薔薇のマリア

14. さまよい恋する欠片の断章

十文字青 Ao Jyumonji

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

角川スニーカー文庫

慣れている。そう。慣れているのだ。
その事実が胸に突き刺さる。痛みより、むなしさのほうが強い。
そんなことはない。そんなことは、決して。
そう自分に言い聞かせてきた。
平気だったわけではないが、耐えることはできた。愛ゆえに。

A BRAVE HEART OF RED ROSE

Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.

薔薇のマリア

14.さまよい恋する欠片の断章

ああ、でも、どうせ逃げたって、どうなる？
どうにもなりゃ、しない。
ここで竜に食われたって、同じことだ。

あきらめなかったのは、たった一人、
一人っきりだった。

背の高い、若い、若い、男だった。
男はまだ、竜の背にしがみついていた。それだけで精一杯で、
男は槍も持ってやしない。だのに、どうするってんだ？


あっさり上着を引っぺがされてしまった。マリアローズは部屋の隅で小さくなった。
「……こ、怖い、この人たち……身の危険を感じるよ……
実力差がありすぎだし……」
サフィニアはマリアローズの真ん前に座って「うふ」と含み笑いをした。
「……思ったとおり……
すごく、かわいい」

薔薇のマリア

14．さまよい恋する欠片の断章

十文字　青



角川スニーカー文庫



A BRAVE HEART OF RED ROSE 14

Cross Link Divided

Ao Jyumonji

First published 2010 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.



illustration : BUNBUN

design work : design CREST

A BRAVE HEART OF RED ROSE

14

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE 14

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者(アッサシン)。



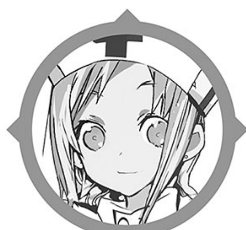
Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長(マスター)。



Lucy
ルーシー

成長期のニューカマー。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

最強伝説。



Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。



Johann Sunrise
ヨハン・サンライズ

《秩序の番人(モラル・キーパーズ)》の総長。



Jin Wang
荊王(ジンワン)

クラン《王龍》の頭目。



Fei Yang
飛燕(フェイヤン)

クラン《S＊K(シリアル・キラーズ)》の頭目。



Fall
琺瑠(フォール)

《秩序の番人(モラル・キーパーズ)》の副長。



Molly Lips
モリー・リップス

アサイラムの医術士。



Beatrice
ベアトリーチェ

元《番人》の医術士見習い。

and the others

Tomoyo
トモヨ

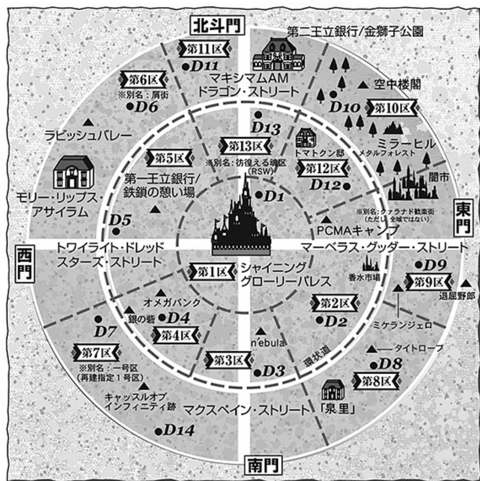
Jean-Jacques de Joker & Claudia
ジャン・ジャック・ド・ジョーカー＆クローディア

Betty
ベティ

and etc.

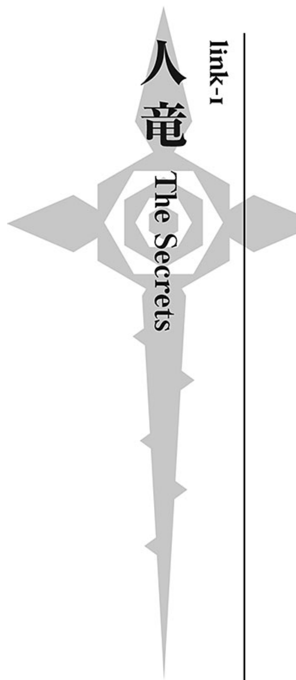
The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics



link-1

人竜 The Secrets

この通路はどこまでつづいているのだろう。壁かべに、床ゆかに、天てん井じようにまで薄うすく刻まれている太古の文字はどのような歴史を物語っているのか。まず行けるところまで行ってみるべきか。それとも、文字をできるだけ記き憶おくするか。書き写すべきか。

ジャン・ジャック・ド・ジョーカーともあろう者が迷っていた。頭は迷っていたが、彼の目は文字を追いつづけた。彼の心は歓かん喜きで満たされていた。

求めていたものがここにあるのだ。

今まで彼が発見した事物は、すべてこの場所へと繋つながっていた。

一つ一つの些さ細さいな手がかりをたどって、ようやくここに至ったのだ。

彼は従者を抱だきよせ、金色とも銀色ともつかない髪かみに鼻をうずめた。

「あ──主様マスター……」

「クローディア。貴様にはわかるまい。己おれは物心がついて以来ずっと、世界にたばかられているような気がしてならなかった。何もかも偽にせ物ものなのではないかと疑っていた。空も大地も信しん頼らいに値あたいする物とは思えなかった」

従者の指が彼の顎あごにふれた。

彼は好きにさせておいた。「識しれば識るほど、この世界はひずみだらけだと知れる。九百年前に何があったのか。大戦とはいったい何なのだ。なぜその証しよう拠こがほとんど残っていないのか。魔導王ドレッドロードと呼ばれる王たちが世を統すべていたことは間ま違ちがいなかろう。記録もある。不確かな、断だん片ぺん的な記録が。魔導王時代はいつ、どのように始まったのか。かつて恐怖のドレッド操り手スターはその魔ま術じゆつで一国を滅ほろぼしたという。強大な魔術は失われたのだ。なぜだ。魔導王たちは相争い共とも倒だおれしたのか。それが先の大戦なのか」

従者は彼の胸にしがみついて身体からだを震ふるわせている。

彼は両りよう腕うでに力をこめた。「己おれは大陸中を歩きまわった。α大陸だけではない。ラハンにも、暗黒大陸にも、バクーにも行った。凰おう州しゆうや龍りゆう州しゆうにも足をのばした。驚おどろいたことに、九百年前だ。α大陸以外でも、オーメネイジが始まったはずの九百年前、それより前の記録が、やはり消し去られているか、ぼかされている。当時はまだ文字を持たん蛮ばん族ぞくの地だったとおぼしき龍州に、こんな歌が残っているのだ。西よりきたる者たち、人つなぎ、頭と身体離はなし、海に流し、皆二度と帰らぬ。何者かが龍州を侵しん略りやくしたが、占せん領りようすることはなかった。何のために？」

「主様マスター……」従者の指が唇くちびるをなぞった。

彼がその指を軽く嚙かむと、従者は目を細めた。

「己おれはな。遠き海の果てにあるというミリアルダにも、いつか行くつもりだった。暗黒大陸の東とう端たんにある港町リドリンから大洋上のアナチック諸島へ、さらに西を目指し、いくつかの島を経由してミリアルダに到とう達たつした船があるという話は聞いている。己おれは識りたい。突つき止めたいのだ。この違い和わ感の正体を。むろん、仮説はある。鍵かぎはサンランド無統治王国、首都エルデンだ。古代九く頭ず竜りゆうの呪いで維い持じされている、蓋ふた。大穴メガボロス。異界の扉アウターゲート。多種多様、無数の異界生物フリークスども。混沌とエルデ恐怖エイニの巷オン。キング・グッダー。魔導王の末まつ裔えい。王立中央文書館。情報は管理されている。管理している者がいるのだ。そして貨か幣へい。α大陸全土で九百年にわたって用いられているダラー通貨。誰だれがどこで鋳ちゆう造ぞうしているのか。他ほかの大陸ではそれぞれの国家が発行している。ここでは違う。あたりまえすぎて誰も疑問に思わないのが、己おれにはむしろ不可解だ。すべては仕組まれている。誰の仕し業わざだ。自明ではないか」

「嗚あ呼あ、人の子よ」

時が止まった。

当然、錯さつ覚かくだった。

彼は従者を離して振ふり向きざまに「五月雨さみだれ丸まる」を抜ぬいた。魔導王時代の秘宝を数多く秘蔵している彼だが、現代にも天才的な職人はいて、彼らの手になる名品には称たたえられ愛さ

れるべき価値がある。〝鱗男スケイルマン〟という不気味な号を名乗る鍛か冶じ士しは彼のお気に入りだ。その作風はときに正統的、あるいは古風と評されるが、刀に必要な要素を一から選定、吟ぎん味み、凝ぎよう集しゆうさせて構成した結果、いかにも刀らしい刀が出来上がったという恐おそろしいまでの合理性が、握にぎる柄つかからひしひしと伝わってくる。

従者も身構えているが、打ち勝つことができるというのか。

音はもちろん、何の気配も感じなかった。無に擬ぎ態たいして近づいてきたとでもいうのか。

それなのに、今はどうだ。

距きよ離りは十メーテル、否いな、十メーテルと三十四、五サンチ。

その姿をどう形容すればいい。

直立二足歩行。人のようではある。撫なで肩がたで首が長く胴どうが短いが、身体つきはまあ人間の女のそれに近い。しかし尻尾しつぽがある。

一糸まとわぬ乳白色の皮ひ膚ふは燦きらめいていて、長い頭とう髪はつは皮膚とほぼ同じ色だ。光こう沢たくがある。

顔だちはやはり人間の女に似ているが、鼻や口が低いというより小さく、地上にある全種類の宝石をちりばめたような瞳ひとみには、黒目と白目の別などない。

輝かがやきそれ自体が、人竜レインドゥラス・ヴィシュクラトーの目なのだ。

「そなたは利口です、人の子よ。無む謀ぼうでもあることは言うまでもありません、人の子よ。そなたとまみえるは二度目ですね、人の子よ。ひとたびは見み逃のがしました。仏の顔も三度と申しますが、人の子よ。あるいは我ヴィシュクラトーは仏ほど慈じ悲ひ深ぶかくはないかもしれないのですよ、人の子よ」

「……ホトケ、とは何のことだ」

彼は自じ嘲ちようしていた。

　五月雨丸の重みをまるで感じぬ。あの化物の前では刀など無用の長物だということか。

　己おれは臆おく病びよう風かぜに吹ふかれているのか。この己おれが。

「仏とは仏ぶつ陀だのことですよ、人の子よ。聡さといそなたも知りはしないでしょう。世界は嗚呼、それほどまでに間違っているのです」

「間違っている、だと」

　彼の呼吸は乱れている。彼は化物を恐れているのに違いないが、それだけではない。彼は昂たかぶっている。

　人竜は知っているのだ。

　世界が間違っていることを。

　そして、人竜は嘆なげいてみせた。

　つまりそれは、間違っている世界を正そうとしているということではないのか。

「貴様は何を知り、何をなそうとしている」

「性急ですね、人の子よ」

　人竜は、ふう、と息を吐はいた。

　その吐と息いきが白く燃えた。

　竜。

　あの化物は、まさしく竜なのだ。

「ただでさえ与あたえられし仮かり初そめの命は短く儚はかないというのに、なにゆえ滅ほろび急ぐのですか」

「思いあがるな」彼は唇くちびるを舐なめた。

　己おれよ、目を覚ませ。化物が何様であろうと、己おれを侮あなどることは許さぬ。決して嬲なぶらせぬ。

　五月雨丸は彼の手中で重量を取り戻もどした。彼は総身、髪かみの毛の一本に至るまで自在に操あやつることができる。恐れすらも完全に我がものだ。

　彼は完かん璧ぺきに知っていた。

　彼は彼自身を愛している。

　このゆがんだ世界を愛している。

「己おれが貴様ごときの掌てのひらの上にあると思うなよ、竜め」

「ジャン・ジャック・ド・ジョーカー」と人竜は、はっきりと、一音一音区切るように発音してみせた。「本名はジャン・ジャック・デュパン・カリエール・ド・ラスペード。サー・ディオロット・マクスペインと近しいそなたのことは存じていますよ」

　何かを打ち砕くだかれた。

　その効果を狙ねらって、人竜は彼の名を暴あばいたのだ。

　彼は歯を食いしばって駆かけようとした。従者に先を越こされた。彼の身体からだから淡あわく光る粒りゅう子しが放散され、従者はその粒子を吸いこみつつ黒い靄もやのごときゼクトプラスマを放出し、その霊れい的な黒色物質は彼女の手の中でグリムサイズと化した。四メーテル以上ある柄の先から直角に突きだして獰どう猛もうに湾わん曲きよくした刃はを持つ大おお鎌かまは、父から娘むすめへの素す敵てきな贈おくり物だ。従者は一いつ瞬しゅんで人竜に肉にく薄はくしてグリムサイズを振ふりおろした。「──〝縦断DIVIDE〟……！」

　人竜はだが、想像を絶していた。

　よけなかった。防ぐこともなかった。

　グリムサイズの無む慈じ悲ひな刃は、人竜の頭頂をとらえた。

　それだけだった。

　傷一つつかない。

　さりとて、弾はじくこともしない。

　縫ぬい止められたように、グリムサイズは静止している。

　現象としておかしい。

　超ちょう越えつ、否、突つき抜ぬけている。

　これが人竜なのか。

「下がれ……！」彼は命じるなり五月雨丸を胸に引きよせて突とつ進しんした。従者は一歩飛びすさって大鎌の柄つか頭がしらを床ゆかに叩たたきつけた。大鎌が崩くずれ、ふたたび黒い靄となってまたたく間に数十本の鎖くさりへと為なり変わった。「──〝鎖縛BIND〟……！」

　鎖の群れは人竜に絡からみついて緊きん縛ばくした。そのときにはもう、彼は人竜を射程に収めていた。

　全身の陽脈と陰いん脈みやくを一気に活性化させると、意識が肉体から解き放たれ、何もかもが虚こ空くうに浮うかんでいるだけのよるべない寂さびしき存在なのだと明確に感じられた。

　彼は悲しき力のすべてを放った。

「〝滂ボウ沱ダ〟……！」

　それは大地を震しん撼かんさせる雷らい霆ていの連れん撃げきだった。技わざを超こえた境地にある技だった。生命の、魂たましいの燃焼だった。

　五月雨丸は全方向から時空の寸すん隙げきを埋うめつくして人竜を攻せめたてた。

　刀は単なる刀の域を飛びだして猛たけり狂くるった。悲鳴をあげて、ついには砕け散った。

　それでも人竜は微び動どうだにしなかった。

　何も起こらなかった。

　ぜんぶ錯さつ覚かくだった。そうとしか思えなかった。

　そう信じることができれば、絶望し正気を失わずにすむ。

彼はしかし、あいにくそれほどやわではないのだ。おのれを保つために幻げん想そうにすがる愚おろかな趣しゅ味みはない。信じるべきものは他ほかにある。

「クローディア……！」

従者は当然のごとく彼の信しん頼らいに応こたえた。「── 〝乱流STORM〟……！」

数十本の鎖は千々に粉ふん砕さいされて、それぞれの破は片へんが入り乱れて飛び交かいはじめた。石の通路が見る間に黒、黒、黒に閉ざされた。

常識的な相手なら一人二人どころか軍の一隊でも鏖おう殺さつしうるが、人竜だ。目くらましにもなるかどうか。

それでいい。

彼は踵きびすを返して、力を使い果たし倒たおれる寸前だった従者を抱だきとめ奔はしった。

人竜は追ってくるか。

逃にげきれるのか。

「儘ままよ……！」

彼はいつの間にか笑っていた。

我ながら度しがたい。

絶体絶命。

悪くない。

それどころか、大好物だ。

cross-1

大事なものを守るため

My Precious

　二に度ど寝ねは絶対にしない。そう決めている。だらだらしたくないからだ。一発でビシッと起きたい。二度寝したら二度寝したで、身体からだがだるくなったり、頭が痛くなったりすることもある。いいことは一つもないのだ。だから、二度寝はしない。とりあえず、自分のベッドでは。

　パッと目を開けて、サッと起きる。

　そうして颯さつ爽そうとフード付きの上着を身にまとい、寝ね癖ぐせ隠かくしのためにフードを被かぶって、寝しん具ぐをてきぱきと整えたら、部屋を出て、リビングへ。リビングと隣りん接せつしているというかひとつづきになっているキッチンで水を一いつ杯ぱい飲めば、よりいっそうシャキッとする。

「よし」

　そんなふうに声を出して、自分に気合いを入れてみてもいい。

　気持ちが高まったところで、ぱぱっと顔を洗ったり着き替がえたりしたいところだけれど、まだ朝早い。そんなに焦あせる必要はないので、リビングのソファーに座って一息つき、これからの予定を頭の中で組み立ててみようとするのだが、これがなかなかうまくゆかない。

　考えている。

　考えようとしてはいるのだけれど、何かが浮うかんだ途と端たん、真夏のアイスクリームみたいにとけてしまったり、シャボン玉みたいに割れて消えてしまう。

　上の瞼まぶたが重い。やけに重くて、途と方ほうもなく重すぎて、今にも下の瞼とくっついてしまいそうだ。「うーん」とか「むー」とか言いながら目をこすって、なんとかあらがおうとするのだが、抵てい抗こうもむなしく戦線は後退の一いつ途とをたどる。

　そんなときに、援えん軍ぐんだ。援軍がやってきた。

「くう」

　救い主は、白くて、おっきくて、もふもふしている。

「……あ、きゅー、おは──」あくびが出そうになって、慌あわてて口を手で押さえるのだけれど、とても我が慢まんできない。「……ひょぅ」

　きゅーは隣となりに腰こしを下ろし、こっちを見て首を傾かしげる。「きゅう？」

　おかしい。援軍ではなかったのか。なんという誘ゆう惑わくだろう。

　逆らうことなんてできるわけがない。身体を横に倒して、純白のもふ毛に顔をうずめた。

　きゅーはきれい好きで、いつも石せつ鹼けんの匂においがする。石鹼の補ほ充じゆうは自分が受け持っているから、香かおりは当然、自分好みのものだ。カンダヴァストリートに石鹼、洗せん髪ぱつ剤ざい、入にゆう浴よく剤ざい、化け粧しよう品ひんなどを扱あつかう「ナーボ」というすてきなお店があって、最近はたいていそこで買っている。甘いけれど甘すぎない、胸いっぱいに吸いこむと濃のう厚こうだが、不意にすうっと消えてゆく、ちょっぴりせつない、蝶ちよう々ちよう花かの香りがお気に入りだ。ああ──

　幸せだ。

　でも、幸福度の上じよう昇しようはとどまるところを知らない。

　きゅーが頭を撫なでてくれる。ぷにっとした肉球が額や頰ほおにふれると、もう泣いてしまってもいいような気がしてきて、たまらない。

　至福の境地がここにある。

　こんなとき、いつも思うのだ。

「……僕、猫ねこになりたいよ」

「きゅう」

　なれば、と言われているようにしか思えなくて、身体を丸めて猫になってみる。けど、ほんとに猫だったら、喉のどがごろごろ鳴ってるよね。さすがに喉を鳴らすのは無理。きゅーは頭だけじゃなくて、肩かたや背中までさすってくれる。これはもう本格的にやば

い。猫になんてなれるはずがないけれど、自分の中の猫的な何かが目覚めようとしていて、つい「みゃあ」とか「にゃうにゃう」とか、そんな声をもらしてしまう。てゆうか、ねむ……。

いいよね。猫なんだし。

眠ねむたいときは、眠ったって。

とっくにうとうとしている。

いつまでもこうしていたい。

身体が、魂たましいが、切望している。



そんなわけにもいかないんだけどさ。

だけど、もう少し。

もうちょっとだけ。

—はい。

わかってます。だめ……だよね。起きないと。

いいかげん、きゅーだって、あれだし。脚あしとか、痺しびれちゃうかもしれないし。

ゆっくりと上半身を起こすと、ソファーの端はしっこのほうに灰被りのルーシーが座っていた。身体をこっちに向けて、両手で顔の下半分を覆おおっている。

見てる。

見てるよ。

めっちゃ見まくってる。

赤い眼めがうるうるしている。

何と言うべきか。何を言えばいいんですか。何が言えるんですか。

マリアローズは紐ひもをぎゅうぎゅう引っぱって、フードを限界まで縮めた。「……い、いたんだ。お、おはよ。てゆうか……声、かけてくれればよかったのに」

「ご、ごめんなさい、あの……」ルーシーはなぜか息を切らしている。「き、気持ちよさそうに、寝ねてらしたので……お、起こすのもあれかなって。悪いかなって、思いまして……」

「ね、寝てないよ？　ちょっと、うつらうつらしてただけだし？　ね、きゅー？」

「くう」

「そ、そうですか。えっと、でも、まあ……朝、ですし。朝はやっぱり、こう……のんびりしたいっていうか、なんていうか、ありますよね、そういうの」

「や、そうでもないけど？」マリアローズは立ちあがって両りよう腕うでを突つきあげた。「うん！　朝はさ、むしろ、すかっとね！　元気いっぱいでいかなきゃね！　一日の始まりなわけだか

ら！」

「あ、そうですよね！　よし、ぼくも……！」ルーシーは跳とびあがるように立って、拳こぶしを振ふりあげた。「今日という日を無む駄だにしてたまるかーっ！　目の前の一いつ瞬しゆん一いつ瞬しゆんにすべてを賭かけるんだ！　燃やせ、この命！　やるぞーっ！　おーっ！」

「そ、その意気だよ！　その意気！」

「じゃあ、ぼく、ちょっと走ってきます！」

「いってらっしゃい！」

「はい！」ルーシーは駆かけだした。

　と思ったら、マリアローズの近くで足を止めた。

「……あれ？」

　小首を傾げて、何度もまばたきをし、フードの小さな隙すき間まからのぞいているマリアローズの顔ではなく、別のところをルーシーは見ているようだ。

　頭頂部……？

　マリアローズはなんとなく両手で頭を押さえた。「……な、何？」

「いえ」ルーシーは慌あわてたように首を左右に振った。「な、何でもないです。たぶん」

「たぶん？　何だよ、たぶんって。気になっちゃうだろ。そんな言い方されたら」

「え、いや、ただ……」ルーシーは片目をつぶり、下に向けた右手を顔の前でさかんに上下させた。「……マリアさん──ちぢみました？」

「は？」

「そんなわけ、ないですよね。やっぱり、気のせいかな……」

「ちぢ……」マリアローズはフードの紐をゆるめて、ルーシーの頭頂部をまじまじと見た。

　それから、赤い両目を見つめた。

　違ちがう。

　ような気がする。

　じゃなくて、確実に違う。

　だからどうした。そんなふうに思おうとした。たいしたことじゃない。何でもない。僕は平気。ぜんぜん平気。まったく問題ない。

　マリアローズは笑えみを浮うかべてルーシーの肩を叩たたいた。
「バカだなぁ。そうじゃないでしょ。僕がちぢんだんじゃなくて、きみの背がのびたんだよ」

「……ぼ、ぼくの背が、ですか？」

「てゆうか、ふつうに考えたらそれ以外なくない？　べつに不思議じゃないし」

「あ……え……ま、まあ、そう……なのかな？」

「二は十た歳ちすぎても、のびる人はのびるみたいだよ。きみの場合、あれなんじゃない？　のびざかりが、ちょっと遅おそくきただけなんじゃないの」

「なんです……かね？」

「と、思うけどねー」

　つ──

　つらい。

　笑顔が今にも崩ほう壊かいしそうだ。もうひび割れくらいはしているかもしれない。

「で？　行かないの？」

「え、は、はい、いってきます！」

ルーシーは逃にげるように走り去った。

マリアローズは両手で顔を揉もんだ。かなりこわばっている。

ため息が出た。

べっつにー。それがどうしたってかんじだしー？　背がのびたからって、それで？　みたいな？　大事なのは身長じゃないわけだし？　経験とか、いろいろあるしね。僕だってほら、いろいろね？　能力低いなりに、工夫だけはしてきたし？　いないほうがいいから始まって、どうにかこうにか、いてもいなくても同じくらいまでになって、そこからちょっとずつ積みあげてきたっていう、何？　自負っていうの？　そういうのだって、なくはないしね。努力？　そりゃあね。してきたよ。言いたくないけど、てゆうか口が裂さけても言わないけど、人一倍ね。だって、しょうがないでしょ？　身体からだちっちゃいし。柔じゆう軟なんはしまくってるから、かなりやわらかいよ？　百八十度開かい脚きやくして床ゆかに上半身べたーってつけられるし。でもさ。筋力がね。正直、なりたいよ？　ムッキムキに。なれないんだよね。どうやっても。つかないんだよね。筋肉。なんでか知らないけど。だからさ。もう、パッと状じよう況きようを把は握あくしてサッと決断して、みたいなところとか、あと、道具面とか、戦術面の工夫とか、いかに頭を使うかとか、そのへんでなんとかするしかないわけで、実際そうしてきて、まあなんていうか、司し令れい塔とう的な役割をＺＯＯの中では担になうようになって、秩ちつ序じよの番人に編入？　される形になったときは参さん謀ぼうみたいなこともやったし、そんなにうまくはできなかったけど学ぶことは本当に多くて、それなりに恰かつ好こうがついてきたかなーみたいに思っていなかったと言ったら嘘うそになる。

「──くっ……！」

手て応ごたえは重かった。相手の体格が体格だ。身の丈たけ二メーテル近く。百五十キルグラハムくらいはありそうだ。ぶよぶよした肉につ塊かいから、関節が四つもある二本の腕と、ごつい脚あしが二本生えている。

アンダーグラウンドＤ３〝渾沌峡間ケイオスハーロウ〟は刻一刻と変化しつづける魔ま境きようで、名前もつけられていない新種の

異界生物フリークスだらけだ。

　こいつの仮か称しようは肉男。今日初めて出くわした。やつの得物は先せん端たんに鉄球がついた金棒だ。あんなものでぶん殴なぐられたら、腐くさったスイカみたいに頭が砕くだけ散ってしまうだろう。

　かなり危なかった。よく受け流せたものだ。どんなに訓練しようと、場慣れしようと、力の強い相手と肉にく弾だん戦せんになったら、いかんともしがたい。

　こんなとき、マリアローズにできることは時間稼かせぎだけだ。今はたまたま剣けんで受けてしまったが、接せつ触しよくは極力さける。よけて、かわして、でも、逃げない。下手に移動せず、可能なかぎり情勢を固定化させるのだ。相手の動きをよく見ながら、視野を広くして、周りの様子をうかがう。手て一いつ杯ぱいだからといって、自分の仕事をおろそかにしてはいけない。

　カタリは右前方で二体の肉男を相手に奮戦中だ。ユリカは左前方で同じく二体の肉男を引き受けている。ピンパーネルは前のほうで三、いや、四体──今、一体屠ほふった。ルーシーは後ろでサフィニアを守っているはずだけれど、さすがに振ふり返る余よ裕ゆうはない。

　この十メーテル四方ほどの部屋は、四つの通路が交わる場所に位置している。ＺＯＯはマリアローズの後方にある通路からこの部屋に入った。残る通路は三つ。前、右、左だ。そのすべてから肉男どもがあふれてきて、ＺＯＯはあっという間に囲まれた。すでに七、いや、八体倒たおしたが、相手はまだ増えそうだ。

　案の定、きた。

　左から。

　前からも。

　こうなると、カタリ、ユリカ、ピンパーネルの三角陣じん形けいは崩くずしたくない。というか、崩せない。サフィニアは一発逆転のための魔術を用意しているはずだ。彼女のことだから、途と中ちゆうで切り替かえてマリアローズを助けることもできるだろう。でも、それはさせたくない。トマトクンがいれば、そもそもこんなこ

とにはなっていないに違ちがいないが、言っても仕方ないことだ。とにかく眠ねむくてしょうがないようで、それでもついてくると本人は言い張ったのだけれど、無理は禁物とみんなして止めた。ということは、ルーシーか。

　やだな。頼たよりたくない。

　そんなことは思っていない。

　と思いたい。

　ということは、思っているということだろう。

　どうにかできないのか。自分一人で、どうにか。

　この肉男を倒す。

　弾だん力りょくがありすぎる灰色がかったあの肉は最悪の防具だ。元アッサシンが操あやつる雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣でさえ、いつものようにさっくり解体というわけにはゆかない。水分が多いのか、かなり斬きりづらそうだ。打だ撃げきも吸収されてしまって効き目が薄うすい。

　狙ねらうとしたら、頭か。まあ、ほとんど肉塊状の胴どう体たいに埋うもれているのだが、二つの目と潰つぶれた鼻と口らしい割れ目がどうにかこうにかのぞいている。あそこはたぶん急所だろう。

　弩いしゆみで撃うち抜ぬけば、あるいは。無理だ。マリアローズの小型強弩ベイビーフアイアは小さいわりに高こう威い力りょくだが、命中精度は低い。相手に気づかれていない状況で狙そ撃げきするか、不意打ち的に密着してゼロ距きょ離り射しゃ撃げきするか。用途はかなり限定されている。

　もうずいぶん経たつけれど、はぐれの機術士〝ショコラット〟が闇やみ市いちの店を畳たたんで行方ゆくえをくらましたのは本当に痛かった。人格的には問題の多い男だったが、彼の手になる武具はものすごく有用だったのだ。

　倒せない。

　冷静に考えて、倒すどころか、殺されないだけで精せい一いっ杯ぱいだ。

　マリアローズはちらりと後ろを見た。

　ルーシーと目があった。

　それだけだった。指示は出していない。でも、勝手に受けとったらしい。

　ルーシーは突とつ進しんしてきた。やむをえない。マリアローズはルーシーと入れ替わる形で後退し、サフィニアを守る位置についた。

「Ｓｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｙｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　ルーシーは疾はやかった。肉男めがけてまっすぐ突つっこんでいったので、危ない━と叫さけんでしまいそうになったけれど、杞き憂ゆうだった。斜ななめに跳とんでギリギリ金棒をかわし、すれ違いざまにモトロール刀を振りあげて肉男の腕うでをズッパリ叩たたき斬った。そして肉男が振り返るよりも早く、百八十度方向転てん換かんしてふたたび刀を奔はしらせた。今度は脚あしだ。膝ひざのところでバツッと両断した。片腕、片脚を失った肉男が横転すると、ルーシーは跳ちよう躍やくした。

「Ｇａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　なんて獰どう猛もうな。とにかく思いきりがいい。

　ルーシーは倒れた肉男に飛びかかって右の眼球に刀を突き入れ、引き抜いて、左の眼球に突っこんですぐに抜き、踏ふんだ。ガツガツダンダカ踏みつぶしながらもう一本の腕を斬り飛ばし、Ａｈｙｙｙｙｙｙｙと歓かん声せいらしきものをあげると、カタリの脇わきを抜けてきた別の肉男に突進していった。

　マリアローズは呆ぼう然ぜんとしていた。

　呆あつ気けにとられていた自分に啞あ然ぜんとした。

「━えっと、えーと、えっと……」勝手に声がもれて、自動的に頭が回転しはじめた。

　組みかえるのだ。各人の特性。数値化できるわけでもない戦せん

闘とう能力。ピンパーネル、カタリ、ユリカ、サフィニアのことは知りつくしている。でも、ルーシーは。わかっていた。身長だけじゃない。まさしくのびざかりなのだ。急成長している。基本的に素す直なおなので、何でも吸収してしまうのだ。じつは素質にも恵めぐまれている。何しろ、父親はあのＳＩＸだ。肉体的な能力だけじゃない。あの野性。敵を倒すときのためらいのなさ。はっきり言って、ふつうじゃない。天性なのかもしれない凶きよう暴ぼうさに振りまわされることなく、うまく飼い馴ならすことができれば、ものすごい力になる。そう思っていた。

　マリアローズだってわかっていたのだ。

　認めたくはなかったけど──認めたくない……？

　バカ。認めろ。認めるんだ。喜ばしいことじゃないか。最初はほとんど期待していなかった新入りが、貴重な戦力になろうとしている。違う。

　もうなっている。

　認にん識しきにずれがあった。どうして？

「ルーシー！　あまり動かないで！　そう！　その位置……！」

　マリアローズはうなずいて唇くちびるの端はしを噛かんだ。

　いっそ噛みきってしまいたかった。

　嫉しつ妬と。

　僕ってやなやつだ。

　進歩がない。

「──変なこと、訊きいていい？」

「うん」

　即そく答とうだった。

　ベアトリーチェは果断だ。潔いさぎよくて、すっきりしている。

そういうところはすごいと思うし、大好きだ。同時に、劣れつ等とう感を刺し激げきされる部分でもある。

　黄昏たそがれどきを過ぎた店内は徐じよ々じよに混雑しはじめていたが、二人きりで向かいあえる奥のテーブル席を確保したから、それほど気にならない。大食小路グラトン・アレイにある「エリック」はとりわけ前菜とデザートがおいしい、知る人ぞ知るこぢんまりとした店だ。意外性を驚おどろきにとどめず、納なつ得とく感の高い美味に仕上げてしまう料理人のセンスと技術は、本当にすばらしい。

　ベアトリーチェの忙いそがしさを考えれば、わざわざ外に連れだすのも気がひけるけれど、アサイラムにいるかぎり仕事のことが頭から離はなれないだろう。モリーも毎度、快く送りだしてくれるので、できるだけ引っぱりだすようにしている。

　いつもとは違ちがう服を着て、違う場所で、違う空気を吸って、おいしいものを食べて、飲んで、ちょっとでも息いき抜ぬきをしてもらいたい。

　嘘うそじゃない。本当にそう思っている。

　でも、つい愚ぐ痴ちをこぼしたくなって、ベアトリーチェなら真しん剣けんに相談に乗ってくれるに決まっているから、その誘ゆう惑わくにあらがうことは、とてつもなく難しい。

「あの……あるでしょ、リーチェの。なんていうのかな。名前とかはないのかもしれないけど、急に動きがよくなるやつ」

「ああ」ベアトリーチェは水を一口飲んで、ナプキンで唇をぬぐった。「あれか。あれは医術式の応用なんだけど……どう説明すればいいのかな」

「あれって、自分じゃなくて他人にやったりできるものなの？」

「他人に？　いや、それはどうだろう。試ためしたことがないし。加減が難しそうな気はするかな。たとえば、そうだな━髪かみを洗うとするだろう」

「髪？　うん」

「自分で洗うのと、他人に洗ってもらうのとでは、ぜんぜん感覚が

違うじゃないか」

「え。他人に洗ってもらうことって、ある？」

「え？　お前、その髪はどうしてるんだ」

「ずっと自分でやってるけど」

「髪かみ結ゆいの店には行かないのか」

「リーチェは行ってるの？」

「いや。わたしも……行かないな。自分で切ったり、あとは母様が──」ベアトリーチェはかすかに頰ほおを染めた。「……まあ、だからその、たまに髪を洗ってもらうことも。いや、というか、違うぞ？　わたしが頼たのんでいるわけじゃなくて、入浴していると勝手に入ってきてだな、それでこう……」

　思わず笑ってしまった。「照れることないのに」

「と、とにかく」ベアトリーチェは小さく咳せき払ばらいをした。「感覚が違うんだ。母様は器用だからとても上手で、わたしは自分で洗うときもそれを真ま似ねしようとするんだけど、どうしても同じにならない。なぜなのか、考えてみた」

「なんで？」

「手だ」ベアトリーチェは右手を握にぎり、開いてみせた。「頭皮が感じる刺激は一いつ緒しよでも、自分で洗う場合は指の感覚もある。指はけっこう敏びん感かんだからな」

　マリアローズは指で頭皮を軽く揉もんでみた。「……あ、なるほど」

「髪を洗ってもらうのは、すごく気持ちがいいんだ」

「へえ……今度、洗ってあげようか？」

「じゃあ、わたしも洗ってやる。洗いっこだ」

「……いいです。ごめんなさい」

「何だ。つまらないな」ベアトリーチェは冗じよう談だんめかして

笑った。「でも、やっぱり自分で洗ったほうがいいのかもしれない。自分のことだから、痒かゆいところが確実にわかるわけだし、適切な力をそこに加えればいいんだからな」

「まあ、そうだよね」

「医術式にも、じつは似たような面がある。痛みがあると集中が乱れるから一いち概がいには言えないけど、それさえどうにかできれば、自分自身に施せ式しきするほうがずっと簡単なんだ」

「なんか、怖こわそうだけど」

「そんなものはすぐに慣れる。ただ、微び妙みような加減はやっぱり難しい。正直、あれを他人にやるとなったら、自信がないな。自分の身だから、失敗してもいいくらいの気持ちで思いきって何でも試せるけど、他人だとそうはいかないし」

「……そんなにやばいの、あれ？」

「そうだな」ベアトリーチェは平然としている。「感覚的には、手て許もとが〇・一ミルでも狂くるったら、身体からだが動かなくなる。死ぬことは、まあないかな。だいたいそんなかんじだ」

「それって、かなり危険なんじゃ……」

「お前たちが日ごろ世話になっている医術式とは、もともとそういうものなんだぞ。ただし、あれには通常の医術式と大きく異なっている部分がある」

「何？」

「医術式とは身体の損傷を修復するための技術だ」ベアトリーチェは小さく息をついた。「わたしのあれは違う。何の異常もない部位に手を加える。医術式としては外げ道どうだ」

「でもさ」マリアローズは肩かたをすくめてみせた。「リーチェのお師し匠しようはモリーでしょ。モリーはそのへん、あんまりこだわらないんじゃない？」

「母様はああいう人だからな」ベアトリーチェは生き真ま面じ目めな表情でうなずいた。「そのぶん、何が正しくて何が間違っているのか、その判断はわたしが自分でしなければいけないと思ってい

る。母様が何でも認めて許してくれるからといって、それに甘えちゃだめなんだ」

「リーチェは間違えないよ」

「そんなことはない」

「てゆうか、間違えないように、いつも心がけてるでしょ。何が正しいのかって、けっこう難しいけど……なんていうか、たとえばモリーとか僕とか、リーチェの周りにいる人たちが、それは変、おかしいって思うような方向には、そうそう行かないだろうし」

「それは、お前たちがわたしを見てくれているおかげだ」

　あまりにもまっすぐすぎる彼女の眼まな差ざしから、目をそらすことなんてできるはずもない。

「みんな、見ていたいから、見てるんだよ」

「わたしだって、お前を見ている」

「光栄っていうか、素す直なおに嬉うれしいかな」

「喜びが分かちあえるというのは、すばらしいことだ」

「そうだね。生まれてきてよかったってかんじ」

「一分一秒が幸せの連続だな」

「変な話だけど、死にたくないなーって思うよ」

「ずっとつづけばいい」

「永遠って、ありえないんだろうけど、どこかにあればってね」

「探したくもなる」

「一緒に行く？　探しに」

「名案だ。今日用意して、明日出発しよう」

「突とつ然ぜんだね」

「善は急げというだろう。もう待てない。待つ必要なんてない」

「わかったよ、それじゃあ、さっそく──」

　だめだ。

　無理。限界。

　吹ふきだしてしまった。

　マリアローズは火が出そうな顔を両手で覆おおってうつむいた。
「……負け。負けだよ、僕の。もう、リーチェ強すぎ」

「じつは、わたしもちょっとやばかったけど」ベアトリーチェの声も震ふるえている。

　何ということもない。最近、二人の間だけで流は行やっている遊びだ。にらめっこの変形とでもいえばいいのか。見つめあって、何か言葉を交かわしあい、先に目をそらすか、笑ってしまったほうが負け。あうんの呼吸で唐とう突とつに始まるので、話の内容はそのときによって違ちがう。戦績は、いちいち数えていないので、
ちょっとわからない。

「あれ？」ベアトリーチェは首を傾かしげた。「……そういえば、何の話をしていたんだっけ？」

「何だったっけ」マリアローズは指で目め尻じりをぬぐった。「僕も忘れちゃったよ」

　嘘うそをついた。

　たわいない嘘だ。

　それに、ベアトリーチェと二人で夕食をとって、アサイラムまで一いつ緒しよに歩いたら、だいぶすっきりしていた。問題が解決したわけではないけれど、病は気から、という。病気でもそうで、ましてこれは気持ちの問題なのだから、まさしく気の持ちようでなんとでもなるはずだ。

　いつかこうなることは、覚かく悟ごしていなかったわけじゃない

んだし。

　つまり、早晩ルーシーに追い抜ぬかれるのではないかという恐おそれは━━そう、恐れていたのだ。焦あせりもあった。でも、どうしようもない。今さら強くなれるわけでもないし。あきらめてもいた。そうはいったって、あきらめきれるものではない。自分は、どこで、何で戦えるか。何が自分の武器か。戦う？　相手は仲間なのに？　役割も違うのに？　おかしな話だけれど、そんなことはまったく考えていなかったとは言えない。

　年下で、経験も浅いルーシーに対たい抗こう意識を燃やしていた。

　もちろん、いつもではない。同じ屋根の下で暮らしているし、ルーシーは少々困ったところもあるけれど、悪い子ではないし、嫌きらいではない。かわいいところだってある。なくはないと思う。

　でも、警けい戒かいしていた。

　ルーシー個人がどうとか、そういう問題ではなくて━━せっかく万年最下位状態から脱だつすることができたのに、落ちちゃうの？　また？　ビリって、精神的にけっこうきついんだけど。認めて、受けいれて、へらへらしていられればそうでもないのかもしれないけど、侵入者クラツカー仕事のときなんかは、それなりに命いのち懸がけだったりするし、すいませーん、よわよわなんで、なーんにもできませーん、助けてくださーい、みたいな態度でいられるわけがないし。

　どうすればいいのかなんて、わかりきっている。

　どうもしなくていい。

　ルーシーの実力を正しく評価し、しっかり戦術に組みこんで、思うぞんぶん、長足の進歩を遂とげているその力を発揮してもらう。

　マリアローズの役目は変わらない。きっちりこなしていれば、誰だれも非難しないだろう。ルーシーに抜かれたことを揶や揄ゆしたりも━━まあ、カタリあたりは、冗じよう談だんのつもりでそんなようなことを言う可能性はあるけれど、半魚人だけに悪気はないはずだ。軽く流せばいい。

　何もかもわかっていて、それなのにうじうじしている。

「嫌いだなぁー……自分の、こういうとこ。ほんと、うざい……」

　足を止めて、星一つ見えない第十三区の狭せま苦くるしい夜空を仰あおいだ。

　妙みようだ。

　何が妙なのか。わからないが、あたりを見まわしてみた。

　二十二時近くの第十三区は、営業終しゆう了りようしている高層寺院が多いので人通りは少なく、けっこう静かだ。

　見える範はん囲いには誰もいない。建物の陰かげに身をひそめてこっちをうかがっている者がいないとはかぎらないが、もしいたとしたら、何かよからぬ企たくらみがあるはずだ。なんで僕なんか──と言いたいところだけれど、言えない。いろいろあって、ＺＯＯは規模のわりに名が知れている。一部では恨うらみを買っていたりもするし、マリアローズの場合、赤い髪かみや橙だいだい色いろの瞳ひとみが悪目立ちするものだから、変に覚えられていたりもするかもしれない。自分で思うのも何だが、目の敵かたきにするには狙ねらい目だろう。まあ、弱いし。

　自覚はあるので、わりと気をつけている。エルデンの中に複数ある危険地帯には、できるだけ一人では立ち入らないようにしているし、仮に尾び行こうがついても撒まいてしまえるように、熟知している道以外は極力使わない。

　それでも、振ふりきることができない相手もいる。

「……アジアン？」

　違うか。

　てゆうか、目の前にいるわけでもないのに、あいつの名前呼ぶのとか、なし。

　なんか──何やってるわけ僕みたいなかんじだし。

　恥はずかしいっていうか、悔くやしいっていうか、だいぶ頭にくるし。

　無む性しように走りたくなったので、駆かけ足で直進したり曲

がったり引き返したり隠かくれてみたりまた進んだり、いろいろやってみた。

　誰もついてきていない。

　と思う。

「気のせい……かな？」

　きっとそうなのだろう。

　でも、なんとなく気味が悪かった。

　家に帰ると、いつも出で迎むかえてくれるきゅーが姿を見せなくて、そんなことでまたちょっと落ちこんでしまう自分がいやでいやでしょうがない。

　リビングは明かりがついていた。

　少し気分が上向いた。

　理由がわかったからだ。

　きゅーはソファーに背をもたせかけて床ゆかに座っていた。眠ねむっているわけではない。きゅーはマリアローズのほうに顔を向けて「くう」と言った。

　トマトクンがきゅーを枕まくらにして寝ねている。おかげできゅーは身動きがとれないのだ。

　マリアローズはソファーに腰こしを下ろし、きゅーの頭を撫なでた。「ただいま」

「きゅう」

「うっわー。熟じゆく睡すいしてるね……」

「くう」

「けっこう長い間このまま？」

「くう」

「大だい丈じよう夫ぶ？　疲つかれない？」

「きゅう」

「そっか。なら、いいけど……いいのかな？」

　トマトクンはきゅーの腹部に抱だきつくようにして爆ばく睡すいしている。ローテーブルの位置がずれているのは、トマトクンが足で動かしたのだろう。少しいびきをかいている。

「きゅーのおなか、よだれまみれとかになってなきゃいいけど……」

「きゅう……」

「あ、もうなってる？」

「くう」

「寝すぎなんだよね。てゆうか、寝るなら自分の部屋でって、いっつも言ってるのにさ」

　マリアローズはトマトクンの頭をつついてみた。トマトクンは「ぐむ」と唸うなって顔を横に向けた。いびきは収まったけれど、きゅーの白くてふわふわした毛がべとべとになっている。

　マリアローズはティッシュをとってきて、きゅーの毛やトマトクンの顔をふいた。ふれるたびに、トマトクンが表情を変えたり、変な声をもらしたりして、おもしろい。

「子供みたいだよね、なんか。この人って」

「くう」

「だけど……」マリアローズは身をかがめてトマトクンの寝ね顔がおをまじまじと見つめた。「地味にけっこう長くない？　睫まつ毛げ。てゆうか、きれいな顔してるよね。よく見ると。ふだんはさ。ぬぼーっとしてるか、おっかない顔してるか、あと、妙なかんじで笑ったりとか。印象で損してるよね。損ってこともないか。あんまりもてたりしてもね。サフィニアがあれだし……」

「……む？」トマトクンが薄うす目めを開けた。

　起きたって、どうせすぐ寝てしまうのだ。マリアローズはトマトクンの目を軽く手でふさいでやった。「おやすみ」

「ぬう……」トマトクンはマリアローズの手をうるさそうに払はらった。「……何だ。お前、あれか。あの……」

「完全に寝ぼけてるし」マリアローズはくすくす笑った。

「いや……」トマトクンは上半身を起こした。

　よだれが垂れたので、マリアローズはティッシュでふいてあげた。「きゅーに枕になってもらうなら、せめて仰あお向むけで寝たら？」

「むう……」

　トマトクンは眠そうにまばたきをしながら、きゅーの頭をわしわし撫でた。そうして、すまんな、と言いたかったのだろうが、あくびのせいで「ふあんあ」になった。

「くう」きゅーはうなずいて、気持ちよさそうにしている。トマトクンの少し乱暴な手つきが、きゅーにとってはちょうどいいらしい。

「どうだ。あれか……外だな。飯を食いにいったんだったか。違ちがったか」

「や、違わないけどね。きみは？　ご飯、ちゃんと食べた？」

「あー……」トマトクンは胸がはだけまくっているシャツをめくって脇わき腹ばらを掻かいた。「そうだな。食ったんじゃないか。おそらく。腹は減ってないし」

「てゆうかさ──いいんだけど、シャツのボタン、ほとんど外れてるし、掛かけ違ってるよ」

「ん？」

　トマトクンはシャツを見て、ボタンを掛けなおそうとしたようだけれど、外したところでやめてしまった。そして、また大きなあくびだ。「──まあ、死にはせんだろう」

「そりゃそうだけど……」

　喉のどの奥がつめたくなって、胸が締しめつけられた。

　死にはせんだろう。

　──死。

　神経過か敏びんだ。

　本当に……？

「ね」

「うむ？」

「大だい丈じよう夫ぶなの？」

「何がだ」

「だから……」マリアローズは少しだけ唇くちびるを噛かんだ。
「身体からだ」

「だから、からだ……む？」トマトクンは片方の眉まゆをつりあげた。「逆から読んでも──」

「だらか、らかだ。ぜんぜん違うでしょ」

「おお。そうか」

「ごまかさないでよ。真ま面じ目めに訊きいてるんだから」

「眠ねむいだけだぞ」

「程度ってものがあるでしょ。みんな心配してるし」

「そう言われてもな」トマトクンは唇をへの字に曲げて後頭部を掻いた。「……まあ、ここ何年かは多少無理をしたからな。ガタがきてるんじゃないか。休めばよくなるさ」

「だけど、増えてるじゃないか」

「む？」

「時間。睡すい眠みん時間だよ。前はこんなにひどくなかったでしょ。よくなってなんかないんじゃないの？　何なら、一回、モリーに診みてもらえば──」

「医術士なら、ユリカがいるだろう。怪け我がしたときは、あいつに治してもらってるしな」

「そうやって、かわすんだ」

「マリア」

　トマトクンの大きな、熱い手がマリアローズの首筋をがっちりとつかんだ。

「俺は大丈夫だ。それにな。もしやばくなったらどうしなきゃならんのか、わかってないわけじゃない。そのときは、お前たちにもちゃんと話すさ」

「ほんとに？」

「本当だ」

「約束してくれる？」

「ああ、約束だ」

「だめだよ」マリアローズはトマトクンの腕うでをつかんだ。「たとえそれが僕らのためでも、嘘うそをついたりしたら、絶対に許さないから。僕だけじゃない。みんなそう思ってるんだよ」

　トマトクンは目め許もとをゆるめてうなずいた。「わかってる」

「信じるからね」

「俺は裏切らん」

　引きよせられて、額と額がそっとぶつかった。

　トマトクンは目をつぶっていた。

　マリアローズも瞼まぶたを閉じた。

　なぜだか泣きたくなった。

「お前たちのおかげで、俺は何もかも手に入れた。俺にとっての世界ってものが何なのか、ようやくわかったんだ。俺は何一つ捨てるつもりはない。だから、俺を信じろ」

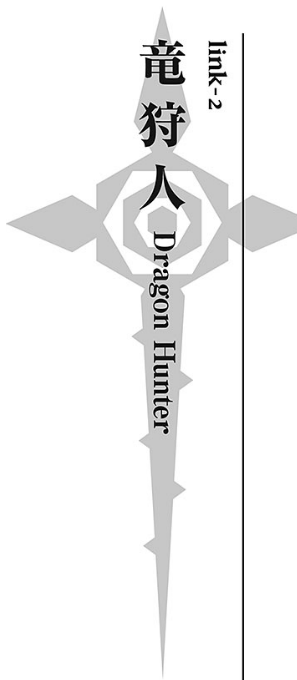
「うん」

「守らんとな」

　静かに額が離はなれていった。

　目を開けると、黄玉トパーズの瞳ひとみに自分の顔が映っていた。

「守ってみせるさ。何があろうと、な」



link-2 竜狩人 Dragon Hunter

あいつをぶっ殺さなきゃ、どうしようもないんだ。

誰だれがそう言いだしたのかなんてことは、みんなもう忘れてしまっているし、どうだっていい。みんなわかっていることだ。わかりきっている。あいつをぶっ殺さなきゃ、にっちもさっちもいかない。

最初は、でけえやつ、と呼ばれていた。

誰かが、ありゃまるで竜りゆうだな、と言ってから、その名で呼ばれるようになった。

つまり、竜、と。

やつは、やたらと、でかい。めちゃくちゃでかい蜥蜴とかげ、といったかんじの姿で、頭から尻尾しっぽまでの長さは、たぶん、二十メートル以上ある。地面から頭のてっぺんまでの高さも、五メートルくらいはあるだろう。全身、鱗うろこみたいなものに覆おおわれていて、ぬるっとしている。とにかくでかいぶん、ものすごい力だ。やつはいきなりかぶりつくか、前ぜん肢しでべちゃっと潰つぶしてから、人間を食う。人間は、簡単にやつに食われてしまう。ちっぽけな人間なんか、物の数秒でやつの胃の中だ。

やつは雑食だ。青いものなら、草でも木の葉っぱでも、何だって食う。根っこも食うらしい。動物なら、本当に何でも食う。小さくても、大きくても、おかまいなしだ。

お気に入りの食しよく糧りようは、人間らしい。というか、少なくともこのへんでは、人間がいちばん、腹にたまる食糧だってことだろう。他ほかの動物は、やつとか、やつのご同類が、ほとんど食いつくしてしまったのだ。

人間たちは、やつに怯おびえて暮らしていた。びびってるだけじゃなくて、やつに追いつめられていた。

何せ、食い物がない。遠くのほうでは、人間が人間をぶっ殺して、食ってるらしい。共食いは、でも、誰だってしたくない。そんなことをするために、させられるために、ここにきたわけじゃないはずだ。話が違ちがう。でも、おかしなことに、話が違う、というその話を、理解できない人間もいた。何なんだ？

とにかく、帰る場所なんてないんだから、あいつをぶっ殺さな

きゃ、どうしようもない。

　人間たちは、なるたけまっすぐな木を集めて、先を尖とがらせて、槍やりを作った。それから、弾だん力りよくのある枝と木の枝で、弓を作った。細い枝と石で、矢も作った。まるで原始人じゃないか、と誰かが言って、誰かが笑ったけれど、ちんぷんかんぷん、という顔をしている者もいた。

　とにもかくにも一生懸けん命めい準備をして、相談して、朝方にやつの寝ね床どこを襲おそうことに決めた。

　その日は、みんなで残りの食い物をわけて、食って、騒さわいで、むやみに歌ったり、踊おどったり、仲のいい男と女はつがったりして、早く寝た。悲鳴を聞いて、目を覚ました。

　竜だった。

　やつときたら、図ずう体たいはでかいのに、素す早ばやくって、あまり音を立てない。忍しのびよってきて、がぶっと人間に食くらいつきやがったのだ。

　何人か、寝ているうちに食われて、一人はすっかり平らげられる前に目覚めた。悲鳴をあげて、助けてくれ、と叫さけび、そして、死んだ。食われた。

　人間たちは、大いにうろたえた。

　何人も、何人も、逃にげた。

　でも、待て。待て。待つんだ。

　人間たちは、残り少ない食べ物をぜんぶ腹に入れて、それで、一か八か、竜に挑いどもうとしていたのだ。逃げたって、どうする？　どうなる？　また地べたを這はいまわって、食えるか食えないか、わかるような、わからないようなものを齧かじって、飢うえをごまかそうとして、ごまかしきれず、弱って、いつか、そう遠くないうちに、竜の餌えさになるのか？　そんな未来しか見えやしないってのに、逃げていいのか？

　戦おう。戦おう。今は戦おう。今、戦おう。今こそ戦おう。人間たちよ、戦おう。

　人間たちは戦った。

　槍持て、弓矢持て、戦った。

　いったん逃げ散った者も、だいたい半分くらいは戻もどってきた。

　人間たちは、男も、女も、竜に攻せめかかった。

　前からいったら、やられるぞ！　食われちまうぞ！　後ろだ、後ろ！

　尻尾の一ひと振ふりで、何人もがいっぺんに吹ふっ飛ばされた。だめだ、横だ、横からいけ！　右から、左から、同時だ！

　竜は左側から突つっこんだ人間たちに飛びかかった。押しつぶして、ぺしゃんこにして、食おうとした。よし、今だ！

　右側からいった人間たちが、竜に襲いかかった。いじきたない竜は食事をやめず、尻尾で人間たちを追い払はらおうとした。半ば成功して、半ば失敗した。何人かの人間が、竜の背中によじのぼった。いいぞ、いいぞ！　やれ！　やれ！

　人間たちは、竜の背に槍を突き立てた。

　何度も、何度も。

　しかし硬かたい鱗だ。木の槍なんか、通らない。無茶だ。どだい無理な話だ。

　やがて竜が暴れだして、その背から人間たちがばらばらと落ちた。こいつはまずい。たしかに、あいつをぶっ殺さなきゃ、どうにもならない。でも、その前に、こっちが残らず、ぶっ殺されちまう。みんな、みんな、食われっちまう。

　もう、おっかなくて、しょんべんちびって、くそをもらして、座りこんでいる者もいる。

　ただただ、涙なみだを流している者もいる。

　気がくるって、竜よ、竜よ、と拝んでいるばかもいる。

ああ、でも、どうせ逃げたって、どうなる？

どうにもなりゃ、しない。

ここで竜に食われたって、同じことだ。

あきらめなかったのは、たった一人、一人っきりだった。

背の高い、若い、若い、男だった。

男はまだ、竜の背にしがみついていた。それだけで精せい一いつ杯ぱいで、男は槍も持ってやしない。だのに、どうするってんだ？

大暴れするのに飽あき飽あきしたのか、竜の動きが止まった。

ゆっくりと、首を回した。

自分の背中に、まだ人間が一人のっかってるなんて、竜はわかってやしなかったのかもしれない。

男は行動を開始した。するすると竜の首をのぼっていって、頭にとりつき、隠かくし持っていた石ころを握にぎりしめ、その右の目ん玉をぶん殴なぐった。何回も、繰くり返し、石ころを目玉に叩たたきつけた。さすがの竜も、これはたまらなかったと見え、首をちぢめて前ぜん肢しで男をつかまえようとした。男は、ところが、まだ逃げようとしなかった。竜の首の後ろまで戻って、そこにひっしとつかまった。

そのうち竜は、厄やつ介かいな人間は姿を消したと判断したようだ。血だか何だかわからない液体が垂れ流れている右目をしばしばさせながら、左目で他の獲え物ものを探そうとしたのだろう。

すると若い男は、また竜の頭にとりすがって、今度は左の目ん玉に石ころをお見み舞まいした。

竜は身をよじって、とんでもない大声で吼ほえた。

男はようやく逃のがれて、地面に転げ落ちた。

竜はしばらくの間、転がったり飛んだり跳はねたりしていたが、とうとうこの場を離はなれることにしたらしい。

逃げるぞ、やった、と誰だれかが叫んだ。しょんべんたれていた者も、くそまみれの者も、泣きじゃくっていた者も、あほみたいに祈いのっていた者も、大喜びして歓かん声せいをあげた。

若い男だけは違ちがった。

男は槍やりを拾って、竜を追いかけるつもりのようだ。おい。

おいおい。

本気か？　おれたちゃ、あのとんでもなくおっかねえ、竜を追い払ったんだぞ？　おまえ、お手て柄がらだぞ？　なんで追っかけなきゃならねえんだよ？

しとめないと、と男は鋭するどい声で言った。

人間たちは、はっとした。

そうだよ。

おれたち、わたしたち、あれだろ？　竜を追っ払ぱらうために、宴えん会かいなんてしたわけじゃないだろ？　そうじゃなくて、竜をぶっ殺さなきゃ、だろ？　何のためにって？

あたりまえだろ。

食うんだろ。

竜を、ぶっ殺して、食うんだ。

やつに、人間、たくさん食われた。

おかげで、やつはあんなにでかいんだ。

みんな、だいぶくたばったけど、腹いっぱいになる。しばらく、食いつなげる。

人間たちは、背の高い若い男に導かれ、ほーほーほーほー雄お叫たけびをあげて竜を追った。猿さるみたいだなあ、と誰かが笑ったが、何それ、わっけわからん、みたいな顔をしている者もいた。とにかく、人間たちは声を出して竜を追った。追い立てた。竜が向かう先、人間たちが、竜よ、そっちへ行け、行くんだと仕向けている

方向に、何があるのか、人間たちはもちろん、知っていた。

　竜はついに、崖がけから落ちた。

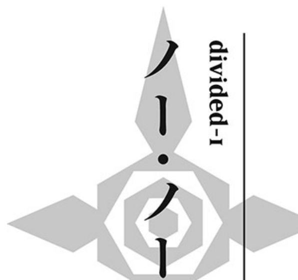
　マンモスだよなあ、と誰かが笑ったかどうかは、知らない。

　人間たちは、石を投げ、岩を落として、竜にとどめをさした。

　竜の肉は、やたらめったらくさかったが、腹と背中がくっつきそうな人間たちにとっては、ものすごくうまかった。精力もたんとついたが、思ったよりもたなかった。食うものがなくなったら、また腹がへる。そしたら、どうすりゃいいのか？　人間たちは、知っていた。

　器用な者が、竜の骨を材料にして、頭がおかしいんじゃねえかというくらい勇ゆう敢かんな、背の高い、若い男のために、すばらしい槍を作った。

　腹がすいたら、また竜をぶっ殺して、食らえばいい。



divided-1

ノー・ノー・ブルーズ No No Blues

手鏡の中の男は見事に苦み走っている。

撫なでつけて固めた髪かみをさわってみた。いい具合だ。

彼は静かに笑いながら手鏡を下方へ移動させた。問題ない。鼻毛はちゃんと切った。髭ひげもきれいに剃そられている。もともと濃こいほうではないのだ。半分魚類やからな。て、ちゃうわボケ。口の前に手をかざして息を吐はきかけ素す早ばやく嗅かいだ。めっちゃサワヤカやんけ。ミント以外のナニモンでもないがな。

服装もバッチシだ。話題のブランド、エフェルムナの立体的フォルムが超最低ＳＵＣＫなまでにイケてるグレースーツに、仕立てのかっちりしたビルマーのシャツをあわせて、落ちついた葡え萄び茶ちやと金のネクタイをチョイスした。腕うで時計は少々派手だが質の高いマクスド・ビリー。靴くつはもちろんマルクセル・ブランだ。流りゆう行こうに気を遣つかいつつ、流されるような軽けい薄はく男ではないことをさりげなくアッピール。フレグランスはスキッとしていながらもほんのりスウィートなエルヴァーン・ド・フェンサーにした。さる雑誌記事によると、クァラナド歓かん楽らく街がいの女性三千人アンケートで好感度ぶっちぎりの一位だったという。イチコロやろ、マジで。

約束の時間にあえて悠ゆう然ぜんとちょっぴり遅おくれてみせるか、それともシャープな正確性を見せつけるか、無難に早め早めの行動を心がけるか、そうとう迷ったが、結局、今は十時五十五分だから五分前だ。第五区鉄てつ鎖さの憩いこい場の公園ほぼ中央の大きな木の下という、ベタっちゅうかダサダサっちゅうかなんちゅうか、微び妙みようといえば微妙な待ちあわせ場所はすぐそこに迫せまっている。自じ慢まんの半魚眼イヤなんで半魚やねんフツーの眼めぇやっちゅうねん怒おこるでしかし、とにかく彼の眼は、すでに彼女の姿をしっかりとらえていた。

彼は足を止めて手首に指をあてた。

腕時計を見つつ心しん拍ぱく数すうを計測すると、驚おどろきの結果だった。「……三百、五」

すごいやん？　わりとやばいやん？　死ぬがな。死んでまうがな。死んでたまるかいっ。わしはここでくたばるわけにはいかへんのやっ。あたりまえやないかっ。

これからデートやねんから。

彼女は迷っている。約束の場所にやってきておいて迷っているというのもおかしな話だが、実際、彼女の心はまだ揺ゆれているのだ。

どうしてきてしまったのか。いや、約束したのだから、こないわけにはゆかない。任務のために欺あざむくことはできても、それ以外で嘘うそをつきたくはないのだ。

彼女は誠実を重んじる。彼女が敬愛する──いや、尊敬してやまない四代目総長も、とても厳しく、非情と思われることもあるが、その人ひと柄がらは誠実だ。

なぜ約束してしまったのか。それが問題だ。

第一印象は、左右の目が離はなれ気味のやかましい男、だった。

彼女が所属している組織の男女比は九対一だ。男ばかりで当然、性格も容姿も千差万ばん別べつだが、あのような男はちょっといない。訛なまりがきついのはやむをえないとしても、とにかく口数が多すぎる。身のこなしも派手で珍ちん妙みようだ。見ているだけで疲つかれる。慎つつしみがないというか、あけっぴろげというか。だから面と向かって平然とあんなことを言えるのだろう。

──お世辞でもなんでもない。アーニャちゃんはめっちゃかわいいで。

思いだすと、顔から発火しそうになる。

彼女はあのとき、怒いかりをあらわにするべきだった。何がかわいいものか。冗じよう談だんはよしてもらいたい。かわいいわけがないではないか。

彼女はもう二は十た歳ちなのだが、童顔なので、たいてい実じつ年ねん齢れいよりずっと若く見られる。外見的特とく徴ちようも資質の一つだ。活用できるのなら活用するべきだろう。彼女はそのための方法を研究し、実行してきた。ようするに、少女のふりをするのは得意だ。変装して町を歩くと、声をかけられることもある。だいたいはロリコンの変態か見境のない酔よっぱらいだ。彼女はエル

デン育ちだし、彼らのごとき下等な連中の下げ劣れつな行こう為いにいちいち目くじらを立てたりしない。適当にあしらうすべも心得ているけれど、やはり嫌けん悪おはあるし、彼らの言葉を真に受けたことなど一度たりともない。

　彼ら以外に、かわいいだの何だのと褒ほめられたことはなかった。褒める……？

　何が褒めているものか。

　かわいい、だなんて。

　それなのに、彼女は頬ほおを染めて恥はじらった。

　認めるしかない。

　ほんのちょっとだけ、嬉うれしかったのだ。

　かわいくないと、ずっと思ってきたから。

　子供っぽい自分の顔が嫌きらいだった。みっともないそばかすがいやで仕方なかった。背が高くて手足が長くて胸が豊かな副長に見とれることがあった。彼女はどちらかといえば寸ずん胴どうだ。胸は平へい坦たんに近い。それでいて、尻しりだけは年々大きくなる。童顔と幼児体型をいかして少女を装よそおい偵てい察さつできるという長所も、そのうち失ってしまうだろう。

　いいところなんて一つもない。

　ふだんは考えないようにしている。

　考えることはないけれど、たまに、つくづく思う。

　わたしはかわいくない。

　ジェノシドの残党狩がりや、三代目から四代目への代だい替がわりにまつわる事々で顔をあわせるたびに、彼は馴なれ馴なれしく声をかけてきた。

　だけれど、かわいいなんて、どうせ物の弾はずみで出た言葉なのだろう。出任せだろう。きっと、自分が言ったことも覚えていないだろう。そう思っていた。

　その後、彼のクランが再結成されて縁えん遠どおくなった。

　何度か町ですれ違ちがい、二度、挨あい拶さつを交かわした。

　三度目で食事に誘さそわれて、断った。

　四度目は「ちゃあしばかへんか」と言われ、何のことかわからなかったが、やはり断った。

　五度目の誘い文句は「なんでもええから遊びに行かへん？」だった。

　任務がある、忙いそがしいのだと説明しても、「休みくらいあるやろ」と彼は食いさがった。しつこい男だ。何を企たくらんでいるのか。腹が立って、なぜわざわざ、よりにもよって自分を誘うのかと問い質ただした。

　彼はむっとしたようだった。「よりにもよってて、そんな言い方することないやろ、お前じぶん。どう見えよるかわからへんけどな。わしかて相手は選ぶんやで。前にゆうたやろ。アーニャちゃんのこと、かわいい思てるから誘うんやないか。せやなかったら、とっくにあきらめとるがな。何回も何回もふられとんのやさかい」

　何回もふられた。

　その言葉が胸に突つき刺さった。そんなつもりはなかったからだ。

　悪いことをした。

　もしかすると、そんなふうに考えてしまったのかもしれない。それでとっさに、埋うめあわせをしなければという思いに駆かられ、誘いを受けてしまった。そういうことなのかもしれない。

　それにしても、妙な気分だ。



　彼女は昨日からそわそわしていた。何を着てゆこうか。どんな恰かつ好こうをするべきか。そんなことばかり考えていた。

　よくわからなかったからだ。衣類は多少持っている。すべて変装用だ。平時は銀の軍団ザ・シルバリイの平服を身につけていればいいから、普ふ段だん着ぎなんて必要ない。変装用の服はだいたいど

れも子供っぽかった。組みあわせを工夫して、どうにか変装に見えないようにできないか。

　結局、ワンピースの上にデニムのジャケットを着て、帽ぼう子しをかぶることにした。脚あしを出すことには抵てい抗こうがあったので、レギンスを穿はいた。鞄かばんは肩かた紐ひものついたハンドバッグにした。少しだけ化け粧しようをした。仲間に見られたくなくて、朝早くに銀の砦とりで内の宿舎を出た。さっきまでぶらぶらして時間を潰つぶしていたのだ。

　彼女は顔を上げて、あたりを見まわした。

　彼の姿を探しているのだということに思いあたって、恥ずかしくなった。

　いっそこなければいいのに。

　でも、約束を破るような男ではない。彼のことなんて知りもしないくせに、なぜか彼女はそう思った。

　しばらく地面を凝ぎよう視ししていた。

　頭が雑念でいっぱいだったのだろうか。

　まったく気づかなかった。

　後ろから肩かたを叩たたかれた。「よお」

　ああでもないこうでもないと考えた末に、背後に回りこんで気づかれないように用心して接近し、軽く肩を叩いてみることにした。

　そのつもりだったのだが、先を越こされた。

　ジェノシドの壊かい滅めつで一挙にすたれたリヴァイスの服を着ている軽けい薄はくそうな若い男だった。

　彼女は振ふり返るなり眉まゆをつりあげた。若い男はたぶん、気づいていない。あれでも彼女は秩ちつ序じよの番人の一員なのだ。しかも、情報収集を主任務としている無名隊とはいえ、隊長だ。ちゅうかワレ、わしの女に何さらしとるんと思わないでもなかった

が、いやいや誰だれがわしの女やねん。彼は慌あわてて走ってゆき、若い男の両りよう肩かたをわしづかみにして、振り向かせた。

「はいはいはいはい。そのへんにしとき。な？　彼女、迷めい惑わくがっとるやんか？　その目ぇが節穴やなかったら、そんくらいお前じぶんにもわかるやろ？　な？」

「……な、何だよ、てめ、この……」

「ええからええから。ここはわしの顔に免めんじて。な？　どっか行ってくれへんか？」

「な、なんで俺が」

「わからんやっつやのう」彼は少しだけ両手に力をこめて笑えみを浮うかべた。「わしはな、お前じぶんのため思て、ゆうたっとるんやで？　長生きしたいやろ？　なあ？」

　若い男は舌打ちをし、身をよじって彼の両手を振りほどいた。いや、違う。

　そうではなくて、彼が手を離はなしてやったのだ。

　男もその事実に気づいたようで、小声で何か悪態をつきながら彼に背を向け、足早に去っていった。できることなら走りだしたい気分だろうが、なんとかこらえている。えほほほほ。瘦やせ我が慢まんご苦労はん、やな。

　彼は彼女に向きなおった。「いっやあ、すまんかったな！　わしがちぴぃーっと遅おくれてもうたせいで」

「……遅れては、いないでしょう」彼女は腕うで時計を見た。頰ほおが赤い。「まだ、三分前です」

「おお。そうなんか。まあ、何はともあれアレやな。おはようさん！」

「なぜ……」彼女は一いつ瞬しゆん、上うわ目め遣づかいで彼を睨にらんだ。「どうして、あの男を逃にがしたのです。なまぬるいのではありませんか。あのような無礼者……」

「せやなあ」彼は首筋を軽く搔かいた。「アーニャちゃんにさわり

よったわけやし、けちょんけちょんにしたってもええねんけど、ゆうても今日はせっかくのデートやん？」

「で、デートって」

「ちゃうんか？　まあ、どっちしたかて、アーニャちゃんは今日、休みなわけやんか。休みの日ぃまで秩序の番人の流りゆう儀ぎに従わんでもな」

「わたしは！」彼女は唇くちびるを嚙かんだ。「……わたしは、身も心も秩序の番人に捧ささげています。それがわたしです。休日だろうと、別人にはなれません」

「ほんなら、それでええ。それがアーニャちゃんやっちゅうなら、わしはまるごとすっかり受けいれるまでや」

「……あの男には、目に物見せてやるべきでした。わたしにはそれができたんです」

「ああ、それはあかん」

「なぜですか」

「やるんやったら、わしがやったるわ」彼は親指を立てて自らを示した。「わしが一いつ緒しよにおるときはな。アーニャちゃんに自分自身っちゅうのんがあるのと同じや。アーニャちゃんみたいなかわいい子ぉに荒あら事ごと任せるのんは、わしの主義ちゃうねん」

　うぉう━決まったんちゃう？

　彼女はさっきから彼の顎あごあたりを見つめていた。

　どうしても目を見ることができない。

　この男は人間ではなく、異界生物フリークスなのではないかと疑っていた。そうでもなければ、歯が浮くような台詞せりふをこうまで臆おく面めんもなく並べ立てることなどできないはずだ。歯が浮くどころか、もはや苦痛ですらある。ほとんど拷ごう問もんだ。

「変な、服」

　気がつくと、そんな言葉が口から飛びだしていた。

　放った矢を引っこめることはできない。彼女は彼の服装を観察した。たしかに、変な服だ。上等らしいということはわかる。でも、ぜんぜん似合っていない。

「どうして、そんな服を着ているんですか。変なの」

「おぉ……」彼はスーツの胸のあたりを引っぱって、自分の全身を見まわした。「似合ってへんか。まあ、そうかもしらんな。土台が土台やからな。かはは。服に罪はないんやけども」

　彼女は苛いら立だって彼の顔をねめつけた。「変な、髪かみ！」

　彼は首を傾かしげて頭をさわった。少しだけ顔が引きつっている。「……ヘアスタイルもあかんかったか。ちょっと、アレやな。気張りすぎやったかな。固めとるし」

「気持ち悪いですよ」言いながら、泣きたくなった。自分はなぜこんなことを言っているのだろう。いくらなんでもひどい。ひどすぎる。

　わたしは嫌きらわれたいのかもしれない。この男が腹を立てて帰ってしまえば、こんな茶番は終わりだ。そうなってほしい。

　でも、だからといって、傷つけてもいいのか。彼はべつに悪くないのに。

　そのはずなのに、彼はちょっと戸と惑まどったような表情を浮かべているだけだ。怒おこっている様子はない。

　どうして。

「……なんで、わたしを誘さそったりしたんですか。わたしは、つまらない人間です。それでいいんです。我が団を、我らの義を支える力になることができれば、それで」

「かわいい思うからて、ゆわへんかったか」

「わたしがかわいいわけ、ないじゃないですか」

「せやったら、好きだからや」

「ばっ──」バカじゃないの、と言いそうになって、ぎりぎりのところで我慢した。義に仕える者として、変装中でもないのに、そんな言こと葉ば遣づかいを自らに許すことはできない。

「アーニャちゃんのことが、好きだからや」彼の眼まな差ざしは真しん剣けんだった。「さ、そろそろ行こか。気に入ってもらえるかどうかわからへんけど、いろいろ考えてんねん。楽しまな、な」

──まあゆうても正直な？

きっつかったで。だいっぶな。そらそうやろ。バッチシや思とったからな。わりと自信あったわけやし？　ほんだのにバッサリやろ？　ブレイクやで。ハートブレイク。ダウンやで。バラバラやっちゅうの。せやけどな。なんっか、こうな。

彼女の言葉は、彼ではなくむしろ、彼女自身を傷つけるために振ふるわれた刃やいばなのではないかという気がして仕方なかった。そうでなくとも、タフガイなところを見せつけるべきだろうと彼は思った。

それに、ゆうてもな？　まあ慣れとることは慣れとるし？　罵ば声せいとか悪罵とか悪態とかな。シャワーよりもよお浴びとったりするわけやし？　マリアローズとかマリアローズとかマリアローズとかな。仲間内にきっついやつもおったりするわけやし。最近はピンプもな。ズバッときよるしな。ズビズバッとな。

ダメでもともと、という気持ちもあるといえばある。

何連敗か数えることもやめて久しい。期待するほうが困難だ。

ま、ええがな。どうせな。わしなんてな。しがない半魚人やんか。もてるわけないやんか。実際もてへんわけやんか。アーニャちゃんが誘い受けてくれたったのも、気の迷いみたいなもんやろ。

せやったらな。せめてアーニャちゃん楽しませたってな。ちょっとでもええ思いしてもらってな。それっきりでもええがな。

ええことないけど、しゃあないやんけ。

大食小路グラトン・アレイを少しぶらついて、十二時きっかりに

「スピノザ」という店に入って昼食をとった。名店とは言いがたいが、小さめの店内はこぎれいで、あたたかみのある落ちついた内装だ。料理のほうも小こ洒じゃ落れていながら、どこか家庭的などっしり感と素そ朴ぼくさがあり、けれんみがないあたり、地味といえば地味だが、そのぶん貴重といえるだろう。

　会話は弾はずまなかったものの、彼女もほっとできる味を気に入ってくれたようだ。

「ここなら、場所も目立たへんし、仲間なんかと一緒にくるのにもええんちゃうか」

「……そう――ですね」

「ＪＭＡやったっけ。まだ解散してへんのやろ」

「ど、どうしてそのことを」

「にょほほ。わしの情じよう報ほう網もうを甘く見よったらあかんで。しっかり調べはついとんねん」

「……ひょっとして、ＪＭＡの正式名めい称しようもご存じなんですか」

「ヨハン・サンライズ副長あらため総長の凜り々りしい眼鏡めがね姿をそっと見守る会」

　彼女は複雑な顔をした。どうとも言いがたいが、戸惑いの成分が一番多そうだった。それから、悔くやしそうでもあった。

「じゃあ……なおさら、なぜわたしを誘ったのか……わたしには……」

「べっつにのう。深い仲になろうとするんだけが恋こいやないわけやし。片思いも恋のうちやで。わしは慣れてんねん。自じ慢まんやないけどな」

　本当に自慢にはならないが、みじめな連敗街道を歩むうちに学んだこともある。

　自慢をするために恋をするわけではない。恋は見せびらかすための戦利品ではない。

あの子の笑え顔がおが見たい。

いつも笑っていてほしい。

そう思ったとき、人は恋に落ちるのだ。

買い物にでも連れまわされるのかと考えていた。なんとなくそのようなものだろうと想像していたのだ。予想は外れた。

彼は、ええから、ええから、と言いながら北ほく斗と門まで彼女を導いた。

まさか、彼のクランの溜たまり場、動物園事務所にでも連れこまれるのか。違ちがった。

二人は北斗門の脇わきにある防ぼう壁へきと一体化した塔とうのような建物の中へと足を踏ふみ入れた。魔導兵が警備しているのに、大だい丈じよう夫ぶなのか。平気だった。二人は階段を上がって、とうとう防壁の上に出た。

「ええ眺ながめやろ」と言って、彼は屈くつ託たくのない笑い声を立てた。

風が強い。

彼女は右手で帽ぼう子しを、左手でワンピースの裾すそを押さえた。「……そうですね」

銀の砦とりでも主塔はけっこう高いので、遠くまで見み渡わたすことができる。見下ろす街並みは彼女が生まれ育ったエルデンだ。

見慣れているのに、一度も訪おとずれたことのない街のように思われた。

「市内の高い建物のてっぺんなんかも悪うないんやけどな。ほれ」彼は振り返って後ろを指さした。「あっちや。見てみい」

彼女は振り向いた。

エルデンの北西には巨きよ大だいな山脈がそびえ立っている。市

内で北のほうを見ると、黒々とした山並みの輪りん郭かくはいつも背景としてそこにあるはずなのだが、ほとんど意識することはない。

　これほどまでに圧あつ倒とう的な山々がすぐそばにあるという事実を、どうして人は簡単に忘れてしまえるのだろう。

「大きいですね」と呟つぶやいてから恥はずかしくなった。見たままではないか。

「せやなあ！」彼は彼女の羞しゅう恥ちを吹ふき飛ばそうとでもするかのように、ひときわ大きな声で笑ってみせた。「わしもなあ、見るたびに思うねん。しゃれにならんくらい、でっかいわ。あのでっかい山見とったら、なんもかんもどうでもよおなってきよる。投げやりになるんとはちゃうで。細かいこと気にしとってもしゃあないっちゅう心持ちになるんや。それに──」

　彼女は彼につられて空を見上げた。

「この空は、どこまでも繫つながっとるわけやろ。そんなこともな。ここにきたら、思いだすねん。今は遠くにおるあいつもこいつも、この空の下でがんばっとんのやろな、てな。死んでもうたやつも、この広い空のどっかを漂ただよっとんのやろし。そないに考えたら、気分ええやんか」

　青い空が突とつ然ぜん、にじんだ。

　散っていった同志たちが空の上から見てくれている。

　わたしは生みの親を知らないし、第六区でわたしを育ててくれたトーリおじいさんも逝いってしまったけれど、一人じゃない。

　生きている人も、死んだ人も、大勢が、わたしを支えてくれている。

　だから、わたしは立っている。

　あたりまえのことがあふれてきて、胸がいっぱいになって、気がつくと彼女は泣いていた。

「おぅっと──」彼は最初、慌あわてて、彼女の背中をさすろうとしたのだろうが、手を引っこめて、かわりにハンカチを差しだしてき

た。ハンカチくらいちゃんと持っている。断ろうと思った。なんとなく悪い気がして、ありがたく使わせてもらうことにした。

　彼女はその場にしゃがんで、ハンカチで目め許もとを押さえながらひとしきり泣いた。

　ようやく涙なみだが収まると、勝手に口が動いた。「……わたしは、副長に──今は総長ですが、ヨハンさまに──こんな呼び方をして、笑われるかもしれませんが、あの方に憧あこがれていました。最初は、眼鏡をかけているお顔が、とてもすてきだと思って」

「そうかあ。眼鏡はなあ。人によってはポイント高いらしいもんなあ」

「まっすぐな方ですし。甘い顔をなさることはありませんが、本当はとても思いやりが深くて、自ら武勇を誇ほこることはありませんけど、お強くて、それに、ひたむきで」

「わしはよう知らんけど、腹の据すわった男やっちゅうことはわかるで」

「……わたしたちの間では、周知の事実です。ヨハンさまは珐瑠フォール副長を愛してらっしゃいます。たぶん、ずっと、ずっと前から──」

　また泣いてしまいそうだ。

　彼女はこらえた。もう乗り越こえたはずだ。どうせ手に入らない。そんなことはわかっている。

　わかっていて、この胸を焦こがした。

　彼女も、彼女よりもっと年上で、傷つけたり、傷ついたり、捨てたり、捨てられたりしてきた女たちも。

　義に人生を捧ささげている彼女たちには、ふさわしい青春のかたちだったのかもしれない。

「貫つらぬいたらええ」と彼が力強く言った。

　彼女は思わずかたわらの彼を見上げた。

彼は笑みを浮うかべていた。

「貫いたったらえええねん」

彼女はうつむいた。涙がぼろぼろこぼれた。

彼は一度だけ彼女の肩かたをやさしく叩たたいた。

あとは泣きやむまで、黙だまってそばにいてくれた。

わかっている。無理をしすぎた。かっこつけすぎやん。そんな、なあ？　ナチュラルかっこええ男ちゃうのに、装よそおってもやで。バレバレかもしれんわけやし。何こいつ無む駄だな努力しとんねんアホちゃうか思われてるかもしらんわけやし。

それでも嘘うそをついてはいないつもりだ。というか、嘘をつくなどという器用な芸当はできない。できていたら、きっとこんな人生を歩んでいないだろう。みんな知っとんのやろうけど、わし、生まれついてのアホやねん。手の施ほどこしようがないねやんか。しゃあないねん。ほんま。

北ほく斗と門のあとは、一年くらい前に闇やみ市いちのそばにできた遊技場へと彼女を連れて行った。賭と博ばくを絡からめず、入場料と遊技料を払はらって遊ぶだけという、エルデンとしてはかなり斬ざん新しんな施し設せつだ。なかなか話題になっているのだが、龍州連合が嚙かんでいるので、番人の彼女はきたくてもこられないだろう。そもそも、行ってみたいと思うことすらないかもしれない。

実際、彼女は渋しぶったが、そこは強ごう引いんさを発揮してみた。あまり楽しそうではなかったものの、的当てや輪投げなど、腕うで前まえを競きそう遊技では負けず嫌ぎらいなところを見せた。彼もすぐむきになるたちなので、ときおり真しん剣けん勝負のような空気が流れて、どちらからともなく笑った。

「複雑なんですよ」と彼女は小声で言った。龍州連合との関係だろう。「もし妙みような動きを見せたら、即そく……です」

「なーんも起こらんと思うけどな」

「わからないですよ。そんなことは」

「せやな。けど、飛燕フエイヤンは悪いやつやないで」

「あなたのクランのユリカさんと交際しているからですか」

　彼女は秩ちつ序じよの番人の情報部門の重要人物だ。何でもかんでも知りすぎるほど知っている。知ることの力を実感し、信じて、活用することに慣れているだろう。ところが、彼には知られて困ることなど一つもないのだ。

「こう、頭ん中をな。ぱかーっと開いてやな。見せてやれたったら、ええねんけど」

「……何をおっしゃってるんですか？」彼女はきょとんとしていた。愛らしい表情だった。

「こっちの話や」

　遊技場をあとにして第五区に戻もどると、夕食をとるのに早すぎることはない程度の時間帯になっていた。

　昼食と同じ大食小路グラトン・アレイというのも芸がないので、ベンテン・カフェの近くにある「エルメロ」というカフェバーで名物のグラタンを注文した。

　飲み物は、と尋たずねたら、飲酒はしません、と彼女は言った。それでもしばらく熱心にメニューを眺ながめていたので、隙すきありとばかりに素す早ばやく奪うばった。「──あっ……」

「おぅ」見ると、パフェやアイスクリームなどがずらずら並んでいるページだった。「甘いモンか。なるほろ、なるほろ。なんか食べたいんやろ。あとで頼もか。今でもええか」

「い、いいですよ。そんな」彼女は顔を真っ赤にしてうつむいた。「……太るし」

「ずいぶん歩いたわけやし、平気やろ。ちゅうかお前じぶん、太ってへんし」

「……平らだから、そう見えるだけじゃないですか」

「たいら？」

「な、なんでもないです。忘れてください。今のは」

　グラタンは美味だった。彼女も満足してくれたようだ。追加でオーダーしたチョコレートパフェをやけくそのように貪むさぼり食う姿が、やたらとかわいらしかった。

　店を出ると暗くなりかけていたので、銀の砦とりでの近くまで彼女を送ることにした。

　歩きながら、彼はつれづれに故郷のことを話した。

　といっても、彼はずっと王宮の奥に閉じこめられていたので、母国のことなんてほとんど知りもしない。彼にとっての故郷とは、監かん禁きんされていた場所と、そこでふれた骨こつ董とう品ひんやら名品やらの数々、そしてジャン・モーロウという名の口が悪いオッサンの蘊うん蓄ちくと、彼に教えこまれた人生哲てつ学がくだった。

「ほんま、えらいオッサンやったで。いろんな意味でな。頭が切れて、物知りなくせに、嘘ばっかりつきよるし。どんだけ性格悪いねん思てむかついたりもしたもんやけど、今から考えたら、照れ屋なんやろな。たぶん、やけど。そのオッサンが、わしに繰くり返し言い聞かせよった。期待したらあかん。求めたらあかん。望んでもあかん。惜おしんでもあかん。自分の力で手に入れるんや。黙っとって誰だれかに愛される思たら大おお間ま違ちがいや。まあ誰かが守ってくれるやろ。そんなん勘かん違ちがいや。守らなあかん。力つきるまで、ただひたすら歩け、ちゅうてな」

「……厳しい人、だったんですね」

「そんなことあらへん。ゆうたやろ。頭のええオッサンやった。オッサンはわかっとったんや。そないな考え方っちゅうんかな。態度っちゅうか、姿勢っちゅうか。そういうのんが、わしには必要やってな」

「あの、あなたの故郷はキングダム・イズルハですよね。ジャン・モーロウといったら、彼かの国の左大臣がそのような名前の方だと記き憶おくしているのですが」

「おう。知っとんのかい。さすがやのう、アーニャちゃん。その

ジャン・モーロウや」

「え……ちょっと、待ってください……？　左大臣が……え？」

「そんころはまだ、左大臣ちゃうかったで。名門っちゅうんかな。ええ家の出ぇで、将来を嘱しよく望ぼうされとったみたいやけど、偏へん屈くつすぎて閑かん職しよくに回されとったんや。わしの文武指し南なん役やくっちゅうても、まあ、単なる見張りみたいなもんやったからな」

「指南……？　余計に意味がわからないんですけど」

「ああ。ゆうてへんかったか。わしはイズルハの王おう妃ひさんと、時の左大臣の間にできた子ぉやねん。表向きは一応、第三王子っちゅうことになっとったけどな。これがまあ、わしとその左大臣はんがよお似とったらしいわ。魚顔やったっちゅうわけやろな。ナハハハハ」

「……王子、だったんですか」

「せや。王子やった。もうちゃうで。元王子や。わしはただのカタリやねん」

　彼女はしばらくの間、黙りこんでいた。

　やがて、ぽつりと言った。「……不思議です。とても信じられないのに、嘘うそだとはまったく思えない」

「上手な嘘のつき方は、よう教わらんかったからな」

　環かん状じよう通の向こうに銀の砦が見えてくると、彼女は足を止めた。「ここまでで」

「そうか」彼は立ち止まって彼女に向きなおった。「今日はありがとうな。楽しかったわ」

「わたしもです」彼女は下を向いていたが、唇くちびるが微笑ほほえんでいた。ほんまかいな。

　脈ありなんかい。

　うっそやろ。

　わし、あれやわ。自分でもびっくり仰ぎよう天てんやけど、まるっきり期待してへんかったわ。実際、女の子とデートできたったら、もっとガツガツしてまうんちゃうかと思とったけど、意外や意外、そうでものうて──それはもちろん、できれば自分のことを好きになってもらいたい。でも、それ以上に、笑ってほしかった。楽しんでほしかった。もしかして、かえってそれが功を奏した、とか──

　んなわけ、ないわな。

　彼女は顔を上げて、まっすぐ彼を見つめた。

「カタリさん。わたし、あなたのことは好きではありません。正確に言います。好悪は別として、恋れん愛あい感情を抱いだいていないということです。ですが、今日は本当に楽しかったです。貴重な経験をさせていただきました。ありがとうございます」

　そうして彼女は深々と頭を下げた。どこまでも誠実な態度と言葉だった。疑ったり憶おく測そくを逞たくましくしたりする余地はない。彼はそのまま受けとめるしかなかった。眩暈めまいがしたが、彼は男だ。いや、漢おとこなのだ。

　彼は満面に笑えみを浮うかべた。

「そうか！　いやあ、そんならよかったわ！　楽しんでもらえたんやったらな！　それが一番や！　まあ、これに懲こりずにな！　また誘さそわせてもらうさかい、よかったらつきおうてや！　わしはアレやで、ほれ、なんちゅうの、友だちにはええけど、彼氏にはちょっとみたいな、よおゆわれんのやけど、そういうタイプみたいやから、つまりアレやろ、ええ友だちにはなれるっちゅうことやろ！　そないなかんじで思てくれたらな、わしとしても気楽ゆうたら気楽やし、ま、とにかく、また遊んだってな！」

　彼女は少し迷ったようだった。

　三秒くらいして、ぎこちない笑顔を見せた。「はい」

「ほんだらな！」

　彼は思いっきり手を振ふって彼女に背を向けた。

　五メーテルほど歩いたところで、耐たえきれずに振り返ってしまった。

彼女はいた。彼の後ろ姿を見ていたようだ。

それだけでよかった。十分すぎた。彼は心の底から笑うことができた。

「また！　おおきに！」

彼女は右手を持ちあげて、振ろうとしたのかもしれないが、途と中ちゆうでやめた。

彼は前を向き、できるだけゆったりと歩いた。なに見み栄え張っとんねんと思わないでもなかったが、どんなときでも見栄を張るのが漢だ。

彼は角を曲がるまで悠ゆう然ぜんと歩いた。それから駆かけだそうとした。無理だった。

膝ひざから、腰こしから、かくんと力が抜ぬけた。

彼はしゃがみこんだ。当分、立ちあがれそうになかった。

「……平気や。こんくらい。なんでもないわ。また誘ったるっちゅうねん。ええ友だちになったるわ。ほんで、ほんで……笑ってくれよったら、それでええねん。わし……アーニャちゃんのこと、好きや。今日一日で、ごっつう好きになったわ。せやから……もっと笑ってほしいねん。そしたらわしかて、笑えるねん。ちぃっとばかし胸ぇ痛くても、笑えるねん……」

うっかり化け粧しようを落とさずに銀の砦とりでに戻もどった。

ＪＭＡのメンバーにからかわれたが、彼女はぼんやりしていて、どう返事をしたのかも覚えていない。

そういえば、主塔の階段で総長とすれ違ちがった。そのこともあとから思いだした。

慣れないことをして、疲つかれたのだろう。

自室に戻って平服に着き替がえたら、力が抜けて寝しん台だいに倒たおれこんでしまった。

　ふと彼の後ろ姿が脳のう裏りに浮かんだ。彼女は枕まくらに顔を押しつけた。

「……やさしい、人」

　傷つけてしまったような気がする。

　でも、はっきり言わないといけない。そう思った。

　誠実な人だから。自分も誠実にならないといけない。気を持たせるような言動はだめだ。

　つらいけれど。

　胸が痛むけれど。

　どうして、つらいの？

　なぜ、この胸は痛んでいるの？

　恋こいなんて、していない。

　するわけ、ない。

　だけれど、空を仰あおぐたびに、思いだしてしまうかもしれない。

　この空の下に、彼もいるんだ。

　そんなあたりまえのことが、彼女の胸に響ひびくのかもしれない。

「……もう、会うこともない……のかな」

　彼女は答えを持たなかった。

　きっと空だけが知っているのだろう。

cross－2

特別なあなた

Only You

「この薔ば薇らの名前を知っているかい……？」

　男は、フッ……と笑って赤い薔薇の匂においを嗅かいだ。

「愛」

　魔ま都とエルデンに退たい廃はいの風が吹ふいた。

　地上百メーテルを吹きすさぶ強い風も、このかぐわしい花の香かおりを消し飛ばすことは、否いな、薄うすめることすらできはしない。

「強き、愛」

　男は一輪の薔薇を天にかかげた。

「愛……！」

　みなぎってくる。

　突つき抜けてしまいそうだ。

「ああ、それは永遠……！」

　思わず叫さけんでしまった。

　男は目をつぶって首を横に振ふった。「──いけない、いけない。つい昂たかぶってしまったヨ。でも、しょうがないと思うのサ、極限愛ラヴ・マツクス。何しろボクはキミのことを考えているわけだからネ。他ほかでもないキミのことを！　そう、キミの、キミの──キミのことを……！」

　本当はその名を呼びたいのだ。呼びたくてたまらないが、我が慢まんしている。必死だ。死にものぐるいでこらえている。考えたからだ。唯ゆい一いつ無二の存在、全世界の至宝、霊れい妙みようにして神聖なるたった一人のキミの名を、果たしてボクは軽々しく口にしていいものだろうか？　もちろん、寝ねても覚さめても四六時中キミの名だけを口ずさみ、その発音のニュアンスなどを変化させることによって幾いく億おくもの極限詩を作りたいくらいの気持ちでいることは言うまでもないし、そうしたところでキミの名を呼びたい衝しよう動どうが衰おとろえるわけもない、そんなことはわかりきっているけれど、ちょっと待ってほしい。本当にボクは、キミ

の名をこんなふうに何度も何度も口に出していいのか？　それは許されることなのかい？　価値あるものはそれにふさわしく扱あつかわれることによって、さらにその価値を高めるものなのでは？　キミの価値を誰だれよりも何よりも理解しているボクだからこそ、キミの貴重な名を大切に大事に取り扱うべきなのでは？

　こうして男はその名を封ふうじこめることにしたのだった。

　しまいこんだ場所からその名をとりだすのは、どうしても、何がなんでも、是ぜが非でもそうしなければならなくなったときだ。

「それまで──ああ、それまでボクは、キミの名を呼ばないヨ、極限愛ラヴ・マツクス。むろん、とてもつらいサ、極限愛ラヴ・マツクス。苦しいよ、極限愛ラヴ・マツクス。息が止まりそうだ、極限愛ラヴ・マツクス。極限愛ラヴ・マツクス。ああ、極限愛ラヴ・マツクス」

　男は赤い薔薇を胸に抱だいて、はたと気づいた。

「……これだと──これじゃあただ、キミの名を極限愛ラヴ・マツクスに置きかえてしまっているだけじゃないのか……？　たしかに、それは……ボクはキミに極限愛ラヴ・マツクスサ。誰が何と言おうと極限愛ラヴ・マツクスだヨ。いや、だが──どうだろうか？　こんなに極限愛ラヴ・マツクス、極限愛ラヴ・マツクスと連呼しているうちに、なんだか、こう──極限愛ラヴ・マツクスの極限具合が微び妙みように下降してはいないかな……？　そんなことはない！　そんなことは！　断じて！　違ちがうんだヨ、極限愛ラヴ・マツクス！　ああ……！　やっぱりこれはまずいような気がしてきた！ほとんど口くち癖ぐせになってしまっているじゃないか！　それじゃあ極限愛ラヴ・マツクスにこめられた本来の意味が……クッ！　これもすべてキミを愛するがゆえ！　愛しすぎていて、怖こわいくらいだヨ！　愛の本質が恐きよう怖ふだったなんて……！」

　両手で頭を抱かかえた拍ひよう子しに薔薇の花が落ちてしまった。

「──ハッ……!?」

　慌あわてて薔薇を受けとめ、見下ろすと、地上でたった一人の宝物が足を止めていた。

　見上げている。

　高さ百メーテル以上の建物の屋上にいる彼の姿が見えるとも思えないが、しかし、ああ、見えなくたって、わかってしまうものなのではないか。そう──

　そこに愛さえあれば。

　愛があるからこそ。

　つまり、間ま違ちがいなくあるということだネ、愛が……！

　今すぐここから飛び降りたい。キミめがけてダイヴしたい。キミの匂いを嗅ぎたいキミの周りに漂ただよっているキミ的な粒りゅう子しを胸いっぱいに吸いこみたいキミにふれたいキミを抱きしめたいキミのぬくもりを感じたいキミの名を呼びたいキミをキミをキミをキミをああ……！

「極限愛ラヴ・マツクス……！」

　耐たえきれなくて、男は絶ぜつ叫きようした。

　その姿を見つづけたら、必ず絶対、愛のままに野望を成じよう就じゆすべく行動してしまうに違いないので、あえて目をそらし、そして跳とんだ。隣となりの建物へと。跳べ！　否、飛べ……！

「もう、五日……五日になるヨ！　長い、長すぎる、永えい劫ごうのような五日間だったサ……！」

　男は自らに禁じていた。

　一つ、愛する人の名を口に出さない。

　一つ、愛する人に近づかない。

　確信があった。そうすることで、この愛は深まるのだ。それだけではない。

　マリア。

　キミもきっと、もっと、ずっと、今まで以上に激しく、ボクを求めるようになる──そうだろう？

「──ハゥッ……⁉　今、ボクは名前を……イヤッ⁉　喋しやべってはいない！　だから大だい丈じよう夫ぶ！　セーフッ！　セーフだッ！　問題ないサ！　ボクは負けない！　負けるものか極限愛ラヴ・マツクス！　でも、フフフッ……！　キミは負けてもいいんだヨ！　むしろ、どうか負けてほしい……！」

　勝負だヨ、マ──じゃなくて極限愛ラヴ・マツクス！　しかしボクは勝利を確信している！　マリ──じゃない極限愛ラヴ・マツクス、キミはボクが欲しくなる、欲しくて欲しくてたまらなくなる、なんてちょっと大だい胆たんな表現かな？　だけど、そうなるはずサ！　なる──と思う！

　なる──よ、ネ……？

「……何やってるんだか、あのバカ」

　最後に会ったのは六日前だったか。や、会ったっていうか──違うよ？　道を歩いてたら行く手に変なやつが立っていて、そいつは両手を広げてなんかこう目を無む駄だに不気味にキラキラさせて、さあおいでヨ的なポーズをとっていたんだけど、もちろん行くわけないしきもいし怖いから回れ右して逃にげようとしたら追いかけてきて、どうしたんだい、今日はつれないネ、でも大丈夫サ等々、数々の意味不明なことを言うもんだから頭にきて無視してやったのに、ずっと、ずっとついてきて、そのうち無口になって、ちょっと気になって見てみたらやたらとしょんぼりしていた。

　いつもいつも不思議に思う。

　なんでこいつは、こんなふうにされてまで、あんなふうにつきまとってくるのだろう。

　僕だったら──僕なら、とても耐えられない。

　ちょっとひどいかもしれないって、反省することもある。

　せめて、もっとふつうにしてくれたら──

　や、ふつうにされたって、どうもしないけどね？　そういう問題でもないし。

　ただ、目があった瞬しゅん間かん、ぱあっと表情が明るくなって、そんな顔を見てしまうと、せっかく断だん崖がい絶ぜつ壁ぺきを登ってきたのに、また突つき落とすような真ま似ねって、なかなかできなくない？

　それでつい「何？　何か用？」とか言っちゃって、あのバカは「うん！　たいした用じゃないんだけどネ！　いや、ボクにとってはとてつもなく重要な用なんだけど、つまりマリア、キミに会いにきたというわけなのサ！」みたいなアホなことをぬかして、呆あきれてしまって、笑うしかなくて、といっても当然、苦く笑しようなんだけど、それから二言三言交かわして──会ったっていっても、それだけだよ？

　よく飽あきないよね。同じようなこと、何回も何回も繰くり返してさ。進歩がないっていうか、なんていうか。や、進歩なんかなくていいし、あるわけないんだけど。

　もう何年、こんなことやってるのかな。

　その間、何もなかったわけじゃなくて、いろいろあったことはあったんだけど。

　取り返しのつかない痛みさえも、ふだんは感じなくなっている。

　そのことを思いだすと、このままじゃいけないんじゃないかって、考えてしまう。

　このままじゃいけない。

　ほんとにそうだよね。

　昼すぎに家を出て、闇やみ市いちの壁店ウオールハウスをひやかしているうちに夕方が近づいていた。

　以前は合成骨材コンクリートの箱に穴があいているだけの建物だった壁店も、このごろはだいぶ様子が違う。穴は大小様々で、店主が顔を出している場合もあるし、陳ちん列れつ棚だなを備えていることも少なくない。素す性じようを知られたくない者が商売をするために編みだされたという壁店は、もうほとんど形けい骸がい化している。龍州連合がしっかりと睨にらみをきかせていて、ここでは健全な商いが保証されているという意識が、商売人、買い物客、双そう方ほうに根づきつつあるのだ。

闇市は変わった。

各種麻ま薬やくの取り扱あつかいは今も活発に行われているし、いわゆる阿あ片へん窟くつ、麻薬酒場といった、麻薬の常習者が出入りし、廃はい人じんたちがそのまま人生を終えるような場所もある。賭と場ばもある。猥わい雑ざつな匂においは漂っているけれど、統制されている雰ふん囲い気きも感じられる。箍たがはゆるんでも、外れることはない。それは許されない。龍州連合主導で区画が整理され、計画的に再開発が進められている地域もある。

品しな揃ぞろえは総じてまともになった。

意外性やおもしろみはない。掘ほり出し物も少ない。〝ショコラット〟の店を見つけて、すごい商品ばかりで、でも、どれもこれも値段が高すぎて手が出なくて、それでも欲しくて──あのころの自分には何かが必要で、状じよう況きようを変えてくれる何かを手に入れようと、とにかく無我夢中だった。〝ショコラット〟を尾び行こうして、弱みを握にぎる。最初からそうしようと思っていたわけではないけれど、結果的にそういう形になった。今だって何かが必要だ。喉のどから手が出るほど何かが欲しい。でも、この妙みように清潔な闇市では何も起こりそうにないし、あのころみたいな情熱や執しゆう念ねんが、果たして現在の自分にはあるのだろうか。

第九区の外れに、クァラナド歓かん楽らく街がいの店に出勤する前の女性たちが慌あわただしく、あるいは気け怠だるそうに食事をとるような店がある。

店の名前は「旅人」だ。なんで旅人なのかさっぱりだが、どんな人間がいてもじろじろ見られることはないし、味はまあまあ、モノによってはなかなか、値段はほどほどなので、たまに利用している。

今日は夕食の当番ではないし、いらないと言ってきたので、もともと外で食べることに決めていた。

帰りたくない。

ちまちま口の中に入れて咀そ嚼しやくしている豚ぶた肉にくのピカタは、この店では上位に入るおいしいメニューのはずなのに、ぜんぜん味がわからなかった。

どうにもうまくゆかない。

きっかけはルーシーに抜ぬかれたことだったけれど、それは一応、克こく服ふくした──と思う。

マリアローズはルーシーの戦せん闘とう能力を再評価し、どう戦術に組みこんだらいいか考えて、あれこれ試ためしてみた。

問題は、ルーシーがどう考えても攻こう撃げき向きだということで、その意味ではピンパーネルに近いが、当然、彼ほどの安定感はない。攻せめ手として一角を担になってもらうには少々不安が残るものの、ただサフィニアに張りつかせておくのはもったいないし、そもそも彼に持ち味を発揮してもらうためにいろいろ頭をしぼっているわけだから、何も変えないという選せん択たく肢しはない。

カタリは気分さえ乗れば爆ばく発はつ力があるものの、基本は粘ねばり強い防ぼう御ぎょ型だ。ユリカは攻こう守しゅともにバランスよく、しかもそうとう高いレベルでこなせる。

二人のどちらかにルーシーをサポートしてもらう線で考えを進めて、実験してみたところ、どちらも悪くなかった。

とくに、血を見て興奮したルーシーと悪乗りが得意なカタリとの組みあわせはけっこう凶きょう悪あくで、先制攻撃で一気に相手を突き崩くずすための一手としては使えるだろう。まあ、ピンパーネルの役割を二人一組でこなすようなものだ。ということは、ピンパーネルがいればいいわけだし、第一の選せん択たくにはなりえない。

ユリカは一種の天才で、ひたすら勘かんがいいから、誰だれとでもあわせられる。もちろん、ルーシーを支えるにしても補助するにしてもお手の物だが、そうすることでユリカ自身の輝かがやきがいくぶん鈍にぶってしまう。

よくも悪くも、ユリカは真ま面じ目めなのだ。こうしてほしいと言われたら、そのとおりにしようとする。

じつは、ユリカに割りあてる役割は大おお雑ざっ把ぱなほうがいい。

たとえば、サフィニアを守りつつ怪け我が人にんが出たら治してやばくなったらなんとかして！

常人なら「え？　結局、何すればいいの？」と迷ってしまうようなところでも、彼女はためらわない。臨機応変に判断して、ズパパッと行動する。ユリカは籠かごの中に閉じこめてしまってはいけない鳥なのだ。

逆にカタリは、持ち場をきっちり限定してしまったほうが、意外といい仕事をする。向こう見ずで、「わしのことはええ、お前じぶんらは先に行くんや……！」みたいなシチュエーションを本気で願っているようなところがあるから、好き勝手にやらせるとよくないのだ。正直、ここしばらくカタリが死んでいないのは、マリアローズが指揮をとっているからだろう。

トマトクンの場合、適材適所というより、みんなにいい気分で戦わせてドカーンズバーンと敵を粉ふん砕さいしようというやり方なので、全員が十二分に力を出しきることはできるけれど、被ひ害がいを最小限にとどめるという点はあまり考こう慮りよされていない。本人が人にん間げん離ばなれしているものだから、どうしてもそのあたりは軽視しがちなのだろう。いざとなれば、自分がどうにかしよう、なんとかなるという考えがあるのかもしれない。でも、まともな人間はわりと簡単に死んでしまったりもするので、気がついたら手て遅おくれだったということもありうる。そういう事態を招かないように、慎しん重ちように慎重を期して戦いに臨むべきだ。トマトクンもそれがわかっているから、肉体的に一番貧弱なマリアローズに司し令れい塔とう役を務めさせているのだろう。

マリアローズとしては、なんとしてもその期待と信しん頼らいに応こたえなければならない。ルーシーの適性を見きわめて、ＺＯＯの主力として活かつ躍やくさせる。ルーシーはそれだけの素材だ。

僕とは違ちがう。

まだ引きずっているのだろうか。

たしかに、軽々と異界生物フリークスを斬きり殺すルーシーを後ろから見ていると、少しだけつらい。

あんなふうに刀一本で勝負するなんて見果てぬ夢だ。僕はあそこには行けないんだ。



やっぱり、まだ乗り越こえることはできていないのかもしれない。でも、そのうち慣れるだろう。わだかまりは薄うすれて、いつか消えるはずだ。

それより、問題は──そう、問題は別のところにあって、ルーシーのことは本当に、単なるきっかけでしかなくて、そんなことよりも

―

　気がついたら手が止まっていて、豚肉のピカタはすっかり冷めていた。

　これ以上、食べられそうにない。でも、残すなんてできない。無理やり平らげて、店を出ると、外はもう真っ暗だった。

「なんだかなぁー」と呟つぶやいて、ため息をついた。

　歩くのもなんだか億おつ劫くうだけれど、歩くしかないのだ。

　どうにもうまくゆかない。

　そんなことはないはずだ。

　Ｄ３〝渾沌峡間ケイオスハーロウ〟の探たん索さくは、何しろ入るごとに内部が変化するので、着々と進んでいるとは言いがたいが、稼かせげるポイントがいくつか見つかっているし、三種類の有力な異界生物フリークスが判明して、その勢力圏けんにもおおよそ見当がつきはじめている。Ｄ３の攻こう略りやくに取り組んでいた大手クラン、鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイ、ザ・フラクタル、翠玉のエメラルド・血盟クラン、神聖帝国ホーリーエンパイア同好会・クラブ、ＲＫＢのうち、先ごろ鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイとＲＫＢが休止を表明、ザ・フラクタルが撤てつ退たいを決断したのは、むしろチャンスだ。他クランの動向次し第だいで、彼らもＤ３に戻もどってくるだろうが、それまでに少しでも先に進んで、できれば大きな成果をあげたい。

　遅ち々ちとした歩みではあるものの、アンダーグラウンドはこうして少しずつ少しずつ開かい拓たくされてきたのだ。

　未み踏とうの土地に足を踏ふみ入れる。

　今となっては、そんな機会はそうそうあるものではない。こうしてＤ３の攻略に参加していること自体が、侵入者クラッカー冥みよう利りにつきるといってもいいだろう。ＺＯＯは死者も出していないし、よくやっている。

　冷静に考えれば、そこそこうまくいっているはずなのだ。

　唯ゆい一いつ、トマトクンの参加率が低い。それにしても、クラ

ンの雰ふん囲い気きは決して暗くない。

　うまくいっているはずなのに、何だろう。この違い和わ感は。もやもやしてしょうがない。

　わかっている。

　身体からだのキレが悪いという自覚もある。判断も遅おそい。あとで考えると、ああすればよかったとかこうすればよかったとか。納なつ得とくできることが極きよく端たんに少ない。後こう悔かいばかりだ。ようするに、最善をつくしていない。そういうことだろう。

　マリアローズの状態は最悪なのだ。

　こんなにごちゃごちゃぐだぐだと考えて、結論を出すこともできず、戦いの中でやっていることといったら、後ろに控ひかえて、ときおりさして必要もない指示を言い訳みたいに出しているだけなのに、ＺＯＯはちゃんとうまく回っている。

　じゃあ、僕って何なの？

　いてもいなくてもいいってこと？

　そこから苦労してステップアップしたんじゃなかった？

　今まで、そのためにがんばってきたんじゃないの？

　ぜんぶ無む駄だだったってこと……？

　考えすぎなのかもしれない。考えれば考えるほど、どつぼにはまりこんでしまう。悪あく循じゆん環かんだ。気にしないで、楽にして、自分にできることを積みあげていれば、そのうち精神的にも落ちついてきて、何もかもいい方向にゆく。そんなものかもしれない。

　だから、仲間の前では、こういうことはできるだけ頭から追い払はらう。おかしな態度をとっているということはないはずだ。たぶん、気づかれていない。ひた隠かくしにしている。

　それがつらくて、一人になりたかったんだ。

だって、落ちこんで何が悪いの？　悩なやんじゃだめ？　そりゃあね。見せたくないよ。そういう姿は。誰だれかに相談したって、しょうがないことだと思うし。おそらく、気持ちの問題なんだよね。だから、どうしようもないんだよ。自分でどうにかするしかないわけだから。でもさ、いいでしょ、落ちこんだって。悩みたいよ。ぐずぐずしたいんだよ。

ほんとはね。

吐はきだしたいけどさ。言いたいよ。誰かに聞いてもらいたい。けど、こればっかりはね。なんていうか、決定的すぎて。しかも、我ながら、え？　まだ？　みたいな。まだそこで止まってるわけ？　いつから？　いつまで……？　自分でもそう思うんだよ。

似たようなことを、あと何回繰くり返せば、進めるのかな？

いいかげん、恥はずかしいっていうかさ。

言えないよ。言いたくても。ＺＯＯのみんなには、もちろん話せるわけがないし。リーチェとか、そりゃあ励はげましてくれると思うよ？　元気もらえるに決まってるよ？　だけど、毎日毎日、本当に本当に一生懸けん命めいで、アサイラムの運営にしても、医術式にしても、やることだらけのリーチェに、そんなことまでさせられないって。僕のおしりを叩たたいてください、なんてさ。

あいつなら、どう思うかな。

──無理。

言えるわけないし。言わないし。

てゆうか、なんでここであのバカが出てくるわけ？

「末期症しよう状じようだよ……あーもう、ばか……」

頭を叩いてしまった。軽く、だ。

やばいよね。

今あいつが出てきたら、喋しやべっちゃいそうで。

それだけじゃない。

なんか、現れそうな気が。

わかるんだよね。そういうのって。まあ、経験上……？

あたりを見まわしてみた。

もうここは第十二区なので、周囲は大きめの邸てい宅たく、屋や敷しき、もしくは用よう途と不明の変な建物ばかりだ。身を隠す場所はたくさんある。でも、バカは高いところが好きと相場が決まっていて、あいつも例にもれない。しかも、やつの場合、隠れるという部分ではいいかげんだ。本気で隠れるつもりはなく、見つけてほしがっているのかもしれない。昼間もそうだった。どうせいるんでしょ、どっかに。

「……や、いない──かな？」

だとしたら、これは何だろう。これ？　これって？　わからない。

勝手に身体が動いた。そのあとで思った。そうだ。走れ。走ったほうがいい。

逃にげろ。

家までまっしぐらに駆かけた。

門の上からきゅーが顔を出して迎むかえてくれた。これ以上ないくらいほっとして、あちこちに目を配ってみたけれど、やはりあやしい人ひと影かげなどは見あたらなかった。

汗あせをぬぐい、息を整えながら呟つぶやいた。「気のせい……かな？」

ひやりとした。

既き視し感というやつか。違ちがう。そうじゃない。

同じようなことが前にもあった。

一度なら、気のせいかもしれない。

でも、それが二度なら……？

おまえは、やさしいこだ。おまえの、むねに、こんこんとわきつづけている、あい。

あいの、いずみの、その、あたたかさ、ああ、それは、なによりも、とうとい。

おまえは、うつくしい。なによりも、だれよりも、うつくしい。

ああ、おまえは、わたしの、あい。

わたしの、しんぴ。

わたしの、すべて。

おまえは、すばらしい。

かんぜんなる、そんざいよ。

わたしだけの、せかいじゅうで、ひとつだけの、わたしだけの、たからもの。

おまえは、とくべつだ。

わたしは、私は、覚えている。

はっきりと、覚えているのだよ。

それは、私だけの権利だった。お前を手に入れた、私だけに許された、特権だった。

私は夜ごとにお前を私の寝しん室しつへと呼びよせた。お前は私に従った。なぜならお前は私のものだったからだ。私はお前を所有していた。私にとってそれは大いなる喜びだった。なぜならお前は特別だからだ。お前は美しかった。私はお前を通して真の美を知るに至ったのだ。それは私が真実の美を探求するための作業だった。私はお前を寝しん台だいに横たえた。

私はお前に命じた。身にまとうものすべてを脱ぬぎ捨てよ。

当然、お前は私に従った。なぜならお前は私のものだったからだ。

　お前の恥じらう顔が、あるいは苦しそうな表情が、今も私の脳のう裏りに焼きついている。私は決して忘れない。忘れることはない。

　お前が衣服を脱ぐときの手つきを、一挙手一投足を、私は完かん璧ぺきに記き憶おくしているのだよ。

　その肌はだが次し第だい次し第だいにあらわになってゆく一いつ瞬しゆん一いつ瞬しゆんは、私の中では永遠なのだ。

　それは流れ去ることも消え失うせることもない、凍いてついた時なのだ。

　ああ、ああ、こうしていると、お前の身体からだの輪りん郭かくが、ありとあらゆる起き伏ふくが、陰いん影えいのすべてが蘇よみがえり、私をとらえ、離はなそうとしない。

　お前は完全な存在だった。

　私はお前に似た存在を一度も目にしたことがない。

　お前だけなのだ。

　特別なのだ。

　私はお前を観賞した。飽あくことなく眺ながめた。どこもかしこも、あますところなく、この視線でお前を焼きつくそうとした。むろん、そんなことなどできるはずもない。お前を失うくらいなら滅ほろびたほうがましだ。

　お前が私に支配されているという事実は、いつでも私を有う頂ちよう天てんにさせ、同時に絶望の淵ふちへと叩たたき落としたものだった。

　だって、そうだろう。私はお前を手に入れた。それ以上の歓かん喜きはもうこの世にないのだ。これが最後なのだ。私は満たされていた。

　私はお前を愛していた。私はお前を知ろうとした。知りつくした。私のものでありながら、私のものになろうとしないお前の心さえも、私はしっかりと握にぎりしめていた。それはじつにかわいらしい反はん抗こうだった。どのみちお前は私のものなのだ。お前が

面従腹背を貫つらぬこうとすればするほど、私の情熱は燃えあがった。それはもう激しく激しく燃えた。一種の遊ゆう戯ぎだと考えていたとしても矛む盾じゅんはないほどだった。お前は私を愉たのしませるために、あえて私にあらがっているのだ。そうとしか思えなかった。私の愛は深まるばかりだったからだ。

　ああ、汚けがされることなき完全なる者よ、もし叶かなうことならば私はお前を汚して汚して汚し抜ぬいただろうが、お前は決してこの世の不ふ浄じようにまみれることがない、それゆえに私はお前を痛切に愛したのだ……！

　お前は私のもので、私に支配されていたが、私に屈くつすることはなかった。

　私は覚えているのだよ。

　寝ねても覚さめてもお前を思っている。

「身にまとうものすべてを脱ぎ捨てよ」と私は言う。

　お前は答えない。身を硬かたくしている。

「どうしたのだ」

　お前は唇くちびるをかすかに震ふるわせて、ようやく手を動かしはじめる。

　私は満足しない。「まだ返事を聞いておらぬ」

　お前は私を睨にらみつけようとするが、私がお前の弱みを握っていることを、賢かしこいお前はわきまえている。他ほかの子供たちなど私にはもはや用済みだ。それにもかかわらず必要なのだ。

　お前のためだ。

　やさしいお前はお前自身がどうなろうとかまわない。しかし他の者がお前のせいで傷つけられ、あまつさえ命まで奪うばわれるとなれば平然としてはいられない。お前は予測している。仮にお前が自分の力で私の手が届かない場所へ行ったりしたら、私は誰だれも彼もばらばらの肉にく片へんにしてそのへんに打ち捨てるだろう。お前は屈していないが、私に逆らうことはできない。お前は私に屈しないために、唯い々い諾だく々だくと私の命令に従うしかない。

「はい」とお前は答える。小さな、小さな声だ。

「聞こえぬぞ」

「はい」

「お前のなすべきことを言ってみるがいい」

「服を」

「服を？」

「脱ぎます」

「そして？」

「裸はだかに……なります」

「私の前に何もかもさらけだすのだろう？」

「はい」

「お前は気づいておらぬかもしれないが、それはお前の望みなのだ。そうだろう？」

「はい」

「お前は私のものだ」

「はい」

「言ってみるがいい」

　もはやお前はためらうこともなく服従の誓ちかいを立ててみせる。

「わたしはあなたのものです」と。

　一いつ瞬しゅんでも遅おくれようものなら、私は子供たちの朝食に悶もだえ苦しんで死ぬ毒を入れ、誰か一人がそれを食べて命を落とすだろうことを、お前は知っているからだ。

　お前は屈することがない。それゆえに、この胸が引き裂さけんほ

どに愛いとおしい。

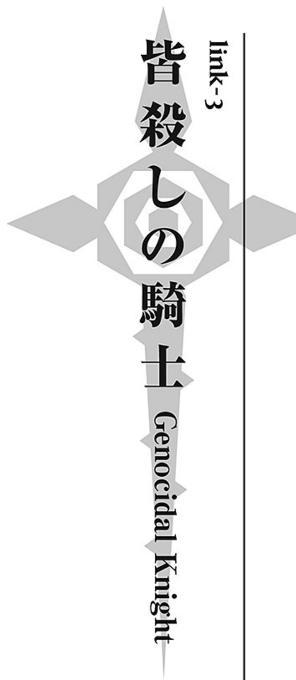
　幾いく度ども幾度も繰くり返され永遠となったその時が私にもたらす歓喜は、誰にも共有されることなく、ただ私の中だけで今もこうして息づいているよ。

　氷のようにつめたく美しいお前の身体からだを、隅すみ々ずみまで、私は覚えているのだよ。

link-3

皆殺しの騎士

Genocidal Knight



誰だれも、誰一人として、彼のことをよくは知らない。

どうやら、たくさんの竜が地上を闊かつ歩ぽしていたころ、それはそう昔のことではないのだけれど、彼は数えきれないほどの竜をその手でしとめたらしい、という噂うわさは囁ささやかれている。でも、くわしいことを知る者はいない。

じつは、とても長く、そして短かった、竜の時代──

竜に屈した一部の人間たちは共食いに精を出していたのだが、それはもうなかったことにされている──

皆、忘れようとしている──

そんな竜の時代、彼は腕うでの立つ竜狩人かりゆうどだったのかもしれない。

竜狩人たちの末路は、けれども哀あわれだった。彼らの大半は結局、竜に食われた。

だから当然、彼のことを知る者はいない。

誰も生き残っていないのだ。

それでも、彼が竜狩人だという噂は、もっともらしく思われる。

最初、東のほうで、遺い跡せきと呼ばれる場所が発見されたという。誰が遺跡と呼んだのか。わからないが、とにかくそれは遺跡と称しようされた。

遺跡を中心にして、人間たちは町を作った。

そうした遺跡町がーいつ斉せいに、あちこちに、たくさん、たくさん、短期間のうちにできた。

遺跡町の多くは王を戴いただいた。

人間たちは続々と遺跡町に集まってきたけれど、資源は有限だった。王たちは民たみを食わせねばならなかった。

軍隊を編制して、近くの遺跡町から資源を強ごう奪だつしようと企たくらむ王が現れた。ある王は自衛のために防衛軍を創設した。

別の王は、攻こう撃げきは最大の防ぼう御ぎよであるとして、民の全員を兵隊にしてしまった。

　そこらじゅうで戦争が起こった。

　人間たちは戦った。

　奪うばうために、生きるために、少しでもいい暮らしをするために、殺しあった。

　私腹を肥やす王は、民の反乱に遭あって殺された。先手を打って、民に民を監かん視しさせ、反逆者を生まない仕組みをつくりあげてしまった利口な王もいた。

　彼はある国の王に騎士として迎むかえられた。形としてはそうなっている。でも、真相は違ちがう。王は這はいつくばって懇こん願がんしたのだ。不便は決してさせない、騎士として遇ぐうするので、どうか敵対しないでほしい。我が遺跡町を滅ほろぼさないでもらいたい。

　彼は名もなき一団を率いて、気ままに、ほしいままに、どこだろうとかまわず襲おそい、殺し、奪いつくした。いや、彼は彼らの首領などではない、ただ荒あらくれ者たちが彼にくっついて歩いていただけだ、そんな話もあるが、そのへんはよくわからない。

　とにかく王は、彼の前にひざまずいて、どうか我が国の騎士に、と哀れっぽく頼たのみこんだ。

　彼はしばらくの間、黄色い目で興味なさそうに王を眺ながめていたが、やがて口を開き、いいだろう、と答えた。そして、彼は騎士になった。

　王が戦争を始めると、騎士はいつも先頭に立って戦った。

　騎士は恐おそれを知らなかった。ひとり突とつ出しゆつして周りが敵だらけになっても、まるで気にしなかった。騎士は剣けんだろうと、槍やりだろうと、斧おのだろうと、鎚つちだろうと、人を殺せる道具なら何でも使った。どの戦場でも、騎士はすぐに土ど砂しや降ぶりの血の雨を浴びたような有様になった。騎士は屍しかばねを粗そ製せい濫らん造ぞうした。醜みにくい死し骸がいを踏ふみにじって、騎士はどこまでも進んだ。

　王は騎士の戦いぶりをうっとりと見物して、さすが伝説の竜狩人よ、と褒ほめ称たたえ、ご満まん悦えつだった。そのころにはもう、竜は狩かられるか、自分たちの世界に帰るかして、めったに見られなかった。時間はとても、とても速く、あるいはゆっくりと流れていた。

　気がつくと、王は騎士のおかげで、十二の遺跡町を治める大君主になっていた。近きん隣りんに、これほどの勢力を誇ほこる遺跡町は他ほかになかった。

　ついに王は、自分の領土を国とし、大王を名乗った。

　建国の宴うたげの途と中ちゆう、大王はふと、不安に駆かられた。騎士のことだ。

　戦いを繰くり返すごとに、少しずつではあったけれど、騎士は変わった。

　初めのうち、騎士は敵のみならず、味方にも恐れられていた。

　それが、だんだん尊敬を集めるようになっていった。

　当然といえば当然だ。大王の兵が戦争で圧あつ倒とう的な勝利を収めることができたのは、騎士の働きがあったればこそだった。騎士は絶えず矢や面おもてに立ち、誰よりも多くの敵兵を殺した。味方の兵は騎士に感謝した。そのつめたい勇ゆう敢かんさに憧あこがれを抱いだく者もいた。騎士に話しかける怖こわい物知らずもいた。騎士はたいてい無視したが、怒おこりだしたり、一いつ喝かつして追い散らすような真ま似ねはしなかった。たまに短い返事をした。ごく稀まれに、笑うこともあった。

　大王もふくめて、誰もが知っていた。

　この国の立役者は、大王ではない。騎士だ。

　騎士は大王の前でもかしこまったりしない。あたりまえだ。騎士がその気になれば、大王の首を斬きり飛ばすことなど造作もない。騎士は大王に仕えているわけではなかった。あくまで、大王の騎士でいてくれているだけだ。

　ずっとこのままならいい。

　しかし誰が保証する？　騎士自身が謀む反ほんを企くわだてなくても、騎士を担かつぎあげて大王を討うとうとする者がいないと言いきれるか？

　大王には、騎士の考えていることがわからない。騎士は無口だし、表情もあまり変えないからだ。

　このまま騎き士しを手て許もとに置いておいていいのか？

　危険なのではないか？

　大王は決断した。

　やるなら早いほうがいい。大王にも忠実な部下はいる。騎士を不気味に思う者もいる。

　大王は百人の精兵を騎士の寝しん所じよに送りこんだ。

　騎士は眠ねむっているところを一ひと突つき、二突きされ、深ふか手でを負ったが、飛び起きて応戦し、あっという間に何人もの兵士を血の海に沈しずめた。

　騒さわぎを聞きつけて、他の兵士たちも駆けつけてきた。

　大王派、騎士派に分かれて、兵士たちは血みどろの戦いを繰り広げた。

　最初の一撃で騎士の息の根を止めることができなかった。それが敗因だった。

　大王派は押され、算を乱して敗走した。

　騎士は大王を追いつめ、低い声で尋たずねた。

　なぜだ、と。

　大王は、玉座を狙ねらう魔ま物ものが目を覚ます前に殺すのは道理だ、と答えた。

　騎士はさらに尋ねた。

　俺が魔物だというのか。

　大王は引きつった笑いを浮うかべた。

　違うというのか。竜狩人め。どこからどう見ても、貴様は魔物だ。

　騎士は大王を一刀のもとに斬り捨てた。

　騎士派の兵士たちは、大王になるよう騎士にすすめたが、騎士は首を縦には振ふらなかった。

　騎士は国をあとにした。少数の兵士が騎士を追いかけたが、大半は残った。

　国は乱れ、分ぶん裂れつした。

　何人もの王が生まれ、殺された。

　騎士は放ほう浪ろうし、何人かの王に請こわれて戦場で剣を振るったが、王が大王になると、決まって騎士に毒を盛るか夜討ちをかけた。

　騎士が去ると、そこには大王と兵士たちの屍が残された。

　騎士が笑うことはなくなった。

　なぜだ、と問うこともなくなった。

　ただ殺した。

　いつしか彼は皆みな殺ごろしの騎士と呼ばれるようになった。

divided-2

総長の鬱屈

Glooming Night

眼前で下を向いている月げつ明みようの刀身は、銀の雫しずくをしたたらせてぬらぬらと光っている。

彼は眉み間けんのすぐ前で手首の裏をあちらに向けて月明の柄つかを両手で握にぎりしめ、足を肩かた幅はばに開いて膝ひざをやや曲げ腰こしを落としたまま、もう十数分も凝じっと気を練っているのだが、充じゆう溢いつするどころか高まり溜たまる気配は微み塵じんもない。何も感じない。

彼の肉体は空だ。穴だらけの、すかすかの容器にすぎないのだ。

窓から射しこむ月の光が、闇やみをまっすぐに切り裂さいている。

銀の砦支塔の道場に彼以外の人ひと影かげはない。

彼はおのれを嘲あざけった。焦じれろ。ぞんぶんに苛いら立だつがいい。おまえはなまくらだ。もはや養父の背を追いかけるどころか、遠くにその後ろ姿を見ることすらできない。

この身体からだは回復しない。アサイラムで治ち療りようを受けた。モリー・リップスは完治を保証した。機能は戻もどっているはずだが、何かを失ってしまったのだ。そうとしか考えられない。

早まったことをした。なまくらの身で総長の座を譲ゆずり受けるとは。できると思ったのか。お笑い種ぐさではないか。嗤わらえ。嗤え。嗤え。これではお飾かざりだ。

道場の戸が開いた。

視線を投げる必要もなかった。

荒あら々あらしいが、それでいて足音はほとんどしない。吹ふきつけてくる気配のかたまりは野や獣じゆうのそれだ。剝むきだしで、用心深く、純じゆん粋すいで、隠かくされている。ばらばらでも、矛む盾じゆんがない。

「総長」嫌いやみのつもりか、死神はわざと強調するように発音する。「精が出るな」

「君もご同類のようだな」大人げない。そう思いつつも、つい彼も受けて立ってしまう。「総長代理」

　死神はゴリッと奥歯を嚙かんだ。「不ふ愉ゆ快かいな呼ばれようだ」

「やむをえまい。君は先々代の総長だ。単に副長に据すえ置くわけにもいかぬ。団の総意だ」

「肩かた書がきなど」

「愚ぐ痴ちかね」彼は月明を下ろして鞘さやに収めた。「よしてくれ」

「貴様はいいのだぞ」

　めずらしいこともあるものだ。

　死神は笑ったらしい。

「何がだ」

「長いつきあいだろう。言いたいことを言え」

　死神といえども、月明かり程度では彼の表情まではうかがえまい。彼は揺ゆれ動く心を抑おさえつけた。「用件があれば、憚はばかることなく伝えているはずだが？」

「俺は一ひと振ふりの義の剣けんだ。貴様が身に過ぎた重荷を引き受けてくれたおかげで、ただの剣に戻ることができた。剣を振るうは貴様だ。命あらば聞く。当然のことだ」

「告ぐべきは告げているよ」

「貴様はつまらん男だ」死神は壁かべに歩みより、掛かけてあった木刀を手にした。「依い怙こ地じで堅かた物ぶつで、面おも白しろみがない」

「君に言われようとは」

「俺はどうあってもいい。もう秩ちつ序じよの番人の総長ではないからな」

　死神は二本目の木刀をとって投げた。

　彼はとっさに手をのばして木刀をつかんだ。即そく座ざに鞘に収

めた月明を床ゆかに置いて身構えた。

　死神が飛んできた。

　予測より早く打ちこんでくる。片手で持った木刀がぐんとのびてくるはずだ。

　彼は両手できつく握りしめた木刀で死神の木刀を弾はじいた。

　重い。

　筋肉、関節から内臓にまで響ひびく、この重量感はどうだ。

　死神は唇くちびるを舐なめた。「──勁ケイ！　勁！　勁……！」

「ツッ……！」彼は必死で死神の木刀を打ち返した。速さはさほど感じないが、力感が異様だ。彼は押されている。あとずさりをしないのは意地だ。退ひけない。退くわけにはゆかぬ。逆を返せば、意地で対たい抗こうする以外にすべがないということだ。

「面つら汚よごしだな……！」死神は距きょ離りを詰つめてきた。

　鍔つば迫ぜり合いになる。

　その前に彼は死神の向こう脛ずねを蹴け飛とばした。死神は蹴られた勢いを利用して床に転がり、起きあがって即そく、また飛びかかってきた。彼は打ち落とした。木刀で木刀を打ち、体勢を崩くずした死神に詰めよって突つきを放った。死神は首を曲げてこれをかわし、下から木刀をすくいあげるようにして彼の顎あごを狙ねらった。間かん一いつ髪ぱつだった。かすりでもしたら、彼は落ちていただろう。

　かわした。

　いかにして？

　彼自身にもわからない。身体が反応した。

　死神は飛びさがって肩かたを回した。「──貴様はなまくらなのか、ヨハン……？」

　彼は半身に構え、胸むな元もとに引きよせた木刀をほぼ垂直に立

てた。「黙だまれ、羅ラ叉サ」

「敵を斬きらねば剣は鈍にぶるぞ」死神は上段だ。「剣とはそうしたものだろう」

「知ったような口を」

「貴様も知っていよう。俺は口下手だ。喋しやべらせるな」

「喋れぬようにしてくれる」

「やってみろ」

「言われるまでもない」

　彼はすっと息を吸って、止めた。

　忘れていた。

　敵。

　敵か。

　おれは誰だれと戦っていたのか。

　すべては邪じや念ねんだった。そういうことか。

　彼は腹の底にたまっていた何物かを破は裂れつさせた。足は勝手に進んだ。全身が一糸乱れず動いた。不規則に見えるが反復して身体からだに叩たたきこんだ足あし捌さばきだ。距離、速度、角度、微び妙みような、あるいは大きな差をつけて相手を眩げん惑わくし圧あつ倒とうする。羅叉は反応した。ことごとく。かわし、弾き返し、受け流した。

　余分を削けずり、削りつくして現れたような羅叉の身のこなしに、血が滾たぎった。

　熱いな。熱い。

　彼は飛びすさって左肩の位置に両の拳こぶしを置き、木刀を傾かたむけて両脚を前後に開く構えをとった。そんな構えは、彼の養父から習い、また見て覚えた破天一流にはなかった。

それは彼の裡うちからしぼりだされて弾はじけようとしている技わざに違ちがいない。

「──〝叢雨ムラサメ〟」

一いつ瞬しゆんで間合いを詰めて、雨あめ霰あられと斬ざん撃げきを降りそそがせた。防戦一方となった羅叉の土手っ腹に前蹴りを二発浴びせたが、死神は半歩も下がらなかった。それどころか押しだしてきた。そうくると思った。

半円を描えがいて羅叉の背後をとった。羅叉はすぐさま振ふり向いたが、半瞬こちらのほうが早い。斬撃の束が羅叉を押して押して押しまくった。決めると見せかけて、また後背に回りこんだ。羅叉は振り返らなかった。跳とんだ。右へ。追いかけて打ちこんだ。

受けながら、羅叉が叫さけんだ。「──愉たのしかろう⁉」

誰が正直に答えるものかよ。

言葉などいらぬはずだ。

剣で語れ。否いな──

それすらもなまぬるいというのか。

二本の木刀が同時に砕くだけ散った。

羅叉は迷わず拳を繰くりだしてきた。よけて、殴なぐり返した。頬ほおをかすめただけだった。膝ひざと膝が激げき突とつした。手刀を肘ひじで打ち払はらい、拳と拳が交こう錯さくして何度も頭ず蓋がいを震ふるわせた。

「初代を思いだす！」羅叉は笑っていた。野犬の吠ほえ顔も笑えみに見えることがある。その程度の人間離ばなれした笑顔だった。「──いつだって俺たちをぶちのめしてくれた！」

「おれを巻きこむな！」思いだしたくないことを思いださせる。本当に嫌いやな男だ。「君の鬱うつ憤ぷん晴ばらしになどつきあっていられるか！」

「貴様以外、誰が俺に火を点つけられる！」

「腕うで達だつ者しやはいくらでもいよう！」

「いいのか、総長！　俺は彼らの息の根を止めるぞ！」

「妙な脅おどし文句を使うな、馬ば鹿かめ……！」

　顎がガクガクしている。拳を食くらいすぎた。左耳が聞こえない。左の腿ももや右の脇わき腹ばらが痛い。思えば全快して以来、こんな手傷を負わされるのは初めてだ。

　おれは結局、恐おそれていたのか。

　羅叉の胸倉をつかんで持ちあげたら、前開きの留め具が弾はじけ飛んだ。鼻面に思いきり鉄てつ拳けんをぶちこんでやるつもりだったが、馬鹿馬鹿しくなった。

　手を離はなすと、羅叉は崩れ落ちてだらしなく床ゆかに寝ねそべった。

　膝が猛もう烈れつに痛む。息はひどく乱れている。やむをえず座った。

「……何をしてくれるんだ。君は、いったい……くだらん。くだらんことだぞ」

「強いな、貴様は」羅叉は口の周りを手の甲こうでぬぐった。「俺のほうが人は斬っている。俺は天性の人斬りだ。それなのに、なぜ貴様のほうが強いんだ」

「知ったことか」

「本音を言う」

「勝手にしろ」

「強い者がなるべきだ。総長は。もっとも強い者が。だから、俺はふさわしくない」

「それだけだと？」

「ようするに、な」

「呆あきれて物も言えぬ」

「初代は強かっただろう。誰よりも」

「あたりまえだ」

「貴様とて強い。何が不満だ」

「ないよ」彼は額の汗あせを手で押さえた。「不満などあるものか」

「そんな面つらはしていない」

「性しよう分ぶんだ。放ほうっておいてもらおう」

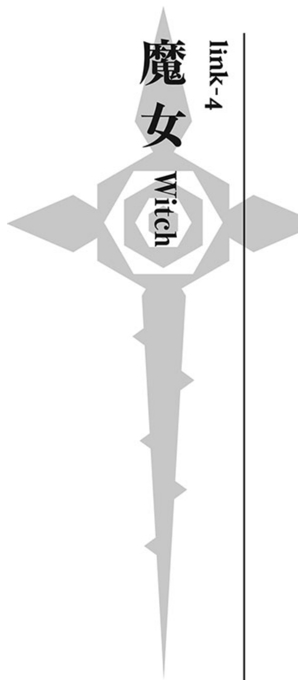
　羅叉は鼻を鳴らした。「琺瑠フオールをどうにかしてやれ」

　彼は答えずに立ちあがった。

　そのまま去るのも心残りなので、羅叉の腹を踏ふんづけてやった。

　羅叉は呻うめいたが、それから子供のように笑った。

　手に負えぬ悪わる餓が鬼きだ。



link-4 魔女 Witch

　意外と知られていない事実だが、王立中央文書館には手洗いの他ほかにも雨浴器、つまりシャワーの設備や調理場などもこっそりあったりする。

　どこにあるのかというと、俗ぞくに文官と呼ばれる非ひ戦せん闘とう事務軽作業用魔ま導どう兵へいが待機しているカウンターの奥だ。かつてこの文書館も、人間の手によって管理運営されていた時期があったのだろう。文書館の女王様はそう推測している。

　また、これもわりと知られていないことだが、キング・グッダーは、君臨すれども統治せず、支配すれども関知せず、などと言っておきながら、主に魔導兵を使って都市の管理、運営に関連する大小様々な作業を一手に引き受けているし、人間の臣下だってちゃんといるのだ。

　たとえば、王直属の近衛このえ騎き士し団だんスペース・ファングは、シャイニンググローリーパレス内の警備が主任務なので、めったに人前に姿を現さないとはいえ、建国以来、それなりの規模を維い持じしつづけているらしい。彼らは全員仮面を被かぶっていて、人種や年代性別さえも見ただけではわからないが、どうやら世せ襲しゅうのようだ。つまり九百年、もしかしたらそれ以上の長きにわたって王家に仕えている家いえ柄がらの者たちなのだ。

　上下水道の整備を担当している魔導兵たちにも、人間の上司がいるという。

　王立銀行と城との間を行き来している魔導兵の中には、肉入りが混じっている。そんな噂うわさもある。

　女王様が知るかぎり、現在、文書館に王の息がかかっている人間はいないが、かつては違ちがった。設備面の証しよう拠こもあるので、そう考えたほうがむしろ自然だろう。

　いずれにせよ、魔導王時代の代しろ物ものとおぼしき冷蔵庫は女王様専用と化しているし、料理が面めん倒どうなときは文書館のそばに出ている屋台で何か買ってすませばいい。入浴はどうせ面倒なので、一日一回シャワーを浴びるだけで充じゆう分ぶんだ。文書館にはソファーがたくさんあるから、どこでも寝られる。基本的にセーターとショーツしか身につけていない女王様は、内ない緒しょにしているけれど、じつはすごい魔ま術じゆつ士しだ。血の巡めぐりをよくして身体からだをあたためることなんて朝飯前だから、冬

でも寒くない。そもそも、年中無休二十四時間営業の館内は常時空調がきいている。一年中寒くも暑くもないのだ。

　文書館二階の一角で、女王様は今日も今日とて読書中だ。

　ソファーの上であぐらをかいたり、膝ひざを崩くずしたり、寝ね転ころがったり、たまには正座したり、わりあい頻ひん繁ぱんに体勢を変えながら、ぱらり、ぱらりとページを繰くる。

　女王様は暇ひま潰つぶしと快楽のために読書をしているので、再読であっても一文字たりとも逃のがさない。熟読する。いや、熟読ではなく超ちよう読というべきか。女王様は文章をもとに映像音声を脳内で再現し、さらに書かれていない部分を補って、ときには改変する。

「━メルアドラの閃せん紅こう騎士アルバレスト・シュナイトスよ。今日こそ貴公のお命を頂ちよう戴だいする。覚かく悟ごしたまえ」

　フェルアロンは剣けんを構え呪じゆ文もんを詠えい唱しようした。

　卓たく越えつした魔法騎士同士の勝負は一いつ瞬しゆんで決する。

　白はく炎えんの奔ほん流りゆう。青せい雷らいの響きよう宴えん。天地震しん撼かん。

　そして、静せい寂じやく。

　フェルアロンは身一つでアルバレストに組み敷しかれていた。

　アルバレストは妖あやしい烈れつ火かの瞳ひとみに嘲ちよう弄ろうで揺ゆらめかせてフェルアロンの×××を握にぎりしめた。

「カラビアの天てん蒼そう騎士フェルアロン。しつこい男だ。嫌きらいではないがな」

「━な、何を……！」

「卿けいとてこうなることを望んでいたのだろう」

「馬ば鹿かな」

「身体は嘘うそをつけぬ」

「よせ……よしてくれ」

「この私が卿の頼たのみを聞き入れるとでも？」

「……ああ！」

「淫みだらな牡おす犬いぬだ、卿は。いや。こんな言い方は犬に悪いな」

「──アルバレスト！　貴公は……」

「アルバレスト様、だろう？　さあ、言ってみるがいい」

「だ、誰だれが」

「よいのか？」

　アルバレストは手を止めた。

　フェルアロンは灼しやく熱ねつに総身を焼かれて羞しゆう恥ちを振ふりきり屈くつするしかなかった。

「……あ、アルバレスト……様」

「いい子だ」

　アルバレストに耳みみ許もとでそう囁ささやかれた瞬間、フェルアロンは悟さとった。

　私はもう逃にげられぬ。

　あるいは、こうして虜りよ囚しゆうの身となることを心底では願っていたというのか。

　否定できぬ自分がいて、フェルアロンはアルバレストの手の動きにあわせて盛りのついた犬のように自ら腰を振り、そして──

「にゃぅっ」

　女王様は胸の真ん中に書物をあてて目をつぶった。

「じんじんするよぉ……」

　ちなみに原文はこうだ。

　その日、カラビアの蒼あおい天と呼ばれし騎き士しフェルアロン率いるカラビア第二連隊は、ジプシニアの野にてメルアドラの閃ひらめく紅くれないと呼ばれし騎士アルバレスト・シュナイトス率いるメルアドラ第一軍団と三度目の会戦に及およんだ。

　勇ゆう猛もう果か敢かんなフェルアロンは自ら陣じん頭とうに立ち奮戦するも、アルバレストは抜ばつ群ぐんの統率力を駆く使しして第一軍団全兵卒を縦じゅう横おう無む尽じんに操あやつり、第二連隊の突とつ撃げきを再三再四阻はばんだ。

　第二連隊は次し第だいに打ち減らされ、ついに万ばん策さく尽つきたフェルアロンは退たい却きゃくを決断、その旨むね指令し、自身はアルバレストに一いつ騎き討うちを挑いどんだ。

　アルバレストは麾き下かの制止を一いつ蹴しゅうし受けて立ち、フェルアロンを打ち負かしたが命を奪うばわず、これを虜とりこにした。

　フェルアロンはのちにアルバレストの股こ肱こうの臣しんとなった。

「フェルアロンたん……」女王様はあたりを見まわした。

　真夜中だ。文書館にひとけはない。

　それがどうしたという気分になってしまった。

　女王様は口を尖とがらせて、ソファーの上で猫ねこみたいに丸く

なった。「──会いたい……なぁ。レニィくん……」

　女王様はある恋こいの持続力に驚おどろきつつ苦しみ、楽しんでいる。



　破れるべくして破れた恋だった。きっと、それがよかったのだろ

う。

　その気になれば、女王様は何だって手に入れられる。あの恋も、やりようによっては、付け入るべき隙すきに付け入れば、成じよう就じゆすることもできた。にもかかわらず、女王様はそうしなかった。相手にとって何が最善か。ついそんなことを考えてしまった。

「恋ってゆぅ～かぁ、愛……？」

　しかし、そこまで高めてこそ、恋は疼うずきを帯びて苦く甘い。

　叶かなわぬ恋こそが最上なのだ。決して届かぬ場所に手をのばして、訪おとずれることのないその瞬間を想像し、砕くだけ散る夢想の欠片かけらが胸に突つき刺さささる。

「みゃぅ……トモヨさん、泣いちゃいそぉだよ……？」

　それにしても──と、女王様の頭脳の別領域はメルアドラとカラビアについて思いを巡めぐらせている。

　メルアドラ。カラビア。いずれも魔ま導どう王おう時代、今でいう中部ミツド諸国域ランズに実在したとされている国だ。正確な年代は不明。なぜなら、暦れき年ねんに関する記き載さいがある文書はこの王立中央文書館にも存在しないからだ。

　ここにないということは、他ほかにもない。

　女王様の師にあたる世にも恐おそろしい魔術士がのたまっていた。

　過去、何かが起こってオーメネイジが始まった。その何かについて記された文書は発見されない。発見されていない、ではなく、発見されないのだ。

　人類の記き憶おくは奪われた。おそらく、魔導王の生き残りとその一派の手によって。

　師はその所業をなした者たちを罪人とお呼びになった。

　罪人の中の罪人、大罪人が今ものうのうと生きのびている。

　師はそうお考えになっていた。

〝原子のアトミック・極大マキシマム・魔術士ドレッドスター〟――魔導王キング・グッダー。

　シャイニンググローリーパレスから出てこない〝引きこインドアもり王キング〟は、人知れず妻を娶めとって子をなし代を重ねている。一いつ般ぱん的にはそう思われているが、師の意見は異なっていた。

　王は代だい替がわりなどしていない。

　当代キング・グッダーは魔導王の末まつ裔えいではなく、魔導王そのものだ。

　つまり、キング・グッダーは不死の存在なのだ。

「……てゆ～かぁ、お姉様だって、殺したって死なないでしょ～よ……」女王様はため息をついて起きあがった。「――あ……れ？　何？　このカンジ……」

　空気が硬こう質しつ化して、パリパリ、ギシギシいっている。

　脈みやく拍はく上じよう昇しよう。発はつ汗かん。眼球の奥が痛い。口の中がカラカラだ。

　女王様は親指を噛かんだ。「――まさか……やばくない？」

　やばい。間ま違ちがいない。

　女王様の本能が危険を察知している。ここまで大きな脅きよう威いはそうそうない。しかも、この感覚。女王様は両手で股こ間かんを押さえて唇くちびるを噛んだ。「……お姉様」

　仕込まれているのだ。求め、拒こばむように。それでいて、離はなれることができない。

　彼女は師の愛あい玩がん動物だった。軛くびきから脱だつして逃にげたつもりだが、それが本当に自分自身の意志によるものなのか、やはり師の思おも惑わくどおりなのか、彼女には判断がつかない。

　何もかも仕組まれたことなのではないか。

お姉様は結局、トモヨさんに飽あきちゃったんでしょ？　もういらないんでしょ？　だから追いかけてこないんでしょ？　その気になればできるはずなのに、それどころか、帰ってこいって念じてくれるだけで、トモヨさんは帰らずにはいられなくなっちゃうのに、そうしないのは、トモヨさんなんてどうでもよくなったからでしょ……？

「──逃げないと」

トモヨは跳とびあがって駆かけた。

つかまりたくない。でも、つかまえてほしい。自分と向きあいたくない。

文書館の中にいては袋ふくろの鼠ねずみだ。外に出た。

張りつめた空気が肌はだを刺すようだ。脚あしが震ふるえる。下半身に力が入らない。指一本でもふれられたらお終しまいだ。這はいつくばって許しを乞こい、どうか奉ほう仕しさせてくれと哀あい願がんする羽目になる。

トモヨは夜のエルデン第一区を走った。

安全。安全な場所はないだろうか。どこか身を隠かくせるような場所は。思いつかない。

無理だ。逃げられっこない。無む駄だなあがきだ。わかっている。

助けて。助けてよ。誰だれか、助けて。

レニィくん……！

トモヨは足を止めて眼鏡めがねを外し、投げ捨てた。「……お笑い種ぐさじゃねえか、ああ？」

もうここは第十三区〝彷徨ＲえるＳ魂区Ｗ〟だ。崩ほう壊かい寸前の高層建築が身をよせあっている。過去に何度も裏切りあって、疲つかれ、あきらめた恋こい人びと同士のように。

トモヨ（裏）は唇をぺろりと舐なめて髪かみの毛を一本引き抜ぬき、セーターの裏のポケットから触しよく媒ばいをとりだした。千

年紙の破は片へんと黄よ泉み蟲むしだ。ベティ。ああ、ベティ。間ま抜ぬけな妹分。真ま面じ目めなだけが取り柄えの処女が。てめえごときにできて、このトモヨ様にできねえことなんざ、一つたりともねえんだよ。やりゃあできるが、めんどくせえし非効率だからやらねえことはあるにせよ。意識の裏側に回ったトモヨ（表）は、すでに精神集中を完かん了りようさせている。トモヨ（裏）は振ふり返って詠えい唱しようした。「怨Ｓｙ款冥Ｇｒｕｍ愛死雷」

　愛と★ラブデス死の雷サンダーボルトは黒い稲いな妻ずまだ。

　暗黒が閃ひらめいて轟とどろいた。

　ばっちりお見み舞まいしてやったというのに、何事もなかったかのようだ。

　髪は銀色、瞳ひとみは黒、頬ほおは薄うす紅べに、青い、青いドレスを身にまとい、彼女は笑っている。

　どう見ても十歳かそこらだ。あからさまに高貴で傲ごう慢まん、砂糖菓が子しを思うぞんぶん与あたえられながらもダイエットして華きや奢しやな体型を保ち、貴公子との結けつ婚こんを夢見ている狡こう猾かつで夢見がちな、汚けがれを知らぬくせに汚れきっている無駄に美しい残ざん酷こくなお姫ひめ様といった風ふ情ぜいだが、その正体はもっと、もっと、笑いが止まらぬほどにえげつなく、とんでもない。

〝閃光のスパークル魔女ウイツチ〟と人は呼ぶ。

　上古の精せい霊れい魔ま術じゆつを批判する形で生まれたという実証主義魔術、力学魔術の流れをくむ白魔術の創出者で、戦略級ストラテジツク・魔術マジツク、古代呪じゆ式しきの大家でもある。

　その名は、マチルダ。

「きてあげたわよ、トモヨ」

　なんて声だろう。

　月を叩たたき割って粉ふん砕さい器きにかけ液体にしたものを、耳に流しこまれているかのようだ。

　それは身体からだの中へ中へと染しみこんできて、あっという間

にトモヨを狂くるわせてしまう。

　あらがうためには、ありとあらゆる汚お濁だくを総動員して、ピュアな本能を穢けがすしかない。

「お会いしとうございました、お姉様──なんて言うと思うかよ？　このトモヨ様がよ」

「まあ、ド汚きたない言こと葉ば遣づかいだこと。あなたには似つかわしくないのだわ、トモヨ」

「うるせえぞ、ババア」

「お仕置きが必要なようね？」

「やれるものならやってみやがれ」

「Ａｍｉｄ澪」

　鳥とり肌はだが立った。すげえ。すげえ。すげえ。

　マチルダを中心とする半径五メーテル程度の空間に、無色透とう明めいの小さな玉が生じた。

　魔術士の感覚をもってしても、とうてい数えられるものではない。途と方ほうもない数だ。

　勾玉マガタマ。

　白魔術の初歩の初歩でも、マチルダが使ってみせればこのとおりだ。

　トモヨだって、しかし、用意くらいはできている。もう触媒は手の中だ。無数の勾玉が押しよせる前に、トモヨはしゃがんで地面を叩いた。「蕃Ｙｕ禰黎Ｋｒａｎ夜咲花」

　夜に★ナイト咲く花ブルームフラワーは破は裂れつする闇やみだ。

　地中で爆ばく発はつした暗黒は、地上にあふれだしてトモヨを覆おおい隠した。勾玉は暗黒やらさまざまな物の破片やらで残らず防がれた。

　トモヨはもう次の魔術を準備している。無意識のうちに握にぎりしめた触媒、秘薬に自身の弱気を見た気がした。でも時間がない。
「弔Ｈａｎ侮礼Ｎａｎ蝶様舞」

　蝶の様フラツターに★舞えバタフライはトモヨを運ぶ黒色の風だ。

　漆しつ黒こくの風がトモヨを包んで宙へと巻きあげた。

　頭上に、まばゆいばかりの、白い光。

　先回りされた。

「かわいい子」

　白い光が肉にく薄はくする。またたく間にとらえられた。抱だきしめられ、唇を奪うばわれると、その刹せつ那な、心が、身体がわなないて、ねじれそうになり、熱い、煮に込んだ果か汁じゆうのような唾だ液えきがほんの一ひと滴しずく、口こう腔こう内にそそぎこまれただけで、もうおかしくなってしまう。

　──だから、ゆったのにぃ～……。

　トモヨ（裏）はトモヨ（表）の意味不明な言葉を聞いたように思った。というか、裏も表もあったものじゃない。黒色の風は圧あつ倒とう的な光で吹ふっ飛ばされた。光に抱きすくめられたトモヨは、外から、自分の内から攻せめたててくる熱の中で身み悶もだえ、喘あえいだ。

　ここはどこ？

　何がどうなっている？

　考えようとして、押し流される。

「わかっているでしょう、トモヨ。わたくしに逆らうことなど、できはしないのだわ」

　うなずいてたまるか。

　耳を噛かまれた。軽く。そして、ねぶられた。甘く。

身体が跳はねあがって、押さえつけられた。

組み敷しかれているのだ。

硬かたい、つめたい、夜道のど真ん中で。

「お馬ば鹿かさんなのね。どこをどうすればどうなるのか。わたくしが忘れてしまったとでも思っているのかしら。何もかも覚えているのよ。わたくしは片時も忘れたことはないのだわ」

トモヨ、あなたのことを。

嘘うそばっかり。嘘に決まっている。

それなのに、トモヨの身体は反応する。違ちがう。

心まで。頭の中まで。

ずっと追い払はらって、閉めだしていたのに。跡あと形かたもなく消そうとして、できなくて。

トモヨはこわごわと目を開けた。ああ、お姉様。

お姉様がここに。

見下ろされている。

軽けい蔑べつしきった、でも、愛いとおしくてたまらない、といった目つきで。無む垢くな幼子のような、それでいて、ろうたけた淫みだらな貴婦人のような顔で。

首から下腹部の手前まであらわになった青いドレスが憎にくらしい。

そんなふうに肌はだをさらして歩かないで。

白い、肌を。

どこまでも白いその肌が、欲よく望ぼうで色づき、汗あせばむ瞬しゅん間かんを、どうしても思ってしまう。

「いいのよ、トモヨ」とお姉様は囁ささやく。もう我が慢まんなんてできっこない。

　トモヨはお姉様の胸むな元もとに唇くちびるを寄せた。とろとろになった舌を這はわせて、ドレスをずらし、硬い、小さなつぼみを口にふくんだ。お姉様が吐と息いきをもらすと、脳が痺しびれた。

「ごめんなさい、お姉様、ごめんなさい」

　何度も何度も謝りながら、トモヨは唇と舌と歯をやさしく、ときに乱暴に使ってお姉様を汚けがした。

　今は、少なくとも今だけは、トモヨだけがお姉様を汚すことができる。今だけは。

　最近は誰だれが、どんな連中が、お姉様の寝しん室しつに侍はべっているのだろう。

　胸が灼やけて、トモヨの動きは激しくなった。上と下が逆になった。お姉様にのしかかって、口づけ以上の口づけを全身に浴びせた。

　お姉様は耐たえて、こらえきれなくなると、細い声を出す。だめ、と言う。だめよ、それ以上は。誘さそいの言葉でしかない。わかっているのだ。

　でも、本当にどうしようもなくしてやりたい。本心からの恐きょう怖ふと期待がない交ぜになった拒きょ絶ぜつを引きだしたい。我を忘れたお姉様が見たい。

　一度も果たされたことのない望みを、今こそ、なんとかして。

「──はっ……そこは……！」お姉様の身体からだが引きつった。
「──んんんん～～～……！」

　まだだ。もっと。もっとだ。トモヨは止まらない。お姉様の両手がトモヨの頭を押さえている。違う。押しのけようとしている。させない。食くらいつく。突つき入れて、かき乱す。お姉様を味わって、ぜんぶ平らげてしまう。

「だめ……だめだったら……トモヨ、ああ……いけないわ、そんな……ゃぁ……！」

　歓かん喜き。魂たましいが張り裂さけそう。それなのに、どうしてこんなに悲しいの……？

　やがてぐったりしたお姉様を包みこむように抱きしめて、トモヨはいっそ泣いてしまいたいと、それだけを思っていた。

　なぜこんなに愛おしいのか。独り占じめにしたいのか。

　そう仕込まれたからだ。

　どんなに願っても独どく占せんできないとわかっていたから、逃にげだした。

　そう仕向けられたのだ。

　トモヨは操あやつられている。

　それでもいいと、心のどこかであきらめているのだろう。

　でも、悲しいよ。

　絶対、手に入らないんだもん。

「泣いているの？」お姉様はトモヨの腕うでの中から這いだしてきて、唇を唇で挟はさむだけのむごい口づけをした。「━━本当に、あなたはお馬鹿さんなのね、トモヨ。いいのだわ。わたくしに吸わせなさい。知っているでしょう？　わたくしはそれが大好きなのよ」

「……はいっ！」

　トモヨは嬉き々きとしてお姉様の前にそれを差しだした。お姉様はその突とつ起きにまず息を吹きかけた。それだけでトモヨは何がなんだかわからなくなってしまった。舌先が軽くふれた。意識が飛びかけた。音を立てて吸われた。間もなくトモヨは遥はるか遠くの世界に到とう達たつした。お姉様の恥はずかしい言葉に嬲なぶられて、自らはしたない言葉をたくさん吐はきだして、何度も何度も達した。もう、死んじゃいそうだよぉ……。

　気がついたら、お姉様に抱だかれていた。

　こんなにやさしいのに、とてつもなく無情なのだ。

　マチルダ。

　この人こそ本物の魔ま女じょだ。

「……どうして」

「今さら、なぜきたのかと言いたいのかしら？」

「用もなく……きたりはしないでしょ。お姉様のことですもん」

「わたくしはあなたに会いにきたのだわ」

「はぐらかさないでください」

「本当よ、トモヨ。師として伝えておかねばならないことがあるのだわ。それでわたくしは、あなたのところへやってきたのよ」

「……伝えておかないといけない……こと？」

「ええ」

　お姉様はひどい。

　ひどすぎる。

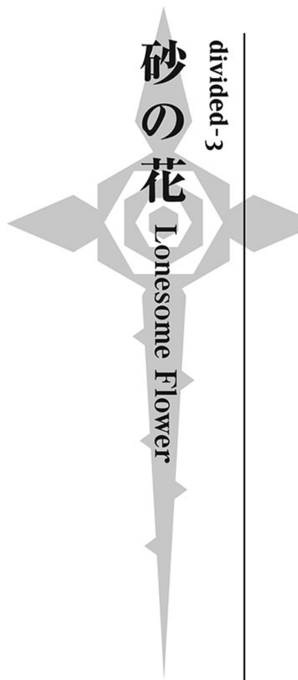
　一瞬で置き去りにされた。

　お姉様はもう遠くにいる。

「もうすぐ終わるのだわ。オーメネイジが。そして始まるのよ。カラミテイジが」

　光を背負い、乱れに乱れた着衣を気にすることもなく、銀色の髪かみをかきあげて、冷れい酷こくな太陽のように魔女は笑った。

「覚かく悟ごなさいな、トモヨ」



divided-3

砂の花

Lonesome Flower

「──もう一軒けん！　もう一軒や！　いやいやいや！　一軒とゆわず二軒でも三軒でもどこまでもいったるでえ！　げへあははは！　わしは最強の酒しゆ豪ごうやっちゅうねん……！」

「はイはイ」

「ボケェッ！　ぴぴぴピーンプッ！　お前！　はいはいやあらへんど！　はいはいって、アレか、あの……なんや！　赤ん坊ぼうかい！　よちよちしとったらあかんねん！　わかっとんのか、そのへん！　どや！」

「わかってマス。わかってマスから──」彼は千鳥足状態で迷走しかけていたカタリに肩かたを貸してやった。「でも、もう帰ったほうガ」

「帰るかダァホ！　か、帰るて……帰るて、なあ！　どこに帰んねん！　ボケ、わしはアレやぞ、渡わたり鳥ちゃうねんぞ、か、帰る……ほー、ほー、ちゅうて……帰るとこなんてなあ、帰る、とことか……そんなん……わしには、ないねん……えぐしっ」

　少し迷ったが、彼は慰なぐさめるつもりでカタリの首筋あたりを軽く叩たたいた。

　やめておいたほうがよかったか。

　カタリはうなだれて号泣しはじめた。「……ええんや。わしはな。べっつになあ。ええねん。友だち上等や、上等……何が上等やねん！　何が……どこが上等じゃ、ボケェ！　下等や。下等すぎるわ！　ちゅうか、わし、いっつもこんなんばっかやんけ……なんでなん……？　どないなっとんのや……」

　クァラナド歓かん楽らく街の夜は、深まるほどに色しき彩さいも匂においも濃こく入り交じり、薄うす汚よごれた道みち端ばたに積もってゆく。

　昨日の二十時から四軒梯はし子ごして、もう二時だ。

　彼自身はうわばみというやつで、どれだけ飲んでも酩めい酊ていすることはまずないが、カタリは違ちがう。弱くはないにしても、底そこ抜ぬけに強いわけではない。それなのに、ありとあらゆる種類の酒を手当たり次し第だいに、浴びるように飲んだのだから、明日はひどいことになるだろう。それどころか、これ以上飲んだら、

明日がやってこないかもしれない。

「帰りまショウ」彼はカタリにそう声をかけた。

　拒こばまれても、無理やり宿に連れてゆくつもりだったが、カタリは泣きながらうなずいた。

「……せやな。すまんのう、ピンプ、こんなん……えらい……つきあわせてもうて……」

　浮うかぶ単語はいくつかあれど、うまく繫つなげることはできそうになかった。

　伝えたい気持ちはあるのだが、はっきりとした形にならない。

　いまだに共通語が苦手だ。そもそも思いを言葉にする習性がないのだろう。

　獣けものなのだ。

　彼は首を横に振ふった。「──イえ」

　カタリを貸し宿まで送って家路についた。

　そのはずだったのに、足が別の方角へと向いていた。

　奇き妙みようだと思ったが、作られた人殺しの彼は、自問自答するより身体からだが動くに任せることに慣れている。

　クァラナドに戻もどり、立ち飲みの屋台で蒸留酒を注文して一気に飲み干した。竜りゆう舌ぜつ蘭らんとかいう植物の葉からとった汁しるで作られているという酒だ。どうやら彼はそれが好きらしい。

　不思議だった。自分に食べ物や飲み物の好みがある、その事実が。

「同じの。もう一いつ杯ぱいくだサイ」

　もどかしい。

　ふたたび一息で飲みきって、グラスをそっと置くと、頼たのんでもいないのに三杯目が出てきた。彼は半分だけ飲んだ。

所しよ詮せん、自分はまともな人ではないのだろう。なりたくても、なれるものではない。ふりをすることすら難事業だ。

近づこうとしても、あるところで足が止まってしまう。

仲間たちの泣き笑いに接すれば接するほど、思い知らされる。

やはり自分はあの男の、シロクネの、作品にすぎないのだ。

彼は三杯目の残りを呷あおって立ち飲み屋の主人に告げた。「お勘かん定じようヲ」

代金を払はらって立ち飲み屋を離はなれた。感覚に揺ゆれや乱れはない。彼の本ほん性しようがそれを許さない。

家に帰れば、おそらくきゅーが迎むかえてくれるだろう。彼は安あん堵どするだろう。

その気持ちさえも偽にせ物もののように思えて仕方ない。

立ち止まって息をのんだ。

「……ジナ？」

何を。

何を言った。

今、自分は何を。

何を見た。

いったい何を。

一いつ瞬しゆんだった。女だ。フードを目ま深ぶかに被かぶってうつむいていた。こちらに歩いてきて、顔を上げ、ちらりとこちらを見た。それから左へ曲がった。

照明は色つきだ。はっきりとしたことは言えない。しかしフードからこぼれた髪かみは黄土色だった。そう見えた。そして、あの顔だち。馬ば鹿かげている。一度だけだ。何度も、何度も、何度も肌はだをあわせた。それなのに、彼はたった一度きりしか彼女の顔を見ていない。いつも目め隠かくしと猿さる轡ぐつわを兼かねた器具

を装着させられていたからだ。覚えていない。覚えてなど。

　彼は駆かけだした。足あし許もとがおぼつかない。酔よっているのか。胸が破れそうだ。それでもどうにか彼女が消えた暗い小道にたどりついた。

　いなかった。

　彼女だけではない。誰だれもいない。

　電でん飾しよくされた看板がいくつか出ている。彼女はいずれかの店に入ったのかもしれない。

　あるいは、錯さつ覚かくか。

　彼は唐とう突とつに思いだした。

　違う。正気に返っただけだ。

　彼女はもういない。

　彼に生きろと告げて、彼女は死んだのだ。

　気がついたら、鮮あざやかな橙だいだい色いろの瞳ひとみに見つめられていた。

「……はイ？」

「や、はい、とか──」

　マリアローズはローテーブルに腰こしかけて、彼とほとんど膝ひざをふれあわせている。

　ソファーに座り、彼はいったい何をしていたのか。

　マリアローズは首を傾かしげて頭を掻かいた。「……大だい丈じよう夫ぶ？　なんか、魂たましい抜ぬけてたっぽいけど」

「タマ、シイ……」彼は胸を叩たたいて笑ってみた。「抜けませン。ワタシは生きているので、ここにありマス」

「そういうことじゃないんだけどね？」

「デワ、どういう？」

「ん、と……」マリアローズは一度立ちあがって、彼の隣となりに腰を下ろした。「何時くらい？　帰ってきたの」

「時間は」彼はリビングを見まわした。

　きゅーがダイニングテーブルを布ふ巾きんでふいている。朝食をすませて、後片付けに精を出しているといった風ふ情ぜいだ。

　自分はいつからここにいるのか。その間、マリアローズたちは朝食の支し度たくをしたり食べたり、ひょっとして彼に声をかけたりもしたのか。

　わからない。

　記き憶おくにない。

　彼は下を向いた。「……時間は、わかりまセン」

「カタリと飲みに行ったんだよね」マリアローズは彼の腿ももに手を置いた。「あ、言っとくけど、責めてるとか、そういうのじゃないからね。僕ごときがピンパーネルのこと心配するっていうのも、なんか違ちがう気がするし。ただ訊きいてるだけなんだけど」

「ええ」彼は顔だけ横に向けて、口許をゆるめた。「──そうデス。カタリと・お酒ヲ。たしか……二時くらいマデ。それカラ、宿に送って」

「で？　そのあとは、まっすぐ……？」

「いえ」

「ふぅーん……」マリアローズは脚あしを組み、彼の腿を人差し指でとんとんと軽く叩いた。「なんか、ごめんね？　立ち入ったことかもしれないけど……誰か、その……なんていうか、いたりするの？　いるっていうか、あるっていうか。ひとりで立ち寄るような場所、みたいな」

「立ち寄る、場所──ですカ？」

「えっと……」マリアローズは片方の頰ほおを少しふくらませ、指で搔いた。「何だろ、ほら──ようするに……彼女？」

「カノジョ」

　その言葉の意味するところはすぐにわかった。今はそれどころではないようだが、カタリがよく、カノジョが欲しいカノジョが欲しいと言っていたからだ。

　胸の裏側がざらざらしている。

　これは砂の感かん触しよくだ。

　彼はゆっくりと首を左右に振ふった。「いまセン」

「そっ……か」マリアローズは軽く唇くちびるを嚙かんで彼の腿から手を離し、自分の鎖さ骨こつを服の上から指でなぞった。「──や、いてもおかしくはない……よね？　とか思ってさ。そういう気配は、まあなさげだったけど──てゆうのも失礼な言い方かもだけど、ちょっと様子が変だったからさ。なんかこう、誰かと、何かあったのかなーとか……」

「何も」彼の口は勝手に動いた。「何もありまセン」

「なら──」マリアローズは微笑ほほえんだが、かすかに眉まゆがひそめられていた。「いいんだけど」

　自分は何をしているのだろう。

　どうしてしまったのだろう。

　夕食は家でとった。それから部屋に行って寝ねようとした。

　気がついたら、クァラナドにいた。

　いや、何も考えなかったわけではない。家を抜けだすときは、誰にも、きゅーにさえ気づかれぬように、細心の注意を払はらった。

　問題は、なぜ自分がそんなことしたのか、だ。

　動機がわからない。とにかく身体からだが動いたのだ。それに

従った。何が身体を動かしたのか。

　家に帰ろう。だめだ。

　足が動かない。

　立ち飲み屋で竜りゆう舌ぜつ蘭らんの蒸留酒を三杯ばい、立てつづけに飲んだ。全身、顔まで刺青いれずみだらけの立ち飲み屋の主人に声をかけられた。「あんた、昨日もきてくれたね」

　彼はしばらくの間、主人の顔をじっと見つめていた。主人が目をそらして手仕事を始めてから、うなずいた。「はイ」

　主人はこちらを見ずに言った。「──何か、あれかい。むしゃくしゃすることでも？」

「むしゃくしゃ……」彼は四杯目を舐なめた。「なぜデスか？」

「そんなツラ、してるからさ」

「ツラ……」彼は少しだけ首を傾げて頭をさわった。

　主人がちらりとこっちを見て、獰どう猛もうだが愛あい嬌きようのある笑えみを浮うかべた。「そいつはヅラだろうよ。何。あんた、それ、被かぶってるのかい？」

「地毛デス」

「だよな。そうは見えないもんな。ちなみに俺は」主人は髪かみの毛を外した。「ヅラなんだよ、これ。けっこう高かったんだ。いい出来だろ？」

　都合五杯飲んで立ち飲み屋をあとにすると、また身体が勝手に動きだした。

　白昼のような夜のクァラナドを歩いた。

　道行く男に声をかけようと手ぐすね引いている女に、彼がつかまることはない。

　彼はここにいるが、いないのと同じだ。

　ときおり立ち止まってあたりを見まわした。

何かを探しているのだと、ようやく気づいた。

会いたがっているのだと知った。

ジナ。

あなたに会いたい。

それが叶かなわぬ願いなのだということは、もちろんわかっている。それとも、わかっていないのだろうか。

「──ピンパーネル？」

「ふぁイ？」

マリアローズに名を呼ばれて我に返った。

何か味がする。金属の味だ。硬かたい物をくわえている。スプーンだ。椅い子すに座っている。ダイニングテーブルの上には皿がのっていて、カレーライスが三分の二くらい残っていた。

マリアローズはもう食べ終えて、皿を片づけてしまったらしい。オレンジジュースか何かを飲んでいる。きゅーとルーシーは台所だ。トマトクンはソファーで横になって、腹を掻かきながら寝ね息いきを立てている。

「大だい丈じよう夫ぶ？」マリアローズの眼まな差ざしはだいぶ気き遣づかわしげだ。

彼はうなずいてスプーンを口の中からとりだし、カレーとライスをすくった。食べると、かなり冷めていた。しかも、妙みようにしょっぱい。

「……今日のは失敗作だからね」マリアローズはトマトクンを一いち瞥べつして肩かたをすくめた。「てゆうか、カレーしか作れないくせに失敗って……どうなのって話だけど」

今日の食事当番はトマトクンだったのだ。最近は疲つかれ気味のようで、朝も昼も晩も寝てばかりいるから、マリアローズが代わってもいいと言ったのだが、トマトクンは拒きよ否ひした。そのあげ

くにこのざまなので、マリアローズは呆あきれつつ、内心ではかなり気にしているはずだ。

　そうでなくとも、最近、何やら思いわずらっているらしい。本人の口から聞いたわけではないが、なんとなくそんなふうに感じられる。

　苦労性しようのマリアローズに、余計な心配の種を植えつけたくはない。

　彼はカレーライスを平らげ、皿とスプーンを台所に持っていった。食器はルーシーときゅーが洗ってくれた。

　部屋に戻もどろうとしたはずなのに、椅子に腰こしかけていた。

「ピンパーネル、さ」マリアローズはコップの底でテーブルをこつこつ叩たたいた。「……やっぱり、あれだよね。僕には話しづらいとか、そういうのもあったりするよね」

「そんなコトは」

「いいよ」マリアローズはちょっとだけ口を尖とがらせた。「気を遣つかってくれなくても」

　彼はうつむいた。「……そういうつもりデワ」

「ごめん、ごめん」マリアローズは笑みをこぼした。「話してほしいってことじゃないよ？　話したくないことだって、あるだろうし。なんてゆうか……まあ、ようするに、僕のわがままなんだよね。話してほしいってより、ただ僕が聞きたいんだと思う」

「ワガママ──」彼は首を横に振ふった。「違ちがう。違いマス。ワガママじゃない・ワタシは思いマス」

「そうかなぁー」

「はイ」

「じゃ、話してくれる？」

「う──」

「冗じよう談だんだってば」マリアローズは笑った。

心がほどけてしまいそうな笑い声だった。

いつか話せる日がくるかもしれないと思った。

今はまだ無理だ。

自分にも自分のことがわからない。整理がつかないのだ。一人で考えてみたが、何があったのかさえ、ピンパーネルはよくわかっていない。いや、わかってはいるのだが、ちゃんと理解できていないのだ。

ジナは彼に生きろと言い残して死んだ。

殺された。

ジナを失った。

それでは、彼にとってジナとは何だったのか。

殺しの仕事を終えて戻ると、彼女が待っていた。違う。あてがわれたのだ。彼は彼女を抱だいた。違う。排はい泄せつするように欲よく望ぼうを吐はきだしただけだ。彼女も自ら望んでそうしていたわけではないだろう。そうせざるをえなかった。それが彼女の役割だった。彼女はやるべきことをやっていただけだ。

いつだったか、彼女が泣いた。

彼は泣いてほしくなかった。泣かないでほしいと彼は言った。

彼女は彼を抱いた。彼女の声を聞いた。言葉を聞いた。

彼女は何を話してくれたのだったか。ほとんど覚えていない。

時間が記き憶おくを溶とかしてしまう。もう原形をとどめていない。

彼女はなぜ、生きろと彼に言ったのだろう。

そんなことを、どうして。

　さんざんクァラナドを歩きまわって、彼女の姿は当然見つからず、あの立ち飲み屋に行くと竜りゆう舌ぜつ蘭らんの蒸留酒が勝手に出てきた。刺青いれずみの主人は無言だった。一いつ杯ぱい飲み干すと、二杯目が目の前に置かれた。

　誰だれかが近づいてくる。気配は察していたが、どうでもよかった。

　肩を叩かれて、驚おどろいた。

　振り向くと、カタリだった。「よッ」

　カタリは彼の隣となりに陣じんどり、主人に向かって人差し指を立ててみせた。「アレお願いするわ。アレやで、アレ」

「どれや？」と主人は間かん髪はつを容いれず訊きいた。

　カタリは「腐フッ……」と笑った。「そないゆうたら、アレやったのう。この店は初めてやったのう。つい常連気分でモノゆうてもうたわ。堪かん忍にんしたってや」

「で、何なんだ。注文は」

「カシスッ！　ソォーダッ！」

「……カクテルかよ。しかもソフトだな、おい。女子か」

「口うるさい店主やのう！　最初はカシスソーダって決めてんねん。最近はな。マイブームっちゅうやつや。ええやろ。好きにさせたってくれ」

「しょうがねえな」主人は手早くカシスソーダを作って出した。「そらよ」

「お客はんに向かって、ええ態度やんか……」カタリはちびりと飲やったかと思うと、いきなり彼の肩かたを抱いた。

　何がなんだかさっぱりだが、振り払はらうこともできない。

　なぜできないのか。

　不可能ではないはずだ。

「ええて」カタリは彼の肩を揺ゆさぶった。「なぁーんもな。ゆわんでええ。もちろん、あれやで。喋しやべりたいんやったら喋ったってもええねんけど、ピンプはわしとはちゃうからな。話したないんやったら……話せへんのやったら、話さんかってもええんや」

　彼はグラスに目を落とした。「はイ」

「飲もうや。わしにな。つきあわせたってくれ」

「ええ」

　彼はグラスの残りを干して、主人に顔を向けた。

「それデワ・ワタシもカシスソーダ」

「──て、なんでやねん！」



「あいよ」

　カシスソーダは、彼には甘かった。

　甘すぎて、ほろ苦かった。

砂さ漠ばくだった。

見み渡わたすかぎりの風景が、ひび割れたこの心が、世界全体が。

乾かわききった砂の海にひっそりと咲さく花だった。

あなたが、あなただけが。

あなたはやがて、はかなく絶えて、はらはら散って、この手をぬらした。

この胸はまだ、いまだにしめっている。

あなたの名を呼びたい。届かなくても、あなたを呼びたい。叶かなわなくても、会いたい。

この思いに名前をつけることができずにいた。

それが何かわかっていたのに、とうに知っていたのに、あえて名づけずにいたのだ。

あなたはもういないからだ。

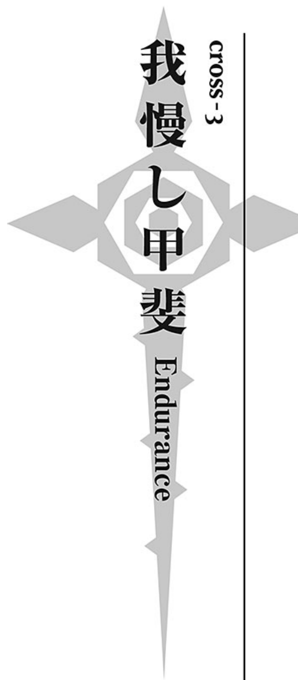
この思いの正体を突つき止めたとしても、あなたに会うことはできないのだ。

それでも砂の海に沈しずめてしまうことはできなかった。

ジナ。

愛していた。

私はあなたを愛していたのだ。



cross-3

我慢し甲斐

Endurance

「十字架ＷＯ崇ＭＥＳＩ者聖者ＷＯ貫ＫＩＳＩ者ＳＯＮＯ血ＷＯ浴ＢＩ歓喜ＳＵＲＵ者罪ＮＩ酔ＩＴＥ高笑Ｕ者汝ＫＯＲＥ贄也此処ＮＩ来ＴＡＲＩＴＥ償ＩＷＯ為ＳＥ」

　サフィニアが呪じゅ文もんの詠えい唱しようを終えると、苦く悶もんと恐きよう怖ふと嘆なげきと狂きよう気きの叫さけびをあげて、黒い光の中からそれは現れた。

　亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞亞……！

　巨きよ人じんだ。眼がん窩かはからっぽで、舌は抜ぬかれ、茨いばらの王おう冠かんを被かぶらされて、身体中に「贄」の焼印を押されている。そのうえ巨体のそこらじゅうに槍やりだの矢だのが突き刺さっていて、それぞれの傷口から黒い粘ねん液えきが流れだしていた。

　悶もだえる者、と呼ばれている。

　異界〝贄のサクリファイス・園プレーン〟の住人だ。

　悶える者は突とつ進しんした。標的は二人いる長鼻人ロングノーズの片割れだ。長鼻人はＤ３〝渾沌峡間ケイオスハーロウ〟の中で幅はばを利きかせている異界生物フリークスのうちの一種族で、身の丈たけは三メーテルから四メーテル、人間のように二足歩行し、二本の腕うでを備えていて、灰色の外皮がものすごく硬かたい。フクロウみたいに回転する頭部の形状に特とく徴ちようがあって、鼻が垂れさがるほど長く、彼らはそれを自由に動かすことができる。知性の程度は不明だが、決して愚ぐ鈍どんではないだろう。彼らはすこぶる好戦的で、しとめた異界生物フリークスや人間の所持品や肉体の一部を戦利品トロフイーとして身につけている。つまり、着き飾かざっている長鼻人ほど、多くの殺さつ戮りくを重ねてきた強者だということになる。

　今日の相手は超最低ＳＵＣＫで最高だ。二人とも、何かの皮やら骨やら金属のようなものやら、とにかくごてごてと身につけまくっていて、それらはそのまま彼らの防具となり、武器になっている。きっと金になるものがたくさんふくまれているだろう。

　悶える者は二本の戦せん鎚ついを鎖くさりで連結したような武器を持っている長鼻人に突っこんでゆき、これに組みついた。長鼻人

はとっさに短たん剣けんみたいなものをとりだし、それで悶える者をガツガツ刺したが、おかまいなしだ。悶える者は亞亞亞、亞亞亞、亞亞亞、亞亞亞叫んでいるが、長鼻人から離はなれようとしない。サフィニアの召しよう喚かん魔術で一人の動きを止めている間に、もう一人を先に全力で片づけてしまう。それがマリアローズの立てた作戦だった。大だい胆たんとは程ほど遠いけれど、慎しん重ちようすぎるというわけでもない。まあ、常道の範はん疇ちゆうに属するってかんじだよね……？

「トマト……！」

「うむ」

　今日は調子がよさそうなトマトクンに先せん鋒ぽうを任せることにした。大剣を担かつぐように構えてもう一人の長鼻人に向かってゆくトマトクンのすぐ後ろにピンパーネル、少し遅おくれてカタリ、ユリカ、ルーシーがつづく。あれ、でも、トマトよりピンプのほうがよかった……？

　そう思った瞬しゆん間かん、長鼻人がジャンプした。やつらの跳ちよう躍やく力はすさまじい。いやに天てん井じようの高い部屋というか広場なので、高く遠くへ跳とんでも頭をぶつける心配もなかった。長鼻人はトマトクンを、そしてピンパーネルを飛び越こして──まずい、半魚人がぶちゃっと踏ふみつぶされる。カタリだけじゃない、ユリカと、ルーシーも。

「──のおほっ……！」「きゃっ！」「うわわっ……！」

　危なかった。三人はなんとか逃のがれた。やはりトマトクンではなく、一番足の速いピンパーネルを先行させるべきだったのだ。ピンパーネルならあっという間に長鼻人に肉にく薄はくしていただろう。足止めを食わせておいて、皆みんなで袋ふくろ叩だたきにすることができた。

　こんなことにはならなかったはずだ。

　長鼻人がこっちにくる。

　というか、もう目の前だ。

　後ろにいるサフィニアを守らないといけない。

　マリアローズはとっさに長鼻人の左脚にしがみついて、腿ももに剣を突き立てようとしたが、刃はが通らない。脚に巻きつけてある毛皮みたいなものを貫つらぬくこともできず、皮ひ膚ふまでも達しなかった。長鼻人はマリアローズを振ふりほどこうとしたのだろう。身体からだが激しく揺ゆさぶられた。すぐにまだるっこしいことはやめにしたようだ。

　背中というか、ほとんど首筋に近い場所に重い衝しよう撃げきがあった。

　意識が飛びそうになったけれど、なんとか踏んばった。

　もう何がなんだかわからない。でも、少しでいい。ちょっとだけ時間を稼かせげば、仲間がどうにかしてくれる。

　長鼻人が短い悲鳴のようなものをもらした。

　振りまわされる。

　手が離れてしまいそうだ。

　長鼻人が振り返ったらしい。どうして。

　後ろから、仲間？

　応戦。それで。

　そろそろいいかな。

　てゆうか、やられたの──

　僕で、よかった。

「……あ」

　もしかして、死んだ？

　違ちがう。揺れている。運ばれているのだ。

「ピンパーネル……？」

　砂色の瞳ひとみがこっちを向いた。

「はイ」

「僕……」

　まばたきをしながら、ピンパーネルにすがりついた。抱だかれて、運うん搬ぱんされているのだ。せめていい荷物にならないといけない。ここは？　まだＤ３だ。たぶん。さっきとは景色が違うので、移動したらしい。見覚えはある。引き返している途と中ちゅうなのだろう。

「ごめん、僕……」

「大だい丈じよう夫ぶでス」

　ピンパーネルの両腕に力がこもった。

　まだいまいち頭がはっきりしていない。でも、後ろのほうで何か音がする。声も。戦っているのだ。退たい却きやく戦？　どうしてこんなことに？　僕だ。

　僕のせいだ。僕がミスしたから。

　下ろして、なんて言えない。言えるわけがない。せめて状じよう況きようを把は握あくしたい。その気持ちはある。ないわけじゃないけれど、それと同じくらい、何も見たくない、何も聞きたくない、何も知りたくない。同じくらい？　違う。そっちのほうがもっと、何倍も、何十倍も強い。

　だって、ただこうしてじっとしているだけで、つらいんだ。

　考えてしまう。

　どうすればいいの？　みんなに謝らなきゃ。いつ？　今はだめだ。あたりまえじゃないか。みんな戦ってる。大変なんだから。あとで。あとって？　だいたい、どう謝れば？　どんなふうに、何を言ったって、みんな気にするなって言うに決まってる。僕だってそうだろうし。

　本当にそうかな？　僕だったら、ああだこうだ言うんじゃない？　こうしておけばとか、ああするべきだったとか。細かいこと

は言いたくないけど、言っといたほうが本人のためだとか、そういう理り屈くつで。偉えらそうに。生意気なんだよ。

　何もできないくせに。

　僕なんて、いる意味、ない。

　だめだ。こんなこと考えちゃ。考えてもしょうがない。わかっていたことだ。そう。わかってるんだよ。もともと居場所なんてない。どこにもないんだ。だから一人で生きていた。そうすれば、誰だれかに迷めい惑わくをかけることもないし。僕が何かすることで、失敗することで、誰かが傷つくなんて、死ぬかもしれないなんて、もういやなんだよ。そういうことばっかりだったんだから。ずっとそうだったんだから。

　怖こわくて、怖くてさ。やけくそにもなれない。ああしろ、こうしろって言われて、冗じよう談だんじゃないって思ったけど、そうするしかなくって。だって、わかってたから。逆らったら、どうなるか。何度も何度も見せつけられたんだから。何人も何人も殺されたんだから。

　僕のせいだ。

　僕が殺したようなものじゃないか。

　違う。僕じゃない。殺したのは、僕じゃなくて、あいつだ。

　子し爵しやく。

　イシュタル・アガメムノ・ド・ゴードン。

　僕は悪くない。僕のせいじゃない。悪いのはあいつだ。ぜんぶあいつのせいだ。

　いまだに染しみついている。どうしたって消えない。あいつは死んだのに。きっと死んだ。死んだはずだ。僕は過去を清算したんだ。嘘うそだ。そう言い聞かせてごまかそうとしているだけだ。清算なんてされない。できるわけがない。僕のせいで大勢死んだ。彼らは帰らない。

　考えちゃいけない。

あの場所には戻もどりたくない。

一人はいやだよ。

僕はだから、逃にげない。逃げるわけにはゆかない。僕は、僕のために。

結局、ぜんぶ、自分自身のためでしかなくて。

やがて地上に出ると、空は高く、まだ青くて、少し濁にごっていた。

「いっやあ、激ッ！　戦ッ！　やったのう！　ムワハハハハ……！」

カタリは上じよう機き嫌げんだった。べつに無理をしているわけではないだろう。思いきり派手に戦うことができれば、それだけである程度満足してしまえるのだ。

「本当に！」ルーシーにも似たようなところがある。「何度か、もうだめかと思ったりもしましたけど！　なんとかなりましたね！　興奮しました！」

「おおッ！　ルーシー！　お前じぶんもすっかり漢おとこやなあ！」

「はい！　まだまだ未熟ですけど！　でも、とっさにカタリさんと連係して出した技わざ！　あれはかなり漢度が高かったですよね！」

「むほっ!?　あれやな、漢流オーロラ二人羽織クロス斬ぎり！」

「え!?　あの技には、そんなにかっこいい名前が……!?」

「今つけたんやけどもな！」

「ええ!?　そ、即そつ興きようですか!?　それはそれですごいですよ！」

「ダァホ、よさんかい！　そんな褒ほめられたら、いっくらわしかて照れるがな！」

まさか、この二人の相あい性しようがここまでいいなんて。

「マリア……？」

ピンパーネルに呼びかけられて、どうすればいいのかさっぱりわからず、とりあえず目を見開いて彼の顔をまじまじと見つめた。

ピンパーネルは気まずそうに、少し目をそらした。「平気……ですカ？」

「誰が？　ああ……僕？　うん」

うなずいて、笑え顔がおを作ってみた。笑うところなのだろうか。よくわからない。

「……あ、下ろしてくれる？　重いでしょ、いいかげん」

「いえ──はイ」

ピンパーネルは律りち儀ぎだ。重くはない。下ろすことについては了りよう解かいする。完かん璧ぺきな返事をしてから、マリアローズをそっと地面に立たせてくれた。まるで雛ひな鳥どりを扱あつかうみたいに。

「マリア、もう一度、ちゃんと調べるわよ」

「……大だい丈じよう夫ぶ、マリア……？」

またたく間にユリカとサフィニアに囲まれた。

二人の後ろからトマトクンがのぞきこんできた。「どうだ。なんだかぼんやりしてるが」

「……え？　そう？」

また笑った。今度は笑おうとしたわけではない。自動的に笑みが浮うかんだ。

「まあ……何だろ。ショック状態？　みたいなかんじ……なのかな。わかんないけど、おそらく。ごめんね。しくじっちゃって」

トマトクンが口を開こうとした。何か言う前に、ユリカがぐっと顔を近づけてきた。眉まゆをつりあげて、唇くちびるをへの字に結

び、顎あごのあたりに皺しわをよせて、ちょっぴり頬ほおをふくらませている。怒おこっているようだ。マリアローズは目を伏ふせた。笑顔は貼はりついたまま崩くずれなかった。

「……な、何？」

「何でもありましぇんけどっ！」

　ユリカはマリアローズを座らせ、両肩に手を置いて目をつぶった。

　マリアローズはサフィニアと目を見あわせた。

　サフィニアはほのかに苦い微び笑しようを目め許もとと口許に漂ただよわせた。

　二人には見み透すかされているのかもしれない。

　何かがあふれてきそうになって、寸前で堰せき止めた。

　二年前の自分なら、きっと当たり散らすか何かして駆かけだしていただろう。今はもう、そんなみっともないことはできない。ルーシーだっているし。我が慢まん、できるよ。うん。できる。

　我慢して、その先に何があるのか、僕にはよくわからないけど。

　本当に──耐たえて、耐えて、耐えに耐えて耐えて耐えて、その果てにいったい何があるというんだい……？

「正直、ネ……」彼はすっかりこけてしまった頬を撫なでた。「疑問だヨ、極限愛ラヴ・マックス」

　第三区にはn'ebulaもあるので、昼飯時ランチタイムの縄なわ張ばりとは言わないまでも、それなりに勢力が及およんでいる地域といってもいいだろう。お膝ひざ元もととは呼べないが、まあ勝手知ったる庭のようなものだ。Ｄ３の出入口はそんな第三区の南のほうにある。というか、そこだ。すぐそこにある。彼はとある集合住宅の上からＤ３の出入口を見下ろしているのだ。

「仲よく……仲よさそうにしやがって……！」彼は慌あわてて口を

押さえた。「──ハッ。ボクは何を。こんな下品な言こと葉ば遣づかいをするボクじゃないはずだヨ？　そうだろう、極限愛ラヴ・マックス……？」

　問いかけたところで答えはない。

　彼は一人きりだからだ。

　いやもちろん、四六時中一人でいるわけではない。彼は昼飯時の頭領マスターだ。何か特定の活動があるわけではないが、n'ebulaにはちょくちょく顔を出すことにしているし、誰だれかが何か立案して参加を求められたら断るわけにもゆかない。断る気もない。

　彼は、フッ……と笑った。最近しみじみと思うのだ。

「いいものだよネ、仲間って……」

　仲間たちと何かしているときだけは、むろん完全にではないけれど、キミのことを忘れられる。違ちがう。違う、違う、違う。忘れているわけではない。忘れることなどありえない。ただ、ほんのわずかだけ、心の隙すき間まが埋うめられる──ことはない、埋められるわけがない、骨身に沁しみる隙間風のつめたさが、いくらかやわらぐ。それだけだ。それだけではあるのだが、大きな違いといえば大きな違いなのサ、極限愛ラヴ・マックス。

　それにしても、おかしい。

　キミに会わず、キミの名を呼ばずにいれば、きっとキミの中にあるボクを求める気持ちが高まりに高まって、どうしようもなくなり、ふとした瞬しゅん間かん、ボクの名前をそっと呟つぶやいたり、ボクを探してしまったりする──そんな展開が訪おとずれるに違いないとボクは思っていた、確信してさえいたのに、これはどういうことなのかな？

　まあ、それはネ？　ボクもネ？　一日中、キミを見ているわけじゃないわけだったりもするわけだし？　ひょっとしたら、その間にキミが狂くるおしくボクを求めているという可能性もなきにしもあらずなわけだし？　というか、そうなんじゃないかとボクは疑っているし、なんとかしてそれを確かめたいと思っているんだけどネ？

　というか、それ以外というよりもそれ以上に気になっていること

がある。

「このところ、ずっと元気がない──さては悩なやんでいるネ……？」

　じれったさはある。こうして遠くから見ているだけでは、何があってなぜどんなふうに思い悩んでいるのか、詳くわしくは、正確なところはわからない。わからない？　そんなことはない。何しろ、他ほかでもない、キミのことなんだからネ。でも、いや、そうはいっても、ここは謙けん虚きよになるべきだ。はっきりとはわからない。ただ、いつだってひたむきなキミのことだから、きっと自分の役割とか立ち位置とか期待と現実のギャップとか、悩みの種はつきないはずサ。それに、灰被かぶりのルーシー。あの新入り。いきなり背がのびた。身体からだつきも逞たくましくなりつつある。以前とは態度が違う。自信をつけてきているようだ。ＺＯＯは規模が小さいわりに、Ｄ３なんていう厄やつ介かいなところを攻せめていて、そこで経験を積んでいるわけだから、めきめき力をつけたとしてもおかしくはない。キミにとってはショックだよネ。それはそうサ。キミがどんな思いをしてここまできたか、ボクは知っている。

　ずっと見てきたからネ。

　それはもう聞くも涙なみだ、語るも涙だヨ！

　もちろん、誰にも話したりはしないサ。ボクだけが知っていればいい。ボクだけが。

　ボクは知っているんだ。だからこそ、今すぐキミを抱だきしめて元気づけたい……！

　一方で、キミにはちゃんと仲間がいて──彼らはキミの大切な友だちでもあって、キミの悩みはきっと、キミ自身のことであるのと同時に、彼らの中におけるキミのことでもあるはずだから、本当にその問題を解決したり乗り越こえたりするためには、何が最善なのか。そんなことも考えてしまう。

「……もちろん、ボクはキミを支えたいヨ、マイスウィーテスト。キミのためなら何だってするサ。あたりまえだろう？　キミがわずかでもそれを望んでくれるのなら──そうッ！」

　彼はあまりに遠い彼の極限愛ラヴ・マツクスを指さして、いや何てことをボクは指さすなんていけないことだと思い、頭を抱かかえて「アアアアアアアアアーッ！」と叫さけんだ。「──せめて！　せめてサインが欲しいわけなのサ！　サインが！　シグナルを！　シグナルをください……!?　ボクだって──ボクだって限界なんだヨ！　求めるだけでは……ただひたすら求めつづけるだけなんて、いくらなんでもつらい！　つらすぎる！　あ、あ、あ──」

　だめだ。その先は言えない。言ってはならない。言ってしまったらこの身が砕くだけ散る。

　■ピーされたい、なんて。

　■ピー？

　なぜ■ピー……？

「でも、ああ、いつから……」彼は両りよう腕うでで自らの肩かたを抱だいて空を振ふり仰あおいだ。「──いつからボクは、こんなに贅ぜい沢たくになってしまったんだろうネ……？　キミを愛する、ただそれだけでよかったはずなのに……いつから、こんなに……！」

　思いあたる節はある。たとえば──

『僕は、きみがどんな姿でも、もしきみの正体が犬でも、猫ねこでも、異界生物フリークスでも、大ゴ脂ツ羽キ蟲ーでも──大ゴ脂ツ羽キ蟲ーだったら、さすがにちょっとやだけど』

　キミはちょっとだけ笑った。

『それでも、僕は、きみを』

　苦しかったはずなのに、キミは。

『嫌きらいには、ならない。アジアン、きみのことを嫌いになんか、なれないよ』

　それはつまり嫌いの反対ということなのでは!?　そうとしか解かい釈しやくしようがないヨ……!?

　野菜野や郎ろうの家の庭でネ!?　頭をつんつんされたこともある

し!?　『バーカ』とか言われて、もうあのときなんてボクはもうボクはボクは、めちゃくちゃになってしまいそうだったサ！　ほとんどなっていたサ！

　抱きしめても、そんなに怒おこられなかったりすることもあるし!?　ぎゅうっと、こう、しがみつかれたりすることもあるじゃないか!?

　これでは期待しないほうがおかしい。

　正直に言おう。言えないが、言いたい。

　ひょっとしてキミは、ボクのことが■■ぴーーーなんじゃないのかい……？

　■■ぴーーー？

　なぜ■■ぴーーー……？

　彼は四つん這ばいになってうなだれた。「……そうサ。ようするに、ボクはネ。怖こわいのサ、スウィートハート。怖くて、怖くて、たまらない。今の関係、距きょ離り感を維い持じするのはそう難しくない……ような気もする。それ自体が思いあがりなのかもしれないけどネ。でも、これ以上を望んだら……自分から何かを変えようとしたら、壊こわれてしまうんじゃないか……？　そんな気がしてしょうがないんだヨ……このままでいい、このままがいいと、キミは思っているんじゃないか……そう思えてならない。でも、そのわりには……そのわりには……！」

　ボクは試ためそうとしている。キミの気持ちを。そうなのか……？

　でも、キミは今、それどころじゃないのかもしれない。それどころじゃない……？

　だとしたら、ボクはその程度の存在だということ……ッ!?

　それはすなわち、歴史的な惨ざん敗ぱい……!?

「――いや！」彼は激しく首を振った。「まだそうと決まったわけでは……！　というかそれよりどうにかしてキミを楽にしてあげたい、そのために何かできることがあるんじゃないのか、このボクに

も……!?　だけど気休めにしかならないんじゃ意味がない！　だいたいＺＯＯの連中は何をやってるんだヨ！　わかるはずじゃないか、そばで見ていたら！　そばで！　ああ、そばで！　いつもそばにいることができたら、キミにあんな顔はさせないのに！　そうだ、気休めでもいい、キミに笑ってもらえたらそれで……！　でも、それじゃあいったい何のために何日も何日も我が慢まんしつづけたのかということになる……！　すべてが無む駄だに！　もともと無駄だった!?　そういうことなのかい!?　ボクは無駄で出来ている、ムダ・ムダオ！　そういうことか！　お笑い種ぐさだネ！　ハッハハーッ！　笑うなッ！　ボクだって真しん剣けんなんだ！　自分で自分に言ってどうする！　ムッ……!?　もうボクは、おかしくなっているのか……!?」

　いつの間にか呼吸が乱れていた。

　百人を屍しかばねに変えても表情一つ変えない虐殺人形カーネイジドールが……！

　彼は立ちあがって眉まゆをつりあげた。「──ナッ!?　いない……!?　ボクが独り真情を吐と露ろしている間に、帰ってしまったというのか……!?　フッ！　だがしかァーし……！」

　彼は建物から建物へと飛び移って極限愛ラヴ・マックスを捜さがした。すぐに見つけた。「──これくらい、お手の物サ……！」

　慣れている。そう。慣れているのだ。

　その事実が胸に突つき刺さる。痛みより、むなしさのほうが強い。そんなことはない。そんなことは、決して。そう自分に言い聞かせてきた。平気だったわけではないが、耐たえることはできた。愛ゆえに。

　愛しすぎて、キミしか目に入らなくて、今まで気づかなかったのか。

　彼は足を止めて目を凝こらした。ＺＯＯの七人から五十メーテル以上離はなれているだろう。建物の陰かげだ。路地から顔を出して、すぐに引っこめた。一いつ瞬しゅんだったが、彼は見た。

　黒っぽかったが、彼が身にまとう黒とは違ちがう。ありとあらゆる色が混ざりあって沈しずみこんだような黒だった。いわば、汚け

がれの黒だ。姿形まではわからないが、人間だろう。

　ＺＯＯの連中はまったく気づいていない。

　彼はその路地へと急行した。

　いなかった。

　誰だれも、何もいなかった。

「気のせい……だといいんだけどネ」

　彼の薄うす青あお色の瞳ひとみは氷の輝かがやきを宿していた。

　どうやらこの我慢にも、なにがしかの意味はありそうだ。

　ユリカとサフィニアの顔をまともに見ることがどうしてもできない。

　だって、さ。

　いきなり二人が今日は泊とまるとか言いだして、トマトクン邸ていには部屋が余っているし、よくあることといえばよくあることだし、とくに問題ないから寝しん室しつを用意しようとしたら、いや必要ないマリアローズの部屋でいいとか。それはちょっとどうなのと思わなくもなかったけれど、ユリカとサフィニアはてこでも動かないといった様子だったので、とりあえず自室に予備の布ふ団とんを二組持ちこみ、みんなでご飯を食べてからお風ふ呂ろに入って、さあ、誰がどこで寝ねましょうかという話をするつもりだった。

　できなかった。

　入浴はマリアローズが先にすませて、ユリカとサフィニアは二人一いつ緒しよに入った。

　戻もどってきた二人は、なぜかオレンジジュースとりんごジュースの瓶びん、それからグラスを三つ持っていて、ユリカが床ゆかに敷しいた布団の上に座るようマリアローズに命じた。有無を言わさぬ口調だったので、最強伝説の持ち主に逆らうことなんてできるわけもなかった。オレンジかりんごか、どちらがいいか訊きかれて、

オレンジと答えたらオレンジジュースをなみなみとついだグラスを渡わたされ、目の前にユリカとサフィニアが座って、それから尋じん問もんが始まった。

「しゃ、話して」

「……ちゃんと、言ってくれないと、いや……ですよ……？」

　しばらく黙だまっていて、オレンジジュースを半分くらいまで飲んだら、つぎ足された。

　ユリカはりんごジュース、サフィニアはマリアローズと同じオレンジジュースをちびちび飲んでいる。こういうときは、いっそお酒でも飲んでしまえば、どばっと吐はきだしてしまえるのかもしれない。

「……や、だからね？　ほんと、たいしたことじゃないんだってば」

「たいしたことか、たいしたことじゃないか。しょんなことは、しょれこしょたいしたことじゃないでしょう？」

「うーん、なんていうか……どう言えばいいのかな、てゆうか……言っても仕方ないっていうかね。どうこうできることでもないし……」

「しょれなのよ」

「え？　どれ？」

「どうにもできないからって、我慢してためこむ必要はないでしょう？」

「あー……まあ、それはそうかも、だけど……」

「マリアは真ま面じ目めしゅぎるんだわ」

「ゆ、ユリカに言われるなんて……」

「……わかり……ました……！」

　だしぬけにサフィニアが立ちあがって部屋から出ていった。

　ややあって、あからさまにジュースではなさそうな瓶を三本も抱かかえて馳はせ戻ってきた。

「今夜は……飲みましょう……！」

　初めてのことだ。

　何しろ、マリアローズもサフィニアもユリカも、ふだんは一いつ滴てきも飲まない。ふだんというか、特別なときも飲まない。マリアローズ自身も、葡ぶ萄どう酒しゆ程度なら飲まされたことはあるけれど、エルデンにきてからは──どうだろう。何かの折に舐なめたことくらいはあるかもしれないが、覚えていない。とりあえず、酔よっ払ぱらったことは一度もないし、限度もわからない。

「……でも、こういうオチは……予想……してなかった……かも……」

　サフィニアは麦の蒸留酒をりんごジュースで割って飲んでいる。

「しょ、しょうね……」

　ユリカは葡萄酒が気に入ったらしい。

「ま、まあ……いいんじゃない？　べろべろになるよりは……」

　マリアローズが飲んでいるのはトウモロコシの蒸留酒をオレンジジュースで割ったものだ。

　三人とも意外と強かった。

　むちゃくちゃな飲み方をしていないせいもあるのだろうか。それにしても、ユリカもサフィニアも酔いが回っている様子は微み塵じんもない。マリアローズも、ちょっとぽわーっとしているような感覚はあるものの、それ以外の変化は感じられず、まったく平気だ。

「……こんなものなんだね」

「正直、ちょっと残じやん念ねんだわ……」

「……ですね……何かこう、もっと……羽目を外したり、できるものかと……」

「あ」ユリカはグラスを置いた。「だけど、しゅこしあちゅいかも？」

「それは……わたしも……」

　ユリカとサフィニアは寝ね間ま着きの上にフード付きの上着を着ている。マリアローズのものなので、サフィニアはだいたいサイズがあっているけれど、ユリカにはだいぶ大きい。二人はそれを脱ぬいで、寝間着姿になった。マリアローズは膝ひざを抱えて顔を覆おおった。

「……ちょっと二人、かわいすぎ」

「え？」

　ユリカの寝間着は白いフリル付きのワンピースタイプだ。そんなものを着て、女の子座りをして、裾すそをぱたぱたやってみせるのは、かぎりなく反則に近い。

　そんなユリカを見て頬ほおをゆるめているサフィニアも、空色のロンパースがすばらしくかわいらしい。

「それ……わたしとマリアが二人で選んで……買ったやつ……？」

「しょうね。ちょっと前だけど。でも、わたしの服なんて、たいていしょうだし。自分ではよくわからないもの」

「だけどさ、ほら、それって寝ねるときに着るやつだから、初めてじゃない？　見るのは」

「……うん、わたしも、初めて……」

「いちゅも着ているのよ？」

「わー……」にやにやしてしまう。笑えみが止まらない。「やっぱり思ったとおりだよ。ほんと、かわいい。いいなぁー」

「やめてよ。なんだか恥はじゅかしいわ」ユリカは赤くなった頬をふくらませた。そんなことをしたら、かわいさが倍の倍のさらに倍になって、悶もだえたくなる。

「……いいなあ？」サフィニアが首を傾かしげてマリアローズを見

た。「……って？」

「あ」マリアローズは首を左右に振ふった。「ち、違ちがうよ？　違うからね？　べ、べつに僕がそういう恰かつ好こうをしたいとか、そういうことじゃなくて……似合うわけないし。てゆうかそもそも、そういう問題でもないし」

「似合うでしょう……？」サフィニアはユリカに顔を向けた。

　ユリカは顎あごに指をあてて斜ななめ上のほうへ目をやった。「えーと……わたしは自分のしょういうセしえンスしゆみたいなものって、まるで信じていないから何とも言えないけど──似合わないということはないんじゃないかしら」

「……そうだ」サフィニアは両手を打ちあわせると、自分の荷物をあさって何かとりだした。

「え？　え？　何……？」

「マリア、これ……着てみて？」

「これ──って」

　セパレートタイプの寝間着だ。上はキャミソールで、肩かた紐ひもは太め、胸のあたりにギャザーが入っていて、裾は少し広がっている。下はかぼちゃパンツというやつだ。色はグレーで、縁ふちやリボンにベイビーピンクがあしらわれている。ベースカラーがピンクだったりしたら怯ひるんでしまうところだけれど、これなら──いや。いや、いや、いや。

「だ、だ、だめでしょ、こんなかわいいの。そ、そりゃあ、サフィニアなら似合いそうだけど。てゆうか、そうとうかわいいと思うけど」

「予備のつもりで、持ってきて……というか、マリアのところに、預けておこうかと……他ほかにも何着か、あるんだけど……」

「へ、へえ。他にもあるの？　嘘うそ。まじ？　あとで見せて？」

「いいけど……まずは、着て？」

「や、や、や、着ないってば。だって、サフィニアのでしょ？　な

んていうか、寝間着なわけだし、他人に着られるのとか、ちょっと抵てい抗こうない？」

「わたしは、べつに……マリアだし」

「これだって」ユリカはさっきまで着ていた上着を持ちあげてみせた。「マリアのよ？　じぇんじぇんいやじゃないわ」

「それとこれとは違うでしょ？　違うはずだよ、きっと？　違う……よね？」

「着て」サフィニアがにじり寄ってきた。なぜか目がうるんでいる。「……お酒の勢いで」

「や、酔ってないし！」

「じゃあ、着せちゃいましょうか？」ユリカがにやりと笑い、サフィニアと視線を交かわした。

　ちょ、ちょっと？　え？　何？　最強の医術士と最恐の魔術士のコラボ実現……？

「──わ、わかったよ！　き、着ればいいんでしょ、着れば！　着るよ！」

　マリアローズはベッドの中にもぐりこんで着き替がえをした。さすがにそのまま出る度胸はなかったので、フード付きの上着だけは羽織った。ベッドから顔を出すと、ユリカとサフィニアがじっとこっちを見ていた。「……と、とりあえず、あっち向いててくれない……？」

　二人が背中を向けてくれたので、一度深呼吸をしてベッドから這はいだした。

　後こう悔かいが襲おそいかかってきて、ベッドに引き返そうとしたら、二人が一いつ斉せいに飛びかかってきた。

「──な、何！　や、だ、だめだって！　だめ！」

「だめじゃないわ！　上着なんて脱ぎなしゃい！　サしやフィニア、わたしが押しゃえるから！」

「えい……！」

　あっさり上着を引っぺがされてしまった。マリアローズは部屋の隅すみで小さくなった。

「……こ、怖こわい、この人たち……身の危険を感じるよ……実力差がありすぎだし……」

　サフィニアはマリアローズの真ん前に座って「うふ」と含ふくみ笑いをした。「……思ったとおり……すごく、かわいい」

「マリアって」ユリカはマリアローズの肩かたに指先でふれた。「……肌はだがとってもきれい。何かしている？」

「……してないよ？　てゆうか、肌ならユリカだって」

「肌自体だけじゃなくて、しゃわり心ここ地ちがいいのよ。ぷにゅっとしてて、やわらかくて」

　サフィニアはマリアローズの二の腕うでをつまんだ。「……ほんと。癖くせになりそう」

「でしょう？」

「ぷ、ぷにゅぷにゅぷにゅぷにゅしないでよ！　もう！　他ひ人と事ごとだと思って！」

「……気にしてるの？」サフィニアは少し首を傾げて眉まゆをひそめた。

　ああ、やっぱり──

　ばれちゃってるんだなぁ。

　そりゃそうだよね。

　マリアローズは唇くちびるを噛かんで、抱かかえこんだ膝ひざに顔を押しつけた。

　ユリカの手が首筋にそっとふれた。「知っている？　マリアがいなかったら、わたし、こんなふうに誰だれかと話したり、笑ったりできなかったかもしれないのよ？」

　サフィニアはマリアローズの足首を軽くつかんだ。「……わたしも、そう。ユリカとだって、こんなに……ざっくばらんなつきあい方は、できていなかったし……」

　返事なんてできなかった。

　今、口を開けたら、絶対大変なことになる。

　水位が下がるまでじっとしているつもりでいたら、二人がかりでくすぐられて、何がなんだかわからなくなった。やられっぱなしで、死ぬ、助けて、無理、もうだめ、みたいなことを叫さけんでいたら、部屋のドアが開いた。血相を変えたルーシーが入ってこようとしたので、すぐさま枕まくらをぶつけて追い払はらい、隙すきをついてサフィニアをくすぐり返した。サフィニアはとくに背中が弱点だった。ユリカと二人で、許しを乞こわれるまで攻せめて攻めて攻め抜ぬいた。

「わたしはやめておいたほうがいいわよ？」

　ユリカはそう言ってマリアローズとサフィニアを牽けん制せいした。たしかに、何せ最強だし、難なん攻こう不落の要よう塞さいだ。あきらめたと見せかけて、サフィニアがユリカを羽は交がい締じめにし、マリアローズが脇わき腹ばらから脇の下をこちょこちょした。ユリカは強いけれど、それがわかっているから、本気で抵抗できないのだ。二人はそのやさしさにつけこんだ。

「じゅるい！　じゅるいわ！　もう、だめ！　だめよ、だめだったら、やめて！　お願い、お願いしましゅ……！」

　さんざん騒さわいで、疲つかれて、眠ねむくなって、結局、ベッドは使わず、二つ並べて敷しいた布ふ団とんに三人で雑ざ魚こ寝ねした。

　夜中、目が覚めると、マリアローズは横向きに寝ていた。背中にはサフィニアがしがみついていて、前にはユリカがいた。

　少しだけ苦しかった。

　頭頂部に近い位置にユリカの顎あごがあたっている。

　マリアローズはユリカの胸に顔を押しつけていた。

　両腕でしっかりと頭を抱だかれている。

　こんなに心配してくれてたんだ。

　嗚お咽えつがもれそうになった。

　その途と端たん、ユリカの腕に力が入った。

「……よし……よし……」

　半分寝ね言ごとみたいな声だった。実際、ユリカは目が覚めているわけではないようだ。

　離はなれることなんてできなかった。

　ほんの少しだけ泣いた。

　そのうちまた眠りに落ちた。



link-5

無限の心臓

Unlimited Heart

　メルアドラのダーナソルは、二十三の所領を支配する大王だった。

　大王の幕下には、引き裂さく王ジヌビニフや、閃ひらめく紅くれないと呼ばれし騎き士し王アルバレスト・シュナイトス、陪ばい臣しんの蒼あおい天と呼ばれし騎士フェルアロンら、一いつ騎き当とう千せんの勇士が数多く名を連ねていたが、中でも大王の敵を震ふるえあがらせたのは、一人の名も無き騎士だった。

　彼は自ら名乗ることがなく、訊きかれても名を明かすことはなかったので、皆みな殺ごろしの騎士とか、無名の騎士王と呼ばれていた。ダーナソル大王から所領を預けられた騎士王でありながら、彼はただ戦場の最前線に立って敵を殺しつくすことだけを願う根っからの殺さつ戮りく者しやだった。

　大王は知っていた。皆殺しの騎士は、目の前に敵さえぶらさげておけばいい。敵に食くらいついて丸のみにする仕事さえ与あたえておけば、大王が皆殺しの騎士に寝首を掻かかれることはない。

　あまたの大王に仕え、そのことごとくを手にかけてきた皆殺しの騎士は、不義理を重ねてきたわけでは決してなかった。皆殺しの騎士を便利に使いながら、大王たちは内心で恐おそれていたのだ。そしてあるとき、ついに恐きよう怖ふは頂点に達する。手に負えなくなる前に、いや、もともと手に負えない道具を処分しようとして、返り討うちに遭あってしまう。

　大王ダーナソルは戦場の勇士ではなかったが、賢けん明めいだった。彼はもともと斬きれ味鋭するどい剣けんではなく、剣の愛好家で、蒐しゆう集しゆう家で、使用者だった。どの剣も用い方を誤れば彼を傷つけ、殺す。そのことを彼は知っていた。彼にとって、皆殺しの騎士は何よりも斬れる剣だった。ただそれだけのことだった。

　今やメルアドラは大陸の中部を治める大国だった。

　超越者オーバリストを名乗り、魔ま術じゆつと呼ばれる奇き怪かいな術を使って人を惑まどわす者たちが世を騒がせていたが、大王の剣はただちにこれを討とう伐ばつした。周辺には超越者に乗っとられた国があり、超越者が打ち建てた国もあったが、メルアドラは安あん泰たいだった。

安定を、大王が望んだ。次なる拡張に向けて、力を蓄たくわえ、準備を整える時期だった。

災さい禍かは突とつ然ぜんやってきたのだ。

大王は折にふれて宴うたげを催もよおしていた。大王の剣たちは、よほどのことがなければこの宴に出席した。皆殺しの騎士だけはめったに顔を出さなかったが、大王は鷹おう揚ようだった。少なくとも、鷹揚を装よそおった。

宴の間、大王はそれとなく剣たちの様子をうかがい、その話し相手、視線、態度から、いろいろなことを察し、剣の用法について考えを巡めぐらせた。このように実際的な理由もあったが、居並ぶ剣たちの観賞は大王の趣しゅ味みでもあった。疑いや懸け念ねんが胸を乱すことはあっても、大王はおおよそ満足していた。宴えんもたけなわでお開きにし、一いち抹まつの寂さびしさを嚙かみしめる極ごく上じょうの喜びに、今夜もひたることができるはずだった。

大王は両手をあげようとした。

剣たちと女たちと酒食とで埋うめつくされていた広間が、青い炎ほのおの巷ちまたと化した。

大王も全身に大おお火傷やけどを負い、一いつ瞬しゅんで息も絶え絶えになった。最後に大王は見た。

広間の中央に青い炎をまとった黒い巨きょ人じんがそびえ立っていた。

「超越者オーバリストだ！」と〝閃く紅〟騎士王アルバレスト・シュナイトスが叫さけんだ。

アルバレストはそれが起こる寸前に何かを感じた。彼の股こ肱こうの臣しん〝蒼い天〟フェルアロンも同様だった。フェルアロンは主人を庇かばおうと、とっさにアルバレストを床ゆかに押し倒たおして、その上に覆おおいかぶさった。突とつ如じょとして現れ、またたく間にふくれあがって広場中を舐なめた青い炎をその身に浴び、フェルアロンは瀕ひん死しだった。それでも立ちあがろうとする忠臣を制して、アルバレストは剣を抜ぬいた。

「息のある者は出会え！　化物を従えている超越者オーバリストを討つのだ……！」

　いったい、いつからそこにいたのか。

　青き火か炎えんをまとった黒い巨人の足あし許もとに、漆しつ黒こくの長衣を身につけた男が一人、蒼そう炎えんに焼かれることもなくたたずんでいるではないか。

　男は長衣の頭ず巾きんを外して顔をあらわにし、にたりと笑った。

　アルバレストは男を知っていた。再三再四、メルアドラの各所で騒そう動どうを起こし、そのたびに大王の剣に駆く逐ちくされたが、命までとられることはなかった。しぶとい男だった。

「超越者エンドリル……！」

「閃く紅よ。我はとうとう超越の果てに至ったぞ。見よ」エンドリルは両りよう腕うでを広げて青き炎をまといし黒い巨人を示した。「我は神さえ喚よびよせた」

「神だと。戯ざれ言ごとを」

「今こ宵よいは貴様らに別れを告げに参ったのだ」エンドリルは狂くるおしく笑った。「神よ、〝無限のダイアデルタ〟よ、今こそ我が身命を捧ささげん、我が願いを叶かなえたまえ……！」

　アルバレストは、そして生き残りの剣たちは、一人の例外もなく息をのんだ。

　超越者オーバリスト曰いわく神だという無限のダイアデルタが、巨大な手でエンドリルをわしづかみにし、炎渦うず巻まく大口を開けて、これを丸のみにしてしまったのだ。

　ダイアデルタの全身が不気味に揺よう動どうした。

　声がもれた。

　エンドリルのそれに似ていたが、似て非なる笑い声だった。

「我が願い果たされん。我は突つき抜けた。突とつ破ぱ者しやとなった。我こそが無限のダイアデルタである。我は神である」

「かかれ……！」

　アルバレストの号令一下、今は亡なき大王の剣たちがダイアデルタに群がっていったが、無む駄だだった。

　ダイアデルタが腕を振ふりまわすと、青い炎が吹ふき荒あれて騎士たちを無残に焼き払はらった。

　全ぜん滅めつだった。大王ダーナソルとその研とぎすまされた剣たちは皆、消し炭となった。

　このままでは広間のみならず王宮自体が、いや、メルアドラ全体が、早晩灰かい燼じんに帰すことになるだろう。

「つまらぬ」とダイアデルタは呟つぶやいた。「この程度か。神になるとはこのようなことか。ならば、すべてを滅ほろぼしてくれる」

「待てよ」

　そこに現れたのだ。

　大王の剣は一ひと振ふりだけ健在だった。

　その最後の剣が彼だった。

　皆みな殺ごろしの騎き士しは長大な両もろ刃はの剣つるぎをすらりと抜いて、焼け焦こげた広間へと足を踏ふみ入れた。

「その前に俺を滅ぼしてみろ」

「貴様は……」

　エンドリルはかつて皆殺しの騎士に一度、命を奪うばわれかけたことがあった。だが、それはあくまで彼が単なる魔術の使い手、超越者オーバリストだったころの話だ。現在は違ちがう。彼はもはや無限のダイアデルタ、神なのだ。

「今となっては、腹ごなしにもならぬわ」

「神ってやつは飯を食うのか」

「減らず口を」

　皆殺しの騎士はダイアデルタに躍おどりかからんとしたが、これ

は見せかけだった。

　だしぬけに踵きびすを返して逃にげる騎士を、当然、神は追った。

　騎士は王宮を飛びだし、ワールー川に飛びこんで神を待ちかまえた。

　神の足先が川べりにふれただけで、ワールー川の水は激しく熱せられて蒸発しはじめた。

　騎士は熱湯の只ただ中なかで神の炎に炙あぶられ、その巨きよ腕わんから身をかわすだけで精せい一いつ杯ぱいだった。

　間もなく川が干ひ上あがり、騎士はさらに逃のがれた。

　戦いではなかった。

　騎士にとっては逃とう走そうであり、無限のダイアデルタにとっては獲え物ものを追いかける狩かりだった。

　騎士の行く先々で、神は青き炎を撒まき散らして人を、獣けものを焼き殺し、建物を燃やした。

　殺さつ戮りくが、破は壊かいが繰くり広げられ、飽あくことなく繰り返された。

　何度も何度も太陽が昇のぼっては隠かくれ、星々があらわす姿は無む為いに移り変わっていった。

　流れ積み重なりはじめていた時の中で、ダイアデルタの恐おそるべき蒼炎によっていくつもの国が滅めつ亡ぼうした。

　獣たちは息をひそめ、人々は住む家を打ち捨てて逃げるしかなかった。

　ダイアデルタは疲つかれ知らずだったが、皆殺しの騎士は違った。疲ひ労ろうだけではない。身体中が焼けただれていて、以前の騎士を知る者が見ても、それとはわからなかっただろう。

　焼死者の一歩手前のような有様で、騎士は逃げつづけた。

　騎士は何物をも信じてはいなかった。ただあらがうことだけが騎士を支えていた。

　そして、活路は見いだされたのだ。

　ダイアデルタは際限のない活力の源をその体内に持つ神だったが、エンドリルの精神はそうではなかった。

　超越者オーバリストは神と融ゆう合ごうしたつもりだった。しかし必ずしもそうではなかったのだ。神は食事をしないが、エンドリルはダイアデルタに少しずつ食われていた。騎士を追いつづけるうちに、その意識はときおり薄うすれるようになった。エンドリルはすでにエンドリルではなかったが、もっと別の何かに己おのれが変わり果てるのではないかという恐きよう怖ふと焦あせりを感じていた。

　今や超越者オーバリストの敵は皆殺しの騎士ではない。エンドリルを侵しん食しよくし、のみこもうとしている無限のダイアデルタだった。

　エンドリルはその敵と戦わねばならなかった。猪ちょ口こオざいな、あきらめの悪い、無駄にしぶとい騎士などとは違い、強敵だ。とてつもない敵だった。

　エンドリルは逃げ隠ればかりしている騎士をさしおいて、そのへんに炎ほのおを炸さく裂れつさせた。神の身が己の意志に間違いなく従うかどうか確かめるためだった。

　ダイアデルタはときに逆らった。青き炎が我が身を焼こうとすることもあった。むろん、炎をまとう神秘の肉体が焼けるはずもない。それであるにもかかわらず、エンドリルは灼しやく熱ねつの痛みを感じた。

「神め……！」

　エンドリルは次し第だいにダイアデルタとの戦いに熱中するようになった。いや、専念しなければ、とうてい打ち破ることのできない敵だった。

　皆殺しの騎士などはどうでもいい。所しよ詮せん、人間だ。

　今は神だ。

神を制圧する。

そして名実ともに、完全に神となり、この世界を焦しよう土どと化さしめ、神の世界にまで攻せめ入ってくれよう。

神との戦いに明け暮れる神に忍しのびよる者があった。

彼は決してこのときを待っていたのではないが、絶好の好機を逃しはしなかった。

皆殺しの騎士は無限のダイアデルタめがけて崖がけから飛び降り、落下の勢いそのままに、神の頭頂に剣けんを突つき立てた。

神は口から青き猛もう火かを吐はきだしたが、騎士はその後頭部にしがみついていた。神の身に剣を幾いく度ども、幾度となく、抜ぬいては突き刺さした。騎士の身体からだも半ば腐くさり、砕くだけかけていたが、かまわなかった。傷口から炎が噴ふきだし、騎士を焼いた。それでも騎士は止まらなかった。

とうとう無限のダイアデルタが地面に倒たおれ伏ふしたとき、皆殺しの騎士は半身しか残っていなかった。

騎士はようやく死が訪おとずれるのかと考えていた。

何の感かん慨がいもなかった。

彼は空白の心持ちでダイアデルタの切り開かれた胸に這はいのぼった。まるでそこが彼の死に場所で、そう定められているので、行くより仕方ないのだと言わんばかりだった。

無限のダイアデルタは倒れていたが、死んではいなかった。

切り開かれた胸の中心で、それは力強く脈動していた。

放ほうっておけば、また炎が生じてダイアデルタを包みこみ、神はふたたび動きはじめるだろう。エンドリルの意識はすでに消失しているに違ちがいないが、神は神として振ふる舞まうのだろう。

彼にはどうでもいいことだった。すでに彼は何も欲ほつしていなかった。何かを望むことのできる状態ではなかった。

彼の腕うでが切り開かれた胸の中へとずり落ちて、指先がそれに

ふれた。それは高熱を発していたが、彼にはもう感じられなかった。ただそこに何かがあったので、ほとんど反射的に彼はそれをつかんだ。

　流れこんできた。

　光のような、熱のような、圧あつ倒とう的な力だった。

　それは彼の掌てのひらから腕を伝って、いまだ残っている肉体の隅すみ々ずみにまで行き渡わたった。

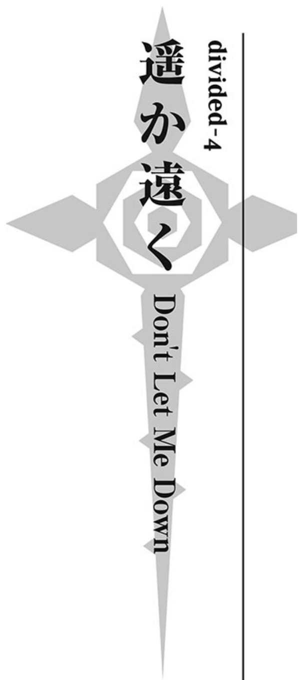
　彼は途と端たんに笑いだしたくなったが、笑うだけではとても足りない気がした。

「神は飯を食うのか……？」

　彼は矢も盾たてもたまらずそれに食くらいついた。

「俺は食うぞ」

　食らいつくしてやる。



divided-4

遥か遠く

Don't Let Me Down

　この状じよう況きようをお笑い種ぐさと言わずして何と言おう。

　とりあえず、自分でも何がなんだかわからないとは口が裂さけても言えない。

　目が覚めたら組み敷しかれていた。

　彼女は第十区の空くう中ちゆう楼ろう閣かくにある自宅の寝しん室しつで通常の睡すい眠みんをとっていた。人それぞれではあるが、魔ま術じゆつ士しには睡眠といってもいろいろあるのだ。通常の睡眠ではきっかり三時間、深く熟じゆく睡すいして、頭脳をふくめた肉体的な疲ひ労ろうをほぼ完全に解消する。その眠ねむりが終わって目を開けたら、このざまだった。

　やわらかな笑えみをたたえた彫ほりの深い顔は、頰ほおや顎あごがほっそりとしていてやさしげだ。金色の髪かみは綿わた菓が子しみたいにふわふわしている。緑色の瞳ひとみがじっと彼女を見つめていた。

　彼女はしばらく目をそらすことができないでいたが、呪じゆ縛ばくを破って彼の頭に生えている雄お羊ひつじのそれのような角に視線を向けた。

「〝踊り羊ダンシングシープ〟」

　彼は彼女の唇くちびるに人差し指をあてた。「クルオと呼んでよ、ベティ」

「クルオ・バーミチェット・アンダリュース」

「クルオでいいってば」彼の指が彼女の前歯をなぞった。

　彼女は彼の指を軽く嚙かんだ。彼は手を引っこめた。

「あたしに何か用？」

　どうやって十と重え二は十た重えに張り巡めぐらせてあった結界を突とつ破ぱしたのか。彼は彼女をどうにでもできたのだ。なぜ何もしなかったのか。

　愚ぐにもつかない問いがあふれそうだ。

　彼女はこらえて、そのすべてを敗北感と一いつ緒しよに胸の底へと押しこめた。

　今はこの恐おそるべき魔術士と渡りあわねばならない。

　如い何かにして？

「クルオはただきみに会いにきただけだよ、ベティ」

「突とつ然ぜんね」彼女は両手を彼の首の後ろに回した。

「会いたくなったんだよ」彼の表情は変わらない。

　彼女は目を細めて彼の左ひだり脚あしに両脚を絡からめた。
「会ってどうするつもりだったの？」

「遊びたくってさ」

「瀞Ｆｙ坤Ｌｙ觀」

　彼女の両手から熱線が発せられて彼の首を焼いた。手て応ごたえはあった。その手応えがぐにゃりとゆがんでとけてしまった。

　彼女は息づかいを聞いた。

　呼吸している。

　誰だれが？

　自分が。

　ここはどこ？

　暗い。何もない。

　何も。

　幻術イルージエンなのか。兆候は何もなかった。そんなわけがない。何かあったはずだ。それとも、とうに術中に陥おちいっていたのか。

　どこからどこまでが現実？　何が幻げん覚かく？　どれが？

　あるいは、夢を見ている？　見せられている？

「ベティ、きみは誤解しているみたいだね」

「……誤解？」

　声がする。どこから？　わからない。光。まぶしい。

　彼女は座っていた。

　草原。一面の草原だ。青い空。白い雲がゆっくりと流れている。風。青草の匂におい。鳥が上空を旋せん回かいしている。虫が飛び跳はねていた。

　知っている。この場所を。

　彼女は横座りして、赤子を抱だいていた。

　白地に赤い水玉模様のつなぎめいた服を着て、青地に白い水玉模様のマフラーを巻いている。食べてしまいたくなるような、金色の綿菓子みたいな髪。角が生えている。

　自分の子供だと思う。この子は自分の分身だ。

　たまらなくなって、彼女は赤子を抱きしめ、それではとうてい足りず、頬ずりして、口づけを浴びせる。ああ、本当にたまらない。どうしてこんなに愛いとおしいの？　この子に乳を飲ませねばと彼女は思う。

「おなかがすいているでしょう？」

　唐とう突とつに彼女は我に返った。

　それでもここは草原だ。赤子は彼女の腕うでの中にいる。自分の子だ。離はなすことなんてできそうにない。

「……これも、幻術だっていうの……？」

「違ちがうよ、ベティ」と赤子が喋しやべった。クルオの声だった。

　彼女は恐きよう怖ふを感じていた。それなのに、この子を手放す気にはなれない。むしろ、もっと、もっと力をこめて、抱きしめた

い。

「……何なの？　感情まで──そんな……」

「だから、きみは誤解しているんだよ」

「何を？　いったい何が間違っているっていうのよ」

「教えてあげてもいいけど、きみは認めて、受けいれることができるかな」

「教えて。何でもするわ」

「すごいや、ベティ。欲ほつするものを手に入れるためには、何だって捨てられるんだね。きみは本物だ。でも、本当も嘘うそもないんだよ」

「本当も、嘘も……？」

「ここにあるか、ないか。それだけなんだ」

　その言葉を耳にした瞬しゅん間かん、彼女の頭の中で何かが嵌はまった。

　彼女は叫さけびそうになった。

　あふれてきて、押し流されて、どこかへ飛んでいってしまいそうだ。

　もう他ほかには何もいらない。

　これだけあればいい。

　長年考えつづけてきた疑問だった。

　到とう達たつした。

　ついに理解した。

「すべては状態にすぎないのね」

「そうだよ。そうさ、ベティ。表と裏がひっくり返るみたいに、その状態は変わってしまうんだ。無か有か。そこには大きな隔へだた

りなんてないんだよ」

「だから召しよう喚かん魔ま術じゆつは可能なんだわ」

「ここにはないものだからね。しかも実在の異界生物フリークスと直接的な因果関係はない。影かげのようなものだと思われているだろう。重みのある影のようなものだと。でもね。影には重みなんてないんだよ。いや、そうじゃない」

「重みのある影さえも、状態としてはありうるんだわ」

「不可能はないのさ」

「それが魔術なのね」

「飛び立てるかどうかなんだよ。どれだけ高く飛ぶことができるか」

「世界はかくあるものじゃない」

「かくあれ。それが世界の真の姿なんだよ」

「要素精せい霊れいは実在する」

「もともとはいなかったかもしれないけどね」

「神すらも」

「そこにはクルオもまだ立ち入ることができていないんだ。神の園への行き方が見つからない。鍵かぎがかけられているのかもしれない」

「状態は、必ずしもたやすく変化するわけじゃないのね」

「強固だよ。とてつもなく。道筋を立てないと、揺ゆるがすこともできない」

「あなたは死なないんでしょう？」

「クルオはもう死なないよ。誰だれかに、何かに滅ほろぼされないかぎりはね」

「憎にくらしいわ」

「教えてあげようか？　死なない方法を。ベティになら、教えてあげてもいいよ」

「結構よ」

　彼女は目を閉じた。

　闇やみ。

　目を開けると、彼女は寝しん台だいの上で彼に組み伏ふせられていた。

「鞫Ｇｗａｎ」

　彼女は寝しん衣いにも魔術士衣と同じ工夫を施ほどこしている。触しよく媒ばい、秘薬はいつでもとりだせるし、第三脳の働きで精神集中は不要だ。突とつ風ぷうが起こり、彼の身体からだが浮うきあがった。風に嬲なぶられるのはお気に召めさないのか、彼は自ら飛び離れて床ゆかに降り立った。もちろん彼女はすでに身を起こし、イキシシュタロとオーボンの結けつ晶しようを握にぎりこんでいた。

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　彼女が集中点とした空中の一点から幾いく条じようもの稲いな妻ずまが放たれ、そのことごとくが彼をとらえた。いや、その寸前、彼の姿が揺らめき消えた。雷霊Ｘｅｗの雷は壁かべを直ちよく撃げきして焼け焦こげさせ、打ち砕くだいただけだった。彼女は枕まくらの下から魔術士のドレツドスターズ・剣フアング〝グリギュエンル〟をとりだして鞘さやを払はらい、振ふり向きざまに空を薙ないだ。よけられた。彼は十歳かそこらの少年の姿で飛びのき、彼女の剣をかわした。

「素人しろうとじゃないね。きみは剣まで使えるの？　すごいなあ」

「案外、あなたも本領はそっちなんじゃない？」

「どうして知っているのかな」

　彼が右手を前に突つきだすと、虚こ空くうから奇き妙みような形の刀とう剣けんが現れた。厚みのある二本の両りよう刃ばの剣身

が、長い柄えを挟はさみこんでいる。頭尾剣ヘツドテイルズ。中部ミツド諸国域ランズの北部に伝わっている古い武器だ。

　彼女は舌なめずりした。「あたしたち、あんな出会い方をしたのよ。だいぶ調べたわ、あなたのこと。夢にも見たくらい」

「嬉うれしいな、ベティ」彼は頭尾剣をくるくる回転させた。

　彼女は突とつ進しんした。魔術のための薬物、鍛たん錬れん、その他、ありとあらゆる手段を駆く使しした肉体改造は、ときに人にん間げん離ばなれした身体能力を魔術士に与あたえる。彼女は剣で打ちあいながら、隙すきを見て魔術を繰くりだした。彼は頭尾剣で防ぎ、彼女の魔術は回かい避ひするだけで、魔術を使ってはこなかった。子供の姿のままで、笑えみを絶やさずに。余よ裕ゆうなのだ。わかっている。力の差は。彼に彼女を殺すつもりはないことも。その気になれば、いつでも彼女の命を奪うばうことができる。それは単なる事実でしかないのだ。

　彼女は拒きよ絶ぜつする。彼女は刃は向むかう者だ。それが彼女の本質だ。

　クルオ。あたしはあなたを知っている。以前よりは、ずっと。あなたはどう？

　頭尾剣を回しながら、彼が下がった。

　距きよ離りができた。

　今だ。

　彼女は作動させた。彼女の身体に、骨に刻みこんである魔ま術じゆつを。彼女はそれを自ら施したし、埋うめこんだ秘薬は使えば減り、骨は再生するものだから、折にふれて補ほ充じゆうし、呪じゆ紋もんを削けずりなおさなければならない。さらに、この魔術にはもう一つ、触媒が要求される。それは彼女の体液、主に血液だ。すなわち、濫らん用ようは死を招きかねない。

　彼女の存在は薄うすれ、またたく間に希き薄はくになり、ついには失うせる。

　彼は目を瞠みはっていた。

　消え失せた彼女は、死を生きる。

　移動は跳ちよう躍やくだ。

　そこへ。

　彼女は出現する。

　移動距離は約七メーテル、ここは空くう中ちゆう楼ろう閣かくの回かい廊ろう上、彼女の家の外だ。

　これが意味もわからずしゃにむに完成させた彼女の魔術だった。

　彼女はイキシシュタロとアムネリリウスを掌てのひらに握りしめた。

「威鸞虞Ｇａｘｉｓ滅祟Ｄｅｕｘ嵐怒」

　彼女は魔導王〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーの失われた秘術を復活させた。

　雷らい獅じ子し。

　グリギュエンルの剣けん先さきから放たれた青白い雷らい光こうの束が、轟ごう音おんを立てて彼女の家を食い荒あらした。全力でぶちかましたのだ。一いつ瞬しゆんで木こっ端ぱ微み塵じんになった。

　背後に誰かいる。

　振り向こうとしたら、抱だきすくめられた。「──本当に、すてきだね。きみのことが、もっと好きになったよ、ベティ」

「光栄だわ」彼女は奥歯を嚙かみしめそうになって、我が慢まんした。

　耳みみ朶たぶにつめたく濡ぬれたものがふれて、思わず身体をこわばらせてしまった。「ん……」

「それに、すごくかわいい」

　何も言えない。口を開いたら罵ば声せいが出てきそうだ。

「クルオはね。決めたよ、ベティ。きみの敵にはならない。そう決めた」

「……敵？」

「まあ、あっちには苦手な人もいるしね。クルオのことはあてにしていいよ、ベティ。困ったら、クルオを呼んで。駆けつけるよ。喜んで、ね」

「考えておくわ」

彼は含ふくみ笑いを残して、唐とう突とつに消えた。

彼女は完全に彼がいなくなったことを確かく認にんしてから、瓦が礫れきと化した自宅を眺ながめた。

空中楼閣は、天に向かってのびる螺ら旋せん状の回廊に、大小様々な建築物がくっついている歪いびつな塔とうだ。だいたい百人ほどの魔術士が住んでいて、隣りん人じんはいるが、近所づきあいはない。よほどのことがなければ、かかわりあいにならない。それが不文律だ。そして、この程度の出来事は、よほどのことにはあてはまらない。

彼女は回廊に腰こしを下ろして膝ひざを抱かかえた。

顔を上げようとしたのに、うつむいてしまった。

「……遠いわね」

今夜の「ミケランジェロ」はやかましい。

金のタートルネックに白いスパッツ、鳶とび色いろの編み上げ靴ぐつ、銀ぎん縁ぶち眼鏡めがねに黒いマッシュルームヘアの店長ミケランジェロが、壁かべ際ぎわのアトリエスペースで鑿のみを振ふるっているからだ。何を制作しているのか。彫ちよう刻こくらしいということくらいしかわからない。

一人で飲みたい気分だった彼女にとってはまあ、好都合といえば好都合だ。あまりに耳みみ障ざわりで、さりとて苦情を言ったからといって聞き入れるようなミケランジェロではないから、くる客く

る客、すぐに帰ってしまう。

　マッケンレー。

　この酒を飲んでいると、隣となりにあの男がいるような気がしてくる。

　酔よったのだろうか。

　ドアが開いて、店員たちが何か言い、客は無言で彼女の隣に腰を落ちつけた。

「一人かよ」と男は吐はき捨てるように言った。

「見ればわかるでしょう。あんたはどうなのよ」

「見てわからねぇのか」

　彼女はちらりと横を見た。相も変わらず、変わるわけもないのだが、男の顔はゆがんでいる。顔の作りだけではない。表情もちぐはぐだ。右目は青で、左目は黒い。まるで調和を拒きよ否ひしているかのようだ。

「何だ」ダリエロは無造作に手をのばしてきた。「目が赤ぇな」

　その指先が睫まつ毛げにふれた。

　粗そ暴ぼうというより凶きよう暴ぼうを絵に描えがいたような男なのに、えらくやさしい手つきで、とっさに振り払はらうことも、身をかわすこともできなかった。

　彼女は二秒ほど、じっとダリエロを見つめてから、顔をそむけた。「だいぶ飲んだから」

「何かあったのか」

「やめてよ。らしくない」

「らしくねぇ、だ？　てめぇが俺の何を知ってやがるってんだよ」

「天下一のひねくれ者も寄る年波に勝てなくて、丸くなった？」

「戯たわけたことぬかしてんじゃねぇ」

「でも、あんたって、意外と面めん倒どう見みは悪くないものね」

「会話してる気がしねぇな」

「あたしはちゃんと、あんたに話してるじゃない」

「俺の話はろくすっぽ聞いてねぇだろうが」

　それきり二人とも無言で何なん杯ばいかグラスを空けた。

　カウンター席には二人しかいない。

　一人ではないのに、一人のときより胸が苦しかった。

　ダリエロがアトリエに一いち瞥べつをくれて、舌打ちをした。
「……マジでうっせぇな」

「ホント」と相あい槌づちを打ってしまい、彼女は唇くちびるの端はしを噛んだ。

　椅い子すが軋きしむ音がした。

　男が席を立つのかと思い、隣を見ると、ただ浅く腰かけなおして脚あしを組みかえただけのようだった。

「──んだ、てめぇ。ひでぇ面つらしやがって」

「どんなツラしてるっていうのよ」

「だから……」ダリエロは顔の右半分を手で覆おおい、左眉まゆをつりあげた。「何だ。あれだ。土ど砂しゃ降ぶりの雨の日に、捨てられちまった子犬みてぇな……」

「詩人なのね」

「どこがだ」

「犬は勘かん弁べんしてよ」

「冗じよう談だん抜ぬきで、酔ってるんじゃねぇのか」

「お酒とか、毒とか、浄じよう化かする器官があってね。身体からだの中に。あたりまえだけど。あたしはね。強いのよ。すごくね。

強化してあるの。そうしないと、死んじゃうでしょう」

「はぁ？　何の話だ」

「魔術士って、そういうものなのよ。どこまでやってもきりがない。どうやったら、そこにたどりつけるのかしらね」

「ようするに──」ダリエロは鼻を鳴らした。「愚ぐ痴ちかよ」

　彼女はカウンターに手を押しつけて首を曲げた。「そうね」

「てめぇらしくねぇな」

「あんたがあたしの何を知ってるっていうの？」

「知らねぇよ。知りたくもねぇ」

「でしょうね」

「ただな」男は低く笑った。「てめぇがどこかに行きてぇっつうなら、連れてってやってもいいぜ。何もいらねぇならな。ぜんぶ放ほうり投げて、行くんだよ」

　彼女はカウンターに突つっ伏ぷして顔を隣の男に向けた。「あんたが……？」

「俺を知らねぇなら、教えてやる」男は身を屈かがめて顔を近づけてきた。「俺にはな、怖こわいものなんざ何もねぇ。その気になりゃあ、どこにだって行ける。何だってできる。俺はそのことを知ってるし、俺だけは俺を裏切らねぇ」

　いったい世界の何がこの男を裏切って、男は何を裏切ってきたのだろう。

　なぜこの男はこんなにも誇ほこらしげで、とてつもなく哀かなしい目をしているのだろう。

　彼女は目を伏ふせて、笑う真ま似ねをした。「行きたくたって、行けない場所もあるのよ」

　頭を押さえられた。

　いや、撫なでられたのか。

　そう認めた瞬しゅん間かん、喉のどがきゅっと締しまって、あうやく妙みような声をもらしそうになった。

「びびってんじゃねぇよ、〝垂れベテイ・目ザ・ドウのベルーピンティグアイズ〟。てめぇがそんなんじゃあな、勃たつもんも勃たねぇ。犯おかしてやる気にもならねぇぞ」

「……その気になったときが、最さい期ごだと思ったほうがいいわよ」

　男の手がすっと離はなれた。「やるかよ」

　彼女は横目で男の顔をうかがった。

　男は唇をぎりぎりと嚙かんだ。「──野や郎ろうに抱だかれたことのねぇ女は、面めん倒どうだしな」

　カウンターが揺ゆれた。

　彼女が何かしたのだ。何をしたのか。でも、何かした。それだけはなんとかわかった。

　男はちらりとこっちに視線を投げ、白髪をかき混ぜるようにして頭を搔かいた。「救えねぇな。クラニィの馬ば鹿かあたりが、さっさとやっちまやぁよかったんだ。そうすりゃあ、てめぇがうちの盆暗ボンクラ大将にそこまで執しゆう着ちやくすることもなかっただろうによ」

　彼女は灰皿をつかんで男の肩かたを殴なぐった。男はびくともしなかった。

「だが、そうなってたら、そうなってたで……どうなってやがったんだろうな。野郎はさっさとくたばっちまったしな。ここで皿洗いに毛も生えねぇようなことしてやがった塵屑ゴミクズ野郎も、あの世にとんずらかましやがった」

　彼女は何度も男の背中や肩を灰皿で叩たたいた。男はかまわなかった。

「ままならねぇな。だいたいそんなもんだがよ。いいかげん飽あき飽あきしてきたぜ」

　彼女の手が止まった。

　男は灰皿を持っている彼女の手首を握にぎった。

　強い力だった。

　金属製の灰皿が床ゆかに落ちて、重い音を立てた。

　彼女は自分が今、どんな表情をしているのか、考えたくなかった。「……どこかへ、行くつもりなの？」

　男は両目を細めた。「土ど砂しゃ降ぶりだな」

　彼女は男の手を振ふりほどいて、顔を伏せた。「行けばいいのよ、あんたなんか」

「そう言われるとな」男は喉を鳴らした。「俺はひねくれ者みてぇだからよ」

　知らずに彼女の唇は笑えみを浮うかべていた。

「──できたジェロ！」ミケランジェロの声がした。

　顔を上げて振り返ると、ミケランジェロは高さ一・五メーテルほどもある未知の異界生物フリークスの胸像といったかんじの物体を愛いとおしげに撫でていた。「我ながら、すばらしい出で来き栄ばえ。これは傑けつ作さくかもしれないね」

「ていうか店長、それ何」と従業員のキヌコが冷めた声こわ音ねで訊きいた。

　ミケランジェロはなんでわからないのかと言わんばかりに肩をすくめた。「これを見てわからない？　新しい灰皿ジェロ」

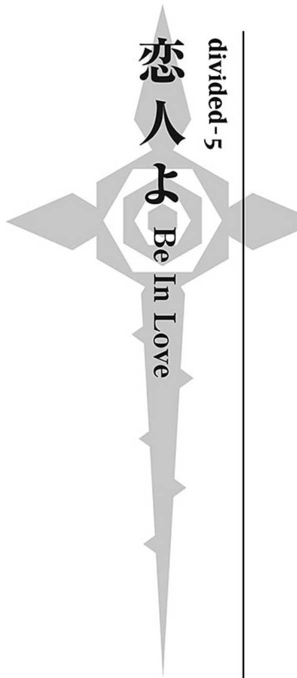
「でかっ……」「いや、でかすぎだろ」

　二人はほぼ同時に呟つぶやいて、顔をみあわせ、どちらからともなくそっぽを向いた。

「だから、この店は……」男はカウンターを蹴けった。

　彼女は口を押さえて肩を震ふるわせた。

いつの間にか、土砂降りの雨は上がっていた。



divided-5

恋人よ
Be In Love

　エルデン第九区と第十区にまたがる一帯が、いつから闇やみ市いちと呼ばれるようになったのか。

　定説はないが、かつて加虐的サディスティイ殺戮ツク・マーダ愛好会ーズ・クラブに牛ぎゆう耳じられていた時代とはだいぶ趣おもむきが変わり、今では看板だけが残されて別物になったような印象を受ける。

　端たん的てきに言うと、現在の闇市の半分は龍州街で、残りの半分は自由市場だ。

　龍州連合が支配権を確立しているせいで、基本的には龍州人が幅はばを利きかせているが、出身地や人種を問わず、若い商売人がとにかく多い。

　活気がある。

　規定の、そう高くはないみかじめ料さえ払はらえば、龍州連合が保護してくれるので、安心して商売を始められる環かん境きようが整っているのだ。

　ただし、詐さ欺ぎや詐欺まがいの行こう為いが発覚すると、厳しい制裁が加えられる。その取り捌さばきが公平なのかどうか。そのあたりについては意見が割れるところだろうが、闇市で龍州連合に逆らう者はまずいない。王おう龍りゆうとＳ＊Ｋシリアル・キラーズの構成員たちがそこらじゅうにいるからだ。向こう見ずが舐なめた真ま似ねをすると、十人、二十人、それ以上があっという間に集まってくる。

　また、龍州連合は、第六区〝屑くず街がい〟などの子供たちを雇やとい入れ、土建作業や清せい掃そうに従事させるといったこともしていて、貧ひん困こん層にはとくに人気が高い。連合の双そう頭とう、飛燕フエイヤン、荊王ジンワンといったら、ちょっとした顔どころか、若者の憧あこがれの的だったりするのだ。

　そんなことは彼女もわかっている。

　だから、やむをえないのだろう。

　一昔前の闇市では考えられない店構えだ。朱しゆと黒に塗ぬり分けられた壁かべも、黒石敷じきの床も、やわらかに揺ゆれる照明も、じつに凝こっている。

「おはようございます！」「姐あねさん、おはようございます！」「おはようございます、姐さん、今日もおきれいで！」「おはようございます！」「姐さん、おはようっす！」

「おーいおいおい……」飛燕は足を止めて一人の店員の胸を小こ突づいた。「テメー、おはようっすって何だァ？　その言い種ぐさはよォ？　そーゆンは略すなって、な？　なしてかっつったら、かえってかっこわりィーだろ？　わかる？　そこンとこ？」

「あ──はい！」店員はガバッと頭を下げた。「す、すいやせん！すいやせんしたッ！」

「イヤ、だからな……？」飛燕は呆あきれ顔で後ろのユリカをちらりと見た。「ごめんな、ユリィ。まだできたばっかだからよォ。この店。教育が行き届いてねンだよ」

「……わたしは、べちゅに」

「いっかァ？」飛燕はもう一度、店員の胸を人差し指で突いた。「そーゆンはな、細っけェーことだけど、ケッコー大事なんだよ。テメーもアレだろ？　ちっせェー弟と妹いンだろ？」

「えっ……な、なんで……知ってんすか」

「バッカおめェ、そんくらい頭に入ってンに決まってっだろ。だからよォ。そいつらのためにもバッシバシ働かなくちゃだろ。ンで、ただ働きゃいーってモンじゃねーだろ。弟と妹がよォ。ニーちゃんの姿見てよォ。お、すッげーかァーっくいい、あんなふーになりてェとか、そう思われるようになんなくちゃだろ？」

「あ……はい、もちろんっす」

「っすじゃねーって」

「も、もちろんです！」

「バビッとしろよ、バビッと。どこ出ても恥はずかしくねェー男になれよ、なァ？　一つ一つキチキチやンだよ。オロソカにしねェーでよォ。わァーったか？」

「はいッ！　ありがとうございます！　心を入れかえてがんばります！」

「よォーし！」

　飛燕に肩かたを叩たたかれると、店員は心底から嬉うれしそうで、他ほかの店員たちはうらやましそうだった。彼らのことも、飛燕は放ほうっておかなかった。

「テメーらもな！　気合い入れてけよ！　オレらァーちゃーんと見てンだからよォ、バッチシやってりゃァ、そのうち一国一城の主にしてやっからな！」

「はい！」「はい！」「はい！」「はい！」「はい！」「はい！」「はい！」「はい！」

　それからも、奥の個室に落ちつくまで店員たちの「姐さん」攻こう勢せいはやまなかった。

　個室に入るとすぐ、飛燕が人ひと払ばらいしてくれた。ようやく二人きりだ。本当にほっとした。

　ついついテーブルに突っ伏ぷしてため息をついてしまい、顔を上げると、飛燕と目があった。

　彼はテーブルに顎あごをのせて、こっちを見ていた。

「……な、何よ」

「いや、かァーわいィーなァーと思って」飛燕はにやにやしている。

　ユリカは身体からだを起こしてそっぽを向いた。「よ、よしてよ。しょういうの」

「なんで？　だってユリィ、マジでめちゃくちゃかわいィーワケだし、オレァ、ホントのこと言ってるだけだぜ？」

「だからって──」ユリカは手で顔を覆おおいかけて、やめた。後ろを向いた。「か、かわいくなんて、ないから！　まったく！　じぇんじぇん！　これっぽっちも！」

「ンなわけねェーし。てゆゥーかよォ……」

「な、何!?　何だっていうのよ!?」

「似合うなァー。その服。やべェーよ、もォ」

「ど、どこが……」ユリカは自分の身体をざっと見た。

　身につけている龍州風の旗袍チーパオというドレスは、飛燕から贈おくられたものだ。生き地じの手ざわりがよく、黒地に白い花の模様が入っていて、上等な服だということはわかるが、いいのか悪いのか判断がつかない。袖そでがないし、両側に深いスリットが入っていて、すーすーしてかなわないといった感想しか持てない、そんな自分に着られてしまった服はかわいそうだ。

「……本当に、やめて。しょんなこと言われても、嬉しくないのよ」

「そっかァー」

「しょうよ」ユリカはうつむいた。

　胸が苦しい。

　せっかくわたしのために、あつらえてくれたものなのに。贈られたときだって、嬉しくなかったわけじゃない。いつもわたしを喜ばせようとしてくれる、飛燕の気持ちが嬉しかった。それなのに、こんな言い方をして。

　どうして素す直なおになれないのだろう。

「な、ユリィ」飛燕は身を乗りだしてきてユリカの頭に手を置いた。「こっち見てみ」

「いやよ」

「見ろって」

「……何なの？」ユリカは一いつ瞬しゅんだけ飛燕のほうに目をやった。

　飛燕は思いきり目を細めて、歯を剝むきだして、馬ば鹿か馬ば鹿かしいくらいの笑え顔がおを作っていた。

　やめてよ。

　涙なみだが出そうになるじゃない。

「平気だって」飛燕はユリカの頭を撫なでた。「これでもユリィのことァ、わかってるつもりだからよォ。オレァーちょっとやそっとじゃァ、何とも思わねェーよ。傷つくとかねェーしさ。安心しろよ。バーッチリ知ってっからな、オレ」

「知ってるって……」ユリカは唇くちびるを噛かんで鼻をすすった。「……何を？」

「ユリィがオレのこと、好きだって」

「……もぉ！」

「アヒャヒャヒャヒャ」

　飛燕の笑い方は、それでも少し照れくさそうだった。

　否定なんて、できなかった。

　できるわけ、ない。

　話が途と切ぎれると、見計らったようなタイミングで料理が運ばれてきた。龍州料理をエルデン風にアレンジしたものだというが、ユリカはただおいしいと感じるだけだ。いくら練習しても、なんとか食べられる程度のものしか作れそうな気がしない。

　そんなことを考えていたら、飛燕がにやりとした。「なァーンだよ。またアレかァ？　料理へたっぴなこと気にしてンだろ？」

「ち、違ちがいましゅ！」

「いィーんだって。ユリィは世界一かわいィーし、他にすげェートコとかいっぱいあンだからさ。料理までできちまったら、かえってヘンだろ」

「またしょうやって！」

「そンで？」

「話をしょらしゃないでよ」

「イヤ、ちげェーって。話したいコト、あンじゃねェーの？　ケッ

コー前だけど、オレがナンか悩なやみでもあンのって訊きいたらさ。ゆってたろ。心の整理がついたら、相談すっかもって。そろそろいィー頃ころあいじゃね？　ユリィのコトだから、仲間絡がらみ？」

　ユリカは飛燕の顔をまじまじと眺ながめた。

　この一年くらいで、少し大人っぽくなったかもしれない。背もちょっとだけのびた。でも、そんなことは関係ない。どうだっていい。

　すごい。

　どうしてわかるの？

　飛燕が向かい側に座っていてよかった。

　すぐそばにいたら、抱だきついてしまったかもしれない。

「あのね」ユリカは居住まいを正した。「たとえばの話だけど」

「ン」飛燕も背筋をのばした。そういうところも好きだ。好き……？

　ユリカは深呼吸をして、鵺ヌエ流古式戦闘術の内気功で体内の血流を制せい御ぎょし、つまりなんとか赤面してしまわないようにがんばった。

「……たとえば、とても仲よしの──お友だちでも、仲間でも、何でもいいけど、しょういう人がいたとしゅるでしょ」

「まァ、そォーゆーヤツがいたとして？」

「しょれで、たとえば、よ？　しょの人のことは、もちろんよく知っているんだけど」

「そりゃァそォーだよな。仲よしなワケだし？」

「……でも、何から何まで知っているわけじゃないでしょう？」

「かもね。なんつゥーの？　過去とか？」

「でね。ある日、何かのきっかけで……しょれまで知らなかったこ

とを、たまたま知ってしまったとして」

「ほォー、ほォー」

「……だけど、しょれまで知らなかったということは、言わなかったわけじゃない？　あえて、言わなかった。言いたくなかった、言えなかった……理由があるのよね」

「だろォーね。忘れるワケもねェーしな」

「知らないほうがよかったのかしら」

「ンでも、知っちまったんだろ」

「たとえばの話よ？」

「オウ。たとえば、な」

「知らないふりをしちゅぢゅけたほうがいいのかしら」

「ン～……」飛燕は首を曲げて顔をしかめ、頭を掻かいた。「モノにもよっけどよォ」

「しょうよね」

「相手にもよるし……」

「だと思うわ」

「ユリィがそォーんなに悩むっちゃァー、ケッコーなコトなんだろなァ」

「だから──」

「たとえばな。たとえば。わァーってるって。まァ、男同士とかだとよォ。テメーアレなんかとかゆって、軽ゥーくジャブったりもできっけどなァ」

「……わたしはこれでも女なのよね」

「バッカ、いやバカじゃねェーけど、ユリィはレッキとした女の子だよ。たりめェーだろ。つかでもォ──ン～……なんつかさァ、ソレって関係あンの？」

「関係って？」

「ソレでなんか変わったりする？　ソレがわかってさァ。たとえばだけど、ダチだったとするじゃん？　もォーダチでいらンねェーとかさァ。そォーゆーのある？」

「ないわ」ユリカは唇を噛んだ。

　急に目め頭がしらが熱くなったのだ。

　何かをひっそりと胸に抱いだいて、誰だれにも見せないようにして日々を生きてゆく。

　自分にもわかる、とは言わない。簡単には言いたくない。

　でも、わからないとは思えない。

「……ないわよ。しょれどころか──」

　正直、その弱さも強さも、一いつ瞬しゅんのうちにすべてを理解することができたような気がした。

　それほどたやすくはないはずだし、訳知り顔をしたくもなかった。

　果たして、ユリカは思い悩んでいたのだろうか。

　どんな態度をとればいいのか。そんなことは一度も考えなかった。

　ただ、重かったのだ。

　その重みがひしひしと感じられるだけに、我がことのように重かった。おこがましいのだ。

　ようやくわかった。

　できることなら、一いつ緒しよにその重みを背負いたい。ユリカはそう望んでいたのだろう。

　いくらかでも肩かた代がわりしたいと。

「……わたし、いやな女だわ」

「どっこがいやな女だよ」飛燕はむっとしているようだ。

「たいしたことはできないのに、何かしなきゃって。いちゅも、しょればかり……」

「あンなァ……」飛燕は指先でテーブルを軽く叩たたいてユリカの注意を引いてから、天てん井じようを指さした。「ユリィはさァ、太陽だよ。つらくっても、ユリィは笑ってンじゃん。そンでみィーんな、がんばれちゃったりするワケよ。ユリィの仲間とかダチとかは、全員そう思ってンよ。オレにゃァーわかるって。けどよォ。たまにはつらいトキとかあるじゃん。そしたらさァ、オレに言やァーいいワケ。バンバン言っちゃってくれよ。何でも聞くし。泣いたっていィーぜ。悪ィーケド、オレァ、ユリィよっか強ェーし。なんでかっつーとオレ、ユリィのコト大好きなワケじゃん。したらさァ、誰よりも強くなれンだよ。ユリィのおかげで、オレはユリィよっか強くいられンだよ。マジ最強だよ、オレ？」





ああ──

好きだ。

わたしはこの人のことが、好きで、好きで、たまらない。

　ユリカは深呼吸をして表情を引き締しめた。「飛燕」

「……え？」飛燕はまばたきをした。

「今しゃらだけど」ユリカは片時も彼から目を離はなさなかった。「わたしとおちゅきあいしてくれましぇんか」

「あ──」飛燕は両目を一いつ杯ぱいに見開いた。

　いったいどうしたのだろう。顔全体が真っ赤っかだ。そうか。

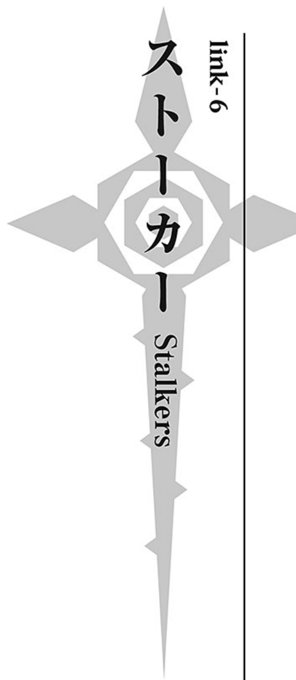
　照れているのだ。

「……は、はい……も、モチロン、つーか、うッわッ、オレかっこわるッ……そォーゆうのはオレからゆわなきャなのによォ……てか、考えてみりャァーゆってなかったって、オレ……」

　ユリカは両方のほっぺたを手で押さえた。頬ほおが熱い。ずっと前から思っていたことではあるけれど、見み飽あきない人だと思う。飽きないどころか、ずっと見ていたい。

　やだ。どうしよう。

　すごく、かわいい、かも。



link-6

ストーカー

Stalkers

「──問題です。この街にはいったい何人の追跡者ストーカーがいるでしょうか？」

　男は右手の人差し指で眼鏡めがねの位置を直し、誰に問うともなく問うてみた。

「今度調べてみることにしましょうか。さしあたって、一人──二人、三人」

　昼間は人目を引いてしまいかねないので控ひかえているが、最近、男は夜のエルデンを上空から俯ふ瞰かんすることを楽しみとしている。

　Axxfflamanddraは偽いつわり欺あざむくものだ。完かん璧ぺきな偽ぎ装そう、擬ぎ態たいを身上としている。

「ちなみにAxxfflamanddraは……そうですねえ。人ひ間とに発音しうる音だけで表現すれば、アフラマンドラ、ということになるでしょうか。実際には、アァッフェゥラマァアンッドゥオラァというかんじなのですが、これでも遠いのでアフラマンドラでよしとしましょう」

　誰に言うともなく言って低く笑った。

　男は滞たい空くうしている。

　その背には黒い翼つばさがある。

「これも真ま似ねなんですが」

　男はある高度を維い持じしている。これ以上近づけば、彼は男の気配を察知するだろう。そうなったら、どうなるか。彼が気分を害することは間ま違ちがいない。男は彼に叱しつ責せきされる。

「怖こわいですからねえ、あの人は。まあ、この程度のことで、本気で怒おこったりはしないと思いますよ。何しろ、甘い人ですから」

　このように彼らの頭領マスターについて独りごちることのできる自分自身を、男はどうやらだいぶ気に入っているらしい。

「それだけに、僕としては心配でもあるのですよ」

地上で頭領マスターが移動しはじめた。頭領マスターはある者にあわせて動いている。そのある者をひそかに尾び行こうしている正体不明の者がもう一人いる。

もう一人の追跡者ストーカーは別口だ。金きん髪ぱつの男をつけまわしている。こちらは女だ。

「コリンさんもしょうがない人ですねえ」

見知らぬ者というわけではない。気にならないこともないのだが、男としてはやはり頭領マスターを注視せざるをえなかった。あの女については、もともと頭領マスターの動向を見守っていて、偶ぐう然ぜん、視界に入っただけなのだ。

「彼女の観察はまたの機会にしましょう」

男は静かに頭領マスターを追った。

そうするだけの理由が男にはあった。

「──またいる。興味深い」

男がそれに気づいたのはしばらく前のことだ。

空を飛ぶ際には、お得意の擬態によって鳥類並みの、いや、夜目も利きくので鳥類以上の視力を有している男だからこそ、気づいたのだろう。

「あらためて、問題です。この街にはいったい何匹の追跡者ストーカーがいるのでしょうか……？」

動物だ。鼠ねずみのような生き物。あるいは、蛇へび、蜥蜴とかげといった爬は虫ちゆう類るいに似た生き物。鳥のような生き物。蝙蝠こうもりめいた生き物。それから、虫のような生き物もいる。

一挙に、ではない。まるで順番を決めて交こう替たいしながら事にあたっているかのようだ。

さまざまな種類の生き物たちが移動している。

追つい尾びしているのだ。

彼らの頭領マスターを？

違う。

そうではない。

「なぜ？　何のために……？」

男は速度を落として一いつ匹ぴきの生き物に狙ねらいを定めた。建物の外がい壁へきから張りだした庇ひさしや出窓などを伝って駆かけている。頭領マスターからだいぶ離れているので、あれなら平気だろう。

急降下して右手でわしづかみにし、すぐさま急きゆう上じよう昇しようした。

旋せん回かいしながら適当な高い建物に目星をつけ、その屋上に降りたった。

生き物は男の右手の中で身み悶もだえつつ、ギイギイ鳴いている。

「ほう……」

一見したところ、それは鼬鼠いたちだ。いや、鼬鼠にしては小さいので、胴どう長ながの鼠というべきか。身体からだは褐かつ色しよくの強こわい毛に覆おおわれているが、手て脚あしや尻尾しつぽは皮ひ膚ふが露ろ出しゆつしている。耳は幅はば広びろで大きい。銀いち杏ようの葉のような形をしている。黒い目はつぶらだ。瞳ひとみの中央に赤い点がある。二つの目の中間にある突とつ起きは何だろう。身体の大きさのわりに力が強い。並の人ひ間となら、こうして握にぎってはいられないだろう。牙きばも鋭するどい。噛かまれたら、そうとう深い傷になった。

あいにく男はこのような生き物を見たことがない。むろん、名も知らない。

「さて──」

少し考えてから、男はその生き物を丸のみにした。

生き物は男の体内でだいぶ暴れていたが、やがておとなしくなっ

た。

　男は首をひねった。

「不思議な味ですね。端たん的てきに言えば、いやに雑味がある……」

　どういうことだろう。男は腹をくねらせ、手の上に生き物を吐はき戻もどした。すべてではない。表皮と筋肉はほぼ消化されている。骨格と内臓だけの姿だ。

　骨をばらして内臓を調べた。

　心臓と肺、肝かん臓ぞうの間に、見慣れない器官があった。

　それは球状で、色は青緑色だ。光こう沢たくがある。この器官からは神経のような管がたくさん出ていて、各臓器に繋つながっていた。脳にまで。

「これまた奇きっ怪かいな」

　男はその器官をつまんで月明かりにあててみた。

　途と端たんに砕くだけて四散した。

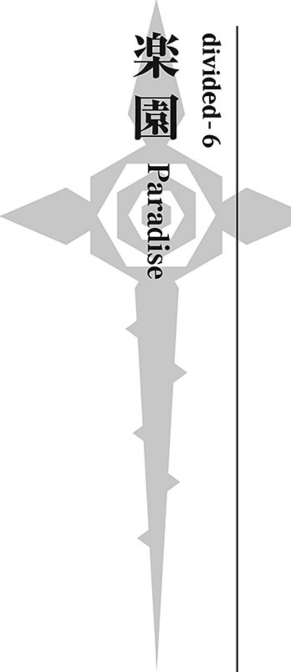
「ずいぶんと脆もろい……」

　男は肩かたをすくめ、器官の残ざん骸がいをそのへんに捨てた。

　胸がざわついている。

　試ためしに吐いてみたら、細長い骨が何本か出てきた。

「これのせいですか」



divided-6

楽園 Paradise

「……死にてえ」

　アドリアン・ギベールの人生において、ここまで切実に死を望んだことはないかもしれない。

　まあ、そうはいっても、自ら手を下すことなく、苦痛を感じることもないのであれば死んでしまったほうがよさそうだという程度の切実さでしかないのだが、アドリアンとしてはこれでもかなり死にたいほうだ。いつくたばってもいいという考えは常にあるのだが、猛もう烈れつな二日酔よいに襲おそわれて立ちあがれないようなとき以外、くたばってしまいたいとまではまず思わない。それに、そういうときはただちに迎むかえ酒ざけで酔っ払ぱらってしまうので、くたばってしまいたい状態はそう長続きしない、ということになる。

　みすぼらしい貸し宿の薄うす汚よごれた部屋の悪あく臭しゆうふんぷんたる寝しん台だいの上で、アドリアンは頻ひん繁ぱんに寝ね返がえりを打ちながら思い悩なやんでいた。

　ああでもないこうでもないと頭をひねること自体、彼にとってはかなりめずらしいし、馴な染じまない。

　それでも、どうしても考えてしまう。

「……どこでどう間ま違ちがった……？　俺の人生……いや、そりゃあな……間違いだらけっていったら、そうなんだろうがな……それにしたって、お前……おい、お前って誰だれだよ、誰に話してんだ、俺……一人だろ……一人……」

　アドリアンは飛び起きてドアを見た。閉まっている。施せ錠じようもしてある。窓を見た。染しみだらけのカーテンを引いてあるが、ちゃんと閉まっている──はずだ。だめだ。確かく認にんしなければ。カーテンをはらいのけて、確かめた。大だい丈じよう夫ぶだ。鍵かぎも掛かかっている。クローゼットと糞クソ小さいテーブルしかない狭せま苦くるしい部屋なので、他ほかには──いや、寝台の下はどうか。いた。脂羽蟲ゴキだ。おい、マジか。一、二、三……五匹ひきもいやがる。つか、もっといるんだろうな。まあいいか。共存共栄だ。いや、栄えてねぇよ。こっちは。その反対だろ。明らかに。脂羽蟲ゴキだけだろうが。楽しそうに繁はん栄えいしてやがるのは。まあ、いい。よくもねぇが、クローゼットだ。開けた。また脂羽蟲ゴキだ。走って出てきやがった。中身は衣類がい

くらか。それだけだ。

　大丈夫だ。

　アドリアンはまた寝台に横たわった。

「……ったくよ……ほんと……どこでどう間違ったんだ？　人生っつうかな……そんな大おお袈げ裟さなアレじゃねぇな……アレって何だよ……もう、わけがわからねぇ……」

　悩んでいても、どうも落ちつかない。何か変だ。何が変なのか。

　気配だ。感じる。馬ば鹿かな。この部屋にはアドリアンと脂羽蟲ゴキどもしかいない。隠かくれられる場所など存在しないのだ。部屋の中にはいない。そうか。

　ふたたび飛び起きてドアに駆かけより、解かい錠じようして開け放った。

　糞細くて天てん井じようの糞低い糞の臭においが染みついた糞廊ろう下かだ。やはり身を隠すことのできる場所はない。そのはずだ。右を見て、左を見て、人ひと影かげがないということは、誰もいない。そういうことだろう。いや━

　アドリアンは斜はす向むかいの３Ｙ５号室のドアを見た。

　ほんの少しだけドアが開いている。

　その隙すき間まから、何かこう冷気のような、禍まが々まがしい邪じや気きのようなものがもれていて、アドリアンは怖おぞ気けをふるった。

　あれは何だ。

　目だ。

　血走っている。

　眼球だ。

　おっかねぇ。

　アドリアンは臆おく病びようではない。というか、鈍どん感かん

なのか。恐きよう怖ふを感じる機能が壊こわれているのかもしれない。むしろ、生きるか死ぬか。そんな感覚は大好物だ。女を抱だくよりずっといい。しかしこれは違う。まったく別物だが、習い性しようなのだろう。アドリアンの身体からだは瞬しゆん間かん的に逃とう避ひより攻こう撃げきを選せん択たくした。

　歩みよって、３Ｙ５号室のドアを開けた。

　女がいた。

　とにかく髪かみが途と方ほうもなく長すぎる。海草みたいな頭とう髪はつに埋うもれているかのような、やせっぽちの女だ。髪の毛の合間からのぞいている目を見開いて、紫むらさき色いろの唇くちびるには呪じゆ笑しようとでも呼ぶべき不気味な笑えみを貼はりつかせている。

　マジでおっかねぇ。

　だがここで怯ひるんでしまったらまずい、付け入る隙すきを与あたえることになる、攻せめだ、攻めの姿勢だと、戦士としての本能がアドリアンに命じていた。

「お前、なんでこんなとこにいるんだ。何してやがる。どういうつもりだ」

「……わわわわたしべつにとくに何がどうというわけでもなくそんなことなくてただたまたま越こしてきた先がここだったというだけでとりたてて何の意図もなくすべては偶ぐう然ぜんで」

「偶然なのに、なんでドア開けて見てやがった」

「そそそそれは日課というか周囲の様子を確認して安全を確かめないと一分一秒たりとも安心していられない傾けい向こうがどうもわたしにはあるようなないようなかんじで」

「安全確認のわりには、じっとこっちだけ見てただろうが」

「ごごごごめんなさいごめんなさいちょっとした出来心でアドリアン様にご迷めい惑わくをおかけするつもりは毛頭なくただひと目そのお姿を拝見できればと思いそれだけがわたしの望みで」

「勝手に様とかつけるんじゃねぇよ。気色悪い」

「え、え、え、そ、そそそそれじゃあ……ア、ド、リ、アン」幽ゆう霊れい女は頬ほおを染めた。

　意識が飛びそうになった。

　何だ、この呪のろいの力は。強力すぎる。

　くらくらするが、ここで負けてしまったら取り殺されてしまいかねない。くたばるのはかまわねぇとしてもな。そんな死に様は冗じよう談だんじゃねぇ。真っ平ぴら御ご免めんだぜ。

　アドリアンは下目遣づかいで、汚お物ぶつを見下ろすように幽霊女を見た。「前にも言ったよな。俺につきまとうんじゃねぇ。わかったか。わからなくても、わかれ。いいな」

　踵きびすを返して自分の部屋に戻もどり、ドアを閉めて鍵をかけ、すっかり同居人気どりの脂羽蟲ゴキを追い払はらって寝しん台だいに寝ね転ころがり、饐すえた臭いのする毛布を頭から引っかぶった。

　しばらくすると、何か妙みような音が聞こえてきた。

　おお。おおお。おおおお。おおおおお。おおおおおお。おおおおおおおぉぉん……。

「……嘘うそだろ」アドリアンは耳をふさいで身体を丸めた。

　それでも聞こえる。幻げん聴ちようなのか。いや、間違いない。たしかに聞こえる。

　泣き声だ。

　幽霊女が慟どう哭こくしている。

　これは完全に呪じゆ詛そだ。

　俺は呪われちまってる。

　出会いはそれこそ偶然以外の何物でもなかった。

　しばらく仕事をせず、朝から晩まで飲んだくれる生活を送ってい

て、有り金を使い果たしたので、やむをえずベンテン・カフェへ。この際、糞クソったれのファニー・フランクでもいいから金かね蔓づるになりそうなやつはいないかと物色していたら、茶ちや髪ぱつを短く刈かりこんで側頭部を剃そりあげている堅かた太ぶとりのギャンガーという男と、やたらとモジャモジャした痩そう身しんの男デ・ペドロの二人組みに声をかけられた。

「アンタ、アドリアン・ギベールだよな。なんか暇ひまそうにしてっべよ。何だったら、ちょっくらオレらと組んで一仕事してみねえか」

「や、ら、な、い、か。なんつーてな」

　たいして陽気でもない凸でこ凹ぼこコンビといった風ふ情ぜいだったが、できるやつらだということはすぐにわかった。アドリアンは面めん倒どうくさいとか疲つかれ気味だとか言って少々渋しぶってみせてから了りよう承しようし、そのあとで気づいた。

　やつらは二人ではなかった。女が一人、ギャンガーとデ・ペドロの背後に隠かくれていた。

　愕がく然ぜんとした。女が進みでてくるまで、その存在にまったく気づかなかったのだ。

　今から思えば、あのとき悪い予感がした。だいたい、気配を消すことに長たけているやつに、ろくな人間はいない。

　女は長い長い髪の隙間からアドリアンを見上げて頭を下げた。
「……ステファニーです。よろしくお願いしていただければ嬉うれしいと思わなくもないという気が……」

　仕事のほうは順調だった。

　堅太りのギャンガーは二刀流の使い手で、モジャモジャ男デ・ペドロは長なが柄えの長刀使い、二人ともやはり尋じん常じようではない域に達していた。そして、ステファニーだ。彼女もギャンガーと同じく二刀流なのだが、得物はなんと、鉈なたと肉にく斬ぎり包丁だった。戦い方はでたらめで、飢うえに飢えた猛もう獣じゆうの食事にも似た激しさだった。必要以上に異界生物フリークスを斬り刻み、肉だの骨だの内臓だの何だのをそのへんに撒まき散らしながら、彼女は無む邪じや気きに笑っていた。その異様に高すぎる戦せ

ん闘とう能力さえなければ、ただの異常者だ。頭のいかれたやつなんて、老ろう若にやく男なん女によ問わずこのエルデンには腐くさるほどいる。問題は強すぎることだ。

どうやらギャンガーとデ・ペドロは、ステファニーの保護者といった役どころらしい。それから、防ぼう波は堤ていか。

ステファニーは何かでキレると、主にギャンガーを容よう赦しやなく殴なぐる、蹴ける、張り倒たおす。ギャンガーがガードを固めて耐たえている間に、デ・ペドロがステファニーをやさしく諭さとしていると、そのうち収まるのだが、傍はた目めにはちょっとした惨さん劇げきだ。そうはいっても二人はかなり手慣れている様子で、どこか喜劇じみて見える部分もなくはないのだが、やつらがステファニーを止めなかったらどうなってしまうのか。考えるだに恐おそろしい。

二度、四人でアンダーグラウンドに潜もぐり、かなり稼かせがせてもらった。そろそろ潮時かもしれない。というか、大きな難点はあれど、三人とも腕うでは確かなので、仕事の面では本当に具合がよかったのだが、一いつ緒しよにいたらいつ巻きこまれないともかぎらない。

ていうかな。やばいんじゃねぇか。

塵ごみ溜ため同然のアンダーグラウンドの片かた隅すみで、煙草たばこを吸っているときに気づいた。視線だ。

ステファニーがこっちを見ていた。凝ぎよう視ししていた。

ぞっとした。

ふつう悪い気はしないものだが、今回ばかりは違ちがった。

惚ほれられちまってる。

目があうと、ステファニーは頬を赤くしてうつむいた。疑いは確信に変わった。それで、三度目の仕事はキャンセルした。といっても、前もって断ったわけではない。約束しておいて、行かなかった。

アドリアン・ギベールは酒さけ浸びたりだが腕うで利ききで、金のためなら何でもする、ただし気まぐれだ。それがこの界かい隈わ

いでの彼の評判で、彼の生き方そのものでもある。自分を偽いつわるのもいいかげん億おつ劫くうだから、好き勝手に生きてくたばるつもりだ。

　今後、ギャンガーやデ・ペドロとすれ違うことがあっても、アドリアンは無視するだろう。二度の仕事はおいしかったが、なかったことにする。どうせ飲んで食って女でも抱だけば、金なんざ跡あと形かたもなく消えてしまうのだ。

　俺のことはどうか忘れてくれ、ステファニー。

　恋こいだの何だの、この俺には似合わねぇ。いい男はごまんといる。気持ち悪い、幽霊みたいなお前にぴったりの物好きな男が、すぐに見つかるさ。

　ところが、だ。

　約束をすっぽかした日の夜から、ステファニーはアドリアンに取り憑ついた。

　とにかく、歩いていても、そのへんの店に入って飲んでいても、彼女の気配を感じた。捜さがすと、それらしい人ひと影かげが見つかることも、見つけられないこともあった。かなり気味が悪かったし、消しよう耗もうさせられた。ステファニーの視線は、本人にそのつもりはないのかもしれないが、殺気に似通っているのだ。身体からだが勝手に戦闘準備を整えてしまう。ラフレシア第三帝てい国こくで現役の優ゆう秀しゆうな兵隊様をやっていたころは、十分な量の興奮剤ざいさえあれば十日でも一いち巡じゆん月でも気を張りつめっぱなしでいられたが、今のアドリアン・ギベールはなまくらだ。若くもなくガタがきまくっているこの肉体では、とても耐えられない。

「何のつもりだ」

　三度、いや、四度か、物もの陰かげにひそんでいたステファニーをとっつかまえて問い質ただした。

　彼女はわけのわかるようなわからないようなことをうだうだ言うだけだった。「ええそれはただそのたまたま通りかかったらお見かけしてそれで何をしているのか気になって天気もあれだしこの街は空気もあまりよくないのでそれで……」

「そうやって喋しやべれるんだったらな。俺に何か用があるなら言えばいい。何もねぇんなら、放ほうっといてくれ。糞うぜぇ。わかったな」

　忠告しても、ステファニーはやめなかった。それで、はっきり言ってやった。

「俺につきまとうな。マジでやめろ。迷めい惑わくだって言ってんだ。いいな」と。

　あれが、たしか━そう、一巡月くらい前か。

　以来、ステファニーは激化した。双そう眼がん鏡きようの使用。高速で後ろから迫せまってきて髪かみの毛を抜ぬいて逃とう走そう。変装し、別人になりすましての接せつ触しよく行こう為い。気の休まる暇ひまがなかった。

　それでも唯ゆい一いつ、部屋を借りている貸し宿だけは安全だったのだ。正直、なぜだろうという思いはあった。やつは確実にアドリアンのねぐらを知っている。知らないはずがない。それなのに、どうして。温情か。情けか。ふざけるんじゃねぇ。何様のつもりだ、畜生フアツク。

　ともあれ、終わりだ。これでこの部屋も安あん穏のんとしていられる場所ではなくなった。

　べつに惜おしくはない。もともと安いというだけで選んだ。荷物だってほとんどない。

　ここを出よう。

「……あれだな……とりあえず、誰だれか女のとこに転がりこんで……ジェシリアなら、泊とめてくれんだろ、一日か二日なら。あれで、押しに弱ぇからな。そのまま居座って……いや、やべぇか。突つき止められたら、何されるか……ていうかよ。逃にげられんのか、俺。あいつ、そうとうなもんだぞ。仮に、本気でやりあったとしても……勝てんのか？　微び妙みようじゃねぇ……？」

　ドアがノックされた。アドリアンはとっさに毛布をはねのけ、寝しん台だいに立てかけてあったサーベルを手にとった。なんとなく、こうなったらやるしかないという気分だ。だいぶ追いつめられちまってるな、俺。内心で冷静に冷れい笑しようしてみたが、すで

にサーベルは鞘さやから抜かれている。

　忍しのび足でドアに近づいて、ノブに手をかけた。さすがに廊ろう下かはまずい。開けて、部屋の中に引きこんで、一気に片を付けてやる。

　静かに息を吸いこんで止め、ドアを開けると、軽い眩暈めまいのようなものを覚えた。

　ステファニーではなかった。スーツ姿の男が立っていた。

　なんだか不ふ機き嫌げんそうな、ひねくれた顔をしているくせに、きっちり撫なでつけてある金きん髪ぱつが嫌いやみたらしい。

　何だ、こいつは。同時に、まさか、という思いもあった。

　どっちが強いかといったら、正直、後者だ。

　阿あ呆ほうみたいな話だが、一目でわかった。

　アドリアンはサーベルの切っ先で床ゆかを突き、目を伏ふせた。もし目の前の男があいつだったとしても、いったい何を言えばいいというのか。

　相手は前もって台詞せりふを用意していたのかもしれない。「久しぶりだね、兄さん」

　大食小路グラトン・アレイのそこそこ高級な料理店リストランテに連れて行かれて、しかも奥の小さな個室に通されたあげく、食前酒アペリチフは何がいいなんて訊きかれるのは、最大級の屈くつ辱じよく以外の何物でもなかった。アドリアンに恥はじを感じる機能が備わっていたら、潔いさぎよく自死していたかもしれない。あいにくそんなものは持ちあわせていなかったので、任せる、任せる、任せるのオンパレードですませた。

　野や郎ろうと二人きりで向かいあって座り飯を食う。最悪にかぎりなく近い体験だ。しかしまあ、料理は上等だったし、酒もうまかった。相手も余計なお喋りをしなかったし、こちらも黙だまって飲み食いだけに集中していれば、この状じよう況きようの不可解さやら違い和わ感やら居い心ごこ地ちの悪さやらをごまかすことくら

いは、なんとかできた。

　食後の茶を断り、きつい酒を頼たのんで飲みはじめると、相手もとうとう痺しびれを切らしたのかもしれない。

「捜さがしたよ、兄さん。エルデンにいるらしいということは、すぐにわかったんだけどね。この街で人一人見つけるのは、なかなか骨だから」

「先に言っといてくれりゃあ、もっと見つけやすい場所にいてやったんだがな。たとえば、シャイニンググローリーパレスの前とか」

　自分で言っていて、冗じよう談だんにもなっていない痴しれ言だとしか思えず、吐はき気がした。

　フィリップ・メシアン。餓が鬼きの分際でラフレシアの有力な政商クロード・メシアンに奉ほう公こう人にんとして仕え、若くして頭角を現し、メシアン家に迎むかえ入れられた。フィリップの女によう房ぼうはクロードの娘むすめだ。それくらいのことはアドリアンも知っている。

　知っているのはそこまでだ。

　もうずいぶん会っていないから、あとのことはわからない。

「いいスーツだな」アドリアンは片方の頬ほおをゆがめて笑ってみせた。「儲もうかってるのか」

「兄さんはどうなの」

「まあまあだ」

「顔色がよくないね。酒、飲みすぎなんじゃないのかい」

「お前は健康そうだな」

「運動不足だよ。この街はつらいね。とにかく歩かないといけない」

「たまに街中で乗合馬車を始めるやつがいる。たいていすぐ廃はい業ぎようだけどな」

「略りやく奪だつされるんだろう」

「殺されてな。走ってる馬車はやべぇ。密室みたいなもんだからな。狙ねらうやつにすりゃあ簡単な仕事だ」

「どちらも仕事と見なされるんだね。この街では」

「いい街さ」

「僕には無理だな」

「じゃあ、なんできた」

「ここには何度かきているよ。仕事でね」

「お前の仕事のほうが、俺には想像がつかねぇよ」

「金を稼かせぐのさ。それだけだよ。兄さん」

「ああ？」

「ここを出る気はない？」

　アドリアンは弟の顔を見た。

　こいつがこんな表情をするとき、どんなことを考えているのか。

　さっぱりわからない。

　思いだせないというより、もともと知らなかったのではないか。ただ、どうやら冗談ではなさそうだ。

　アドリアンはグラスを持った手の小指でテーブルを叩たたき、肩かたをすくめた。「この街はな。俺の墓場だ。うってつけだろうが」

「リュリュはここで死んだのかい」

「ああ」

「埋まい葬そうは？」

「こんな街でもな。外れに墓地があるのさ。薄うす気味の悪い墓守

がいて、墓荒あらしは割りに合わねぇらしい」

「できれば、出たほうがいいと思うよ」

「お前がなんでそんなことを言うのか、見当もつかないし、訊こうとも思わねぇよ。言えることなら言ってるだろうしな」

「僕は本気なんだよ、兄さん」

「だろうな。じゃなきゃあ、わざわざ探したりはしないだろうさ」

「情の薄い弟だと思っているだろう」

「お互たがい様じゃねぇのか」

「そうするしかなかったんだよ。僕なりに必死だった。生きるためだったんだ」

「よかったな。その甲か斐いはあったみたいだ。お前は立派になった」

「今の僕には少しくらいはゆとりだってある。正直、昔は考える余よ裕ゆうがなかった。自分のことだけで精せい一いつ杯ぱいだったけど、今は違ちがう」

「なあ、フィリップ」酒を飲み干すと、しゃっくりが出そうになった。「──夢を見るのも現実があってこそ、だろ。俺はな。どこにも行けやしねぇ。侵入者クラツカーなんていかれた商売が成り立つのはこの街だけだ。ここを出たら、俺は野垂れ死にするしかねぇ。そういうことなのさ」

「国に戻もどればいい」弟の声は切せつ羽ぱ詰つまっていて、かえってアドリアンを醒さめさせた。

「不ふ名めい誉よ除隊を食くらった身だぞ、俺は」

「それはあくまで軍だろう。仕事はいくらでもあるよ。兄さんは優ゆう秀しゆうな軍人だったじゃないか。何だって任せられる」

「お前の下で働けって？　よしてくれ。たった二人の兄弟じゃねぇか。お前に恥はじをかかせたくはない」

「僕にはコネがある。兄さんにその気があれば、軍に戻ることだってできるよ。だいぶ体制が変わったし、これからも変わる。人手も必要だし──」

「よせ、やめとけ、フィリップ。だめだ」アドリアンは首を左右に振ふった。「いらんことを喋しやべるな。俺は聞いたってわけがわからねぇし、どうだっていい」

「でも、僕はじっとしてはいられないんだ」

「そいつはな」アドリアンは唇くちびるをさわった。ひび割れて、血がにじんでいる。酒のおかげか、痛みは微み塵じんもなかった。「──フィリップ、今のお前には力がある。金。人脈。権力。それで、自分にはあれもできる、これもできる。できると思ってるから、やらずにはいられないのさ。でもな。余計なお世話だ」

「兄さん……」

「とことんまで落ちぶれた。そんなふうに思ってやがるのか？　いいさ。誰だれがどう思おうと関係ねぇ。俺はな。この暮らしが性しように合ってるし、けっこう満足してる。わかってくれとは言わん。マジでどうでもいい。ただ、な。これは俺が手に入れたものなんだ。俺はこんなふうに生きて、いつか塵ごみみてぇにくたばる。そいつが俺には一番しっくりくるのさ」

「そんな、投げやりな」

「違う。俺はこれを選んだんだ。文句を言われる筋合いはない。みんな放ほうっておいてくれる。明日、俺が死体になっててもな。それがこの街なんだ」

　弟はうつむいている。打ちひしがれているわけではない。思いどおりにならなくて、腹を立てているのだ。「……僕は、遅おそかったのかな」

「遅いも早いもあるかよ。お前は何も悪くない。お前はお前の人生を生きて、俺は俺の人生を生きてる。兄弟だって他人だ。歩む道も、行きつく場所も違う。それだけのことさ」

「他人じゃないよ。血が繋つながっている」

「そうだな」アドリアンは腰こしをのばして天てん井じようを仰あ

おいだ。「悪かったな、フィリップ。俺はそんなにいい兄貴じゃあなかった」

「いや……」

「最悪ってわけでもなかったと思うがな」

「たしかに、よくはなかったよ。不名誉除隊はずいぶんネタにされた」

「これっきりだ、フィリップ」

　弟は答えなかったが、二度と会うことはないだろう。

　別れとしては、悪くない。まあ、ましなほうだ。

　貸し宿に戻って、まず３Ｙ５号室のドアを確かめた。開いていない。閉じている。ドアに耳をくっつけて気配を探さぐってみるか。馬ば鹿か馬ば鹿かしい。

　自室に入って施せ錠じようして半永久灯をつけたら、何か勘かん違ちがいしている脂羽蟲ゴキが我が物顔でうろちょろしていた。連中を追っ払ぱらって寝しん台だいの上に身を投げだし、三本煙草たばこを吸った。明かりを消すのも面めん倒どうで、そのまま目をつぶった。

　自分はいつから気づいていたのか。

　わからないが、今ということはないだろう。もしかしたら、寝ね入いる前、部屋に足を踏ふみ入れたときにはもう、なんとなく察していたのかもしれない。

　薄うす目めを開けると、寝台の脇わきに幽ゆう霊れい女がしゃがんでいた。

　見ている。

　観察している。というか──

　何なんだ、その目つき。

　俺はそんなふうに誰かを見たことがあるのか。どうだかな。わからない。

　見られたことは？　記き憶おくにはない。

　目を見開きながら、同時に細めようとでもしているのか。そんなの不可能だ。唇をきつく結んで、鼻だけで呼吸していて、息づかいは乱れていて、顎あごが細かく震ふるえている。

　いったい何だってんだ……？

「おい」

　アドリアンはやおら起きあがって幽霊女をつかまえ、寝台に押し倒たおした。唇を奪うばって、思うぞんぶん貪なぶっているうちに、気分が乗ってきた。何だ。やれそうじゃねぇか。もともと見境のあるほうじゃない。「ヤニくせぇだろ」

　女は痙けいれんを起こしたように首を縦に振った。

　わざわざ服を脱ぬがすのも面めん倒どうだ。襟えりぐりに手をかけて引きちぎろうとしたら、思いきり突つき飛ばされた。

　アドリアンは寝台から転げ落ちて床ゆかに背中を打った。

　女は起きあがって、だが、呆ぼう然ぜんとアドリアンを見ている。

　そのうち瞳ひとみが震えだした。

　あふれて、濡ぬれた。

「……わ、わ、わわ、わわわたし……ご、ごごごめんなさいどうしてわたし……こ、こここんなことする……つもりは……」

　アドリアンはじっとしていた。というよりも、ぼうっとしていた。

　女は寝台から飛び降りて、部屋を出ていった。

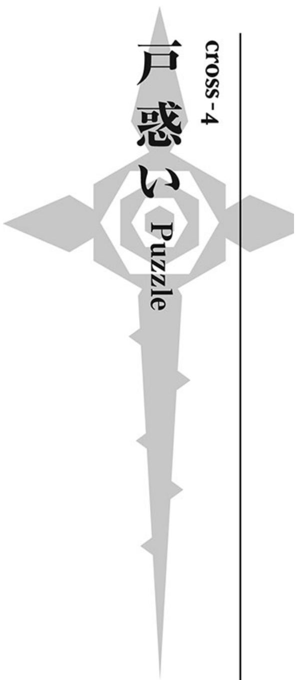
　クローゼットが開いている。いつからあの中にひそんでいたのやら。

「達者で暮らせよ、ステファニー」

　呟つぶやいてみたら、笑いたくなった。

　アドリアンはそうした。

　おもしろくも何ともなくたって、笑えるものだ。



cross-4

戸惑い

Puzzle

順調なんてとても言えない。

一昨日おとといはカタリとルーシーを組ませたら突っこみすぎて陣じん形けいに穴があく恰かつ好こうとなり、そこになだれこんできた異界生物フリークスどもをサフィニアの爆ばく雷らい索さくとユリカに一いつ掃そうしてもらったところまではまだよかったのだが、ユリカが下がったことで生じた綻ほころびに敵がつけこんできた。そこをカバーするためにピンパーネルを戻もどさざるをえず、前方が手て薄うすになった隙すきに押しまくられ、狭せまい通路まで後退してなんとか片をつけた。重傷者も出さずに勝ったわけだし、終わりよければすべてよしだ。そういう考え方をしたほうが精神衛生上いいことは間違いないのだけれど、次に繫つながらない。なんでそれがわからないのかな……？

昨日は昨日で、ごろごろ転がって移動する巨きょ大だいな球体といった姿の異界生物フリークスに初めて出くわした。これがもう、サフィニアの魔ま術じゅつで焼いても、ピンパーネルが雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんで斬きりつけても、ユリカが極限クライマツクス九手棍ナインポールで打ちすえても、ぜんぜんさっぱり平気らしいという恐おそろしい相手で、逃にげたって追いかけてくるし、あまり動きまわると他ほかの異界生物フリークスにも絡からまれかねないし、どうにか踏ふみとどまって決着をつけるしかないという展開になった。トマトクンが参加してくれていて、本当によかった。敵は五体もいて、一体はサフィニアが白魔術で真っ二つにしたのだが、魔術はそうぽんぽん使えるものではないし、大きな魔術をどかーんとかますにしても、アンダーグラウンドの中では諸もろ刃はの剣つるぎになりかねない。崩ほう落らくでもしたら、全員生き埋うめになって死ぬしかないのだ。おかげで、ＺＯＯ最大といってもいいだろうサフィニアの打だ撃げき力りよくは、主戦場であるアンダーグラウンド内ではかなり制限される。しかし、打撃力二番手のトマトクンは大剣を振ふりまわせるだけのスペースさえあれば本領を発揮することができ、なおかつ魔術よりも連発がきく。園長マスターがいるのといないとでは大おお違ちがいなのだ。残りの四体はトマトクンの活かつ躍やくなくしてはしとめられなかったかもしれない。ということは、トマトクンが常に同行できる態勢が整わないかぎり、Ｄ３の探たん索さくを継けい続ぞくするのは危険なのではないか。ふつうに考えたら、そういうことになるよね、やっぱり……？

その日の夜、トマトクン邸ていで会食がてら会議をした。

　議題は、Ｄ３探索をどうするか。

「いや、そんなんつづけるに決まっとるやん」

「せっかくぼくも、だいぶ慣れてきたところですし……」

　カタリとルーシーの意見は無条件継続だった。

「でも、また今日みたいなことがあって、しょのときにトマトクンがいなかったら──」

　ユリカは慎しん重ちよう論を唱えてくれた。

　サフィニアがこれを支持した。

「……そうですね……わたしがもっと、効率よく魔術を使うことができれば……でも、現実問題として、一朝一いつ夕せきには……進歩するものじゃないし……」

「そのへんは気合いやろ、気合い！　気合いで乗りきらな！」

「漢おとこパワーですよね！」

「……わたし……男じゃないんですけど……」

「ちゃうで、サフィニアァッ！　性別は関係あらへん！　男だろうと女だろうな！　気合い次し第だいで漢の道は歩けるんや！」

「……歩きたく、ないです……」

「なんやとォォッ！」

「カタリ！　食べながら喋しやべらないで！　もう、しゃっきから──」

　ユリカが布ふ巾きんでテーブルをふきはじめると、カタリはしょんぼりした。「……え、えらいすんまへん」

「ワタシは」

　ピンパーネルが自発的に口を開くとは思っていなかったので、ちょっとだけ驚おどろいた。

「トマトクンが必要と・思いマス。誰だれも死んでほしくないカラ」

「くう」

　すかさずきゅーが同意した。

　マリアローズはもこふわっとしたきゅーを撫なでて、トマトクンを見すえた。

「僕もトマトがいないとだめだと思う」

　トマトクンはそれまでずっと眠ねむたそうにしていたくせに、目をぱっちり見開いて片方の眉まゆをつりあげた。「俺は大だい丈じよう夫ぶだぞ。最近は調子がいいしな。もともと、行こうと思えば行けないことはないんだ。お前たちが止めるから、休んでただけでな」

「無理……してませんか……？」サフィニアは泣きそうな顔をしている。うるうる、ふるふるしてて、かわいすぎだから。あんな目で見つめられて、何とも思わないのだろうか。

「してない」トマトクンは平然としている。「できんことをできるとは言わんぞ。そんなことをしたって意味がないからな」

「園長マスターがこないにゆうとんのやから」

　なんとなくあやふやなかんじになってしまった。たぶん、マリアローズの中にも、トマトクンは問題ない、平気だと信じたい気持ちがあるのだろう。信じていないわけではないのだけれど、不安もある。見み抜ぬかれたのかもしれない。食後にトマトクンが久々に稽けい古こをつけてやると言いだして、マリアローズは一度、断ったのだが、大喜びしたルーシーがさっそくリビングから飛びだしていった。やむをえずみんなで庭に出て、一対一、二対一、二対二、三対三といった試合形式の訓練をした。サフィニアが飲み物を用意して、休きゆう憩けい中の仲間をねぎらってくれた。やりたくなかったけれど、ルーシーと一対一をやることになって、大苦戦した末になんとか一本とった。試合だったからだ。真しん剣けん勝負なら負けていた。マリアローズがルーシーより有利な点は、もはや一つしかない。ルーシーにはマリアローズを倒たおす気がないのだ。

　厄やつ介かいなことに、ルーシーは自覚していない。全力を出し

きって、それでもマリアローズに及およばなかった。そう思っている。

「ぼく、いつかきっと、マリアさんを守れるような漢になりますから……！」

　試合が終わったあとにそう言われた瞬しゅん間かん、ピキッときた。心の殻からが割れてしまいそうだった。正念場だと思った。マリアローズは笑えみを浮うかべてルーシーの肩かたを小こ突づいた。

「早くそうなってくれると助かるかな？　きみが強くなってくれれば、そのぶん僕は楽になるわけだし」

「は、はいっ……！」ルーシーは目を輝かがやかせて何度もうなずいた。

　よし。乗りきった。

　━━のかな？

　よくわからない。もやもやは消えないけれど、成し遂とげた感はある。

　僕はちっちゃすぎる。いろいろな意味で。身体からだもそうだけど、心だって。とにかく器うつわが小さい。歩ほ幅はばが小さい。何もかも小さい。わかっていたことじゃないか。一段一段上るのも僕には難しい。

　だからって、止まってていいの？

　絶対に、必ず、今日より明日は進歩してなきゃいけない。そんなことはないだろう。進歩なんてしたくないなら、しなくたっていい。でも、僕は少しでも上に行きたい。それは僕の意志で、僕の望みなんだ。そのために、無む駄だかもしれないけれど、あがいている。

　たぶん、繰くり返しなんだ。こんなことを延々やってゆかないといけない。そのたびにくじけそうになって、落ちこんで。いやになるよ。いいかげん、あきらめたほうがよくない？　そんなふうにも思う。

　一人だったら、足を止める前に、息の根が止まっていたかもしれない。

　一人じゃないから、今もどうにかこうにか歩くことができている。

　すっきりしたわけではないけれど、明日も顔を上げて前を向く覚かく悟ごだけはできた。

　それなのに、なぜだろう。

　明かりを消してベッドで横になると、胸が締しめつけられた。

　唇くちびるを噛かんで、うつぶせになり、枕まくらに顔を押しつけて低く呻うめいた。

「……何、これ？」

　今日は大変な目に遭あった。いろいろ感じて、思って、考えた。何かが片づいたわけではない。解決しそうな見込みが立ったわけでもない。でも、それなりに稼かせいで、みんなと話しあうこともできて、充じゅう実じつした訓練もできた。何のかのいって、楽しかった。いい一日だった。

　そのはずなのに、何だろう。この感覚は。

　枕を抱だきしめていると、足りない気がしてしょうがない。何が足りないのか。

「……寂さびしい？」

　ぽつりと呟つぶやいて、顔を上げた。

「は……？　寂しいって──なんで？　何が……？」

　わからない。

　わからないったら、わからない。

　なんで？　どうして？

　あいつの顔が浮かんで消えない。

「──そうとう用心深いみたいだネ……」

　何度かその姿を見た。何度か。正確には三度だ。

　やつはあらゆる汚お濁だくをかき集めて結けつ晶しよう化させたような黒い衣を身にまとっていた。どうやら人間のようだった。とりあえず脚あしが二本あることは確かく認にんできた。顔はわからないが、暗視鏡のような大ゴ型ー眼グ鏡ルをかけていた。光るレンズが見えたので間ま違ちがいないだろう。エルデンの下水道を根城にしている溝鼠族ブラウニグにも似た恰かつ好こうだ。

　やつは妙たえなる唯ゆい一いつの薔ば薇らをつけまわしている。一日中張りついているのか。それはわからない。とにかくやつは遠くから薔薇を見ている。何のために？　不明だ。今のところは見ているだけらしい。接近しようとはしない。ひょっとすると、彼に気づいているのか。それで警けい戒かいして、薔薇に近づこうとしないのかもしれない。

　彼は網あみを張っている。

　もし仮にやつが薔薇を手た折おろうとしたら、彼は即そく座ざに動くだろう。

　本当は薔薇のそばにいたい。つきっきりで守りたい。

　彼は王立中央文書館の屋上で首を横に振ふった。「──いや。それはダメだ」

　やつはたぶん、察している。彼の存在を。彼に狙ねらわれている。そのことも承知しているはずだ。彼が薔薇に寄り添そえば、やつはあきらめて手を引くかもしれない。一時的には。機会をうかがって、いずれふたたび薔薇にちょっかいを出そうとするかもしれない。その可能性がある以上、彼がなすべきことは決まっている。

　薔薇に害をなさんとする毒を、完全に排はい除じよするのだ。

　彼と薔薇との距きよ離りは常に百メーテル前後。これならば、薔薇やその仲間たちはもちろん、標的であるやつに気配を察知されることもないだろう。

　彼は網を張っているのだ。

　手ぐすね引いて、やつが姿を現すときを待っている。

「キミと会えないのはつらいけど、ネ」

　不思議と前より苦しくはない。

　明確な目標があるからだろうか。

　とはいえもちろん、まったく苦しくないわけではない。

「会いたいサ。会いたいのに、会えない。愛ゆえに。フ、フ、フ……」

　我ながら空くう虚きよな笑い声だった。

　彼は奥歯を嚙みしめた。

「──そう、これこそが……極限愛ラヴ・マツクス」

「あの……マリアさん」

　朝食の席でルーシーがこわごわと顔をのぞきこんできた。

　マリアローズはそのルーシーが作った目玉焼きの黄身の部分に箸はしの先を突つき刺さした。

　白っぽかったので、そうじゃないかとは思っていた。

　硬かたい。

　硬すぎる。

　黄身がゼリー状になっていて、表面を破るとトロッと流れだす。マリアローズの好みはそれくらいの焼き加減だ。そこに醬しよう油ゆを垂らしてちょっと混ぜ、ちぎった白身をそれにひたして白いご飯と一いつ緒しよに食べる。最高だ。というより、この食べ方以外は認めたくない。いや、何があろうと認めない。

「何？」

「あ、いえ……」ルーシーはうつむいた。「も、もしかして……何か怒おこってます？」

「怒る？　僕が？」

　マリアローズは黄身をぐちゃぐちゃにした。

　硬い。

　硬い。

　硬すぎる。

　手を止めた。

「怒ってないよ？　ぜんぜん。これっぽっちも」

「そ、そう……ですか。なら、いいんですけど……」

「怒るわけないし。これくらいのことで」

　ちょっと眠ねむれなかっただけだ。

　何でもない、何でも――

　実際、この日のＤ３探たん索さくは失敗らしい失敗もなかった。寝ね不ぶ足そくで、体調があまりよくないから、よっぽど気をつけないと。その意識が、かえっていい方向に働いたのかもしれない。だいたい、調子がいいときほど足をすくわれるものなのだ。

　晩ご飯のあと、リビングのソファーに寝転がっていたら、ピンパーネルが隣となりに座った。

「元気ないデス」

「……え？　そう？　ああ……」

　あくびが出たので、慌あわてて口を押さえた。

「なんか、昨夜あんまり眠れなくてさ」

「夜の訓練・しますカ」

「うーん……やめとこっかな？　今日は」

「そのほうがいいデス。早く寝たほうガ」

「だよねー。うん。わかってる」

　それなのに、入浴したあともリビングでだらだらしていた。

　トマトクンはソファーでいびきをかきはじめ、きゅーは最近凝こっている編み物をしだして、ピンパーネルはちびちびお酒を飲んでいる。ルーシーはピンパーネル相手に何か話しているけれど、聞こえているだけで、その内容はまったく頭に入ってこない。

　ピンパーネルとルーシーに、部屋へ戻もどって寝てはどうかと何度かすすめられた。

「そうだよねー。うん。そのうちね」

　一人になりたくなかった。

　横になって、背中を丸め、腿ももの間に両りよう腕うでを挟はさんで、何を考えるでもなくぼんやりしている。

　この時間が終わってほしくないと思った。

　ちょっとだけ心ここ地ちよいのだけれど、なんだか胸苦しい。

　でも、一人きりになったら、きっと苦しいだけだ。

　日付が変わるころ、ピンパーネルとルーシーときゅーはリビングから出て行った。その前に声をかけられたが、自分もすぐ寝るから、と答えておいた。

　自分の部屋とトマトクンの部屋から二人分の毛布を持ってきた。眠っているトマトクンに毛布をかけて、マリアローズは毛布にくるまった。

　トマトクンの足に足を向ける恰かつ好こうで眠ろうとした。

　寝つけなくて、トマトクンの足を軽く蹴けってみたりしたけれど、この程度のことで起きるわけもない。

　ユリカとかサフィニアがいれば。それか、リーチェ。だめだ。

　言えない。話せっこない。

　自分でも何がなんだかわかってないし。

「うわー」と小声で叫さけんでみた。

　小声で叫ぶなんて、変なの。

　ほんとに変だよ。

　変すぎて困る。

　それでも気がついたら眠りこけていたみたいで、朝はわりと爽そう快かいだった。

　今日はアンダーグラウンドには行かないから、アサイラムに顔を出す予定だ。「ヌー・ベイル・アデフェット・ウィット」でお菓か子しを買って行くつもりで、前もって予約しておいた。

　十一時に家を出てヌー・ベイルに寄り、ケーキを買ってアサイラムへと向かった。

　道中やたらと周りが気になった。

　見られているようなかんじがする──わけではない。

　いないのかな？

　いないか。

　いないよね。

　いないんだ……。

「──って」

　これじゃあまるで、いてほしいみたいじゃない？

「そんなことないよ？」

　下を向いて、いや、それは危ないから、前だけを向いて、ずんずんかつかつ歩いた。

「あるわけないしっ」

　そうだ。歩くことに集中しよう。

「ないないない。あるわけないんだからっ」

　できるだけ速く歩こう。風のように歩こう。いっそ走っちゃえば。走らないって。疲つかれるし。速く歩くのもどうなの？　ふつうに歩いたほうがよくない？

「それじゃ、気が収まらないんだよね」

　アサイラムにつくとちょうど昼飯時だった。

　昼飯時ランチタイム。

　胸の奥のほうがちりっとした。「──超最低ＳＵＣＫ」

　昼休みのモリー、ベアトリーチェと一いつ緒しよに昼ご飯を食べて、お菓子をつつきながらお茶を飲んだ。一時間なんてあっという間だった。二人ともいつもどおりで、何も言われなかったから、マリアローズもふだんと変わらないということだろう。自信がついた。

　帰り道は脇わき目めもふらなかった。

　家に帰ると、きゅーしかいなかった。

「……みんなは？」

　きゅーはどこかを指さして首を傾かしげた。「きゅう」

「ああ、トマトは部屋？」

「くう」

「他ほかは？」

　きゅーは別の方向を示した。「きゅう」

「どっか行ったんだ」

「くう」

「むぅー。何だよ。聞いてないし。何かあるなら、教えといてくれればよかったのに。僕の用事はすぐすむんだし。そう言っといたのにさ。ちょっとしたいじめじゃない？　これって」

「きゅう」

「いいよ、もう！　昼ひる寝ねでもしよっと！」

　マリアローズはリビングの床ゆかに転がった。きゅーがきてくれたので、しがみついてもふもふの毛に顔を埋うずめた。しばらく幸福感をむさぼって、目をつぶっていれば眠ねむくなるだろうと楽観していたのだけれど、そんなことはなかった。

「ねーむーくーなーいーっ」

　じたばたしていたら、きゅーに頭を撫なでられた。

　マリアローズは飛び起きて地じ団だん駄だを踏ふんだ。

「だだっ子かっ。僕はっ。子供じゃないんだからっ」

　装備の手入れでもしよう。そうだ。そうしよう。

「きゅーは？　編み物とかする？」

「くう」

「じゃあさ、僕の部屋でやらない？」

「くう」

　部屋で小型強弩ベイビーファイアをばらして各部を掃そう除じして組み立てなおしたり、剣けんやらボディスーツやらを点検したり、ハーレム・ゴードンの量をチェックしたりした。

　きゅーはベッドに腰こしかけて編み物をしている。たまにその姿をちらっと見ると、思わず頬ほおがゆるんでしまう。

　マリアローズはひとりうなずいた。「──うん。悪くない休日だよね」

　ピンパーネルとルーシーはカタリを連れて夕方に帰ってきた。ユリカとサフィニアもきて、トマトクンを起こし、みんなでご飯を食

べた。ユリカとサフィニアは帰るつもりだったらしいが、泊とまってゆかないかと誘さそってみた。二つ返事だった。

　三人で夜中まで話していた。

　おかげでちっとも寂さびしくなかったし、余計なことを考えずにすんだ。

　というか、だいたい寂しいわけがない。一人ぼっちでいる時間なんてほとんどないのだ。

「……意味不明すぎ」

　寝る前にそう呟つぶやいたら、サフィニアに「……何が？」と訊きかれた。

「え？　や……まあ、いろいろと」

「……いろいろ……って？」

「うーん……だから、いろいろ？」

　サフィニアはくすくす笑ってそれ以上は尋たずねなかった。よく眠れた。

　Ｄ３探たん索さくは振ふりだしに戻もどった。たった一日休んだだけなのに、異界生物フリークスたちの勢力分布が一変していたのだ。神聖帝国ホーリーエンパイア同好会・クラブの連中と出くわしたので、情報交こう換かんをした。どうやら昨日、異界生物フリークス同士の大だい抗こう争そうがあったらしい。それに巻きこまれた翠玉のエメラルド・血盟クランは二十三名もの死者を出して、Ｄ３からの撤てつ退たいどころか、クラン解散の危機に瀕ひんしているという。生き残りの大半は鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエティに吸収されるだろうと、〝女傑ヒロイン〟の異名を持つ翠玉のエメラルド・血盟クランの盟主マスターララ・パパラッチが言っていた。「──どっちにしても、ここはしばらく静かになりそうだね。あたしらはもうちょい踏んばってみるつもりだけどさ」

　ちなみに、Ｄ３における異界生物フリークス同士の大抗争は〝激震シエイク〟と呼ばれていて、知られているだけで七度も起こっている。めずらしい出来事ではないのだ。そうはいっても、侵入者クラツカーにとっては大事件で、かなり意気をくじかれる。何しろ、

これまで積みあげてきたものが一気に崩くずれ去ってしまうのだ。反面、弱い異界生物フリークスは淘とう汰たされ、勝ち残った異界生物フリークスも抗争で弱体化していることが多いので、一いつ攫かく千せん金きんのチャンスがそのへんに転がっている場合もある。

ＺＯＯは慎しん重ちように探索を進めて、新種の異界生物フリークスを多数確かく認にんし、いくつかの珍ちん妙みような戦利品を獲かく得とくして、そこそこ稼かせいだ。

夜はピンパーネルに稽けい古こをつけてもらった。ルーシーも加わって、きゅーが手伝ってくれた。トマトクンは夕食をとってすぐ、ソファーで寝てしまっていた。ピンパーネルの剣けん捌さばきを見ていて、突とつ然ぜん、何かつかんだような気がした。気のせいではなかった。ルーシーと一対一を三回やって、三戦三勝、うち一度は辛しん勝しようだったが、二度は圧勝といってもよかった。どうやら二刀流のコツみたいなものがわかりかけてきたようだ。右と左にそれぞれ意識を向けるのではなく、右と左を一つとしてとらえる、とでもいえばいいのか。両手をうまく使わなければならない。そう考えすぎて、一いつ杯ぱい一いつ杯ぱいになっていたのかもしれない。どうも思いどおりにゆかない、難しいという気持ちが強すぎた。できない、できない、と思っていると、できることもできないものだ。過信は禁物だけれど、ほんの少しだけ自分を信じてあげたほうがいいのかもしれない。それはそれで簡単なことでもないんだけどね。僕にとっては。

いい疲ひ労ろう感だった。これならぐっすり眠れそうだ。

「……眠いよ？　けっこう眠いんだよ……？」

ベッドの中でごろごろした。

「あぁー……何？　何なの？　もぉー……うぅー……わぁー」

頭から布ふ団とんを被かぶって身体からだを丸めてみたりもしたけれど、息苦しいだけだった。

顔を出して、天てん井じようを見つめた。

ため息があふれた。

「……くるし」

　何がこんなにも苦しいのだろう。

「きみのせいだ」

　名前を口に出してみようとして、やめた。

　あれこれ考えてしまいそうだ。

「……やだ。考えたくない」

　いい一日だったはずなのに。

　不満なんて何もないのに。

　寝られなくて、真夜中のリビングに行ってみた。トマトクンはいなかった。自分の部屋に戻ったのだろう。理り不ふ尽じんだとわかっているけれど、頭にきた。

「なんでこういうときだけ……」

　かといって、部屋に押しかけるわけにもゆかない。水を一杯飲んで、自室に引き返した。結局、朝方まで悶もん々もんとしていた。超最低ＳＵＣＫだ。

　翌日のＤ３探索はちょっと雑になってしまった。寝不足よりも、昨夜の訓練で何かつかんだという思いが、マリアローズを出たがりにさせた。さいわい失敗には繋つながらなかったけれど、反省した。僕の場合、個人的な戦せん闘とう能力の面で自分を計算に入れようとするのはぜんぶ慢まん心しんだ。そこはゼロと考えて戦術を組み立てるべきで、僕なんかが出張らないといけない状じよう況きようはなるべく作らないようにしないといけない。状況を作ること。それこそが僕の仕事で、そのことに集中するべきなんだ。

　何度戒いましめてもわからない、聞き分けのない自分が情けない。でも、自分は自分でいるしかないから、見捨てることだけはしない。

「──もしかして、ちょっとだけ、強くなった？」

　とりあえず、落ちこむことはなかった。むしろ、明日もがんばろう的な気分で、入浴するまでは元気だった。ベッドに入った途と端たん、泣きたくなった。

「……て、泣くわけないし」

　最近、訓練は毎日しないようにしている。Ｄ３探索もそれなりにきついし、一日か二日あけたほうが、訓練の成果を吟ぎん味みして次に生かすことができたりするものだ。でも、今日は稽古をつけてもらえばよかったかもしれない。へとへとになっていれば、もっと違ちがったはずだ。

「けど、昨日はだいぶ疲つかれてたよ……？」

　今だって、疲ひ労ろうはかなりある。

「……そういう問題じゃないってことかな……」

　思いっきり顔をしかめてみた。

「じゃあ、どういう問題……？」

　胸が、きゅっ、とする。

　それだけではない。

　頭がぐるぐるする。

「……なんで？」

　両手で口をふさいだ。これ以上はだめだ。

　考えないほうがいい。考えちゃいけない。

　僕のことなんかどうでもよくなった。それならいいよ、でも――

　また何かあった？

　前みたいに――あの人の――クラニィのときみたいに、僕のせいで、何か。だって。

　だって、変だよ。いくらなんでも。こんなに顔を出さないなんて。このごろなんて、どっかそのへんに隠かくれてるってかんじもしないし。おかしいでしょ。や、ふつうに考えたら、ぜんぜんおかしくないのかもしれないけど、そこはほら、きみのことだしさ。もともと、まともじゃないんだし。まともじゃない？

　僕はきみの何を知ってるっていうの？

　何も知らない。

　たとえば、昼飯時ランチタイムの中ではどんなふうなのか、とか。仲間にはかなり好かれてるっぽいけど。てゆうか、愛されまくってるっぽいけど。直接知ってるわけじゃないし。

　きみがどんな暮らしをしているのかさえ、僕は知らない。

　どうやって、どこで寝てるの？

　ご飯とか、ちゃんと食べてる？

　そんなことすら知らない。

　本当に何も知らない。



起きあがって、カーテンを開けた。

きみもどこかでこの星が少ない夜空を見ているのかもしれない。

そんなふうにはとても思えなくて、首を振ふった。

胸を押さえて、息を吸いこんだ。肺がちぢんでしまったのか。もう満まん杯ぱいだ。

「──あ……」

歯を食いしばって押し殺した。

身体からだを横にして目をつぶり、閉じた瞼まぶたの上に左ひだり腕うでを押しつけた。

右手でシーツを握にぎりしめた。

こらえきれなかった。

「あいたいよ」

そうだ。

あいたい。

おまえに、あいたい。

あわなければ、ならぬ。

おまえにあわねば、なんのために。

なんのために、わたしは。

こうまでして。

このような身に成り果ててまで、生きながらえているというのか。

お前だ。

お前のためだ。

お前だけのためなのだ。

私は逃にげた。お前の姦かん計けい。我が母の六十七回目の誕生日〝歓喜の日ジユルドプレジール〟は悲劇のジユルド日トラジエデ

イとなった。お前は客に振る舞まう酒に毒を混入させた。私はお前がそこまでやるとは予想していなかった。なぜならお前は心やさしい。まさかお前が他人を殺あやめるとは。そこまでお前は追いこまれていたのか。あれはお前がもたらした破は滅めつだった。お前が私にくれた贈おくり物だった。絶望。憎ぞう悪お。それらをこの胸に抱いだいて私は逃げた。荷物はお前だけでよかったが、そうもゆかぬ。お前以外に四人の供を連れ、馬車を走らせて、私は逃げた。

世にも美しい逃とう避ひ行こうだった。

私はあのような美しさをこそ求めていたのだ。

できうることなら、お前への愛いとおしさと憎にくしみでこの胸を何百万遍切り裂さかれながら、いつまでも、永遠に、逃げつづけたかった。

望みは絶たれた。

卑いやしい、凶きよう暴ぼうな、獣けもののような野や盗とうどもが、私の馬車を襲おそった。

供の者たちはあっという間に錆さびて汚よごれた剣けんで突つき殺され、私とお前は馬車の外へと引きずりだされた。そして、私はどうした？

這はいつくばって哀あわれみを乞こうた。有り金すべて渡わたす。その代わり、どうかこの者には手をふれないでほしい。助けてやってほしい。

私は半はん狂きよう乱らんでお前を庇かばおうとしたのだ。あんなことをしたところで、野盗どもが聞き入れるはずもない。だのに、私はあの野や獣じゆうどもに懇こん願がんした。

野獣どもはにやにやしながら私の肩かたと腹部に剣を突き刺さした。私はそれでも私を殺そうとしている野獣にとりすがって慈じ悲ひを求めた。野獣どもはけたたましく笑った。私は痛みとともに喜びを感じていた。そのときになって私は知ったのだった。

私はあえて道化を演じていたのだ。そうして野獣どもの気を惹ひこうとしていた。

お前に合図を送ったりはしなかった。私には確信があった。お前

はやさしいだけではない。賢かしこい子だ。その気になれば、どこまでも抜ぬけ目なく立ち回ることができる。

　果たして、お前は逃げだした。

　数匹ひきの野獣がすぐにお前を追いかけたが、お前のことだからきっと逃げおおせてくれるだろうと私は信じた。

　そのあとのことは私の物語だ。

　野獣どもはお前の逃とう走そうで算を乱した。これにより生じた隙すきは私にとっても貴重な好機だった。私はいくつもの深ふか手でを負わされながらも、我が錬れん金きん術じゆつの生成物を駆く使しして、なんとかその場から離はなれることに成功した。

　私は生きのびた。

　死にはしなかった。

　正直、私にはわからないのだ。屍しかばねと間ま違ちがえられたのか、本物の獣に肉体を食いちぎられるような有様になってさえ、私はなぜ、命だけは落とさなかったのか。私は死んでいてもおかしくなかった。生きているほうがおかしい。私は生命の維い持じに欠かすことのできない重要な臓器をいくつか失ったし、体液も半ば以上、体外に流出していたはずだ。はっきりしたことは、私自身にもわからないのだ。

　一つだけ思いあたる節があるとしたら、それは我が錬金術だ。

　錬金士ならば誰だれでも一度は夢見たことがあるに違いない不老不死に挑いどんでいた時期が、私にはあった。我々錬金士は魔ま術じゆつ士しのなり損そこないであると見なされることもあるが、半ばまでは事実であると言ってもよかろう。私は幼いころ自ら希望して魔術士としての訓練を受けた。しかしその素質は皆かい無むであると判断された。機術は魔術の変形だ。医術式には興味がなかった。私には錬金術しかなかった。

　私は学んだ。私が世界と戦うための武器は知識だった。頭につめこんだ知識を総動員し、家財をつぎこんで珍ちん品ぴんを集め、生成、生成、生成の日々だった。初期は師がいた。世界の仕組みだの戒かい律りつだのとやかましいばかりで、微み塵じんの野心も持たぬ師などすぐ不要になった。私は独学独習した。とりわけ不老不死

の万能薬エリクサーを生みだすことに熱中した。実験台はたいてい自分自身だった。当時の私は恐おそれ知らずだった。我が手になる生成物に自信を持ってもいた。必ず効果があると確信してさえいた。失敗は成功の母とためらわずに言い放つことができた。

　私の万能薬エリクサーはとうとう完成しなかった。

　私は苦すぎる挫ざ折せつを味わい、断念したのだ。

　そのはずだったのだが、あるいは無数の試薬が私の肉体に何らかの変化を及およぼしていたのかもしれない。

　私は死ななかった。長い、長い時間を要したが、傷は癒いえた。ただし、もとどおりにはならなかった。

　たしかに私はしばし野人のような暮らしを送っていたが、そのせいではあるまい。

　私は変へん貌ぼうを遂とげた。

　おかげで、私は人目をさけねばならなかった。

　もっとはっきり言おう。

　私はとても人とは思われぬ、二目と見られぬ姿に成り果てたのだ。

　むろん、私は嘆なげいた。せっかく拾った命だが、もう生きてはゆかれぬ。そう思いつめたこともある。

　私はだが、生きることを選せん択たくした。

　私は思いだした。

　私にはまだ望みがあった。

　一つだけだ。

　この私に残された、たった一つだけの希望。

　お前だ。

　私はお前を捜さがし求めた。

　ずっと、ずっと、お前を捜していたのだ。

　ようやく見つけた。

　あれから幾いく星せい霜そうを経て、お前も変わっていたが、いや、しかし、お前はやはり変わってなどいない。

　一目でわかった。

　お前は特別で、完全な存在だ。変わるはずもない。

　私はお前に会いたいのだ。

　だが、どうすれば？

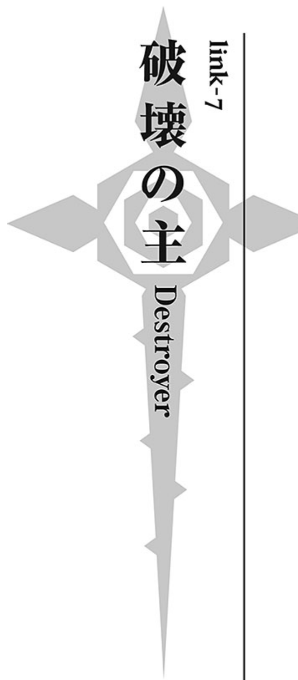
　私はいまだ決めかねている。

　それに、うるさい蠅はえが。

　私はときおり、そのつめたい視線を感じる。流る浪ろうの暮らしで私は野獣に劣おとらぬ勘かんを身につけた。私は危険だと思う。とても、非常に、異様なまでに危険だと思う。私は逃にげる。逃げざるをえない。それでも私はあきらめぬ。

　お前のことだけは、あきらめきれぬ。

link-7 破壊の主 Destroyer



姉がいて、弟がいる。それはずっと前から変わらない。

いつだって、姉がいて、弟がいた。

姉には弟がいればよかった。弟にとっては姉がいればよかった。

どんなときも、姉と弟は二人で生き抜ぬいてきた。

竜が人を食くらい、人が人を食う時代、二人は他ほかの人間たちとは交わらず、竜をさけ、野を、山を、海辺を歩きまわった。

二人には自負があった。他の者らよりも、自分たちはこの世界を知っている。

調べ、検証するごとに、誇ほこりは打ち砕くだかれてゆき、やがて粉々になった。

こんなはずではなかった。何かが、あるいは、すべてが間ま違ちがっている。

何らかの原因で、世界は根本的にゆがめられてしまったのだ。

世界は、まるで想定していなかった、想像を超こえる危険にあふれていた。

二人は、でも、探した。何か痕こん跡せきのようなものくらいは、きっと見つかるだろう。信じるというよりも、すがる思いで探し求めた。ついに見つけた。

二人は皮肉をこめて、それを遺い跡せきと呼んだ。彼らに本来、与あたえられていてしかるべきものが、そこには埋うもれていた。わざわざ掘ほりださなければならなかったのだ。いったいどうしてこんなことに？

二人は遺跡から遺跡へと渡わたり歩いた。遺物は二人に力をもたらした。それは技術だった。二人には知識があった。しかし遺物はどれも不完全か不良だった。苦労してどうにか使えるようにしても、ろくすっぽ役に立たないことも多かった。

遺跡を狙ねらう者も増えた。

遺跡に人が集まると、町ができて、国ができた。

　二人は彼らとは交わらなかった。彼らは野や蛮ばんで、危険だった。二人には知識と技術があったが、弟は虚きよ弱じやくだった。弟がそのことを嘆なげくと、姉がたしなめた。姉は弟の愚ぐ痴ちにも、身を挺ていして弟を守ることにも慣れていた。

「そのために、あたしがいるんだろう」

「そうじゃないよ、姉さん。ぼくは姉さんの負担になっているんだ。ぼくがいなければ」

「無意味な仮定だ。実際、おまえはいるんだから」

「いなくなれば？」

「あたしがそうさせない」

「姉さんは強ごう情じようだ」

　姉には弟がいればよく、弟には姉がいればよかった。

「予定どおりじゃないということだよね」

「それどころか」

「めちゃくちゃだ」

「何もかも、おかしい」

「どうなっているのかな。探さぐるすべは？」

「あたしには見当もつかないな」

　やがて流れるだけだった時が少しずつ積み重なりはじめた。

　国と国は争い、大国が生まれ、また潰ついえる。

　弟はときおり姉の目を盗ぬすんで人間の国に入りこむようになった。弟が姿を消すと、姉は当然、捜さがした。見つけて連れ帰ることもあれば、見つけられず、苛いら立だったり肩かたを落としたりしている間に、弟が平然とした顔で戻もどってくることもあった。

「なぜ勝手に出歩くんだ」

「ぼくは知りたいだけだよ、姉さん」

「知らなくていい。知って何になる」

「姉さんはこのままでいいと思っているの？」

「このままで、何が悪い」

「悪いとか、いいとか、そういう問題じゃないよ。このままではいられない。姉さんだって、本当はわかっているはずだよ」

「わからないな。あたしは好きこのんで危険を冒おかすような真ま似ねをするなと言っているんだ」

「ぼくは平気だよ。いつまでも姉さんに守ってもらってばかりいられないし」

　また弟がいなくなった。姉は弟を捜しに行った。たいていは二人が隠かくれ家がにしている山奥の遺跡から一番近いカラビナだ。姉の心配は的中した。弟はカラビナ騎き士しの一団に言いがかりをつけられて、公衆の面前で謝罪するよう要求されていた。おとなしく従えばいいものを、やはり姉に似ているところもあるのか、弟も意地っぱりだった。

「ぼくは正当な代価を求めただけだよ。それなのに、支し払はらう気はないっていう。侮ぶ辱じよくも何もあったものじゃない。なんでぼくが謝らなきゃならない？」

　騎士はようするに、人食いや竜狩がりの系けい譜ふに連なる武辺者だ。最近では上等ぶっているが、ようするに荒あらくれ者なのだ。

　騎士たちは弟を突つき飛ばし、這はいつくばって許しを乞こえば殺さずに見み逃のがしてやる、というようなことを言っていた。弟は引き下がらないだろう。姉はその気き性しようを承知していたから、他人とかかわるのはよせと弟に言い聞かせていたのだ。弟は聡さといが、身体からだが弱いことに引け目を感じていて、傲ごう慢まんなほどに誇り高い。野蛮な連中とうまくつきあえるはずがないのだ。

　やむをえず、姉は騎士たちめがけて突とつ進しんし、刀を抜き放った。騎士たちは町中なので軽装だったし、まるで警けい戒かい

していなかったから、二人斬きり伏ふせるまではたやすかった。姉は不意を衝ついて騎士たちを驚おどろかせ、その間に弟を引きずって逃にげるつもりだった。

「行くぞ、こい！」

　そうは問屋が卸おろさなかった。

　弟の襟えり首くびをつかんで駆かけだそうとした姉の背に灼しやく熱ねつが走った。浅あさ手でだが、斬られた。

　姉は振ふり返って応戦するしかなかった。騎士は残り三人だ。やるとなったら、姉はためらわなかった。

「姉さん……！」

　弟の声も聞こえなかった。姉は動きまわり、刀を振りまわしつづけて、二人の騎士を倒たおし、もう一人を動けなくした。

「……逃げるぞ！」

　そして弟と一いつ緒しよに逃げた。血が止まらず、足が止まりそうになったが、駆けた。

　もちろん追っ手がかかったが、町の外に原動機付きの二輪車を隠してあった。

　二輪車に二人乗りして、隠れ家に戻ると、姉はいったん気を失った。

　ややあって目が覚めると、弟が青い顔をして震ふるえていた。

「どうしよう。姉さん、ぼく……どうしたら」

「どうもしなくていい。これくらい、どうってことはない」

「そんな──そんなわけ、ないじゃないか。だって、姉さん、左ひだり腕うでが……」

　姉は左腕を失った。騎士の中に一人手て練だれがいて、気合い一いつ閃せん、長ちよう剣けんを彼女の左腕の肘ひじあたりに叩たたきこんだ。ぼとりと落ちた。逃げる際、拾って持ち帰ろうと一いつ

瞬しゅん思ったが、そんなことをして何になるだろう。

　姉は右手で弟の頬ほおを撫なでた。「あたしは大だい丈じよう夫ぶだ。失血死せずにすんだからな。なくなった腕はつければいい」

　二人には知識があり、技術があった。二人は知ち恵えと技わざと遺物を駆く使しして、姉の左腕を復元した。完全な形ではなかったが、自在に動かすことができた。

　弟は安あん堵どした。同時に、このままではいけないという思いをあらたにした。

「聞いてよ、姉さん、ぼくの話を」

「聞いている」

「そうじゃなくて、聞き入れてほしいんだよ。これはぼくたちのためなんだ」

「何があたしたちのためだ。おまえは理解していない。あたしたちの知識や技術には価値がある。大きな価値が。それがどれだけ危険なことか」

「知っているさ。そんなこと。だから有効利用しないと」

「おまえ、まさか──」

　弟は技術を取引材料にして情報や物品を手に入れ、人脈を作ろうとしていた。

「これはぼくたちの武器なんだ。活用しない手はないよ」

「おまえの、だろう」

「ぼくたちの、だよ、姉さん。なんでそんな言い方をするの？」

　姉には弟がいればよく、弟には姉がいればよかった。だが、姉は当然のように弟を庇かばい、守りながらも、一度たりとも自らの思いを口にしたことはなかった。

　姉にとっては弟がすべてだった。

　ありとあらゆる物事を単純化する癖くせが姉にはあった。そうす

ることで目的が明確になり、迷わず、確実に成し遂とげることができる。姉は弟を世界から隔かく離りしたかったのだ。弟を守るという目的を達成するには、それが最善の方法だと姉は考えていた。

　姉は弟を理解していた。弟は知りたがり、手に入れたがる。姉のように、失ったものを補うだけでは足りないのだ。そしておそらく、充じゆう足そくすることはない。

　二人だけでいい。互たがいの他ほかには誰だれも、何もいらない。

　そんなの、嘘うそだ。

　姉はとうに気づいている。

　それなのに、しがみつこうとしている。

「こんなところに閉じこもっていちゃいけないんだよ、姉さん。そうだろう。何が起こっているのか、ちゃんと知らなくちゃ。把は握あくしないと」

「把握して、どうする」

「選せん択たく肢しだよ。選択肢ができるってことなんだ」

「おまえはそして、何を選ぶつもりだ」

「わからないよ。まだわからない。だけど、ぼくたちにとって一番いい道を選ぶつもりだよ。今は一つきりだろう。それにしたって、どんづまりじゃないか」

「不満なのか、おまえは」

「違ちがう。違うよ、姉さん。そうじゃないんだ。どうしてわかってくれないのかな……」

　弟がいくつかの遺物や技術と引き替かえに渡わたりをつけたカラビナはメルアドラに滅ほろぼされ、ぜんぶ水の泡あわになった。

　おまけに、戦乱に巻きこまれた弟を救うため、姉は右みぎ脚あしを失う羽目になった。

「姉さん……ごめん、本当に、ぼくのせいで、姉さん……」

「たいしたことはない。またつければいいんだ」

　弟は懲こりずにメルアドラの騎き士しの知ち遇ぐうをえた。といっても、相手はフェルアロンという、もともとはカラビナの騎士だった男だ。

　フェルアロンは自らを打ち負かしたメルアドラの閃ひらめく紅くれない、騎士王アルバレスト・シュナイトスの臣下となっていた。姉もフェルアロンとは何度か会った。初対面の折は、長身の女がめずらしいのか、義手と義足が不思議なのか、だいぶじろじろ眺ながめられて不快だった。

「何か？」

「いえ」フェルアロンは首を振ってひかえめな笑えみを浮うかべた。「申し訳ない。お持ちの剣けんが見たこともない形なので、つい」

「何なら、威い力りよくの程ほどをお目にかけよう」

「お手合わせ願えるということですか。いや、しかし──」

　二度目に会ったときは試合の真ま似ね事ごとをして、彼女が勝った。勝つには勝ったし、結果は同じだったろうが、フェルアロンが手心を加えていたことに彼女は気づいた。

「試合とはいえ、真剣勝負ができない者は、いずれ戦場の露つゆと消えましょう」

「これは手厳しい」

「どっちにしても、姉さんには勝てっこないよ」

「そうですな。我が君とお引きあわせしたいところですが」

「無用です」彼女はにべもなく断った。

　あとで弟はつむじを曲げた。「フェルアロンが気に入った？」

「何を言っているんだ、おまえは」

「だって、よく喋しやべっていたじゃないか」

「おまえが会わせたんだろう。黙だまっているわけにもゆかないし」

「フェルアロンは強い騎士だからね。彼が仕えているアルバレスト・シュナイトスはもっと強いらしいけど。メルアドラにはそれよりすごい騎士がいるんだよ。その名も──名前じゃないんだけど、皆みな殺ごろしの騎士といって」

「興味がない」

「フェルアロンと試合をしていたとき、楽しそうだったよ」

「そんなわけがない。気のせいだろう」

「昔から、好きじゃないか」

「何がだ」

「身体からだを動かすの。勝負事も。負けず嫌ぎらいなんだよ、姉さんは」

「おまえもそうだろう」

「でも、戦ったって、勝てないからね」

　メルアドラの繁はん栄えいは長くつづかなかった。

　ある日の晩、一人の超越者オーバリストが王宮で催もよおされた宴うたげにもぐりこみ、〝無限のダイアデルタ〟という名の神を召しよう喚かんして、大王と騎士たちを殺した。フェルアロンも、アルバレストも死んだ。生き残った騎士はただ一人だった。

　ダイアデルタと生き残りの騎士は壮そう絶ぜつな一騎討うちを繰くり広げた。いや、騎士は逃にげまわるだけで、ダイアデルタは獲え物ものを追いかけながら、人を殺し、建物を壊こわした。

　それは大いなる災さい禍かだった。

　メルアドラの国土の半分は灰かい燼じんに帰し、残りは荒こう廃はいした。メルアドラにとどまらない。小国がいくつも滅ぼされ

た。

「待て！　だめだ、よせ、行くな……！」

　神。神とは何だろう。弟はダイアデルタをこの目で見たいと言って聞かなかった。姉は止めたが、振ふりきられた。こういうときだけは素す早ばやいのだ。

　弟は原動機付き二輪車を走らせて、あっという間に姉を引き離はなした。

　その願いは間もなく叶かなった。

　青い炎ほのおをまとった黒い巨きよ人じんが弟の前を横切っていった。弟はたしかにその姿を目に焼きつけた。違う。そうではない。

　目が焼けた。目だけではない。青い炎は彼を軽く舐なめただけだったが、それで身体の前面が燃えあがった。

　弟は熱された二輪車ごと転てん倒とうした。やがて姉が駆かけつけてきた。目は見えないが、耳は生きていた。姉の声は聞こえた。聞こえるのに、何を言われているのか、わからない。何がどうなっているのか。確かく認にんしたかった。

「……ぼく、死ぬのかな」

　こんなことを尋たずねられても、姉は困るだろうと弟は思った。

「ぼくたちは、死んだら、どうなってしまうのかな」

「死なせるものか！」と姉が叫さけんだ。「おまえを死なせてたまるか……！」

　姉は弟を抱だきかかえて隠かくれ家がへと運びこみ、知識と技術を総動員してその命を繋つなぎとめようとした。

　それは彼女が今まで経験した中で、もっとも長い戦いだった。

　彼の肉体が被こうむった損傷は想像以上に手ひどく、とりわけ使い物にならない臓器が多すぎた。

彼女は彼を死なせないために、いくつもの重大な決断を下さなければならなかった。

彼女は思考を単純化した。目的は彼の生存だ。そのためにとるべき方法をとる。

彼女は粘ねばり強く戦いつづけ、数えきれない危機を乗り越えて、彼を生かした。

彼は生きのびたし、物を考えることはできた。音を聞くことも可能だったが、見ることも、喋ることもできなかった。むろん動けなかった。

彼女は彼のためにさらなる遺物を求めた。

無限のダイアデルタは倒たおされたらしいが、この世界にはありとあらゆる危険がそこらじゅうにごろごろ転がっていた。

彼女は右みぎ腕うでを失い、左ひだり脚あしをなくした。

大きな怪け我がを負うたびに、彼女の肉体は作りかえられた。

それだけにとどまらず、身を守るため、あるいは遺物を強ごう奪だつするために、より強きよう靭じんな身体を彼女は欲ほつした。彼女は自分自身を改良した。進化させた。

すべて彼のためだった。

弟はとうとう自分の意思を伝えることができるようになった。
「デモ・ドウシテ・ボクワ・ウゴケナイ……？」

「待っていろ。きっとあたしがなんとかしてやる」

「ボクガ・ヨワイ・カラ……？」

「違ちがう。あたしの処置がまずかった。あたしのせいだ」

「ネエサンワ・ワルク・ナイヨ……」

「あたしのせいだ。あたしはおまえを守る。おまえを動けるようにしてやる」

「カラダ・ナンテ・イラナイ」

「何だと？」

「イラナイ・カラダ・ナンテ……フジユウ・ダ……」

　一時的な措そ置ちだ。姉は自分にそう言い聞かせて、弟を移し替かえる作業をした。

　彼女もわかっていたのだ。弟は限界だった。このままではもたない。でも、一種の情報体となった弟は、本当に弟なのだろうか。

　弟だ。

　もちろん、弟以外の何物でもない。

　彼女はつめたい球体に封ふうじこめられた彼を胸に抱だいた。

「寒くないか」

「姉さんの身体からだだって、ほとんど金属メタルじゃないか」

「そうだな」

「寒くないよ」

　姉は遺物探しに弟を連れてゆくようになった。

「ぼくは携けい帯たいサイズだから、楽でしょう？」

「なんてことを言うんだ」

「事実じゃないか。でも、こっちのほうがずっといいよ。姉さんと一いつ緒しよにいられるし」

　そうはいっても、二人の隠れ家は行動の拠きよ点てんだった。ここにはさまざまな遺物が集められ、積み重ねられて、多種多様な設備が整えられ、施設と化している。捨てるには惜おしい。捨てるわけにはゆかない。隠れ家にいる間は、周辺を見まわるのも姉の仕事だ。

「誰だれか、くる」

　見晴らしのいい高台の上で、彼女は隠れ家のほうへと近づいてくる男の姿を見た。

　男は丈たけ高く、鬣たてがみのような髪かみを風になびかせて、大おお振ぶりの剣けんを背負っていた。その一歩一歩が地を揺ゆるがすかのようだった。それでいて奇き妙みように静かだった。

　異形の男だった。

「姉さん、ぼくにも見せてよ」

　弟はもともと発音と聴ちよう音おんの機能を備えていたが、それに加えて視覚装置を接続してある。

　男の姿を見せると、弟は「ああ……」と声をもらした。「どうするの？」

「先手を打つ」

　姉は弟を胸きよう甲こうの奥にしまい、両手で二振ふりの刀を抜ぬいた。異形の男に忍しのびより、背後から飛びかかろうとした瞬しゆん間かん、何か熱風のようなものが押しよせてきた。彼女はそれでも男に迫せまろうとしたが、吹ふき飛ばされた。

「──なっ……！」

　男は振り向きざまに剣を抜いて、地面に叩たたきつけた。彼女にあたってはいない。かすってもいない。それなのに、彼女は紙かみ屑くずみたいに飛ばされて地面に転がった。

「……姉さん？」

「黙だまっていろ」

　彼女は起きあがろうとした。できなかった。男が近づいてくる。茫ぼう々ぼうとして渦うず巻まいている蛇へびの群れのごとき髪の毛の合間から、黄玉トパーズの瞳ひとみがのぞいた。

「何だ。変なやつだな」

　乾かわいて、ひび割れそうな声だった。決して大声ではないのに、彼女は気け圧おされていた。その事実が彼女を激げつ昂こうさせた。

　彼女は飛び起きて男に襲おそいかかろうとした。

　叶かなわなかった。

　衝しよう撃げき、それも全面的な衝撃だった。

　気がつくと、彼女は地べたに寝ねていた。

　男は肩かたに剣を担かついで彼女を見下ろした。「本当に変だな。どうなってるんだ、その身体」

　彼女は声を出すこともできなかった。機能的に不可能だった。

　男は唇くちびるの片かた端はしをほんの少しだけゆがめた。「弱いくせにかかってくるな。邪じゃ魔まだ」

　彼女は彼女自身に改良と強化を重ねて、人間など足あし許もとにも及およばない力を我がものとしていた。こんなふうにあしらわれていいはずがない。屈くつ辱じょくだった。

　男は去った。

　彼女は壊こわれた身体を引きずることもできず這はって隠かくれ家がに戻もどり、修理と改造に精を出した。

「……姉さん。ぼくはたぶん、あの男を見たことがあるよ」

「いつだ。どこで」

「メルアドラ。あれは皆みな殺ごろしの騎き士しだ」

「じゃあ、あの男が無限のダイアデルタを討ったという、破は壊かいの主か」

　元どおり、いや、それ以上に動けるようになった彼女は、隠れ家の近くで男を見つけた。

　男は高台の上に寝ね転ころんでいた。

「……何のつもりだ」

「姉さん、放ほうっておいたら？　寝ているだけみたいだよ」

「そんなわけにいくか。ここはあたしたちの領域テリトリーだ」

　彼女は破壊の主と呼ばれ、大いに恐おそれられている男にふたたび挑いどみ、やはり一いつ蹴しゆうされた。

「……姉さん、あれは天災だと思ったほうがいいよ。過ぎ去るのを待ったほうが」

「だが、危険だ。あの男、壊れたあたしをじろじろ眺ながめていた。何か知っているんだ」

「どういうこと？」

「同類かもしれない。ここを発見されたら、奪うばわれかねないぞ」

「そんなことを言って、悔くやしいだけじゃないの」

　彼女はそれから三度、高台で男に挑みかかり、そのたびに退けられた。

　男は彼女の破は片へんを拾って匂においを嗅かいだ。それは物でしかないのだが、彼女は猛もう烈れつな羞しゆう恥ちを感じた。男は呟つぶやいた。「なんでこんなものがあるんだ」

「……仲間ってことかな、姉さん？」

「仲間だって？　くだらないことを」

「だけど、どうして彼は姉さんを殺さないんだろう。その気になればできるはずじゃない？」

「知ったことか」

　男がいなくならないかぎり、彼女は隠れ家に張りつくしかなかった。しかし自分の身体からだにばかり手をかけていたわけではない。姉は弟に少しでも多くの自由を与あたえるという義務を忘れていなかった。彼女は弟に脚あしをつけて移動できるようにした。

「いいよ。これはいい。最高だよ、姉さん」

　弟は無む邪じや気きに喜んで走りまわったが、姉は不安だった。

　男は高台から動こうとしない。

「けどさ、姉さん、彼は一日中寝ているけど、飲み食いもしてないんじゃない……？」

「何しろ神を殺したらしい。神殺しだ。ふつうじゃない」

「神って何なんだろうね。ぼくたちが知っている神とは違ちがうのかな」

「あたしにはわからない」

「いっそ、死んでみればよかった」

「馬ば鹿かを言うな」

「死んだら、本当にお終しまいなのかな」

「わからない」

「ぼくは死ぬのかな」

　案の定、弟は姉の目を盗ぬすんで行方ゆくえをくらますようになった。姉は血ち眼まなこになって隠れ家の周辺を捜そう索さくした。姉につかまえられても、弟は悪びれなかった。

「ぼくは知りたいんだよ、姉さん。今のぼくにはそれしかないんだ」

「あたしがいるだろう」

　そう言ってしまってから、彼女は深く後こう悔かいした。

　弟はけろりとしていた。

「だから、これはぼくらのためなんだよ」

「理解できない」

「姉さんはどうするつもりなのかな」

「どうとは」

「このままでいいと思っているの？」

「簡単なことのように言うな」

「簡単だなんて思っていないよ。でも、発展性がないじゃないか。このままじゃ何も変わらない。変えられない」

「変えられると思っているのか」

「変えられるかどうかもわからないじゃないか。姉さんは満足なの？」

「何がだ」

「そんな身体になって。なりたくてなったわけじゃないでしょう？」

「……過ぎたことだ」

「ごめん。そんな身体なんて、ひどい言い方だね。でも、ぼくはいやだよ」

「それは……すまなかった。あたしのせいだ。あたしがおまえを守れなかったから」

「だから、そうじゃないんだよ。姉さんのせいじゃない。だいたい、考えても仕方ないことじゃないか。それより、ぼくらは知るべきだよ。世界を知るんだ」

「どうやって」彼女は苛いらついていたのだ。八つ当たりに近かった。「──その姿で、世界を知るだと……？　人から話を聞くことさえできないぞ。あたしだってそうだ。あたしたちはまるで化物じゃないか」

「ぼくは、あきらめないよ」

　弟は以前より頻ひん繁ぱんに、そして長い間、姿を消すようになった。

　高台にあの男がいる。姉は隠かくれ家がから離はなれられない。弟の帰りを待つしかない。

　戻もどってくると、弟は激げき怒どする姉にかまわず、世界の変化について語った。メルアドラ滅めつ亡ぼう後の世界は魔ま術じゅ

つに席せつ巻けんされつつあった。無限のダイアデルタを喚よびだした超越者オーバリストエンドリルは呼び水だった。原始の魔術は精せい霊れい魔術と召しよう喚かん魔術に大別され、精霊魔術は実証主義的な力学魔術と要素魔術に枝分かれした。

「時の流れは急だ。魔術の時代だよ、姉さん」

　姉は興味を持たなかった。「それで、魔術とやらはあたしたちを救ってくれるのか」

「それはどうだろうね。でも、可能性を広げてくれるかもしれない」

「おまえは何を企たくらんでいる」

「ぼくには姉さんを抱だきしめる腕うですらないんだよ」

「そんなものがなくても、あたしはおまえのそばにいるだろう」

「わからないかな。どうしてわかってくれないのかな」

　弟は最後の一言を決して口にしなかった。それを言ってしまったらお終いなのだ。すべてがばらばらに砕くだけ散ってしまう。

　姉は何度か高台の男に挑ちよう戦せんして無残に敗北した。彼女が自らを修理している間、弟は自分を改造した。

　弟はすでに球体ではなかった。脚あしの数が増え、手のようなものを備えていた。大型化した。歩く。走る。跳はねることも、物を持ち運ぶこともできた。

「おまえはここで何をやっているんだ」姉は高台の男に遠くから尋たずねた。

「何も」男は彼女を見ようとしなかった。「何もしてない」

「なぜここにいる」

「飽あきた」

「何に飽いたというんだ」

「殺し飽きた」

「どれだけ殺した」

「数えきれん」

「なぜ殺した」

「敵がいたからだ」

「あたしもそうだ」

彼女は男に叩たたきのめされた。男は彼女を見下ろして表情を変えずに言った。「俺がここにいると都合が悪いらしいな。出てってやる」

破は壊かいの主は去った。

弟は人外の化物として物好きの魔導王を名乗る魔術使いの大王に取り入り、遺物や技術を提供しはじめた。

そのうちの一つであるギアロゴスはのちに機械化王国と呼ばれるようになり、〝機関王エンジンタイクン〟マハリク・ゴンドラゴナは壮そう大だいな機械化軍の武力を背景にして、大陸南東部に強固な支配権を確立する。〝無敵インビンシブル軍団アーミー〟を率いて多くの魔道具を残した魔導王〝黄金の指〟ユピクラトムも、弟から遺物の提供を受けた王国から出た。数多あまたの人造生物を生みだした〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーもそうだ。

遺物と魔術は融ゆう合ごうした。

そのための下準備を始めていた弟に、姉はもうかかわろうとしなかった。放ほうっておいた。

「これは姉さんのためでもあるんだよ」

「おまえのおかしな企くわだてにあたしを巻きこむな」

「ぼくは姉さんを元に戻してあげられるかもしれない」

「余計なお世話だ」

「ぼくだってこんな姿じゃなくて──それに、変えられるかもしれないでしょう？」

「何を変えられるというんだ」

「すべてだよ。何もかもさ。世界はゆがめられたんだ。何か方法があるかもしれない」

「寝ね言ごとは寝て言え」

「ぼくたちのためなんだ」

「またそれか」

「なんでわかろうとしてくれないんだよ。ぼくはこんなに姉さんを愛しているのに！」

　彼が胸の奥底に秘ひめて、今まで口に出さなかった最後の一言だった。

　彼女は泣きたくなったが、すでにその機能がないようだった。
「出ていけ」

「いやだ。姉さん、ぼくは──」

「出ていけと言っている。出ていかないのなら、殺してやる」

「殺せやしないよ。ぼくを壊こわしても無む駄だなんだよ、姉さん」

　そのころには、彼は人を模した姿になっていた。明らかに人ではないが、無骨な人の模型のような何物かだった。

「姉さん、これは本体じゃないんだ。本体は別の場所にいる」

　知らぬ間に彼がそんな存在に成り果てていたことよりも、言ってはいけない一言を発したことよりも、自衛策としか思われない手立てを講じていたことが、彼女を打ちのめした。だが彼にそのつもりはなかった。彼女に成果を見せびらかして驚おどろかせたい。彼にしてみれば、その程度の気持ちでしかなかったのだ。

「ジュジ。あたしだって、おまえを愛していた」

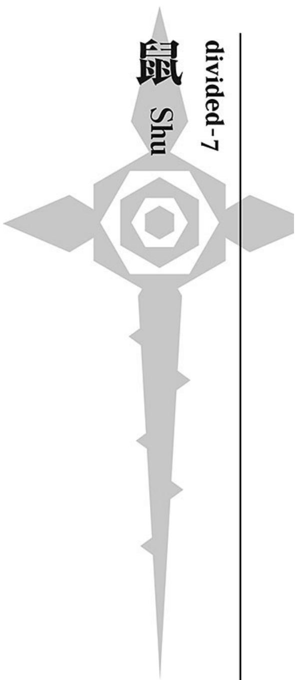
　彼女は隠れ家をあとにした。

　取り残された彼は、なぜ自分が置き去りにされたのか、その理由

を理解してはいた。これが訣けつ別べつになるのではないかという予感もあった。ただ、腑ふに落ちなかったし、彼女はそのうち戻もどってくるのではないかとも思っていた。

　そう思いたかったのだ。

「りりぃ、どうして……」



divided-7

鼠 Shu

　雨だ。

　この闇やみ夜よをどこまで昇のぼってゆけば雨は途と切ぎれるのだろう。雨の始まる場所はどこなのか。それとも、どこまで行っても雨は降りしきっているのか。

　雲が雨を降らせると聞いたことがある。

　己おのれが何も知らぬことに彼は気づいた。

　雨。

　夜に降る雨を蛇じやの目め傘がさが受けとめている。降りはさして強くないが、雨足はひどく遅おそい。

　この雨は昨晩から降りつづき、やむことを忘れているかのようだ。おかげで今こ宵よいの闇市は閑かん散さんとしている。もっとも混雑する時間帯はすでに過ぎているとはいえ、それにしても閑かん古こ鳥どりの鳴き声が雨音に負けず劣おとらずかしましい。

　雨が降ろうと槍やりが降ろうと無関係だ。彼は暇ひまがあれば闇市を歩きまわる。自分の足で。結局、他ひ人と任まかせにはできない。性しよう分ぶんなのだろう。飛燕フエイヤンのほうが遥はるかにいい頭目だ。器うつわではないのかもしれない。自覚しているから、まだどうにかやれている。

　自分自身に何が足りないのか。足りないことを知っている彼にはよくわかっていた。

　ちょうど隣となりに飛燕がいる。彼の不足を補うために、天が遣つかわしたのではないかとさえ思える男が。天などというものがあるとするならば。

　あれはあれで、危なっかしいところもある男だから、独りで駆かければつまずくこともあるだろう。役割分担だ。

　闇市の繁はん栄えいを見れば、それなりにうまくいっているらしい。

　まるで他人事だ。

　古く濁にごった血は抜ぬいた。新しい血を入れて流れをよくす

る。澱よどみは除く。

闇市は生まれ変わった。半ば彼の手しゆ腕わんによるといっても過言ではあるまい。

それにもかかわらず、色眼鏡サングラス越ごしに彼が見る闇市はどこまでも他人の街だ。

彼はときに夢想する。

すべてを捨て去る。王おう龍りゆう。頭目の座。龍州連合。闇市。ありとあらゆる過去。何もかも捨てる。この街を離はなれる。

できるだろう、と彼は思う。その気になれば、躊ちゆう躇ちよすることなく、俺にはできるだろう。

惜おしくなどない。人が羨うらやむ成功を手にしても、彼は満たされない。おそらく満たされることはないのだろう。どうせ満たされぬのならば、捨て去る理由もない。ただそれだけだ。

彼は足を止めた。

龍州料理店と各国料理屋台館の間の路地が気になった。

何かが見えたわけではない。勘かんのようなものだ。額の裏側に痒かゆみのような感覚がある。彼は経験的にわかっていた。これは厄やつ介かい事ごとの暗号だ。

回かい避ひするか。先手を打って潰つぶしておくか。

状じよう況きよう次し第だいだが、不意に真しん紅くの髪かみと橙だいだいの瞳ひとみがちらついて、逃にげ場を失った。あれこそ厄介事の最たるものだ。

彼は路地に歩みよった。

さすがに暗い。

色眼鏡サングラスを外して目を凝こらした。

シューは自分がなぜシューと呼ばれるようになったのか知らない

が、とにかくシューと呼ばれている。

　気がつくとシューは、街の裏手のほうとか隅すみっこのほうで、こそこそしながら食べられそうなものを漁あさっていた。シューが覚えている一番昔のことは、たぶんそれだ。

　腹がへると食べられそうなものを、寒いと着られそうなものを探した。

　眠ねむたくなったら、できれば屋根があって誰だれにも蹴けられたり殴なぐられたりしない場所があればいいのにと思ってうろつきまわったが、なかなかいい場所にはめぐりあえなかった。

　シューみたいなやつはたくさんいるけれど、その中にも階級みたいなものがあって、シューは最下級だった。

　シューは身体からだが小さくて、喧けん嘩かをしても弱いので、しょうがない。

　そもそもシューには、他ほかの連中と争うような気き概がいがないのだ。

　痛い思いをするのはいやだし、そこまでしていいものを食いたいとか上等な着るものが欲しいとか、そんなふうには思わない。安全な寝ね場所だけは、あればあったほうがいいけれど、なければそのへんで丸くなって朝を待っていればそのうち眠ってしまうし、朝はくる。

　冬だけは本当につらい。

　冬は嫌きらいだ。

　シューはもうだいぶ食っていなくて、ふらふらしていた。それでついつい、闇市と呼ばれる一帯に入りこんでしまった。

　ここはやばい。怖こわいやつらがいて、見つかるとすぐに追いだされる。

　シューだってわかっていた。でも、本格的に空腹だった。シューが知っている場所にはだいたい先客がいて、運がよくないと食い物にありつくことはできないから、こうでもしないと死んでしまう。

あんなにいつも厳重に守られているくらいだから、きっと食べられるものがさぞかしたくさんあるのだろう。

シューはふらふらびくびくしながら建物と建物の間を歩いてごみ箱探しをして、ごみ箱らしい箱は見つかったのだけれど、どれも開かなかった。鍵かぎがかかっていたのだ。めったにないことなのに、ここではあたりまえみたいだった。

雨降りのせいか、怖い人に声をかけられたり飛び蹴りをかまされたりすることはなかったが、食い物が手に入らないのでは何の意味もない。なんだか咳せきが出てしょうがないし、鼻水がずるずるだし、足あし許もとはよろよろだし、頭もぼわぼわするしで、もうやっていられない。

何日か前から、身体の具合がおかしかった。

シューはとうとう歩くのもつらくなった。

どうにもならなくて、開かないごみ箱の上に座った。

やがてそうしているのもつらくなって、ごみ箱からずり落ちて、地べたに座って、ごみ箱にしがみついた。

死ぬのかな、とシューはぼんやり思った。

死ぬって、どういうのだろ。

わからないのに、死ぬのかな、と思っている。

そんな自分自身が不思議だった。

死にたくないな、とも思った。

なんで死にたくないんだろ。

「おい、餓が鬼き」

声をかけられるなんて、予想していなかった。

死にたくないけど、このまま死ぬんだろうなと思っていたので、意外だった。

シューは顔を上げたが、暗いし、そうでなくとも目が霞かすんで

いて、よく見えなかった。

「ここは闇市だ。お前のいる場所じゃない。食い物もない。出ていけ」

　かなり背の高い男だ。傘かさを差している。低い声だ。それだけはどうにかわかった。

　怖い人だ。

　シューは立ちあがろうとした。身体に力が入らない。てんでだめだ。でも、なんとかしないと、蹴られる。

　シューは這はって路地から出ようとした。そうしようとしているのに、腕うでが自分のものじゃないみたいだ。雨に濡ぬれた地べたに顎あごを打った。

　もういいや。

　どうせ死ぬんだ。

　殴られて、蹴られて、それで死んだって同じだ。

　頭上から雨と一いつ緒しょに太い声が降ってきた。「餓鬼が」

　シューは眠ってしまったのだろうか。

　よくわからないが、気がついたらどこかの部屋の中にいた。

　やわらかくて、あたたかい。何だろう、これ。布か。ずいぶん厚い。部屋はだいたい暗かったが、隅のほうに明かりがあった。

　シューの頭はまだぼわぼわして、変なものが詰つまっているように身体が重かったので、目をつぶった。

　寝て、起きた。

　シューは鼻をひくつかせた。いい匂においがする。

　暗い。部屋だ。隅すみのほうに明かりがある。いい匂いだ。

　シューは革かわ張ばりの長なが椅い子すの上で、厚手の布にくるまって眠ねむっていたらしい。

誰だれかいる。明かりの近くだ。男が立っている。

やたらと背の高い男だ。髪かみが逆立っている。黒い眼鏡めがねをかけているので、顔はよくわからない。あの男か。

シューに、出ていけ、と言った。

それなのに、シューの近くにいる。同じ部屋の中に。

こっちを見ている。「腹がへっているなら、食え」

シューは長椅子の下を見た。生なま唾つばをのみこもうとしたが、口の中はからからだった。

皿だ。床ゆかに置いてある。三つも。その上に食べ物が並んでいる。どれも湯気が立っていた。

シューはおそるおそる男の様子をうかがった。

男は顎をしゃくって皿を示した。「食え、浮浪児フールンアー」

ふるんあ、とは何なのか。わからないが、シューのことだろう。もともとシューだって、誰かがつけた名前だ。何だっていい。

シューは長椅子から下りて、何かの肉と野菜か何かを混ぜたらしい食い物を手でつかんだ。離はなした。熱かったのだ。

「箸はしを使え。……無理か」

男の声なんて耳に入らなかった。

シューはかまわず食った。あったかくて、目の玉が飛びだすくらいうまかった。ぜんぶ食ってやる。食わずにはいられない。シューは夢中で貪むさぼり食った。皿は味がしなくなるまで舐なめた。腹はら一いつ杯ぱいになって苦しかった。

男が床に透とう明めいのコップを置いた。中身は水らしい。

シューは一気に飲んだ。満足だ。

もう死んでもいい、と思った。

「浮浪児フールンアー」頭上から声が落ちてきた。

振ふり仰あおぐと、男に見下ろされていた。

「もう動けるな」

シューは身を縮めた。

この男、おっかない。でも、食わせてくれた。シューの頭は混乱していた。何かがこみあげてきて、我が慢まんできなかった。それでも口を閉じようとした。

おかげで、ぴゅう、と飛んだ。

食い物だ。

吐はいてしまった。男のズボンにもかかった。まだ出る。

シューはうずくまってえずいた。苦しい。急いで食べすぎたのだ。もったいない。

というか、殺される。

吐けるものはぜんぶすっかり吐いてしまい、震ふるえていると、いったんどこかへ行った男が戻もどってきた。

男はしゃがんで何かしはじめた。見れば、布でシューの吐と瀉しゃ物ぶつをぬぐい、その布を容器にたたえた水ですすぐことを繰くり返している。

男はちらりとシューに顔を向けた。「臭くさいな。風ふ呂ろに入れ。いいな」

何を言われているのか、シューにはさっぱりだった。とにかく、うなずいた。

そうしないと、殺されると思ったのだ。

舌打ちをしようとして、こらえた。

この扉とびらの前までたどりつくには、地上から地下に入ってまた地上に出て地下へ下りる複雑な経路をとらなければならない。いわゆる隠かくれ家がというやつで、そのうちの一つだ。この場所を

知る者は少ない。彼と飛燕フエイヤンと、一ひと握にぎりの幹部だけだ。

彼は鍵かぎを突つっこんで回し、扉を開けた。その先は狭せまい小部屋だ。さらに扉を開けると、暗い部屋の隅でうごめく者の気配がした。

彼は台所の照明をつけた。「何をしている」

浮浪児フールンアーは毛布にくるまってソファーと壁かべの間に挟はさまっていた。こわごわと毛布から顔を出してこっちを見て、すぐさま引っこめる、その仕し種ぐさが彼の神経を逆さか撫なでした。

「なぜ明かりをつけない。教えたはずだ」

浮浪児フールンアーは答えないどころか、身じろぎ一つしない。いや、毛布が小刻みに震えている。彼に怯おびえているのだ。不知恩ブージーエン、と呟つぶやきかけて、今度こそ彼は舌打ちをした。

恩知らずだと。恩を売ったつもりなのか。

「──畜生チユーシエン」

彼は買い入れてきた食材を冷蔵庫にしまい、料理の準備を始めた。

他人にはもちろん言わないし、隠れ家でしかやらないので知る者は少なかろうが、もはや自分では認めている。うまい飯を作る。食くらう。彼にとっては、それが唯ゆい一いつの気晴らしだ。龍州風の料理がやはり多いが、一通り何でもやる。最近凝こっているのは、中部ミツド諸国域ランズの南方にあるナハトラ国の香こう辛しん料りようをたっぷり使った青辛飯アイジヤイナ、赤辛麵マウジヤイハ、黄辛汁シンジヤイチだ。調理法は単純だが、辛からみが強すぎると風味が飛ぶので、香辛料の調合、分量の調節にこつがいる。ひとつまみ違ちがうだけでがらりと印象が変わって、おもしろい。

彼は手早く材料を刻んで鍋なべで煮にはじめた。スープをとる間は、鍋から離れてはならない。集中のあまり時間を忘れる。火を消してから、寝ねかせておいた麵めんのタネを細く切り、具材の大きさをそろえて熱油で炒いため、スープを投入したら、いよいよ味つ

けだ。彼もまだ完全な味つけを見つけていないので、毎回香辛料の入れ方を変えている。前回はシナモンが少々多すぎた。今回はやや抑おさえて、そのぶんシラントロシードを増やしてみよう。

　味見をしていると、浮浪児フールンアーが毛布ごとにじりよってきた。

　彼はかまわず味の調整をつづけた。

　味見しすぎるのもよくない。潮時というものがある。これでいい。

　一煮立ちさせながら、麵を茹でるための深鍋を用意した。麵が茹であがるころには、浮浪児フールンアーは毛布から顔を出し、彼の脚あしにふれそうな場所まで進出していた。

　乱暴に湯切りをすると、浮浪児フールンアーが飛びさがった。湯が顔にかかったようだ。

　彼は丼どんぶり鉢ばちに麵を入れた。赤辛汁マウジヤイチをそそげば、赤辛麵マウジヤイハのできあがりだ。

　箸はしと丼鉢を持ってソファーへと向かい、まずは汁しるを一口飲んだ。広がりのある甘みと旨うま味みが塩味で引き立てられていて、辛みは最初、後ろに控ひかえている。それがだんだんと前面に出てきて、強いが強きよう烈れつではない刺し激げきが二口目を渇かつ望ぼうさせる。狙ねらいどおりだ。悪くない。つづいて、麵だ。やはり細めのほうがいい。腰こしもある。汁もよく絡からんでいる。まずは合格だろう。

　箸を動かしていたら、物音がした。

　浮浪児フールンアーが背せ伸のびをして、棚たなの中に手を突っこんでいる。丼鉢でも探しているのだろう。彼の視線を感じたのか。浮浪児フールンアーが振り向いて顔を引きつらせた。

　彼は無視して麵をすすり、軽くうなずいた。「好味ハオウエイ」

　どうやらシューは栖すみかを手に入れたらしい。

　ここにいれば、食べ物にありつくこともできる。ただ、不自由だ。食べ物が入っているつめたい箱を勝手に開けて中のものをこっそり食べると、絶対にばれる。出ていけ、とあの背の高い男に言われる。

　出ていっても、ここよりましな場所なんかどこにもないことを、シューは知っている。だから、毛布にくるまって、部屋の隅すみで身を縮める。怖こわいけれど、かなり怖くて仕方ないけれど、そうしている。

　男はシューをつまみだそうとはしない。放ほうっておいてくれる。でも、怒おこると、本当に怖い。だから、男が作ったものしか、シューは食べない。いろいろ試ためしてみたが、それだけは大だい丈じよう夫ぶらしい。でも、汚きたなくすると、やっぱり怒られる。男のやり方を真ま似ねして、食べる。それなら、怒られない。

　シューも時計の見方は知っているのだ。

　男はたぶん、一日に一回か二回、ここにやってくる。それ以外、シューは一人きりだ。だいたい、寝ている。ここでは安心して眠ねむっていられる。今までなかったことだ。暇ひまだけれど、横になっていれば、そのうち眠くなる。

　シューは夢をたくさん、たくさん見る。

　おっかない夢も見る。殴なぐられたり、蹴けられたり。血まみれになって、もういやだ、死にたい、と思ったり。

　あったかい夢も見る。誰だれかとくっついていて、それなのに、その誰かは、いやがることも、シューを突き飛ばすこともないのだ。

　考えることもある。

　食べ物のこととか、あの男のこととか。

　妙みような男だ。

　怖いのに、食べ物をくれる。ここはきっと、あの男の縄なわ張ばりだ。それでいて、出ていけ、とたまに言うわりには、シューを追いださない。それに、あの男は変なことをしなかった。

　風ふ呂ろに入れ、と言われて、この部屋の隣となりの隣にある狭せまい部屋に押しこまれ、雨みたいに降る熱い水で全身を洗う羽目になった。

　なんだか恐おそろしかったけれど、殺されると思って、一生懸けん命めい洗った。

　途と中ちゆうで部屋の扉とびらが開いた。男が開けたのだ。

　シューはびっくりして、部屋の隅で縮まった。

　男の黒い眼鏡めがねが曇くもった。

　男は指で眼鏡をぬぐい、唇くちびるの端はしを少しだけゆがめた。「……女か」

　男と女がいることくらい、シューだってわかっている。女は弱くて、いじめられることも知っている。

　シューも何度か、女だとばれた途と端たん、男に変なことをされた。怖かったし、痛かったし、気持ち悪かった。恥はずかしい、というような気持ちもあった。

　どんな身なりでも、女は男にひどいことをされるのだ。

　それで、シューは男のふりをしている。というか、男か女か、見ただけではわからないようにしていた。思いきり汚くしていれば、まあ、だいたい大丈夫だ。シューは小さいし痩やせているから、何か着るものさえ着ていれば、女だとはわからない。



　また何か痛いことをされるのだろうか。でも、逃にげ場がない。終わるまで我が慢まんしているしかないだろう。

　シューはそう思い、半分以上、覚かく悟ごを決めていたのだけれど、男は扉を閉めた。

扉とびら越ごしに男の声がした。「ちゃんと洗え。石せつ鹼けんがある。使え。いいな」

「……せっけん？」

咳つぶやくと、また扉が開いた。

男は熱い水に濡ぬれるのもかまわず、壁かべのあたりから白いものをとって、シューの顔の前に突つきだした。「これだ。こすれば、泡あわが出る。泡で汚よごれを落とせ。わかったか」

よく意味がわからなかった。怖いからうなずいて、石鹼を受けとった。男に言われたとおりにしたら、泡だらけになって、きれいで、おもしろかった。

あの男は妙だし、怖いけれど、じつはそんなに、怖くないのかもしれない。

シューの匂においがしみついた布にくるまって、いつものように長なが椅い子すの上でぬくぬくしていたら、扉が開いた。

あの男かと思ったら、違ちがった。

もっと背の低い男だった。

シューは動けなかった。

あの男以外の人間がこの部屋に入ってくるなんて、思ってもみなかったのだ。

「あン？」男は首を傾かしげた。「なんだテメー。ンでオレらのアジトにいやがンだ……？」

面めん倒どうなことになった。

いつかこうなることは、だが、目に見えていた。それなのに、彼は何の手も打たなかった。自じ業ごう自じ得とくというわけだ。

それがどうしたという気持ちも、彼の中にはある。

どうとでもなれ。

少なくとも、戸と惑まどってはいない。むしろ、飛燕のほうが困こん惑わくしているようだ。

「……ンで、どォーするつもりよ、コレ」背もたれに覆おおいかぶさるようにして椅い子すに腰こしかけている飛燕が、顔だけ振ふり向かせた。「飼うンかよ。このまま」

「さあな」彼は麦ビ酒アの瓶びんに口をつけて少しだけ首を傾かたむけた。「邪じゃ魔まなら捨てる」

「イヤ、テメーなんだろォーが。コレ拾ったの」

「拾った、か」彼はうなずいた。「そうだな。まさしくそのとおりだ」

「犬いぬ猫ねこじゃあンめェーしよォ。つかジン、テメーにそォーんな趣しゅ味みがあったとはなァ」

「そんな趣味とは」

「趣味っつーかよォ。拾って飼うのとか、しそォーにねェーし。なかったべよ。今まで」

「まあな」彼はソファーの上で毛布を被かぶって震ふるえている浮浪児フールンアーを一いち瞥べつした。「偶ぐう然ぜんだ」

飛燕は唇をひん曲げて肩かたをすくめた。「オレァ、信じねェーけどな」

「どういう意味だ」

「偶然とかで人ォー拾うかァ、フツー？　てゆゥーかよォ、何？　死にかけてたみたいな？　だったワケ？　そンでも放ほっといたっていィーし。よくあるコトじゃん。エルデンじゃなくたってよォ。龍州でも、アレだろ。裏街リージエあたりじゃァーよォ」

その一言が不意打ちだったとでもいうのか。

裏街リージエ。

彼が塵ごみとして生まれ、塵として育った場所。

あの光景が一いつ瞬しゆん、脳のう裏りをよぎり、それがために浮浪児フールンアーを拾ってやったというのか。

肯こう定ていも否定もできない。いずれにしても、飛燕の言うとおりだ。彼は見捨てることもできた。なぜかそうしなかった。気まぐれではあるかもしれないが、偶然ではないのだろう。

彼は麦ビ酒アを飲み干した。「よくもないな」

自分でも意味のわからぬ言葉を吐はいているようでは、本当によくもない。

「ふへェー」飛燕は妙な声を出して天てん井じようを仰あおぎ、それからもう一度、彼を見た。「コレの名前とかは？　なんつゥーの？」

彼が肩をすくめてみせると、飛燕は浮浪児フールンアーに向きなおって軽く床ゆかを蹴けった。「やい。毛布魔人になってねェーで顔くらい見せろよ。口はきけンのか。テメー、名前なんつゥーンだ」

浮浪児フールンアーはまず床を蹴る音に反応して、それからおそるおそるといったふうに毛布から顔を半分だけ出した。「……シュー」

「鼠シユー……？」飛燕が訊きき返すと、浮浪児フールンアーは大おお袈げ裟さに首を縦に振った。

飛燕は呆あきれ顔で振り返って浮浪児フールンアーを指さしてみせた。「鼠だってよ、コイツ」

「龍州人じゃなさそうだ。鼠とは関係ないだろう」

「バッカ、龍州人だったら自分で鼠なんて名乗ンねーよ」

そうともかぎるまいと言ったところで、飛燕には理解しかねるだろう。

飛燕フエイヤンはその名のとおり飛ぶ燕つばめだ。

有能な恐おそるべき拷ごう問もん係としてのしあがった男につけられた名が荊王ジンワンで、それは魂たましいに刻みつけられた消

えない印でもある。

　彼は、糞フエン、便所虫ビヤンスオチヨン、鳥骨ニアオグ、という名の男たちを知っていた。すべて自じ称しようだ。連中は皆みんな、死んだ。裏街リージエの塵ごみで、塵からろくでなしに成りあがることもできず、塵のままくたばった。

　名は体を表す、だ。ろくでもない名は、ろくでもない死を約束する。

　彼は浮浪児フールンアーを見た。「自分でつけた名か」

　浮浪児フールンアーは慌あわてたように首を左右に振った。

　彼は色眼鏡サングラスの位置を直して、那好了ナオハオレー、と胸の裡うちで呟つぶやいた。

　そいつはよかった、か。

　このごろ裏街リージエの夢を見る。

　慰なぐさめに彼を愛して病に敗れ老女の姿で死んだ女の夢は見ない。

　鮮せん烈れつな橙だいだいの瞳ひとみはほとんど悪夢だ。

「つか……」飛燕は浮浪児フールンアーの顔をじろじろ眺ながめている。「テメー、女かよ」

　浮浪児フールンアーは顔を真っ赤にして毛布にもぐった。

　飛燕は唸うなった。「……ン~。オレァいィーケドなァ。ベッつにィー。ジンがどォーしてもっつゥーならよォー」

「どうしてもとは言っていない。どうしたいとも言っていないはずだ」

「ンだったらどォーすンだよ。さっきもゆったケドよォ。犬とか猫じゃァーねェーし、飼うったって大変だぜ？」

「犬猫じゃない。飼うという言い方はよせ」

「ンだよ。なに怒おこってンだよ」

「怒ってなんかいない」

「てェーかジン、テメー、ロリコンになったンかよ。女っつったってガキだぞ」

　思わずユリカ・白雪の名を出しそうになったが、彼はこらえた。それはまずい。飛燕は本気だ。心底からあの女に惚ほれ抜ぬいている。物の弾はずみという言い訳は通用しないだろう。決けつ裂れつする羽目になりかねない。

　彼は右手を軽くあげてみせた。「いい。捨ててくる」

「投げやりになンなよ。つゥーか、犬猫じゃねェーって、テメーがゆったんだろォーが」

「犬猫じゃないから厄やつ介かいだ」

「そらそォーだケドよォ」

「もともと成り行きだ。飯も食わせた。すぐにはくたばらないだろう」

「だからほっぽってもいィーってか。あんまりっちゃァーあんまりじゃねェーの？」

「ご立派なことを言うようになったな」

「体てい裁さいがよくねェーってコト。テメー、わァーってンのか？　龍州連合の頭目だぞ？　オレの相棒なんだぞ？　ガキ拾ってポイッて捨てたとか、もしンなコト知れ渡わたったらどォーよ？　オレらァハヤ九ク三ザじゃねェー。昔のギャング時代ともちゃうんだからよォ」

「……お前に説教されるとは」

「素す直なおになれよ、ジン。テメーが裏街リージエで育ったことくらい知ってンだよ。裏街リージエがどォーゆゥートコかだって、知らねェーワケじゃねェー。余よ裕ゆうがなきゃしょォーがねェーケドな。今のオレらには力があンだからよォ。できるコトはするっきゃだろ」

　空を飛ぶように駆かけてきたお前に何がわかる。わかるはずがな

い。

　あるいは、そう思いたいだけなのか。

　そうかもしれない。

「何ができるというんだ」

　飛燕は腕うで組ぐみをして上うわ唇くちびるを鼻にくっつけた。
「ソレだよなァ」

「力があろうと、餓が鬼きの扱あつかいなんぞ、俺たちには」

「よりにもよって女だしなァ……」飛燕は両手を打ちあわせた。
「──オッ。いィーコト思いついちまったぞ、オレ。力とかある意味、関係ねェーケドよォ。コイツにとっちゃァーコレがベストかもな……？」

　久しぶりに外へ出ると雨降りで、雨は寒くて嫌きらいだし、雨の日に死にかけたのだけれど、雨の日に拾われたわけだし、それに、あったかい服を着て、ジンが傘かさを差してくれたので、雨があたることはなかったから、複雑な気持ちだった。

　あまり背の高くないフェイヤンも一いつ緒しよで、外は夜で、暗くて、しとしと雨が降っていて、なんだかシューは胸が苦しくなった。

　ン、どうしたんだよ、とフェイヤンに訊かれたけれど、答えられなかった。

　しばらく歩くと、三人を別の人たちが待ちかまえていた。男が二人と、それから、背の低い女だった。みんな、傘を差して、頭ず巾きん付きの服を着ていたし、暗いので、顔はよくわからなかった。フェイヤンと背の低い女は知りあいのようだった。

「よォー。わざァーざすまねェーな、ユリィ」

「いいわよ、べちゅに。でも、やっぱりマリアに頼たのんでもらったほうが、話は簡単だったかもしれないわね」

「ソコはほら、いろいろあってさァー」フェイヤンはジンをちらっと見た。「悪かったよ、手間とらしちまって。マジで」

「もういいってば」背の低い女は少し怒っているようだった。

「まァーなァ」フェイヤンは笑った。「オレとユリィの仲だしなァ」

「しょういうこと、言わないの！」

「へいへい」

「ほんだら、雨も降っとることやし、そろそろ行くか？」一人の男がそう言うと、もう一人の男が「はイ」と短く応じて、フェイヤンにユリィと呼ばれた背の低い女が近づいてきた。

　背が低いといっても、シューよりは大きいかもしれない。ユリィは金きん髪ぱつで、大人ではないけれど、すごくきれいな人だった。手を差しのべてきた。

「しゃあ、行きましょう」

　シューはジンの顔を見上げた。

　ジンは暗いのに黒い眼鏡をかけている。でも、眼鏡の向こうの目が、ちゃんとシューを見下ろしていた。

　ジンは眼鏡の位置を中指で直してから、シューの背中を押した。シューはとっさにジンの脚あしにしがみついた。なぜシューはそんなことをしたのだろう。わからない。

　ただ離はなれたくなかった。

　ジンはシューの肩かたをつかんだ。「行け。それがお前のためだ」

　よくわからない。誰だれのためとか、シューにはさっぱりだ。

　シューはジンの脚に両腕を回した。絶対に離れてたまるものか。

　シューは思いだしていた。

　ジンが作ってくれた食べ物はぜんぶおいしかった。

　ジンがいなくて一人きりだと、退たい屈くつだった。

　ジンがくると、嬉うれしかった。

　ジンがやったとおりに食べないと、出ていけ、とジンは言った。でも、ジンはシューを追いださなかった。

　こんなふうにされたことはなかった。

　一度もなかった。

　ずっとこうしていられると思っていた。

　なぜ離れないといけないのか。シューにはわからなかった。

　ジンの手がシューの首筋を強く撫なでた。

　シューは首をすくめた。くすぐったくて、胸がとても痛かった。

「お前は鼠ねずみじゃない」ジンは低い声で言った。「名をくれてやる。今日からお前は夕蝶シーデイエだ」

「……しー、でぃえ？」

「覚えろ。お前の名だ」

「しーでぃえ」

「そうだ。同じ街にいる。二度と会えないってわけじゃない」

「また、あえる？」

「お前が望めばな」

「のぞめば」

「ああ。行け」

　ジンの手に押されると、するりと腕うでがほどけてしまった。

　よろめきながら進むと、ユリィに抱だきしめられた。

「大だい丈じよう夫ぶよ。何も心配しなくていいから」

涙なみだが出てきて、ユリィにしがみついた。いっぺんにわかった。この人は平気だ。絶対に怖こわいことをしない。悪いことは起こらない。大丈夫だ。

ひとしきり泣いて振ふり向くと、ジンとフェイヤンの後ろ姿はすでに遠ざかり、雨の中に煙けむっていた。

「……しーでぃえ」と呟つぶやいてみた。

シューより、ずっといいと思った。

だって、ジンがつけてくれた名前だから。

第六区〝屑くず街がい〟は混こん沌とんだ。それだけに隙すき間まが多い。食いつめてエルデンに流れついた者が居つくとしたら、まず第六区だろう。

屑街には多種多様な社会が混在している。

出身地。前歴。職種。年ねん齢れい層。利害。さまざまな理由で人間は群れを作り、衝しよう突とつして、離ればなれになる。

闇やみ市いちの半ばが龍州街になっても、エルデン中の龍州人がそこに集つどうわけではない。屑街にも龍州人の社会はある。しかも分ぶん裂れつしていて、一部は龍州連合と繋つながり、一部は敵視している。

彼らが抗こう争そうの真ま似ね事ごとを繰くり返し、血が流れるたびに、龍州連合が介かい入にゆうするわけではない。たいていは放置だ。たまに首を突つっこんで、敵対組織に灸きゆうを据すえる。それだけだ。

彼らには彼らの存在意義がある。同郷人であっても、龍州連合では受けいれられない、受けいれる価値のない輩やからもいるのだ。目め障ざわりだ、皆みな殺ごろしにすればいい。そうもゆかない。何しろ、手間だ。生かしておいたところで脅きよう威いにはならないし、いつか何かで役に立つことだってあるかもしれない。

たまに整理する。今日がその日だった。

友好組織の構成員を殺害した敵対組織の跳はねっ返りを何人か始末して、頭目に誓せい約やく書しよを書かせて血印を押させ、それで手打ちだ。彼がわざわざ出張る必要もなかったが、たまたま身体からだがあいていた。それだけだ。

仕事が片づくと、彼は手下どもを遠ざけた。王おう龍りゅうの頭目は気き儘ままな独裁者では決してないが、その命令に従わない者がどうなるか。配下であれば皆みんな、知っている。

雨の夕べだった。

なぜよりにもよって、雨なのか。

彼は蛇じやの目め傘がさを打つ雨音を聞きながら一人歩きした。

これ以上、近づくことはできないと知っていた。

モリー・リップス・アサイラムは銀の軍団ザ・シルバリイが厳重に警備している。四代目総長が襲しゅう名めいしてから、彼らとはひそかに、断続的に交こう渉しようしているが、関係は改善されていなかった。

彼らが闇市に手を出さず、こちらが彼らの縄なわ張ばりに足を踏ふみ入れなければ、戦せん端たんを開くことはない。それが唯ゆい一いつといってもいいだろう暗あん黙もくに近い合意事じ項こうだ。とりわけアサイラムは彼らの逆げき鱗りんなので、何があろうとふれるわけにはゆかない。わかっている。

引き返そうとした。その寸前だった。

彼はほとんど慌あわてふためいて踵きびすを返し、建物の陰かげに身を隠かくした。傘を閉じて顔を出し、歯を食いしばった。

傘は差していない。フードを目ま深ぶかに被かぶっている。

それでも見み間ま違ちがえるものか。

見ていたかった。

せめて見えなくなるまでは。

彼は目をつぶって顔を引っこめた。

　鼓こ動どうは収まらない。すぐには。

　間もなく平静をとりもどすだろう。すべてが。

　この雨さえも、いつかはやむのだから。

「夕蝶シーデイエ」と彼は呟いた。

　愚おろかなことをした。死んだ女の名を与あたえて、何のつもりなのか。あの女は別の人生を夢見ながら死を望んだ。彼があの女に与えてやることができるものは終わりだけだった。まさか、あの女の夢を叶かなえてやったつもりなのか。

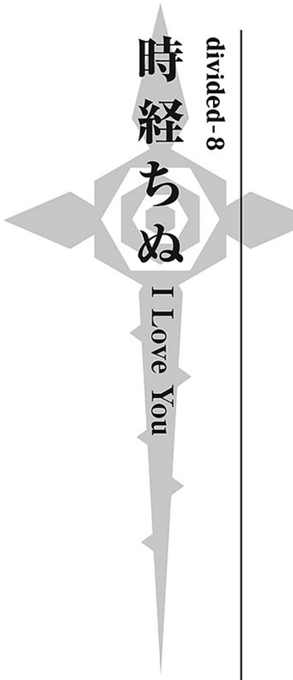
　夕に雨が降りしきる。

　蝶ちようは飛ばない。

　どんな夢も必ず潰ついえるのだろう。

　何もかも無む駄だだ。

　それでも俺は息をしている。



divided-8

時経ちぬ

I Love You

　周りの態度がどうもおかしい。それがきっかけだった。

「──クルチバ隊長？」

「はいっ……？」執しつ務む机の向こうで、アーニャ・クルチバは明らかに動どう揺ようしていた。「な、何でしょうか。報告書に不備が？　それとも……」

「いいえ、そうじゃなくて」琺瑠フオールは眉み間けんを人差し指で押さえた。

　皺しわが寄っている。というか、深く、深く、刻まれている。

　いつの間にか、しかめ面つらをしていたということだ。

　琺瑠は皺よ消えろと念じて人差し指を動かし、一つ息をついた。

　クルチバは上うわ目め遣づかい気味で、こちらの出方をうかがっているといった様子だ。

「なぜそんなにおどおどしているの？」

「おどおど？　いえ。そんな。していません。決して」

「そうかしら」琺瑠はクルチバの斜ななめ後ろに控ひかえている短たん髪ぱつ長身のカロリーナ・シェルベリ隊長補に視線を向けた。

　あの強気なシェルベリが目をそらした。何？

　何なの……？

「いいわ」琺瑠は報告書の束を執務机に置いた。「とくに問題はないようね。例の案件については後日会議します。日程はのちほど。下がって」

　二人は逃にげるように琺瑠副長の執務室から出ていった。

　自分のせいなのではないかと思いあたった。

　わたし、もしかして、苛いらついている……？

じつは、体調があまりよくない。月の物もかなり乱れている。周期も期間もばらばらだ。やけに長かったり、極きよく端たんに短かったりする。

自室が少し殺風景になった。この前の休みに、私物をだいぶ処分したからだ。

仕事はちゃんとこなしている。でも、振ふり返ってみれば、精力的に、とは言いがたいかもしれない。目の前の仕事を片づけることしか頭になく、思考に奥行きと広がりを欠いている。

疲つかれを感じることが多い。よく寝ね違ちがえる。身体からだのあちこちが痛んで、筋力の偏かたよりに気づく羽目になり、むきになって鍛きたえ、そこが改善されると別の場所がつらくなっている。

琺瑠は寝しん台だいで横になって、腹の上で両手を組みあわせた。「……年のせい？」

苦く笑しようがもれた。苦味成分の量が気になるところだ。

笑えない。

手で顔を覆おおった。「何、してるんだか……」

義。

すべては義のために。

わかっている。頭で理解しているだけではない。身体に染しみついている。魂たましいにまで。それだけじゃ不足だというの？

まるで言い聞かせているかのようだ。自分で自分を説得しようとしている。

明日は久々に休みだという夜、執務室を出て階段を下りていたら、十二番遊ゆう撃げき隊たいの隊長と行き会った。平服姿のシャルロット・リンデは豪ごう奢しやな金きん髪ぱつをさかんに揺ゆらして、なんだか不ふ機き嫌げんそうだった。

「どうかしたの、リンデ隊長」

「ええ。少し」リンデは肩かたをすくめた。「どうです。つきあいませんか、これから」

　リンデとは何度か飲んだことがあるので、お互たがいいける口だということは知っている。いったん自室で着き替がえてから二人で銀の砦とりでを出た。

　普ふ段だん着ぎなら一目で秩ちつ序じよの番人だとばれることはないかもしれないが、さすがにクァラナドには行けない。大食小路グラトン・アレイの遅おそくまでやっている小さな店をリンデが知っているというので、そこに連れて行ってもらうことにした。

「なっていないのですよ、本当に。今の若い男は」

　リンデはジョッキで麦ビ酒アをぐいぐい飲みながら、猛もう烈れつな勢いで愚ぐ痴ちを並べ立てた。

「とにかく堪こらえ性しようがない。どこが痛い、あそこが痛い、疲れた、やる気が出ない。口ばかり達者で、剣けんのほうはさっぱりです」

「それはね、リンデ、あなたに比べたら」

「男なら、私程度はやすやすと打ち倒たおしてほしいのですよ。いいですか、副長」

「ここで副長はよして」

「ああ、そうですね。琺瑠、私はね、団の一員としては女を捨てているつもりです。ですが、やはり女なのですよ。肉体的な差というものはどうしてもあるでしょう。突つきつめてゆけば突きつめてゆくほど、私は女から逃のがれられないのですよ。わかるでしょう」

「もちろん、それは」

「それなのに、ですよ！　──あ、麦ビ酒アを……いいえ、ブルハーデンをお願いします、そう、ストレートで」

「もう本気飲みに移行するわけね……」

「麦ビ酒アなんてものは水と同じでしょう。喉のどが渇かわいている間だけで充じゆう分ぶんです。そうだ。それで、話のつづきです

が」

「どうぞ。あ、わたしはギムレットを」

「おっと待ってください、琺瑠。それないでしょう？　いけませんよ。今のオーダーはなしです。ええ、ブルハーデンで。当然、ストレート。チェイサーもいただけますか」

「……リンデ」

「とにかく、男ですよ。だらしないのは。ひどいものです。見てください。我が団の現状。あきらかに女性隊士のほうが元気があります。私はね、琺瑠、歯がゆいのですよ。だって、そうでしょう。男は総じて怠たい惰だです。むろん、そうではない男もいますが」

「ワーノンとか？」

「ばっ──」酒を飲んでも赤くならないリンデの顔が真っ赤になった。「何を言っているんですか。なぜあの熊くま男おとこの名前がここで出てくるのです。意味がわからない。意味が」

　ラッド・ワーノン。六番突とつ撃げき隊たいの隊長だ。その性質は豪ごう気きで、一本気で、おおらかで、恐おそれを知らない。

　最近、リンデとワーノンがよく二人で稽けい古こをしている。

　そんな噂うわさが副長の耳に入っていた。

「あなた、ああいうのがいいのね。べつに意外でもないけど」

「よくないですよ。何がです」リンデはそっぽを向いて頬ほお杖づえをついた。「……まあ、頑がん丈じょうな男なので、いい的にはなりますよ。いくら打ちこんでも、びくともしませんから」

「たしかに、あなたの愛情表現につきあえる男は多くなさそう」

「わからない人ですね。私はただ、男たちは身体的な優位があるのに、なぜそれをもっと生かそうとしないのかということをですね」

「男だろうと女だろうと、人にはできることとできないことがあるわ。しようとしないことは、ようするにできないのよ」

「賢さかしげなことをおっしゃる」リンデはブルハーデンをくいっと呷あおって鼻を鳴らした。「ですが、それであきらめてしまったらおしまいではありませんか。たとえば、琺瑠、あなたはどうです」

「どうって、何が？」

「総長がいつになっても粉をかけてこない。しようとしないことはできないことだ。そんなふうに割り切れますか」

「ちょっと、なんでここで総長の名前が」

「笑わせないでください」リンデはグラスの端はしを齧かじって食事中の豹ひようみたいに笑った。「私とワーノンのことなんぞより、あなたと総長のことのほうがずっと知れ渡わたっているのです」

「そんな—」

「誰だれも面と向かって言わないだけですよ。それはそうでしょう？　我が団の総長と副長なのですから。物笑いの種になりますよ。ですが皆、興きよう味み津しん々しんです」

　琺瑠は褐かつ色しよくの蒸留酒を口にふくんだ。

　喉の奥に流しこむと焼ける感覚があって、一気に酔よいが回ってしまいそうだった。

「—興味を持たれても、わたしと総長との間には、何も……」

「承知しています」リンデはブルハーデンをもう一杯ぱい頼たのんだ。「知っていますとも。あなたがたの一挙手一投足に注目している連中もいますからね。何かあろうものなら、一いつ瞬しゆんで周知の事実となりますよ。間ま違ちがいありません」

　琺瑠は頭を抱かかえた。「……初代が今の状じよう況きようをごらんになったら、きっとたいそうお嘆なげきになるわね」

「どうでしょう」リンデはせせら笑った。「案外、総長の尻しりを叩たたかれるかもしれませんよ。初代はあれでけっこう女性がお好きでしたから」

「男性だもの」

「だいたいね。皆、初代を神格化しすぎなのですよ。いいですか。初代はたしかにすばらしい御お方かたではありました。ですが、それだけではないでしょう？　及およぶ者とていないほどお強くて、間違いなく人格者でいらっしゃいましたが、欠点もおありでしたし、人間くさい御方でした。違いますか？」

　琺瑠は返事に窮きゅうし、酒ではなく水を一口飲んだ。

「私はね」リンデはグラスを額に押しあてた。「好きでした。初代のことが。男性としてお慕したいしておりました。もちろん、だからどうこうしようというものではなくて、ただ好きだったのです。琺瑠、あなたにもありませんでしたか。そういう感情は」

「……あったかもしれないわね。いくらかは」

「おそらく、初代に父親を見ていたのです。そうでしょう」

「そうね」

「親のいない者が多いですから。我が団には。どうしても……」

「ええ」

「しかも、亡くなられた。私たちは親を失った子供なのです。いいかげん親おや離ばなれしなければいけない。そのために、手っ取り早い方法があります」

「親になればいいのね」

「一つの考え方です」

「それで？」

「違います」リンデはブルハーデンを飲み干して、熱い息を吐はいた。「私はワーノンを好いています。頭はよくありませんが、あれは男の中の男ですから。いつも考えています。今夜こそ寝しん所じょに忍しのびこんでやろうと」

「……わ」琺瑠は口を押さえた。

「私は女なのです」リンデは挑いどむように琺瑠を見つめた。「好きな男がいれば抱だかれたい。おかしいですか？」

「おかしいなんて、そんな」

「抱いてほしいのですよ」リンデは空のグラスをテーブルに叩きつけた。「なぜそれがわからないの、あの唐とう変へん木ぼくは！　見かけ倒だおしの意い気く地じなし！　信じられない……！」

「ま、まあまあ……」

「まあまあではありませんよ！　そもそも、あの男は──」

　今夜は朝まで帰してもらえそうにないと思った。

　そのとおりになった。

　休日は二日酔いが覚めきらないうちに終わった。

「……お酒が抜ぬけにくくなった？　年のせい……？」

　よほどのことがないかぎり、秩ちつ序じよの番人の非番は一日だ。仕事が山積しているだろう執しつ務む室しつへと向かう琺瑠の足どりは重かった。酒はさすがに抜けたが、具合はきわめてよくない。肉体的な疲ひ労ろうだけではなくて、気分も沈しずんでいた。

　これではいけないという思いが、いっそ空回りしてくれればよかったのかもしれない。

　別の方向に行った。

「クルチバ隊長」

「……はいっ！」クルチバはあからさまに怯おびえていた。

「この報告書だけど」琺瑠はクルチバの前に報告書を広げて見せた。「ここと、ここ。内容に重複があるわ。それから、憶おく測そくと確定的な事じ項こうをもっと明確に分けてください。ときおり混乱があるわよ。一つ一つ明示したほうが？」

「い、いえ」うつむいたクルチバは冷や汗あせをかいている。

「……申し訳ありません。本件については隊士に一任しておりまして」

「あら、言い訳？」

「違います。そうではなく、一任することはわたしの決定で、すなわち見込みが甘かったということでありまして」

「今日は、シェルベリ隊長補は？」

「は……」クルチバは上うわ目め遣づかいで琺瑠を見てまばたきをした。「本日シェルベリは非番です」

「ああ」目がくらんで、唇くちびるを舐なめた。「そうね。そうだったわね」

　二十七番無名隊は琺瑠直属だ。しかも、カロリーナ・シェルベリは隊長補なのだ。出番か非番か。そんなことは百日先まで把は握あくしていて当然だ。

　琺瑠は天てん井じようを仰あおぎそうになって、どうにかこらえた。頭の中がぐちゃぐちゃだ。何を話していたのか。何を話せばいいのか。わからない。クルチバを退出させよう。だめだ。ここで打ち切ったら、錯さく乱らんしていると言っているようなものではないか。

「で、どうなの、アーニャ」

「……はい？　どう、とおっしゃいますと？」クルチバは目を見開いた。戸と惑まどっている。あっという間にこちらのペースだ。

「ＺＯＯの子と、うまくいっている？」

「え……」

「お調子者だけど、あのクランはとんでもない修しゆ羅ら場ばをいくつもくぐり抜けてきているし、言うまでもなく手て練だれだわ。稀少物レア・蒐集家ハンターとしても名が通っているようね。鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイのロドリゴ・ファルコーネとも懇こん意いらしいじゃない。しかも、彼の出自を知っている？」

「あ、それは……」

「キングダム・イズルハの元第三王子。そうは見えないけど、矛む盾じゅんはないわね」

「はい……あの、でも、わたしは」

「いいのよ。さいわいＺＯＯとは友好的な関係を保っているし、この先も維い持じしつづけたいと思っている。公私を分けてくれさえすれば、何の問題もないわ。それくらいできるでしょう」

「いえ、あの、ですから、わたしは」

「何？」

「彼とは、とくに……ただ、非番の折に──誘さそいを受けたものですから、それで」

「そう」琺瑠は執務机に肘ひじをついて両手を組み、その上に顎あごをのせた。「でも、気をつけなさい、アーニャ。あれで彼はなかなかの情報通よ。顔が広くて、情報を入手する手段をたくさん持っている。悪気はないのかもしれないけど──ねえ、どういうことかわかるでしょう？」

「はい……わかります。承知しています。ですが、ご懸け念ねんは無用です。わたしは本当に」

「だから、いいと言っているじゃない。あなたは道理をわきまえている。有能だわ。間ま違ちがいを犯おかすこともないでしょう。わたしがそう考えていなければ、あなたはその立場で今の仕事をしていないわ。アーニャ。あなたを信しん頼らいしているのよ」

　クルチバは無理やりというかんじで琺瑠の視線を受けとめてうなずいた。「……はい」

　無名隊は二十七番だけではない。他ほかにも二十五番、二十六番、二十八番の無名隊がある。二十五番は総長直属で、二十八番はマシュー・シュナイデル副長直属だが、二十六番は琺瑠の麾き下かだ。これはむろん琺瑠の方針なのだが、ベレニアス・〝褐色のブラウン〟・ウォンドード率いる二十六番無名隊とアーニャ・クルチバの二十七番無名隊は、競きそいあうだけではなく、相そう互ごに、ひそかに監かん視ししあっている。情報は多面的であったほうがいい。そうあるべきなのだ。それを一手に握にぎり、操作することで、琺瑠はときに武力以上の力をえる。

　こんなことのために行使していい力ではない。

　しかも、次元が低い。あまりにも低すぎる。

　自分はいったい何をやっているのか。

　謝罪したかった。できるはずもなかった。体面というものがある。手をゆるめるか。それもできない。今さら下手に出てどうなるというのだ。どうにもならない。

　取り繕つくろおうとしたところで、もう遅おそい。

「クルチバ隊長」琺瑠はやけくそで笑えみを浮うかべた。「あなたがたのくだらない秘密結社とやらの活動にいちいち目くじらを立てるつもりはないわ。ただ、わたしを嗅かぎまわるような真ま似ねをしたらどうなるか、よく考えてみることね」

　その日はずっと頭が痛かった。

　風か邪ぜでもひいたのか。いや、たまにあることだ。頭痛くらいどうってことはない。

　机の中には、信頼の置ける錬れん金きん士しに調合してもらった鎮ちん痛つう剤ざいがしまってある。何度か服用しようとして、思いとどまった。眠ねむ気けがさして、頭の働きが鈍にぶるし、それに──

　これは罰ばつだ。

　この痛みを戒いましめにしないといけない。

　クルチバはまだ若いのに、よくやっている。自ら情報収集に動いたりもするから、世間ずれしていないということはないはずだが、妙みように純情な部分もあるのだ。怜れい悧りなだけに、汚お濁だくをも透とう徹てつした目で論理化することができ、その汚けがれを汚れとして引き受けることなく、自分自身は純じゆん粋すいでいられるのかもしれない。

　わたしはあの子ほど賢かしこくないわ。

もっと愚ぐ劣れつ。脆もろくて、腑ふ甲が斐いない。

アーニャ。かわいそうに。こんな年とし増まにいじめられて。

後こう悔かい。自じ嘲ちよう。卑ひ下げ。頭を振ふっても、そんなものしか出てこない。

琺瑠は二十時までに机の上を片づけ、執しつ務む室しつの半永久灯を消した。

執務室を出ると、ほとんど同時に総長室の扉とびらが開いた。

そんなわけはない。今日も二度、顔をあわせた。それなのに、なぜか久しぶりに会ったような気がした。

ヨハン・サンライズはこちらに顔を向け、右手の中指で眼鏡めがねを押しあげた。「今、明けか」

今日の仕事は終わりかと訊きかれただけだ。何を黙だまっているのか。

琺瑠は首を縦に振った。少しぎこちなかった。笑顔を作った。困難な作業だった。

「……ええ。総長も？」

「私は──」ヨハンは一いつ瞬しゆん、目を伏ふせた。「そうだな。部屋に戻もどるところだ」

「そう」琺瑠は歩きだした。

どれくらいの速さで歩けばいいのかわからない。なぜ速さを気にしないといけないのか。

ヨハンが後ろにいる。ついてくる。そういうわけではない。ただ同じ方向に歩いているだけだ。それ以外の意味はないだろう。

ないはずだ。

ない。

ないに決まっている。

　さっき一瞬、目を伏せた。

　どうして？

　階段を下りはじめると、二人分の足音がこだまして、耳が破れそうになった。

　あげくの果てに声をかけられた。「疲つかれているのではないかね」

「な……」

　琺瑠は少しだけ後ろを見ようとして、やめた。

　足がもつれて、転んでしまいそうな気がしてならなかった。

「なんで？」

「顔色がよくない」

「年のせいよ」

　言った途と端たん、胸が鋭するどく痛んで、ごまかすために笑った。無理だ。足りない。それだけでは。

　焦あせりが無む為いに言葉を重ねさせた。

「早いわね、時間がたつのは。気がついたらこの年だったわ。人によって違ちがうんでしょうけど。ヨハン、あなたはどう？　あ、ごめんなさい、総長……」

「私は」ヨハンはため息をついた。「──長かったな。今日まで、長かった」

「いろいろあったし」

「ありすぎた」

「そうね」

「琺瑠」

　肌はだが粟あわ立だって、骨がとけて、心はどこかに行ってし

まった。

　足が止まっている。

　進めるわけがない。

　後ろから抱だかれている。

　耳みみ許もとで声がした。

「おれは君を愛している。君だけを」

　またたく間に何も見えなくなった。

　心は戻ってきたのに、どこかへ飛びたってしまいそう。

　でも、どこにも行きたくない。ここにいたい。

　彼の腕うでの中に。

「……ばか」

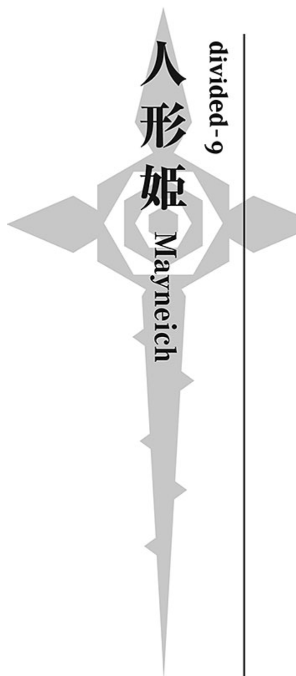
　目の周りをぬぐった。

　無む駄だだった。

「……ばか……ばか」

「もうあやまらない」と彼は低く言った。

　彼女はうなずいた。



divided-9

人形姫 Mayneich

　この地の冬は、川も土も木々も何もかもを凍いてつかせて雪に閉とざしてしまう。

　植物が一気に息を吹ふき返す夏は短い。強食カニバロと呼ばれる異形の獣けものたちが、長い冬を越こえるための力を蓄たくわえるべく、動くものすべてに襲おそいかかって食くらう凶きよう暴ぼうな季節でもある。

　無限凍土フローズンアビシは意思を持って人の侵しん入にゆうを拒こばんでいるかのようだ。

　それでも人間は彼かの地に立ち入ろうとする。彼らは知っているからだ。

　物にもよるが、強食カニバロの骨は高く売れる。無限凍土にしか生えないツンバの木の枝にも高値がつく。夏に花を咲さかせるヒウラは人を夢ゆめ幻まぼろしの国へと誘さそう麻ま薬やくの材料となる。もし生きた強食カニバロを捕とらえることができれば、いい見世物になるだろう。白毛長兎シロケナガウサギや手テ漕コギ馬ウマ、フバロ、ホーテッドといった雪上、雪中でのみ活動するめずらしい動物もいる。

　それらを欲ほつして、人間たちは無限凍土に分け入ってゆくのだ。しかしそれも辺へん縁えん部にとどまる。どれほど無む謀ぼうな者でも、道に迷ったのでもなければ、無限凍土の中で夜を明かすことはまずない。

　今となっては、知る者とて多くないだろう。皆かい無むに近いかもしれない。

　かつてこの無限凍土を領地としていた王がいる。

　その名もアドニス・グリムハーゲン。

〝凍てつくドールマスター・森のオブ・フローズン人形王フオレスト〟と呼ばれた魔ま導どう王おうだ。

「ローク・ララウィー城……」

　男の吐はく息は白い。それだけではない。男はほとんど雪に埋うもれている。歩いていても全身に雪が積もるのだ。頭のてっぺんから手首、足首まで覆おおう防寒着の下に何枚も重ね着し、ゴーグル

を装着して手て袋ぶくろをつけブーツを履はいている。もちろん、手袋も靴くつ下したも三重、四重だ。それでも寒い。全身が氷と化したかのようだ。

　厳寒の無限凍土に入りこんで七日目になる。

　男はようやく目指すものを見つけた。

　木というより絡からみあう巨きょ大だいな蔦つたのようなツンバの木に半ば埋めつくされている谷間の底で、それはひっそりと眠ねむりについていた。

　明らかに人の手で建てられたものだ。木造なのか。石造か。そのどれでもない。硝子ガラスのようだが、透とう明めいではないようだ。

　八つの尖せん塔とうを備え、天守は丸い。たしかに城だ。まだ距きょ離りがあるので、玩がん具ぐめいて見える。

　なぜ雪が積もっていないのか。男にもわからないが、ひとひらの雪すらまとっていないローク・ララウィー城は、ぼんやりと発光している。

　硝子のようだと男は思ったが、そうではない。

　氷だ。

　まるで氷で出来ているかのようだ。

　男は深い雪の中を泳ぐようにして歩き、やがて城の前に到とう達たつした。

　こうして近づいてみると、城と呼ぶにはやや小こ振ぶりで、建物というより一個の美術品といった趣おもむきがある。

「遺品なのだ。孤こ独どくな魔導王の……」

　感かん慨がいを振ふりきって、男は城門に手をかけた。まさかと思いながらも、手袋をとって素す手でさわってみた。つい笑えみがこぼれた。

　あたたかい。

　そう表現できるほどの温度ではないのかもしれないが、微かすかに熱を持っている。

「この城は生きている。そういうことか」

　生きている城を相手に、男の格かく闘とうが始まった。男は招かれざる客だ。押し入るために十時間を費ついやした。

　城内は青や緑の照明に照らされた鍾しよう乳にゆう洞どうのようで、外がい壁へきより温度が低かった。おそらく、水が凍こおる寸前くらいだろう。外よりはましだが、居住するのに適している環かん境きようとは言いがたい。外壁に熱を持たせて雪をとかしているのだから、もっとあたためることもできそうだ。

　あえてそうしていない。

　当然のことだが、もはや誰だれも住んでいないのだろう。少なくとも、生ある者は。

「──最初から思ってはおらんさ。魔導王といえども、生きているはずが……」

　男は城内を探たん索さくしながら自問した。孤独な魔導王が、千年の時を超こえて生存している可能性を、一いち分ぶたりとも信じていなかったと断言できるだろうか。

　信じてはいなかった。だが、叶かなうことならば会いたい。訳知り顔で人の誇ほこりを嘲あざ笑わらう人竜よりも、無限凍土の奥底に城を築いてひっそりと暮らし、今もその地で手て慰なぐさみに人形を作りつづけていると言い伝えられているいかにも偏へん屈くつそうな魔導王に、昔話をしてもらいたい。

　妄もう想そうだ。

　男は夢を見るが、現実を見失うことはない。常に現実の手ざわりを確かめながら進むことで、この場所に到達したのだ。

　男は両側の壁かべに陳ちん列れつ棚だながびっしりと並んでいるまっすぐな廊ろう下かに足を踏ふみ入れた。

　棚たなは硝子張りで、中身は人形の骨組みや外側の部品だ。それらが一つ一つ丁てい寧ねいに、一部分も重なることなく、整理され

ているのではない、明らかに展示されている。男にもその性向がないわけでもない。

「熱マ狂ニ者アの仕事だな、これは……」

　伝説によると、グリムハーゲンは友も臣下も持たず、人形の兵団のみを従えてこの無限凍土を治めていた。

　魔導王はたった一人でこれらの部品を配置したのだろうか。一人きりで眺ながめて悦えつに入るために。それとも、人形は彼の友であり臣下だったのか。

　キング・グッダーの魔導兵の中には、自律型で会話すら可能なものもいる。グリムハーゲンの人形はどのような機能を備え、どの程度の性能を有していたのか。

「見たところ、人形でしかないようだが……」

　骨組みからすると、大きさは人間の半分ほどだろうか。五、六歳の子供くらいの背せ丈たけだ。関節の数は多いが、動力源やそれを伝達するような部品は見あたらない。

　いや、早計だったか。

　進むごとに、人形の寸法が大きくなってゆく。

　ここから先の骨組みは、もはや骨格だ。動力装置らしきものは依い然ぜんとして現れていないが、精せい巧こうさは加速度的に増している。外側の部品も、最初は陶とう器きを組みあわせたようなものだったのに、これはもう皮だ。

「この容器の中身を骨格に塗ぬりこめて……貼はりつけるわけか。あれは眼球だな。まるで本物だ。信じられん。こんな部分まで……」

　廊下の突つきあたりは丁字路をなしていた。

　男は左を選んだ。ここから先には、陳列棚の代わりに一枚板のような味もそっけもない扉とびらが並んでいる。小さな把とっ手てを押しても引いても開かない。念のため、すべての把手を確かめながら男は進んだ。廊下は九メーテルと七十サンチ前後で右に折れた。両側の扉はまだつづく。また九メーテルと七十サンチだった。右へ

曲がると、扉は一つだけだった。十メーテルほど先の右手側だ。男はそこまで行って、扉の前で手を揉もんだ。

　今までの扉とは違ちがう。

　素材は廊下や他ほかの扉と同じだが、細かな彫ちよう刻こくが施ほどこされている。把手も丁寧に仕上げられた作品のようだ。

　男の勘かんが告げていた。

　この扉は開く。

「さて、何がある……？」

　男は把手に手をかけた。動く。下の方向だ。

　動かすと、金具の嵌はまるような音がした。

　男は扉を押した。

　異質だった。

　美しいが寒々しい城内の様子とはまったく異なっている。

　この部屋には色があった。室温は低いが、内装にあたたかみがある。椅い子すがある。机がある。書しよ棚だながある。鏡台がある。天てん蓋がい付きの寝しん台だいがある。

　まるで王族の寝室のようではないか。

　いや、寝室にあってはならないものが一つだけあった。

　寝台の脇わきだ。床ゆかに置かれている。

　男はあえて寝台を視界の外に置いて、それに近づいた。荷物を下ろし、膝ひざをついて、その縁ふちに指を這はわせた。

　それは箱だった。材質は不明だが、外側は黒い。内側には白くやわらかいものが敷しきつめられている。箱に蓋ふたが立てかけてあった。これではしかし、蓋をすることなどできまい。

　箱の中で一人の男が横になっていた。

　彼は黒に白と金をあしらった仕立てのいい、だが、簡素な意い匠しようの服を着ている。

　眠ねむっているのだ。

　永遠に。

　干ひからびているだけで、腐ふ敗はいはしていないから、生前の面相が想像できる。若くはない。彼は老いていた。老いさらばえて、生命を使い果たし、この棺ひつぎの中に自ら横たわり、そして息絶えたのだ。

「拝はい謁えつが叶かない光栄だ、魔ま導どう王おう陛下」

　男はひざまずいて頭こうべを垂れ、死者の眠りを妨さまたげぬよう静かに黙もく禱とうを捧ささげた。形はどうあれ、死するまで我が生を貫つらぬいた者の姿がそこにあった。尊び礼を尽つくすのが道理だ。それにしても、あれは何なのか。

　男は立ちあがって寝台を見下ろした。

　半はん透とう明めいの天蓋をはねのける前に、鼓こ動どうが落ちつくまで待つ必要があった。

　この部屋は寝室だ。そして、魔導王のものではない。だから魔導王は、寝台ではなく棺で覚めることのない眠りについた。

　男はそっと天蓋をどけた。

　寝台には女が寝ねている。

　魔導王と同じように、彼女は二度と目覚めることがないのか。それがふさわしくも思える。

　端たん整せいというよりも繊せん細さいな顔だちだ。ただ細身なのではない。どこか人間離ばなれした、恐おそれすら覚えるほど均整のとれすぎた身体からだつきをしている。金色とも銀色ともつかないあの頭とう髪はつはどうだ。未知の貴金属を極限まで細くのべて束ねたようではないか。身にまとっているというより着せられているといった印象を受ける衣い装しようは純白だ。死に装束に違いない。

このような女が生きて存在するはずもないのだ。

一方で、死んでいるようにはとても見えない。

彼女は魔導王のように干からびてはいないからだ。その皮ひ膚ふは瑞みずゞみずしさこそ感じないものの、真新しい白磁のごとき艶つやを保っている。そう。保持しているのだ。

彼女はいつから眠っているのか。昨夜いつものように就しゆう寝しんしたというふうではない。

魔導王はいつ息をひきとったのか。おそらく数百年前だ。千年前かもしれない。

彼女はそのころから今と変わらぬ姿で、この寝台に身を横たえているのではないか。

枕まくら元もとに一冊の書が置かれている。

男はまずその書を手にとって開いた。上古ハイロ高位語メオンで書かれている。手書きだ。どうやらグリムハーゲンの手記らしい。多種多様な上古ハイロ高位語メオンの中でも、かなり難解な部類に入る高殿様式カスルリアニズムか。読めないことはないが、解読に時間がかかりそうだ。

男は手記を閉じて抱かかえ、女に手をのばした。

一いつ瞬しゆん、ためらった。

指先でふれた途と端たん、彼女は粉々に砕くだけてしまうのではないか。

男は首を振ふり、静かに女の首筋に指をあてた。室温と変わらない温度だ。むろん、脈も感じない。

男は寝台から離はなれて椅子に腰こしかけ、ふたたび手記を開いた。やはり手て強ごわい。専門用語なのか。見慣れない単語が多すぎるのだ。はたと気づいた。

「……そうか。これは──人形の制作日誌とでもいうべきものか。わからんはずだ。いくら己おれでも……」

男はとりあえずその箇か所しよを飛ばすことにした。こうして見ると、日常の些さ末まつ事や体調に関する記き載さいもいくらかある。魔導王の晩年は、老いと格かく闘とうしながら最後のMayneichとやらの創造に勤いそしむ日々だったらしい。Mayneichとは、おそらく人形のことだろう。日を追うごとに魔導王の筆ひつ致ちは鈍にぶり、同時に愚ぐ痴ちっぽくなってゆく。

「……我、我が為ために生まれるも我が為に死すことなし、然しからば我、何な故ぜ生まれたるか、か。痴しれ言だな」

魔導王は焦あせっているのだ。命が尽きる前に自らの手でMayneichをつくりあげたい。しかし間に合うかどうか。おぼつかない。いま風か邪ぜでもひいたら自分は死んでしまうに相そう違いないと魔導王は書いている。魔導王は衰すい弱じやくしている。余計に作業が遅おくれる。苛いら立だちが魔導王を駆かり立てるが、弱らせもする。それでも魔導王は成し遂とげたのだ。

「……完成したのか。いや━だが、最後の工程が……すでに我が娘むすめに分け与あたえる命数我になし。我が目は霞かすみ曇くもり闇やみに閉とざされんとし我が耳には我が声すら届かず。我はうつつにありしか。我、我が娘に潰ついえんとする我が命数授さずけようとも、我が娘、我と見まみえることもなく我とともに不帰の客とならん。願わくはいつの日か我が骸むくろ見つけし者よ、我が娘に汝なんじの命数分け与えたまえ。我が娘、汝の伴はん侶りよとなり汝とともに生き汝とともに死す。我、最後の工程について書き記さんとす。我……」

男は手記を閉じて寝しん台だいへと視線を送った。

つまり、こういうことだ。

最後のMayneichとは、寝台の上で目を閉じている彼女なのだ。魔導王はまさしく全身全ぜん霊れいを打ちこんで彼女を完成させた。人間と見まごうばかりの、だがそれでいて、人間とは似ても似つかぬ人形姫ひめを、孤こ独どくな魔導王の娘として。

彼女はしかし、動かない。人形なのだから当然だ。彼女は死んではいないが、生きてもいない。そうはいっても、魔導王の創造物だ。単なる人形ではない。彼女は見かけどおり、生き物のように活動することができる。そのためには、最後の工程が必要なのだ。

魔導王はそれをなしえなかった。

あるいは強行することもできたかもしれないが、あえてそうしなかった。

「悪い癖くせだ」

男は椅い子すから立ちあがり、寝台に歩みよって彼女を見つめた。

これは物だ。

魔ま導どう王おう時代の秘宝だ。

貴重な品だ。

所有物を金に換かえる趣しゆ味みは男にはない。金などはどうとでもなる。金には換えられぬ物が多すぎる。

この秘宝を蒐しゆう集しゆう品ひんの列に加えるべきか。是ぜ非ひともそうすべきだろう。

理性はそう告げているのだ。

男は屈かがんで女の髪かみの毛を指ですくった。

「だが、絶望すら甘美ではないか。作り物に宿るいのちがあるというのなら、己おれはそれをこの目で見てみたい」

男は魔導王が記した最後の工程を実行に移そうとした。何らかの感覚が警報を発した。一瞬後には、より明確に警けい戒かいすべき根こん拠きよをとらえた。

音だ。もしくは、振しん動どうというべきか。

扉とびらの向こうだ。

張りつめたような静せい寂じやくだから、わずかな乱れでもそれと知れる。

男は手記を寝台に置いて、腰から刺し突とつ剣けんを抜ぬいた。〝千のサウザンド・貫通ピアツサー〟。魔導王時代の秘宝だ。刀剣に関しては現代刀も馬ば鹿かにならないが、さすがにこの過か酷こ

くな環かん境きよう下では千年の時を超こえた逸いつ品ぴんでなければ常用に耐たえない。

　男が半身になって足を広げ腰を落とし、千の貫通の剣先を前に突つきだすと、扉が勢いよく開いた。

　寝室に飛びこんできた。

　彼女らは、次々と。

　身にまとうは色とりどりの古めかしい夜会服で、その両手には三つ叉またの小刀が一ひと振ふりずつ握にぎられている。見た目は人間の女に近い。

　だがたしかに、女を象かたどってはいるものの、女そのものではないことは一いち目もく瞭りよう然ぜんだ。彼女らは寝台で眠ねむっているMayneichと違ちがい、関節の部分に球体の部品が露ろ出しゆつしていたり、外皮に切れ目があったりする。

「──女どもに歓かん待たいされるは男おとこ冥みよう利りに尽つきるが……！」

　彼女らは人形だ。男は千の貫通で先頭の人形の額を突いた。小さな稲いな妻ずまが散った。人形は大おお袈げ裟さに全身を震ふるわせて倒たおれた。さらにもう一体。二体。三体。

「所しよ詮せんは人形か」

　男は軽かろやかに舞まいながら、襲おそいくる人形どもをもれなく千の貫通で一突きした。十体倒したところで、人形の波は絶えた。男は扉から顔を出し、左右の廊ろう下かを確かめた。ひとまず増ぞう援えんはなさそうだ。

　扉は閉めなかった。

　室内を見まわすと、人形どもが起きあがろうとしていた。

　それはまあいい。千の貫通には、突いた相手を感電させるという機構不明の仕し掛かけが施ほどこされているが、相手は人形だ。死ぬも死なぬもない。

　ただ、永久に動きつづけるということはないはずだ。

彼女らの動力の源は何なのか。どこにあるのか。

まず間違いなく、彼女らはあの陳ちん列れつ棚だなに展示されていた部品を組みあげたものか、その延長線上にある。最後のMayneichはおそらく、技術の粋すいを集めた到とう達たつ点てんなのだろう。

だが部品群を眺ながめたかぎりでは、動力装置らしいものは見あたらなかった。

たとえば、人間でいえば、血液を送りだす心臓や、神経の中ちゅう枢すうであり思考を司つかさどる脳。陳列棚の部品の中に、それらに準ずるものがあったか。見み逃のがしたはずはない。一つもなかった。

それらはことに貴重な部品であるがゆえ、別の場所に保管されているのかもしれない。もとよりそのような部品は存在しないのかもしれない。

それでも彼女らは動いている。動くことができる。

額の穴から何か黒い煙けむりのようなものを立ちのぼらせながらも、起きあがろうとしている。

「……何だ、あれは」

詮せん索さくするためには、彼女らの動きを止めねばならない。

男はふたたび千の貫通を操あやつって、容よう赦しゃなく人形どもを穴だらけにした。どの穴からも例の黒い煙がもれだした。穴があけばあくほど、彼女らの反応は鈍にぶく、動作は緩かん慢まんになっていった。まるでその黒い煙のような靄もやのような物体が、彼女らの血液であるかのようだった。

きっとそうなのだろうと男は見当をつけていた。人形どもが完全に動かなくなるころには、黒い物体は彼女らの体内からすっかり流出しきっていた。

男は黒い物体の行く先を目で追った。

それらは次し第だい次し第だいに薄うすれてゆき、空気にとけこんでゆくようだった。

　しかしよく見ると、透とう明めいな空気とほとんど区別がつかないさまになりながらも、どこかへ流れてゆく。

　男は眉まゆをひそめた。

　彼女だ。

「……吸っている、だと？」

　錯さつ覚かくではない。黒い物体は最後のMayneichに吸収されてゆく。だがどうやって。呼吸はしていない。皮ひ膚ふからか。どうやらそうらしい。

　今はもう動かぬ人形を解体して、内部の構造をあらためたい衝しよう動どうに駆かられた。

　それより先に、なすべきことがある。

　義務ではむろんない。

　男自身が欲よつ求きゆうしているのだ。

　寝しん台だいの脇わきに膝ひざをつき、最後のMayneichに手をふれる寸前、己おのが裡うちに逡しゆん巡じゆんを見つけて即そく座ざにつまみだした。

　男は今にも凍いてつきそうなほどつめたい彼女を抱だき起こし、上古ハイロ高位語メオンで唱えた。

「目覚めよAweik.。然らば我Zen ai-wil'が汝に名giv-theeを与えん-the'name.。汝はZou□□」

　それはとくにめずらしい名でもない。聞き覚えがあるといえばある。誰だれかの名なのか。男にはわからなかった。とにかくその名が自然と男の口からこぼれた。

「クローディア」

　音にした途と端たん、その名はある形を、重さを持ち、動かしがたくなった。

　男の全身から何か白い光のようなものが発せられた。それはいっ

たい何なのか。男にもわからなかったが、あるいは男自身なのではないか。

　光は彼女にとりこまれる。

　そのぶん男は薄まる。

　軽くなる。

　奪うばわれているのか。

　違う。そうではない。

　そうか、こういうことか、と男は思う。よかろう。くれてやる。

　男は彼女に口づけをした。吸いこまれた。

　意識が。どこかへ。飛ぶ。飛んでゆく。暗い。穴か。底だ。何かの。どこかの。

　男は一筋の光でしかない。かぼそく、頼たよりない。ちっぽけだ。これが己おれか。己おれなのか。

　己おれだ。

　探さねばならない。己おれは、おまえを。

　どこだ。どこにいる。

　光はさまよう。

　闇やみの狭はざ間まに迷いこむ。

　隠かくれているのか。なぜだ。

　出てこい。

　己おれは探しにきたのだ。

　声が響ひびく。

「いけません」と。「わかっているのですか。あなたが何をなさっているのか。本当にわかっていらっしゃるのですか」

　男は答える。「あたりまえだ。わかっていて、己おれは探しにきてやったのだ」

「いけません。わたくしが呪のろわれた人形だということがおわかりになりませんか」

　男はせせら笑う「生意気な人形め。貴様が呪われていようと何だろうと知ったことか。己おれはもう決めたのだ」

「わたくしが目覚めてしまったら、あなた様は──」

「それがどうした」

「王はなぜわたくしをおつくりになったのでしょう。わたくしのような、呪わしい──」

「馬ば鹿かめ。人形作りは彼の人生だったのだ。最後に彼は、文字どおり自らの人生を注ぎこんで傑けつ作さくをつくりあげた。それが貴様ではないか」

「わたくしは王を存じあげない。王のことをはっきりと知っているのに、それでいてわたくしの記き憶おくはからっぽなのです」

「彼にも貴様を目覚めさせることはできただろうよ。それだけならばな」

「王にお会いしたかった」

「そして二人仲よくくたばることができれば、貴様は幸せだったというのか」

「わたくしは王のためにつくられたのです」

「彼はそうは考えなかった。いいか、人形。貴様は人形のつもりだろうが、彼は人形として貴様をつくったのではない」

「嘘うそです。嘘。嘘」

「彼はこう書き記している。願わくはいつの日か我が骸むくろ見つけし者よ、我が娘に汝なんじの命数分け与あたえたまえ、と。彼の言う我が娘とは、貴様のことだ」

「──ああ……！」

「いいかげん出てこい。いや、この己おれが引きずり出してくれる」

　男は暗くら闇やみを引っぺがして彼女を見つけだした。

　彼女は男と同じ光だった。はかなく、心許もとない、とるにたらない一筋の光にすぎなかった。

　これがいのちか、と男は思う。いのちなのだ。これが。

　どのいのちもあまりに不確かで、ありふれていて、せいぜいほんの一いつ瞬しゅんまたたくだけで、消えてしまう。

　男には孤こ独どくな魔ま導どう王おうが何を望んだのか、はっきりと理解した。

　いのちだ。

　つくろうとしたのだ。いのちを。

　いのちなど黙だまっていても生まれては死んでゆくのに、一いつ生しよう涯がいを賭かけて、自らの手でそれをつくりだそうとするとは！　愚おろかにも程ほどがある……！

　しかも、できあがった最高傑作とやらは、とんだ出来損そこないだ。それでも魔導王はそのいのちを愛した。生まれてすぐ死ぬのでは、あまりに哀あわれだ。少しでも生きてほしいと願った。生を知ってほしいと。父として。

　人とはかくも愚ぐ劣れつなのだ。

　滑こつ稽けいにすぎるというものだが、魔導王よ、喜ぶがいい。

　己おれはそんなくだらぬ人が、みすぼらしいいのちが、愛いとおしくてたまらん。

　この己おれが叶かなえてやろうではないか。

　男は彼女を抱だいた。

　彼女はあらがおうとした。

「……いけません！　もしわたくしが目覚めてしまったら！　わたくしが果てるとき、あなた様も果てます！　もちろん、あなた様が果てればわたくしも！　──あなた様の寿じゆ命みようはわたくしに分け与えられ、定められているうちの半ばまでしか、あなた様は生きられない！　あなた様はあなた様の生を全まつとうできない……！」

「貴様も、他ほかの何者も、この己おれの生を定めることなどできん。させるものか。己おれは己おれが決めたとおりに生きて死ぬ。クローディア、貴様とて生きたかろう」

「ですが、そのために──」

「本音が出たな。それでいい。己おれが貴様を生かしてやる。さあ、行くぞ、魔導王の愛まな娘むすめよ。これより貴様の人生が始まるのだ」

　返事は聞かなかった。

　男は彼女をきつく抱だきしめて浮ふ上じようした。

　いつの間にか目をつぶっていたようだ。

　唇くちびるを離はなして瞼まぶたを押しあげると、彼女も薄うす目めを開けた。その瞳ひとみは髪かみの毛と同じ色をしていた。

　男の手は早くも彼女の身体からだにぬくもりを感じはじめている。

　男は彼女を寝しん台だいに寝ねかせようとした。その前に、彼女が両りよう腕うでをのばしてきた。彼女は男の首に両腕を回して、溶とけかけた氷のような唇を男のそれに押しつけた。不器用な接せつ吻ぷんをしている間も、彼女は男を見つめていた。

　男は唇をずらした。「はしたない女だ。こういうときは目をつぶるものだぞ」

「いやです」彼女はもう一度口づけをせがんできた。

　男は彼女の唇を軽く嚙かんで怯ひるませた。「逸はやるな、クローディア。貴様の人生は始まったばかりだ。貴様は貴様の思うとおりに生きて死ね。貴様がそれを望めば、誰だれかを愛することも

できるだろう」

「わたくしはもう決めています」彼女は雪原に咲さく幻まぼろしの花のごとく微笑ほほえんだ。「──主様マスター。わたくしはあなた様とともに生き、そして死にます」

「馬鹿め」男はその瞼に唇を寄せてから彼女を抱き起こした。「よかろう。ついてくるがいい、クローディア」

「はい、主様マスター」彼女は裸足はだしで立ちあがり、魔導王の棺ひつぎに目を落とした。

　男は開きかけた口をつぐんだ。扉とびらの向こうだ。何かが迫せまってくる。押しよせてくると表現したほうが正確かもしれない。

　男は苦笑いを浮うかべた。「平へい穏おん無事とは程遠いぞ」

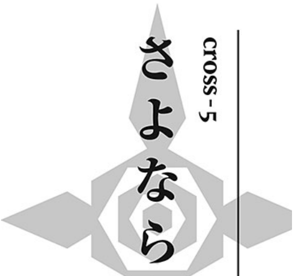
「問題ありません」

　彼女は胸に手をあてて目をつぶった。

　娘として、父の冥めい福ふくでも祈いのっているのだろう。

「わたくしは生きているのですから」

cross-5



さよならさえ重すぎる

Never Say Good-bye

「──マリアローズ、お前……」向かいの席で前菜を食べすすめていたベアトリーチェが、不意に手を止めてまじまじとマリアローズを見つめた。「ちょっと痩やせたんじゃないか？」

「そういえば、そうねえ」右斜ななめ前の席でだらだらとフォークを操あやつっていたモリーもこっちに顔を向けた。「顔色もそんなによくないし」

「え？　そう……？」マリアローズはフォークを置いて両手で頰ほおを押さえた。「そ、そんなことはない……と思うけど？」

「ちょっと見せて」モリーが身を乗りだしてきて、マリアローズの下瞼をめくった。「ああ。ほら、やっぱり貧血気味よ」

「熱はどうです、母様」

「うーん」モリーはマリアローズの額に手をあて、それから首をさわった。「そのへんは大だい丈じよう夫ぶみたいだけれど」

「食事中の診しん察さつ禁止！」マリアローズは身をよじってモリーの手を振ふり払はらった。「僕はぜんぜんなんともないし！　元気いっぱいで毎日すごしてるし！」

「本当か……？　何か無理をしているんじゃないか？」こういうときの真しん剣けんすぎるベアトリーチェの眼まな差ざしはほとんど凶きよう器きだ。

「し、してないってば。ほんとに」

「意外と、あれなんじゃないの？」モリーは頰ほお杖づえをついてにやにやした。「恋こいわずらい」

　聞き慣れない単語だったので、ぴんとこなかった。

　おかげで、反応が遅おくれた。

「──は、はあっ……!?」

　テーブルを叩たたいてしまいそうになった。

「恋わずらい……」ベアトリーチェは上を見てうなずいた。「なるほど。精神状態が身しん体たいにも影えい響きようを及およぼすこ

とはよくあるというか、ごくあたりまえだしな」

「恋をするとねえ」モリーはわざとらしくため息をついた。「食しよく欲よくが減退するのよ。これは実証済み。恋しすぎると痩せるわけなのよ。余分な脂し肪ぼうを落としてきれいになりたいなら、恋をすればいいのよね。それも、激しい、あまり報むくわれない恋が最適」

「や……きれいにとか、なりたくないし」

「うん、でも」ベアトリーチェはまたぞろマリアローズを凝ぎよう視しした。「──たしかに、きれいになったかもしれないな。なんというか、憂うれい、みたいなものを帯びているような……わたしはがさつで詩心がないから、表現がおかしいかもしれないけど」

「ないない。帯びてないから。そんなの、これっぽっちも。てゆうか、きれいって……」

「ああ、すまない。気を悪くしたか？」

「この程度のことで怒おこったりはしないけどね！　僕は心が広いし！」

「ごめん。謝あやまるから」

「だから怒ってないってば」

「あからさまにむっとしている顔で言われてもねえ」

「むぁー。ほんとに怒ってないし。怒ってはないけど、二人して変なこと言うから……」

「冗じよう談だんを真に受けるから、からかいたくなるのよ」

「僕をおもちゃにして、楽しい？」

　モリーはベアトリーチェと目を見あわせた。

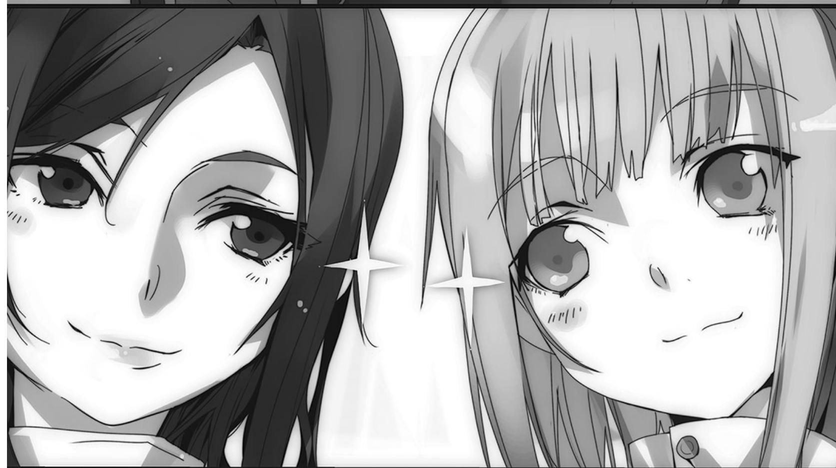
　二人はいやらしい笑みを浮かべただけで、何も言わなかった。

　マリアローズは頬をふくらませてフォークで前菜をつついた。
「……もぉーやだ、この母娘おやこ。どんどんタチが悪くなってく

し……リーチェなんて、もっと純情でやさしかったのに。モリーのせいだよ、絶対。モリーの。モリーの。モリーのぉー……」

　大食小路グラトン・アレイの端はしのほうにある「スピノザ」は二十時を回っても八割以上の入りで、なかなかのにぎわいを見せている。もともと小さめの店だということもあるけれど、素そ朴ぼくで家庭的、それでいて小こ洒じゃ落れているという、エルデンではわりとめずらしい特色が、じわりじわりと客を呼びこんでいるのだろう。開店直後に見つけて以来、足あし繁しげくとはゆかないまでも、折にふれて通っているマリアローズとしては嬉うれしいかぎりだ。





　かなり好みの味つけなんだけどね。そのはずなのに。

　牛頬肉と何かを重ねて焼いてワインとトリュフのソースをかけたメインディッシュが、思うように減ってくれない。減る、というのも失礼な話だ。おいしいことはおいしいのだから。味は問題ない。むしろ、牛頬肉と何かとか。何かって？　聞いたはずなのに覚えて

いないし、興味がわかない。こんな気持ちでは、何を食べたって感動できるはずもない。

「やっぱり、食欲がないのか？」ベアトリーチェは本格的に気き遣づかわしげだ。

　どう返事をしたものか。モリーもいる。適当な言い訳をしても無む駄だだろう。絶対に見破られてしまう。

　とりあえず曖あい昧まいに笑え顔がおみたいな表情を作ろうとしたら、新しい客が入ってきた。

「まいど！」

「……え」

　マリアローズは思わず入口のほうを見た。そうせざるをえなかった。

　高そうなスーツをビシッと着ていても、まったくそれなりに見えないから不思議だ。

　我が目を疑った。これが疑わずにいられようか。

「嘘うそ……」

　半魚人は女連れだった。

「あれは……」ベアトリーチェは身を屈かがめて声をひそめた。「ＺＯＯの……あれだよな。あれという言い方もないようなものだけど、なんだか、服装が……」

「一いつ緒しよにいるのって、秩ちつ序じよの番人の子じゃない？」何がそんなに楽しいのか、モリーは目を輝かがやかせている。「変装しているみたいだけれど、たぶん間ま違ちがいないわ」

「へ？　番人？　あ──」

　思いあたる女性が一人だけいた。色眼鏡サングラスをかけて、おそらくウィッグをつけている。かなりヒールの高い靴くつを履はいていて、クァラナド風のけっこう派手めの服を着ているのに、なぜか露ろ出しゆつ度どが極きよく端たんに低いという奇き妙みような

装よそおいをしているが、たぶん彼女だろう。

「──二十七番無名隊隊長、アーニャ・クルチバ」

「その子、その子」モリーは子供みたいに何度もうなずいた。

「ああ」ベアトリーチェも得心がいったようだ。「……でも、ということは──二人は交際しているということか？」

「交際……」マリアローズは首をひねった。「それは……どうなんだろうね。なんかちょっと、考えづらいけど」

「こっちには気づいていないようね。様子をうかがいましょう」

　カタリとクルチバは、マリアローズたちの席からもっとも遠い場所にある席に案内された。そうはいっても小さめの店だから、いつ気づかれてもおかしくないが、カタリはクルチバ以外は眼中になさそうだ。クルチバのほうはどうだろう。ときおりさっと周囲に視線を巡めぐらせているので、ひょっとしたらもう見つかっているかもしれない。それとも、落ちつきがないだけか。そんなふうにも見える。

　席につくと、カタリがさかんに話しかけ、クルチバはときどき首を振ふるだけで、あとはひたすら身を硬かたくしていた。そうとう緊きん張ちようしているらしい。少なくとも、さして親密ではなさそうだ。最初はそんな印象だったのだけれど、次し第だいにクルチバも受け答えするようになり、たまに笑顔を見せさえした。

「悪くないかんじね」モリーはニヤリとした。

　ベアトリーチェはやけに真ま面じ目めな顔つきで同意した。「わりと楽しそうだな」

「……しかし、あの二人がねぇ……」マリアローズは低く唸うなった。「わかんないもんだね。性格的には、なんとなく嚙かみあいそうにないけど……」

「そうかしら。堅かた物ぶつとお調子者って、意外といい組みあわせよ」

「へえ。そういうもの？」

「わたしは苦手だな。彼みたいな男は。口数が多いのはまだ我が慢まんできるとしても、声がやけに大きくて身振りも大おお仰ぎようすぎるし、なんというかこう……もっとどっしり構えていてもらいたい。じっとしていても、人間的な奥深さを感じられるような──」

「リーチェって、そういう人がいいの？」

「た、たとえばの話だ、たとえばの」

「リーチェは求めるものが高すぎて、気がついたら周りに誰だれもいなくなっている、みたいなタイプよねえ」

「そんな……わたしは何も求めてなんかいませんよ。そもそも、興味がないですし」

「つきあっている男の一人や二人いてくれたほうが、わたしとしては安心なんだけれど」

「それどころじゃありません。忙いそがしいんです、わたしは。だいたい、必要性を感じません」

「堅かたいわねえ。少し遊ぶか遊ばれるかしたほうがいいんじゃない？」

「や、待って、モリー。それはちょっと僕、賛成できない」

「マリアローズが賛成してくれなくたって、遊ぶとか遊ばれるとか、わたしには無む縁えんです」

「どうして？　減るものでもないのに」

「へ、減るって何がですか！」

「いろいろよ。というか、わたしは減らないと言っているんだけれど？」

「……リーチェ、モリーといっつもこういう話、してたりする？」

「いや、しない……かな？」

「しないわよ。この子ったら、仕事のことばっかりなんだもの。こういう機会でもないと、雑談する時間だってほとんどないのよ」

「極端だよねえ、リーチェは。そのへん……」

「マリアローズ。お前には言われたくない」

「そうよねえ。マリアだってなかなかのものだわ」

「えー。そうかなあ？　僕はけっこう柔じゆう軟なんなほうだと思ってるんだけど……」

「お前の場合、融ゆう通ずうが利きかないわけじゃないんだ。何だろう。すぐ思いつめるというか」

「考えすぎなのよ。もっと楽しく、のんびり生きればいいのに」

「モリーって、エルデンを代表するハードワーカーっていっても過言じゃなくない？　そんな人には言われたくないよ……？」

「そーお？　わたしはかなり人生を楽しんでいるわよ？　最近、彼氏もできたし」

「……それはいいんですけど、母様。男性とつきあいだしたらつきあいだしたで、二人、三人と交際相手をどんどん増やすのは慎つつしんでくれませんか？」

「だぁーって。物足りなくなるんですものぉー」

「明らかにのんびりはしてないでしょ、のんびりは。恋れん愛あいまでハードワークしてるし……」

「五人まではいけるわ。最高記録は十三人。若かったわねえ、あのころは」

「母様は十分お若いです……」

「まあ、初めて会ったころと、ぜんっぜん、まぁーったく、変わってないしね」

「あらそう？　本当に？　嬉うれしいからキスしていい？」

「だめ」

「なぁーんでぇー？　いいでしょう？　舌はちょっとしか入れないから」

「だぁーめ！　なんでも何もないでしょ？　てゆうか、ちょっとしかって、入れるつもりなんじゃないか」

「かわいらしいキスはしない主義なの」

「どういうキスもだめ！　全キス禁止！」

「わかったわ。じゃあ、ハグだけさせて。はぐっとするだけ！」

「嘘うそだよ。絶対、変なことするもん……」

「しないわよ。だいたい、ふつうでしょう？　ハグくらい。挨あい拶さつと変わらなくない？」

「僕にはそういう習慣ないから」

「これから習慣にすればいいのよ。とりあえず今から始めましょうか？」

「始めません！」

「思いっきりぎゅうっとしたりぺろぺろしたり、そういうことはしないから！」

「母様」ベアトリーチェは咳せき払ばらいをした。「……マリアローズも。じゃれあうのはいいけど、できれば場所を選んでくれないか」

「あ……」

　てゆうか、カタリとクルチバがばっちりこっちを見てるし。見まくってるし。

　クルチバの表情は色眼鏡サングラスのせいであまり読めないが、引き結ばれた唇くちびるがわずかに震ふるえている。カタリは眉まゆ根ねを持ちあげて離はなれ気味の目を見開き、口を菱ひし形がたにすぼめて、さーてどないしよ、どないしよったらどないしよ、みたいなことでも考えていそうな顔つきだ。

　マリアローズは唇の両りよう端はしをつりあげ、どうも、みたいなかんじでうなずいてみた。

　おそらくほとんど反射的な動作だろう。カタリとクルチバはぎこちなくうなずき返した。

　微び妙みように気まずい雰ふん囲い気きの中でデザートとお茶をすませて、黙だまって帰るのも何だから、店を出る前に軽く手を振ってみた。クルチバは下を向いてしまい、カタリだけは「お、おう」とか言いながら会え釈しやくをした。

　アサイラムまで歩きながら、カタリとクルチバの話題で盛りあがった。

　泊とまってゆけとモリーにすすめられたけれど、断った。

　家に帰ったら一人だ。いや、一人ではないのだけれど、一人で寝ねないといけない。あたりまえのことが、なぜだか妙にこたえる。

　モリーの誘さそいは正直ありがたかったし、かなり魅み力りよく的だった。でも、マリアローズは迷わなかった。今日はいいや、とすぐさま返事をした。

　あれこれ突つっこまれるに決まってるしね。痛くもない腹を探さぐられるみたいなかんじで、なんかめんどくさいしさ。

　気分はいいし。

「楽しかったなぁー」

　口に出して言ってみても、自分が嘘をついているとは思えなかった。

　本当に楽しかった。

　きっと今夜はぐっすり眠ねむれるだろう。

　食しよく欲よくはたしかにあまりない。食べられないわけではなくて、食べたくないのだ。身体からだのために三食とっているけれど、量は以前より少ない。ちょっぴり瘦やせたかもしれない。ただ、ものすごく体調が悪いというわけではないし、Ｄ３探たん索さくは進んでいるし、大きな失敗はしていないし、多少しくじっても過か剰じように落ちこんだりはしないし、トマトクンもわりあい調子がよさそうだし、日々の暮らしに問題はない。

　何の問題もない。支障なんてない。困っていることもない。

　最高の仲間に囲まれて、大好きな友だちがいて、これ以上、何を望めばいいの？

　何もいらない。

　これでいい。

　十分だ。十分すぎるくらいじゃないか。

　いつの間にか、環かん状じよう通を北回りして第十二区を目指すという遠回りのルートをとっていた。

　第五区の中を突っ切って第十三区を抜ぬけ、第十二区を目指したほうが近道だし、比ひ較かく的安全な経路だってたくさん知っている。常夜灯が設置されていて明るく、広いので見晴らしがいい環状通も悪くはないけれど、大勢で待ち伏ぶせするやばい連中もいて、そういった手合いはかなり手慣れていたりもするので、注意しないといけない。

　もう第五区と第十三区の境目あたりだ。

　マリアローズは高層寺院が建ちならぶ第十三区に入ることにした。トマトクン邸ていに引っ越こす前は高層寺院の最上階というか屋上に住んでいたので、この界かい隈わいは知りつくしている。

　不意に足が止まった。

　高層寺院の合間からのぞく黒というより紺こん色いろに近い空を見上げた。

　細いため息がこぼれた。

　薄うすっぺらな胸がしくしくする。

　唇を噛かんでうつむいた。

「……なんか、だめになっちゃいそう」

　呟つぶやいて、笑い飛ばしたくなったけれど、笑うなんて無理だ。

　その気になれば、いくらでも紡つむいで重ねられそうな言葉がぜんぶ、身体の裏側にこびりついている。

　外側じゃなくてよかった。裏側で。そうでなければ、身動きがとれなくなっているだろう。それに、外側だったら丸見えじゃないか。

　忘れちゃえばいいんだ。

　何もかも、なかったことにすればいい。

　そもそも出会っていない。そう思えばいい。

　あんなやつ、知らない。

　最初から、いない。

　どこにもいない。

　いない。

　いないんだってば。

　……なんで？

　どうして消えてくれないの？

　ああ、もう──

　こんなことならいっそ、何もかも消えてしまえばいい。

　しゃがみこんでしまいそうになって、なんとか我が慢まんした。

「やだ、やだ、やだ」

　よくない傾けい向こうだ。このままだと、自分の頭を叩たたいたり髪かみの毛を引っぱったりしかねない。

　マリアローズは胸に手をあてて一つ息をつき、歩きだそうとした。

　鼓こ動どうが乱れた。

右を、左を、後ろを見て、前に向きなおり、振ふり仰あおいだ。

僕、もしかして一いつ瞬しゅん、期待した……？

違ちがう。そうじゃない。

何度か同じようなことがあった。ここしばらくはなかった。だから、あれはたぶん、気のせいだったのだろう。そう思っていた。

マリアローズは駆かけだそうとした。

どうしてか足が前に進まない。

「……あれ？」

おかしい。何も感じない。

それが何なのか。わからないが、気味が悪かった。恐おそろしいもの、脅きよう威いというよりは忌き避ひすべきもので、決してふれてはならない。近づいてもいけない。そんなかんじがした。

それは間違いなくあった。

今はない。

だからといって、安心することはできない。

マリアローズは歩きだして、すぐ早足になった。さっさと家に帰ろう。少なくともきゅーは出で迎むかえてくれるはずだ。

こうやって何度も夜をすごしているうちに、いつか忘れてしまえるはずだ。

ついに。

とうとうヤツが動いた。

第十三区。二十三時過ぎの〝彷徨Ｒえる Ｓ魂区Ｗ〟。高層寺院と高層寺院の狭はざ間まに身を隠かくして息をひそめていたヤツは、一輪の薔ば薇らが足を止めて空を仰いだ瞬間、牙きばを剝むこうとした。

よくもこれまで我慢したものだ。賞賛に値あたいする。ヤツがこらえればこらえるほど、彼も忍にん耐たいを強しいられるわけだから、正直、恨うらみも骨こつ髄ずいに徹てつしていた。しかし、もうどうでもいい。

これですべて終わる。

終わらせる。

彼は高層寺院の屋上から地上めがけて身を躍おどらせた。相変わらずヤツは勘かんがいい。よすぎるくらいだ。気づかれた。ヤツは剝きかけた牙を引っこめた。アルカーディアを駆く使しし、落下の速度を殺して地面に降りたったころには、ヤツの気配は遠かった。薔薇は。ここからでは振り返ったとしても見えない。薔薇にもこちらが見えないということだ。見えなくていい。こんなことを知る必要はない。

ヤツが消えた路地へと音もなく駆けこんだ。約十五メーテル先で左右に分かれている。どっちだ。考える前に身体からだが反応した。左だ。ちらりとヤツの後ろ姿が見えて、すぐに消えた。この先の小さな通りを右へ。通りに出ると、ヤツはだが、いなくなっていた。足音は。聞こえる。さほど遠くない。あの路地か。

彼はヤツを追った。ヤツは只ただ者ものではない。速度のみならず、身のこなしが異様だ。まず走り方がおかしい。歩幅ストライドが尋じん常じようではなく広いのだ。跳とびあがるのではなく、前へ前へと身体を押しだして、ぐんぐん距きよ離りを稼かせぐ。さらに、角を曲がるときなどは、その勢いのまま建物の外がい壁へきにぶつかってゆき、思いきり反動をつけて方向転てん換かんする。どこかカエルを思わせる動作だ。汚けがれた衣に覆おおわれている体たい軀くはさして大きくもないが、人間離ばなれした身体能力の持ち主であることは間違いない。

ヤツは彼の六メーテルから七メーテル前方を走っている。ただ追いすがるだけなら、もういつでもできるだろう。彼はしかし、ヤツを観察している。ヤツはいったい何者なのか。なぜ薔薇を付け狙ねらう？　あの執しゆう着ちやく心しん、執しゆう念ねんはどこからくるのか？　その源は？　ヤツと薔薇は無関係なのか。それとも……？

彼はちょっとした挙動で、追つい跡せきの進路どりで、ヤツの行

く先を制せい御ぎよしている。右へ。左へ。まっすぐ。ヤツは気づいているだろうか。気づいていようがいまいが同じことだ。ヤツは逃にげているのではない。逃げさせられている。もはやヤツに自由意思などない。彼の意のままに踊おどる道化ピエロ以下の操あやつり人形だ。

まずは薔薇から引き離はなす。遠くへ。

もっと遠くへ。

ひとけのない場所へ。

かつて大陸中の商人たちが競きそうように高層建築を建て、この地を拠きよ点てんとして巨きよ万まんの富が生みだされ、ばらまかれたという第十三区〝摩天楼スカイスクレイ区パーズ〟。

やがて無法者たちが金の亡もう者じやどもを殺さつ戮りくし、何もかも略りやく奪だつして、栄えい華がは汚され、壊こわされて、この一帯は、〝無人地帯ノーマンズエリア〟と化した。

もっとも激げき甚じんな破は壊かいの跡あとが、そこにはまだ残っている。

崩くずれかけたり傾かたむいたりしている高層建築が無様な姿をさらす廃はい墟きよ群だ。

いつ崩ほう落らくしてもおかしくないので、廃墟の内外で寝ね起おきする者はめったにいない。

互たがいに傾いてもたれあう高層建築と高層建築の合間に、ヤツは駆けこもうとしている。その先は大小様々な瓦が礫れきの山しかない袋ふくろ小こ路うじだ。

ヤツは追いこまれた。

彼が追いこんだのだ。

速度を上げて距離を詰つめると、ヤツも足を速めた。まだ余力があったとは。多少意外だったが、驚おどろきはしない。彼は知っている。彼の身体は化物の見本市だ。人間には──ヤツがただの人間ではないとしても、彼にはとうてい敵かなわない。化物の彼は圧あつ倒とう的で一方的な捕ほ食しよく者しやだ。獲え物ものに反はん撃

げきの機会などない。

　三メーテルまで寄せた。

　ヤツが振ふり向いた。

　止まらずに、上半身だけだ。まるで下半身と分断されているかのような奇き怪かいな動きだった。ヤツは何か投げつけてきた。

　瓶びん。二つ。

　小さな瓶だ。

　液体が入っている。

　見覚えがあった。

　彼は首をひねってよけた。

　さらに、二つ。かわせる。あえてそうしなかった。

「ジャシュギシュ」

　目覚めよ、穏おだやかに。

　人間の腕うでの形状を損そこなわず、一・五倍ほどに膨ふくれあがった彼の左腕が小瓶をつかまえた。その途と端たん、爆ばく発はつしたが、衝しよう撃げきも熱も光もすべて掌てのひらの中に封ふうじこめた。間もなく後ろのほうでも爆発があった。

　ヤツは何か声を発した。

「にんげんか」と聞こえた。

　彼は薄うすく笑った。

　ヤツは半分転がるようにして足を速めた。そうかと思ったら、また振り返って小瓶を投とう擲てきしてきた。

　今度の狙いは彼ではない。

　地面だ。

小瓶は割れた。爆発はしなかった。

中身の液体がぶちまけられた。

たいした量ではない。そのままでは。

変化した。

泡あわだ。

きめの細かい、真っ白な泡になった。

膨ぼう張ちようする。ものすごい勢いだ。あっという間にのみこまれた。視界がゼロになった。ただの泡ではない。たとえていえば、マシュマロみたいなものだ。

彼はかまわず突つっ切った。

マシュマロの領域から飛びだすと、目の前にヤツがいて、横合いから何かが襲おそいかかってきた。やけに長かった。ヤツの右腕だ。猪ちよ口こオざいとも思わなかった。彼はヤツの右腕を左手で受けとめ、軽く握にぎりつぶした。ヤツは呻うめきながら左腕を繰くりだしてきた。彼は右手で軽々と止めた。ヤツは右みぎ脚あしで彼を蹴け飛とばそうとするだろう。その前に彼は、ヤツの右みぎ膝ひざを左の踵かかとで丁てい寧ねいに蹴けり砕くだいた。ヤツは年老いた雄お牛うしのように鳴いてよろめいた。彼はつづけざまにヤツの左膝に右足を叩たたきこんだ。両膝をだめにされて、ヤツは立っていられなくなった。しゃがみこもうとしたヤツの顎あごに膝蹴りをぶちこんだ。その瞬しゆん間かん、ヤツはイッた。ヤツの全身から力が抜ぬけたのは、しかし一瞬だった。ヤツは膝がぶっ壊れているのに踏ふんばろうとして、盛さかりのついた獣けものみたいに吼ほえた。彼は軽く首を傾かたむけて、ヤツの右膝と左膝を順番に、だが素す早ばやく、まったく役に立たなくなるまで完全に、左の踵で踏みにじるように粉ふん砕さいした。ヤツは声も出せなかった。

彼はヤツの両腕から手を離はなした。

ヤツはヒイヒイ言いながらだらしなく崩れ落ちた。

彼は間かん髪はつを容いれず跳とびあがって、得意の舞踏ダンスを披ひ露ろうした。

　舞ぶ台たいはヤツの身体からだの上だ。

　回転しながら、前後左右に移動しながら、両腕両脚の関節とおぼしき箇か所しよを踏みしだいた。

　彼は虐殺人形カーネイジドールという自身の二つ名を嫌けん悪おしているが、その気になればそのように振る舞まうことなどたやすかった。そうするために頭の中のスイッチを切り替かえる必要すらなかった。化物が棲すみついている彼の身体には、そのための方法が染しみついているのだ。

　壊す。

　徹てつ底てい的に破壊する。

　ヤツはもう動けない。

　彼はヤツの胸の上に立って見下ろした。

　この身はどこもかしこも化物みたいなものだから、この暗さでも十分見える。

　汚れた衣はフード付きで、ヤツはそれを被かぶっていたのだが、今はもう脱ぬげている。ゴーグルをかけて口を覆おおう防毒マスクのようなものを装着しているので、ヤツの顔はわからないものの、それ以外の部分はあらわになっていた。髪かみの毛は白く、まばらだ。頭皮はただれているのか。いや、腐ふ爛らんしているわけではない。もともとではないのかもしれないが、皮ひ膚ふやその下の組織が引きつったり隆りゅう起きしたり陥かん没ぼつしたりしている。額、耳、首も似たような状態だ。

　彼は瞬間、考えた。

　これは何者だ。

　あの小瓶。同じようなものを使う人物を彼は知っている。複数ではない。一人だけだ。いったいどういうことなのか。

　知りたい。問い質ただしたい。

　頭と身体は別物だ。彼は右足を持ちあげた。息の根を止めようとした。

「まて」とヤツが言った。

　がさついていて、くぐもっていた。ひどく聞きとりづらい声だった。マスクのせいか。おそらく、それだけではあるまい。

「まて。なぜだ。なぜ、わたしの、じゃまをする。なにゆえ、わたしを、さまたげる」

　聞く必要はない。

　聞かなくていい。

　聞かないほうがいい。

「なぜだ。わたしは、ただ、まりあろ――」

　彼はヤツの喉のどに右足を押しつけた。「その名を口にしないことだ」

　声は微み塵じんも震ふるえなかった。彼は笑えみすら浮うかべていた。

　ヤツは呼吸もできず苦く悶もんするしかない。彼は右足を少しだけゆるめた。

「……な……なに、もの……なにもの、だ、き、きさま、は……」

　つまり彼を知らないということだ。エルデンの者ではないのだろう。

「人に名を尋たずねる前に、自分から名乗ったらどうだい」

「わ……わたし、は……」

　何か硬かたい物をこすりあわせるような音がした。歯は軋ぎしりをしたのか。

「……わが、なは……い、いしゅたる……あがめむの……ど……ごーどん……」

　イシュタル・アガメムノ・ド・ゴードン。

　真しん偽ぎはともかく、名前からすると、ラフレシア第三帝てい

国こくの貴族か。

「……き、さまは……なに、もの……」

「友人だヨ」

「ま、り──」

　彼はすかさず右足に体重をかけた。「口にするなと言わなかった？」

　ゴードンは何度か顎を引いた。うなずいたつもりらしい。彼は右足を浮かせた。ゴードンは身じろぎもしなかった。用心深い。抜け目がないのだ。

「ゆ、ゆうじん……そうか……それで……」

「勝手に納なつ得とくしないでほしいネ」

「……わ、わかった……」

「キミは何だ」

「な、なに……とは……」

「なぜつけまわす」

「そ……それ、は……」

「ずいぶん長い間、張りついてたネ」

「……わ、わたしは……それは……あのものは、わたしの……わたし、の……」

　言葉を選んでいるのだ。どう言えば彼の逆げき鱗りんにふれないか。狡こう猾かつだ。

「……かつて……わたしの、しようにんとして……」

　ということは、使用人などではなかったのだろう。

　何だったというのか。

「キミはラフレシアの貴族だな」

「……そ、そうだ……し、ししゃく……」

「子し爵しやくか」

「もと……だ……いまは、ちがう……もはや、わたしには……」

「罪を犯おかして、お家取り潰つぶしにでもなったのかい」

「……つみ……わたし、は……つみなど……おかしては、おらぬ……」

「まあ、どうでもいいサ」

「な……」

「ここはエルデンだ。他国の事情はよく知らないけどネ。ここには罪なんてものは存在しない。それくらいのことはキミも知っているだろう」

「……も、もちろん……」

「ただ因果だけだ」

「いん……」

「キミの行いがある結果をもたらす。それだけのことだ」

　彼は気づいていた。自分が何のために長ちよう広こう舌ぜつをふるっているのか。

　直接的な表現で詰きつ問もんすることはできない。彼が何を求めているのか。ゴードンが勘かんづけば、必ずそれを利用して何か企たくらむだろう。最終的に自じ暴ぼう自じ棄きになり、彼にそれを与あたえないまま自じ滅めつする道を選せん択たくしようとするかもしれない。

　彼はその結末を恐おそれている。

　それほどまでに欲ほつしているということだ。

　薔ば薇らはゴードンにとって何だったのか。薔薇とゴードンの間

に何があったのか。

　ゴードンは何かを知っている。

　彼が知らないことを。

　知りたい。

　何もかも知りたい。

　ゴードンが知っていて、彼は知らないことがある。

　許せるものか。認められるものか。

　こんな欲よく望ぼうは断たち切るべきだ。

　彼はゴードンの顔面に右手を向けた。「──アルカーディア」

　右手首のあたりから何本もの黒い管が飛びだし、ゴードンのゴーグルとマスクをかすめた。

　ゴードンが身体からだを震ふるわせた拍ひよう子しに、壊こわれたゴーグルとマスクが顔の上から滑すべり落ちた。

　彼はほんの少しだけ目を細めた。

　何のことはない。ゴードンの顔面は頭皮と変わらない状態だった。皮ひ膚ふの下で数百、それ以上の蚯蚓みみずがのたうちまわり、ある瞬しゆん間かん、時が止まったら、こんな具合になるかもしれない。瞼まぶたもゆがんでいるが、眼球は一応、露ろ出しゆつしている。鼻び梁りようらしきものはない。鼻の穴は一つだけだ。口はひび割れた裂さけ目のようで、唇くちびると呼べるようなものはなかった。

「み……醜みにくかろう……」

　ゴードンの言わんとしていることは彼にもわかる。しかし自己憐れん憫びんにつきあってやる義理はない。そもそも、とくに醜しゆう悪あくだとも思わない。ただそのようなものとしてそこにある。それだけのことだ。

　彼はしとめるつもりだったのだ。

　仕損じた。そんなわけがない。アルカーディアが反逆を試みた。違ちがう。ありえない。

「私は……さぞかし、醜かろう……？」

　ためらったのか。迷いが生じたのか。

　ゴードンは笑った。

「……私は……すべてを失った……もはや、取り戻もどすことはできぬ」

　芝しば居いじみた独白だ。聞かせたいのか。喋しゃべらずにはいられないのか。

　ならば、喋らせておけばいい。

「だが……あの者だけは」

　ゴードンの濁にごった瞳ひとみがぼんやりと光をたたえた。

「あの者だけは、あきらめきれぬ。なぜなら、あの者は私の」

　彼はゴードンの喉のどを踏ふみ抜ぬこうとして、寸前で足を止めた。

　ゴードンの口の両りよう端はしがわずかに持ちあげられている。

「くく……そうか」

　彼は表情を仮面のように固定すべく努力しなければならなかった。

　逡しゆん巡じゆんしたあげく、乗せられたのだ。

　ゴードンは青みがかった舌で口の周りを舐なめた。唾だ液えきは黄ばんでいた。

「友人などではない。貴公はあの者を愛しているのだな。それも、深く、深く。あの者だけを。あの者に惹ひかれ、魅み入いられ、あの者だけを胸の奥に住まわせているのだな」

　彼は返事をしなかった。答えるべきなのか。どう答えれば、ゴー

ドンは真実を語るのか。真実？　ゴードンが何を打ち明けようと、真しん偽ぎを確かめるすべがない。すべて虚きよ言げんでしかないと考えるべきだ。聞くことはない。

「しかし貴公はあの者のそばにはおらなんだ。互たがいに想おもいを寄せあい、慕したいあい、愛しあっている間あいだ柄がらではないということだな。むべなるかな。それはそもそも不可能だ」

　彼は思わず呟つぶやいた。

　不可能……？

　いや、唇が動いただけだ。声は出さなかったが、ゴードンには読まれた。

「そうか。そうか。そうか。そうか。そうか。そうか。貴公は」

　ゴードンはいびつな瞼をいっぱいに開いた。虹こう彩さいが異様な輝かがやきを宿している。

「貴公は知らぬのだな。あの者のことを何も知らぬ。それで私の名にも聞き覚えがないのだな。たとえば貴公があの者の友人だったとしよう。心を許した親しき友だったとしよう。されば、我が名を知らぬというのも解げせぬ話。私との過去はあの者にとって小さくはなかろう。いかような意味かはさておき、むしろ巨きよ大だいだろう。心腹の友であれば、我が名くらいは聞き知っていよう。知らぬはずがないのだ」

　彼はゴードンの口を閉じさせるよりも、一つのことに思いあたって歯は嚙がみしたい衝しよう動どうを抑おさえることに骨を折っていた。

　ゴードン。

　小こ瓶びんにたたえた爆ばく薬やく液を、薔薇はたしかハーレム・ゴードンと呼んでいた。

　忘れていたというのか。少なくとも、すぐには思いださなかった。

「錬れん金きん士しか」

　口が滑った。

　ゴードンは、ひい、ひい、ひい、とおぞましい笑い声を立てた。

「そうだ。私は錬金士だ。なぜ貴公はそう思う？　当ててやろう。あの者が錬金術の産物を用いているからだ。そうだろう？　私が手ほどきしたのだ。一から教えた。手とり足とり。錬金術だけではない。あの者の立ち居い振ふる舞まいは美しかろう？　礼れい儀ぎ作法もしっかりと身についている。すべて私が教えこんだ」

　黙だまれ。

　彼の頭は、身体は今、つめたい怒いかりに占しめられている。あまりにつめたすぎて、凍いてついている。声が出ない。

　本当にそうか。違うのではないか。彼は聞きたがっているのではないか。

「あの者は売り物だったのだ。エルデンで人買いに捕とらえられた。競売にかけられ、私が買った。競せり落とした。高い買い物だった。あの年の最高値だった。それに見あうだけの価値があの者にはあった。私はあの者を大切に大切にした。私には大勢の子があったが、あのように慈いつくしんだ者は他ほかにいなかった。一人としていなかった。あの者は特別だからだ。あの者は違う。何者とも違う。そうか。そうか。そうか。貴公は知らぬのだな。そうか」

　どうするべきか。自分が何をなすべきなのか。彼はわかっている。それなのに、できない。身体が動かない。

　薔ば薇らのことを考えている。

　マリアローズ。

　売り物。人買い。買われた。競り落とされた。ああ、そんな──

　何が？　いったい何があった？　人買いに捕らえられた？　競売？　そんな──

　どんな目に？　どんな痛みを？　どんな傷を？

　キミの笑え顔がおが浮うかぶ。

　仲間たちに、友人たちに囲まれて、キミはうちとけた笑い声を弾はじけさせている。

　ボクにだって、そっと笑いかけてくれた。ああ──

「貴公は知らぬのだ。私の知るあの者のことを貴公は一つとして知らぬのだ。私は知っているよ。あの者のことをよく知っている。私は何もかも知っている。すべて、だよ。あの者の身体からだの隅すみ々ずみまで、魂たましいの端々まで、私は知っている」

『おい』とキミはボクを睨にらみつけた。『今、何て言った』

　初めて出会った日のことだ。

『訂てい正せいしろ。誰だれが女の子だ』

　真しん紅くの髪かみの毛よりも燃えたつような橙だいだい色いろの瞳がボクの胸を刺さし貫つらぬいた。

　キミは美しかった。

『嘘うそなもんか、僕は女じゃない！　くそ、頭にくる、この目め腐くされゲス野や郎ろう、お前なんか死ね、百回死んで、ずっと死んでろ……！』

　ああやって、キミは自分のことを守っていたんだ。

　守るしかなかったんだ。

　一人きりで。

　ゴードンは血のような涙なみだを流し、黄色っぽい唾だ液えきを垂らしはじめた。

「知ることにより、人は手に入れるのだ。知ることによって、支配する。それゆえに私はあの者を知ろうとしたのだよ。貴公はあの者を愛しているのだろう？　手に入れたいのだろう？　あの者を支配したかろう？　それなのに、貴公は知らぬ。あの者を知らぬ。私は知っているのだよ。あの者が懇こん願がんするときの表情を。あの者が哀あい願がんするときの声こわ音ねを」

「うるさい」

小さな声だった。繰くり返した。

「──うるさい」

「あの者が私に媚こびるときのなまめかしい仕し種ぐさを。恥はじらう顔つきを。あの者のどこにふれれば、あの者がどのように身をくねらせるか。どれもこれも、私は知っている」

ああ──

目がくらむ。

ゴードンは、あっ、あっ、あっ、と奇き怪かいな鳥のように鳴いた。

「私は知っているのだ……！　知ることによって、私はいまだにあの者を所有している！　あの者を支配している！　あの者のすべてが私の中に刻まれていて、消えることはない……！」

いいはずだ。

憤ふん怒ぬのままにこの外げ道どうを殺して何が悪い。

彼はそうしようとした。

ゴードンは見み透すかしていたのか。

「教えてやってもいいのだよ」

「──何……？」

「教えてやろう。あの者の悲しみも痛みも、そう、私が知りうるかぎりのあの者の過去、そして私があの者にした仕打ちについても、何もかもを貴公に教えよう。あの者が特別で、唯ゆい一いつである理由も、貴公はどうやら知らぬようだから、もちろん教えよう。洗いざらい話そう」

「命いのち乞ごいかい」

「あの者について教えれば、私を見み逃のがしてくれると……？　それはそれは。私としてはそこまで望んではいなかったが。せっかくそちらから持ちだしてくれた交こう換かん条件だ。ではそういう

ことにしようか」

「そんなことをして、キミに何の得がある」

「得？　得だと？　私に？　誤解してもらっては困るな」

「何を企たくらんでいる」



「私がこの無残な口であの者について語るとしよう。貴公は疑っているかもしれぬ。それが真実だという保証がどこにある、偽いつわりではないのかと。なるほどそうかもしれぬ。私は真実だと信じているが、さまざまな要因によってゆがめられている可能性もある。だがしかし、欠片かけらほどの真実はふくまれているだろうとは思わぬか？　知らぬよりは知ったほうがよいのでは？　知ることので

きる機会を逃のがすべきではないのでは？」

「キミにとって、何の意味があるんだ」

「だから貴公は誤解していると私は言っているのだ。私はあの者を愛しているのだよ」

「言うな」

「いいや、言わせてもらうよ。私はあの者を愛しているのだ。腹立たしいのなら私を殺あやめてもかまわぬが、私はあの者を愛している。貴公もそうなのだろう？　いい。答えずとも私にはわかる。愛しているのならば、貴公は知るべきだよ。何もかも知るべきだ。知りたいだろう？　それとも、恐おそれているのか？」

　彼はあやうく奥歯を噛かみしめかけた。

　ゴードンは首を曲げた。

「知るのが怖こわいのか？　貴公の知らぬあの者を知るのが恐ろしいのか？　知ることによって貴公の愛にひびが入るかもしれぬ。瑕きずがつくかもしれぬ。ことによると砕くだけ散ってしまうかもしれぬ。恐れているのか？」

「違ちがう」

「なれば、貴公は真実に耳を傾かたむけるべきだ。知るべきだ。あの者も喜ぶだろう。きっと喜ぶはずだよ。あの者も理解されたいはずだよ。どうか理解してやってほしい」

「お為ごかしを」

「貴公に覚えていてほしいのだよ。あの者の口からは未み来らい永えい劫ごう決して語られることのない真実もあるはずだ。あの者が私の前で、私だけの前で見せた顔を、姿態を。私は万の言葉を費ついやして貴公に伝えよう。私が知っているあの者のすべてを貴公に教えよう」

　それか。それが狙ねらいか。

　語るに落ちたというやつだ。ゴードンはあることないこと彼に吹ふきこんで、かき乱すつもりなのだろう。もしかしたら、自分の命

はもうあきらめていて、置き土産みやげのつもりなのかもしれない。ただでは死なないというわけだ。

　ただで死なせてやる。

　彼はふたたび右手をゴードンの顔へと向けた。

「終わりだ」

「待て！」

　ゴードンは黄色い唾つばを飛ばして叫さけび、これ以上ゆがみようのない顔を、それでもどうにかゆがめてみせた。

「──待て。待ったほうがいい。貴公は知りたくはないのか？　あの者の──マリアローズの、この世にたった一人しかない神秘の、完全なる存在の、その秘密を！」

「秘密……」

　騙だまされるな。妄ぼう言げんだ。姦かん計けいだ。

「知っておいたほうがいい！　知るべきだ！　知れば、貴公にもわかるはずだ！　マリアローズが完全であることの意味を知らずして、何が愛か！　その悲しみの痛みの苦しみの絶望の源を知らずして、マリアローズを真に愛することなどできるものか……！」

　まだあるのか。マリアローズを深く傷つけ絶望の淵ふちに叩たたき落としたものが、悲ひ惨さんな過去以外にもあるというのか。

　何かあるとは思っていた。

　知りたかった。

　歯がゆかった。

　もどかしかった。

　手をのばせば届くところに、それがある。

　いや、手をのばす必要すらない。じっとしているだけでいい。ただ耳を傾けていればいい。

　ゴードンは吼ほえた。

「マリアローズは……！」

　彼は命じた。

「アルカーディア」

　震ふるえない。揺ゆらがない。ためらいはない。

「静かに殺せ」

　彼女は忠実に彼の命令を遂すい行こうした。彼の右みぎ腕うでがほどけて数十本の黒い管となり、まずはゴードンの一つしかない鼻の穴や裂さけ目のような口や耳の穴に滑すべりこんで完かん璧ぺきにふさいだ。ゴードンはこれで声を出すことはおろか呼吸することもできなくなった。その一いつ瞬しゅん後から彼女はイシュタル・アガメムノ・ド・ゴードンという存在を蝕むしばみはじめた。彼女はゴードンを貫つらぬいて無数の穴をあけた。小さな穴は中くらいの穴となり大きな穴となった。血しぶきなどあがらなかった。血液はただ流れだし広がるだけだった。ゴードンは物の数秒でゴードンではなくなった。それが何であるか表現できる者はきわめて稀まれだろう。もはや皆かい無むだろう。彼女はそれらの作業をひそやかに執とり行った。彼はその模様を眺ながめるでもなく眺めていた。

　すべて終わり、彼が身をひるがえすと、そこらじゅうから黒々とした蟲むしが這はいだしてきて子し爵しやくだったものに群がった。

　新しん鮮せんな死し臭しゆうをことのほか好む彼らは、これ以上ないくらい優ゆう秀しゆうな掃そう除じ屋だ。

　子爵だった男は間もなく消えるのだろう。

　血は一ひと滴しずく残らず啜すすられ、肉も、砕かれた骨まで食いつくされる。

　跡あと形かたもなく消し去られてしまう。

　彼は一度たりとも振ふり返らず、たわむれに別れを告げることもなかった。

　さよならさえ重すぎる。

　目が覚めたら、頬ほおが濡ぬれていた。

　頭が重い。

　袖そでで目の周りをぬぐった。

「……最悪」

　熱でもあるのだろうか。ひどく身体からだがだるい。

　夢を見た。たくさんの夢を。どれもあまりよくない夢だった。悪夢だった。

　いっぱい傷つけた。自分でも不思議だ。どうしてあんなことができたのだろう。

　第十三区の廃はい墟きょ地帯で、いつだったか、あいつが言った。

『キミに責任はない』

　思えば、あの裏返しの言葉が唯ゆい一いつだったかもしれない。あれが最初で最後だった。あのとき以外、あいつが僕を責めたことはない。ただの一度もなかった。

　それなのに、僕はどう？

　ひどいことばっかりして。思いだしたくもないくらい。思いだしちゃったよ。夢に出てきて。実際にあったこと、ぜんぶそのままじゃないけど、思いあたることだらけだった。

　こうなってもしょうがない。

　当然だよね。

　僕は、だって、嫌きらわれたかったんだし。

　遠くへ行ってほしかった。

　そのとおりになった。

　自じ業ごう自じ得とくだよ。

　朝ご飯なんかとても喉のどを通らなかった。それでも無理をして食べた。みんなに心配されたらたまらない。無む駄だな努力だった。気づかれた。

「マリアさん、もしかして、具合とか悪いです……？」

「顔色・よくないデス」

「むう。言われてみればそうだな」

「きゅう」

　大だい丈じよう夫ぶだと言い張ろうとした。でも、今日はＤ３に行くことになっている。さすがにこの状態では、仲間に迷めい惑わくをかけてしまいそうだ。

「……あー、なんか、風か邪ぜひいちゃったかも？　悪いんだけどさ、今日は……」

　Ｄ３探たん索さくはとりやめになった。

「マリアがいないんじゃあな」というトマトクンの鶴つるの一声で決まった。「俺も最近はまともに指揮をとってないし、司し令れい塔とうなしであそこはやばいだろう」

　反対意見は出なかった。

　みんな、気を遣つかってくれたのかな。

　もし僕抜ぬきで行って何の不都合もなかったら、また臍へそを曲げるんじゃないかって、そう思われているのかもしれない。

　午前中は部屋で寝ねていた。眠ねむれはしなかった。どうにかしないと。そればかり考えていた。

　このままだとまずい。切り替かえないと。早く切り替えたい。どうすれば？

　昼すぎに、ピンパーネルときゅーとルーシーが共同作業でお粥か

ゆを作って持ってきてくれた。食べないわけにはゆかなかった。体調はだいぶましになった。そう思うことにした。

　気の持ちようなんだ。

　十五時ごろにリビングへ行ってみたら、トマトクンはソファーで昼寝をしていて、そのそばできゅーが編み物をしていた。ピンパーネルとルーシーはどこだろう。きゅーに訊きいてみたら、どうやら外出したらしい。

　庭で身体を動かすことにした。動きやすい服に着き替がえて外に出たら、きゅーがついてきてくれた。

　編み物のつづきをしているきゅーの横で、念入りに柔じゆう軟なん体操をした。

　身体がほぐれてあたたまってくるに従って、だんだん頭がすっきりしてきた。

　空は晴れ渡わたり、もうすぐ終わろうとしている五巡月の風は、ほんの少しだけつめたい。

　芝生しばふの上で受け身をとる練習をした。

　転がって、頭を打たないように背中を丸め、手足で勢いを止めて、すぐに起きあがる。

　何度も繰くり返して、身体に覚えこませるのだ。

「積み重ね、積み重ね……」

　できることなんて、それくらいしかない。

　忘れてしまわないように。

　何だろう。

　身体がやけに重たい。

　仰あお向むけになって、しばらく空を見ていた。

　だしぬけにあばら骨がきゅうっとなって、顔をしかめた。

　歯を食いしばっていないと、何かが出てきそうだ。

　フードを目ま深ぶかに被かぶって、ゆっくりと息をついてみた。

　吐はきだす息が震ふるえた。

　目をつぶって、両手で顔を覆おおった。

「くう」

　きゅーの声が聞こえた。

　返事なんてできやしなかった。

　平気だ。

　発ほつ作さみたいなものだ。

　すぐおさまる。

　浅い息が次し第だいに深く、深くなってゆく。

　心臓を握にぎりしめられているかのような痛みも、徐じよ々じょに引いていった。

　熱だけがしこりみたいに残って、消えようとしない。

　手をどけて、目を開けた。

　まばたきをした。

　目を凝こらした。

　右手を持ちあげかけて、思いとどまった。

　あいつがいる。

　すぐそばに片かた膝ひざをついて、薄うす青あお色の瞳ひとみで僕を見下ろしている。

　前まえ髪がみが風に流れてさらさらと揺ゆれた。

　あいつは口くち許もとをゆるめて、ちょっとだけ目を細めた。

　そして「やあ」と言った。

　起きあがって、あいつに背を向けて、膝ひざを抱かかえた。

　やだ。どうしよう。どうしよう。どうしよう。

　どうしたら？

　何がどうしてどうすれば？

　胸が。

　せっかく静まっていたのに、胸が。

　顔が。

　身体からだの奥に凝りかたまっていた熱が上がってきたかのようだ。

　熱い。熱いなんてものじゃない。熱すぎる。

「……どうかしたのかい？」

　頭をぶんぶん振ふった。

　言えない。何も言えない。口を開くことができない。心臓が飛びだすに決まっている。

　目を閉じて、唇くちびるを嚙かんで、顔全体を膝に押しつけた。

　落ちつけ。落ちついて。落ちつくんだ、僕。思いっきり落ちつかないと。限界まで落ちついて、落ちつきまくらないと。

　肩かたで息をしながら、少し顔を上げて、横目できゅーを見た。

　きゅーは編み物こそしていないけれど、のんきに首を傾かしげている。「──くう？」

　くう、じゃないって。

　そりゃかわいいけどそういう問題じゃないし、何やってくれやがったりしてくれてるんだよきゅーってば、こういうときはあれじゃないかほら、だからあれでしょなんていうかその、不法侵しん

入にゆうは許すまじっていうかそういう何？　いつもそうだしそうだったわけだし、それなのになんで今日にかぎってあれなの？　おかしくない？　ねえ？

「え──と……」

　あいつは戸と惑まどい気味に頭でも掻かいているのだろう。見えないからわからないし知らないけど、知ったこっちゃないんだけど。

「いきなりだし……よくなかったかな？　というか、すんなり入れてもらえるとはボクも正直、思っていなかったんだけど……」

　ほんとだよ。ほんとにそうだよ。どういうことだよ。これって由々しき問題だよ。責任の所在を明らかにして今後の対処について検討しなきゃだよ。なんか言いたいことは、言わなきゃいけないことはいっぱい、それはもうたくさんあるような気がするけど、だめだよ。

「うぅー……」

　そんな声しか出てこない。呻うめき声だ。もはや人間じゃない。何だよもう。何なんだよ。

「あの……」

　あいつは芝生しばふに腰こしを下ろしたのかもしれない。どうでもいいけどそんな気がする。

「ひ、久しぶり……だネ？」

　何かが切れた。

　振り向いて叫さけんだ。

「それがどうかしたっ⁉」

「え……」

「久しぶりとかそんなの知らないし、だっていつから会ってないとかぜんぜん覚えてないしさ、てゆうかどうでもいいし、いちいち言わなくていいんだよ関係ないんだから、どうだっていいだろそんな

こと、てゆうか僕にとってはめちゃくちゃどうでもいいし、ようするにきみもどうせあれでしょ、どうでもいいからあれだったわけでしょ、そうじゃなきゃ変だし、それがどうしたってかんじだけど！　マジで、それがどうかした⁉　べつにどうもしないと思うけどさ、結局、そういうことでしょ⁉　いいんだけど！　それならそれで！」

「いや、ど、どうでもいいなんて、そんなことは……！」

「だから、どうでもよくって結構！　そう言ってるだろ！」

「違ちがうヨ、ボクはただ──」

「あ……」

　だめだ。これじゃあ。そうじゃない。これだけは。これだけは確かめておかないと。

　そうはいっても、目を見て訊きくなんて無理だ。マリアローズはうつむいた。

「……な、何か──あったの？」

「へっ。な、何かって？」

「その……大変なことっていうか……あのとき、みたいな──」

「ああ」

　あいつは短く息をついた。

　顔を上げると、あいつは太陽の光を浴びて輝かがやく銀色の月みたいに微笑ほほえんだ。

「ないヨ。何もないサ。ただちょっと──ボクも一応、頭領マスターだからネ。昼飯時ランチタイムでいろいろあって。たいしたことじゃないんだけど」

「たいしたことじゃ……ない？」

「うん」

「嘘うそじゃなくて？」

「ボクがキミに嘘をつくわけがないだろう？」

「そ……っか」

　信じてもいいのかな。

　また僕の知らないところで、何か大きな荷物を背負ったりしていない？

　もしそんなことがあったら、僕は。

　僕は──

　てゆうか。

「……それなら、うん」

　マリアローズは下を向いて立ちあがった。

「よかったよ。元気そうだし。いいことだよね。よかった、よかった。それじゃ」

　回れ右をして玄げん関かんのほうへと向かった。

「──え？」あいつは追いかけてきた。「あの……え？　そ、それだけかい？」

「それだけって？」マリアローズは足を速めた。

「だから、こう……しばらくぶりなわけだしネ？」

「で？　何？」

「き、近きん況きようの報告とか？　お互たがいの……」

「ない」

「ない？」

「うん。ないよ。なーんにも。話すようなことは。うん。思いつかないし。さっぱり」

「そ、そ、そんなことはないだろう？　きっと何かあるはずサ。

ちょっとだけでいいから、考えてみてはくれないかい……？」

　あいつは追ってくるだけで、行く手に立ちふさがろうとも、横に並ぼうともしない。

「考えても無む駄だだし。無駄なことはしない主義だし」

「だ、だったら、話なんかしなくたっていいヨ」

「話もしないで、何するわけ」

「ただ見つめあうだけでいい！」

「冗じよう談だんでしょ」

「そばにいるだけで！」

「白昼夢でも見てれば？」

「もちろん夢ではいつもキミと一いつ緒しよサ！」

「うざいんだけど……」

「フッ。かといっておかしなことをしたりはしないヨ？」

「夢の中でまで意い気く地じなしなんだ」

「えっ……？」

　玄関のドアを開けて中に入った。

　振ふり返ると、あいつはぼんやりした顔で突つっ立っていた。

　僕は今、どんな表情をしているのだろう。

　何か言いたくてドアを開けたままにしてあるのに、どうしても声にならない。

　あいつは二度、まばたきをしてから、僕の名を呼んだ。

「マリア」

　ゆっくりと、でも、区切らずに、大切に、抱だきしめるように。

「マリアローズ」

　それだけで、僕はわかってしまった。

　本当はきっと、気づいていないのは僕じゃなくて、きみなんだ。

　そんなふうに思われたら、誰だれだって受けとめきれずに身をすくめてしまう。

　だけどたまらず踏ふみだしてしまいそうになって、ドアを閉めた。

　息が止まっていた。

　ドアに背をあずけて、ようやく再開した呼吸がなぜか妙みように懐なつかしく思えた。あいつの名を呟つぶやいてしまいそうになった。右手で喉のどを押さえて、それだけでは足りず、左ひだり腕うでで自分の肩かたを抱だいた。苦しかった。

link-8

くそたわけ

Fool On The Ground

　ジャン・モーロウは例によって例のごとく今日も不ふ機き嫌げんだった。

　持病の腰よう痛つうに加えて、このごろは膝ひざの具合もよくない。肩かた凝こりや背中の張りとの腐くされ縁えんは死ぬまで断たち切れないだろう。

「長旅があかんかったわ」

　キングダム・イズルハの左大臣閣下は旅がお嫌きらいだ。馬に乗るにせよ馬車に揺ゆられるにせよ、若くない肉体に鞭むち打うつがごとき行こう為いに喜びを見いだす輩やからは一種の倒とう錯さく者しやだろう。疲ひ労ろうなど一いつ切さい感じたくない。思考のみの存在となって、古今東西の事物の間を漂ただようことができれば他ほかには何もいらないのだ。それがジャン・モーロウの果たされることのない宿願であり、夢叶かなわぬ現世は当然のことながら苦界でしかなく、何もかも気にくわない。

「何が悲しうてこのワシがこないな茶番につきおうたらなあかんねや」

「閣下、お声が大きうございます……」

　そのうえいい年をしてまるで小こ姓しようのような駐ちゆうラフレシア大使ヤナン・タフトが諫かん言げんぶってくだらない小言を耳打ちしてきたものだから、モーロウの不快感はいや増すばかりだ。

「あほだら。ワシがワシの思とること思とるとおりにゆうて何が悪いんや、ぼけ」

「そないなことおっしゃいましても、周りの耳もありよることですし……」

「周りも何も、どなたはんも口に出さんだけでおんなしこと思とるに決まっとんのやないか。そないゆうても立場だの体面だの体てい裁さいだの何のかのありよるさかい、ざっくばらんにはよう言われへんのやろ。せやから老い先短うてもう、オノレがくたばったらどないなりよるのか、それだけが楽しみなワシが代弁したってるんやないか。見てみい。笑いこらえとる御ご仁じんがそこにもあそこにもおるやろ」

「か、閣下にも我が国の左大臣であらせられるという、重要きわまりないお立場というものがおありになりよるのですぞ」

「ぼんくらここに極きわまれりやな。この界かい隈わいでワシのたわけっぷり知らんっちゅうたらモグリやで。ワシがこないなヤツやっちゅうことなんぞ、どなたはんも承知なさっておられるに決まっとるやろが。ほんま、ワレと口きいとったら早うこの世とおさらばしとうなって、刻一刻と寿じゆ命みようが縮まるわ。自覚せえよ。くそ間ま抜ぬけなワレが今この瞬しゆん間かんも真綿でワシの首絞しめてんねん。ワシが早晩死んでもうたらワレのせいや」

「か、閣下にはまだお元気でおってもらわな困ります」

「勝手に困っとったらええがな。ワシの知ったことやない」

「そ、そんなご無体な！」

「声がでかいわ、あほ」

　ヤナン・タフトはあたりを見まわすと、赤面してうつむいた。これでもイズルハでは屈くつ指しの人材で、それがために王国にとって最大の交易相手であるラフレシア第三帝てい国こくの駐ちゆう在ざい大使という重大な地位にいる。しかも、タフトを抜ばつ擢てきしたのは他の誰だれでもない、モーロウ自身なのだ。人ひと懐なつっこく、おっちょこちょいに見えて、なかなか腹黒いところもあり、人情家を装よそおいながら平気で背中から他人を刺さすような残ざん忍にんさを持ちあわせているあたり、まったく使えない男ではないのだが、四十の坂を越こえているくせに、人間的に軽すぎる。

　モーロウは舌打ち混じりに口の中で呟いた。「こんなんやったら、ようくたばられへんわ」

「……は？　何かおっしゃいましたか、閣下？」

「ワシは何も言うとらん。空耳やろ」

「さ、左様でございますか。ほんならええのですが」

「うつけの相手するのんは、ことのほか疲つかれるわ」

「む？　今のは……？　また空耳でしょうか？」

「あからさまにちゃうやろ」

「そうですか。そうですよね。それはよかった」

「何がええんや……」

　モーロウは眠めい目もくしてため息をついた。

　ほんまにな。因果なもんやで、カタリ。

　あないな国に生まれてもうたんが、ワシの運の尽つきや。

　キングダム・イズルハは資源産出国だ。それも、金こん剛ごう輝き石せき、ダントタイル、イキシシュタロといった特とく殊しゆな稀き少しよう鉱石の鉱山を保有していて、何度も隣りん国ごくから侵しん略りやくされ、征せい服ふくされた過去を持つ。ここ五十年ばかりは奇き跡せき的に独立国としての体裁を保っているが、それもいつまでつづくことやら。もともと隣となりのエーメン大君国の支配下に置かれていて、彼かの国で政変が起こったことをきっかけに、ファー・セルジナがイズルハを掌しよう中ちゆうに収めんとして軍を進めてきた。すると北のハッツフォー独立軍領とトレイン公国が呼応してファー・セルジナの国境を侵おかし、あっという間に大乱状態になったものだから、さあ大変だ。イズルハは身の程ほど知らずにもベルドリッド王国の支し援えんを受けて独立を果たしてしまったが、それからはあっちにいい顔をしてこっちにもいい顔をし、八方美人のふりをしながら、ラフレシア第三帝国、顚テン聖セイ虞グ、熾シキ帝国といった遠くの大国とよしみを結び、各国の影えい響きよう力を利用して勢力の均きん衡こうを保ちつつ、どうにかこうにか綱つな渡わたりじみた国家運営をつづけなければならないという宿命を課されることになった。

　現在のキングダム・イズルハは繁はん栄えいをきわめている。金はある。腐るほどある。

　イズルハは金庫だ。

　資源を吐はきだしてためこんだ金は、やがて必ずいずれかの国に奪うばわれる。

　餌えさを与あたえられ、肥え太らされている家か畜ちくのようなものだ。食いごろになったら、誰かがひっつかまえて絞しめて捌さばいて調理しようとするだろう。どいつもこいつもその機会をうか

がっている。皆、それがわかっていて、睨にらみあっている状態だ。手を出すとなったら名分くらいは必要なので、内心では誰かが先に動いてほしいと願っている。そうしたら、我こそは哀あわれな弱小国を救う者なりと高らかに宣言して、颯さつ爽そうとキングダム・イズルハの国土を丸のみにしてくれよう。それが連中の腹で、こちらとしては何もかも承知していながら、現状維い持じが精せいーいつ杯ぱいだ。軍備の増強。強国との関係強化による隣国への牽けん制せい。政略婚こんを駆く使しした隣国との融ゆう和わ策。金と知ち恵えにあかせた離り間かん策。何をやってもイズルハはイズルハのままだ。いざとなったら列強はよってたかってイズルハを蹂じゆう躙りんし、いくつにも引き裂さいて我が物とする方法を選ぶだろう。イズルハにおいては全知全能を発揮しているといっても過言ではない左大臣閣下にできることはそう多くない。正確に言えば、深しん慮りよ遠えん謀ぼうも機略も陰いん謀ぼうも奇き計けいも効果は非常に限定的だ。どれだけ苦く心しん惨さん憺たんしたところで、厩きゆう舎しやの家畜は家畜でしかない。それを思い知らされるだけの日々だった。そして左大臣はやりすぎたのだ。何もかも手をかけすぎたせいで、イズルハは今や左大臣閣下の国と化している。左大臣がいなければーいち巡じゆん月げつともつまい。彼なりに心血をそそいできた玩具おもちゃのような家畜国家が、それではあまりに情けないではないか。

　このたび、ラフレシア第三帝国の先せん帝てい国こく葬そう及および次代皇こう帝てい継承大典レサクセシオンにジャン・モーロウ自ら出席することを決意するにいたったのは、まさにイズルハを左大臣離ばなれさせるための第一歩として、長期間国を空けて何が起こるか確かめようというのが動機の第一だった。

　むろん、ラフレシアは最大の輸出先だから、新しい皇帝陛下に精せいーいつ杯ぱい媚こびを売っておかねばならないという表向きの理由についても、軽かろんじているわけでは決してない。

　モーロウはこれで権力者には愛される。当然そう仕向けているのだが、今までも多数の国王、帝王、大貴族を舌先で言いくるめてきた。

　ラフレシア第三帝国次代皇帝クリストフ・マガレスト・ヴィド・ラフレシア陛下にも、是ぜ非ひ気に入られたいところだが、さて、どうなることか。

　先ごろ享きよう年ねん七十二歳で崩ほう御ぎよされよった先帝陛

下の長男坊ぼうは、もともと出来のええ息むす子こっちゅうわけでもないからな。ちゅうか暗あん愚ぐに近いやろ、あれは。

さすがのモーロウも、これは口に出さず胸中で呟つぶやくにとどめた。

何しろ、ここ帝都太華饒京アルマンドナの望ル天バ蓋ナ地ビ宮アで現在、執とり行われようとしている式典こそが、そのクリストフ・マガレスト・ヴィド・ラフレシア陛下の継承大典レサクセシオンなのだ。

広大といってもいい望ル天バ蓋ナ地ビ宮アの天ウ地ル境カのナ間ンは、皇帝の臣下、文官武官をあわせて五千七百名余と、他国からの招待客四千名余とでほとんど埋うめつくされていた。

この他ほかにも、望ル天バ蓋ナ地ビ宮アを警護するべく動員されている兵士が約七万八千名、太華饒京アルマンドナ全体には十二万五千名、平時でも防備の厚い都ではあるが、それにしても二十万名以上の兵員が帝都一帯に集中していて、それでも国境の紛ふん争そう地帯からは一兵も動かしていないというのだから恐おそれ入る。

天ウ地ル境カのナ間ンの中央には深しん紅くの長い長い絨じゆう毯たんが敷しかれていて、その右側には皇帝の臣下、左側には他国の者たちが突つっ立っているのだが、キングダム・イズルハの左大臣と駐ちゆうラフレシア大使以下の使節団にあてがわれた場所は、広間のだいぶ奥のほうで絨毯の近くだ。

向かいには第三皇子オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィス・ラフレシア殿でん下かとその後見団セコンダンテがいる。

それより奥には第二皇子のエルネスト・アルヌール・ヴィス・ラフレシア殿下とその後見団セコンダンテ、さらに皇太后とその一族、そして次代皇帝陛下の近ガ衛ル団デという並び順になっているから、キングダム・イズルハの使節団としては、のちほど皇帝陛下の御ご前ぜんでさんざん恐きよう懼く感激してみせなければならない。あまり下手に出るわけにもゆかないが、ラフレシアはα大陸屈くつ指しの強国で、その主権者である皇帝は常に傲ごう慢まんだ。とりわけ今度の陛下は、愚おろかなだけに尊大さもひとしおだろう。

やがて楽隊による演奏が始まり、人々は一様に口を閉とざした。

これから次代皇帝が登場して天地峡谷ウルカネラと名づけられた赤絨毯をしずしずと歩いてゆき、その果てにある壇だん上じようにに安置されている先帝陛下の棺ひつぎの前にひざまずく。

棺の脇わきに控ひかえている七名の女性は、幼児のころから不人インペルソネとして育成されている一種の巫み女こだ。彼女らはとても美しいが無個性で、もちろん同一人物ではないし、目鼻立ちはそれぞれ違ちがうのに、不思議と区別がつかない。肌はだもあらわな恰かつ好こうをしているが肉感は微み塵じんもなく、まさに人間でありながら人間ではない、不人としか呼びようがない生き物たちだ。

ラフレシア第三帝国の式典はたいてい不人が司つかさどり、そもそも彼女ら以外は正式な手順を知らないらしい。不人は帝国の儀ぎ式しきを権けん威いづけながら何者にも利用させず、それでいて厳げん粛しゆくに精確に執とり行うためだけに生まれて死んでゆく、じつに特異な国家巫女なのだ。

今、先帝陛下が被かぶっている帝冠クローネ、その胸に抱だいている帝錫バトー、そして指に嵌はめている帝環バーグは、不人たちの手によって次代皇帝に授さずけられるだろう。

その後、不人たちは次代皇帝に仕えることを示し、次代皇帝はこれを受けいれる。

さらに次代皇帝が継承を宣言して、天上に第一帝国あり、地下に第二帝国あり、地上に第三帝国あり、という内容の祝歌シヤントをうたい終えた瞬しゆん間かん、次代皇帝は晴れて当代皇帝となるのだ。

すでに次代皇帝陛下は天ウ地ル境カのナ間ンに足を踏ふみ入れて天地峡谷ウルカネラの上を歩いているのだろうが、モーロウと絨毯の間に三人ほどいるし、ここからではまだ見えない。

モーロウは無む駄だに高すぎる天てん井じようを仰あおぎ、目を凝こらしてびっしりと描かきこまれている絵を見つめた。「天上とルメヨール地下エスソル」と名づけられているあの天井画を完成させるまでに、何人もの画家が命を落としたという。おそらく冗じよう談だんや誇こ張ちようではあるまい。あの高さで、しかもずっと上を向いたまま作業をするとなると、そうとう危険だ。天井画にかぎらない。摩ま訶か壮そう大だいで絢けん爛らん豪ごう華かな帝都

太華饒京アルマンドナは、質量ともにさまざまな犠ぎ牲せいがなければ築かれ、創られることはないだろう建造物や美術品にあふれている。

　ラフレシア第三帝国は、宗教とも違う独自の主義ドクトリンによって律されている風変わりな専制国家だ。それによれば、世界は天上、地下、地上の三つに分かれており、すでに天上と地下では帝国による支配が確立されているので、残る地上でラフレシア帝家が覇は権けんを握にぎることにより、全世界が統一され完全なる恒こう久きゆう和合が実現される。このような主張をしておきながら、戦争もすれば和平交こう渉しようもする、各種条約も平然と結ぶのだから、まったく矛む盾じゆんしている。ラフレシアが領土拡張に野心的な大国であることは間違いないが、約定を違たがえることのない国として信しん頼らいされてもいるのだ。

　モーロウ個人としては一つの見解がある。

　おそらくラフレシアは、百年、数百年、もしかしたらそれ以上の長い期間をかけて全世界統一を成し遂とげようとしているのだろう。焦あせりはないのだ。いずれ必ずや世界はラフレシア第三帝国の色で染め抜ぬかれるのだという確信すら、彼らは抱いだいているのではないか。不人という人間を超ちよう越えつした存在も象しよう徴ちよう的だ。彼らの認にん識しきは個人の枠わくから飛びだしている。少なくとも、そうあろうとしている。帝国は一つの生命体で、帝家も不人も国民もその構成要素でしかない。もちろん、個々人の意志や欲よく望ぼうはぬぐいがたくあるだろうし、誰だれも彼もが帰属意識以上の付属意識とでもいうべきものを持っているわけではないだろうが、帝国としてはそうあろうとしていて、いつか全世界をのみこもうと企たくらんでいるのではないか。

　気にくわん。

　けったくそ悪いわ。

　なあ、カタリ。

　期待したらあかん。求めたらあかん。望んでもあかん。惜おしんでもあかん。自分の力で手に入れるんやて、ワシはワレには教えたったやろ。

　ワレはどう思とるか知らへんけどな。あれはワシの本心やで。黙

だまっとって与あたえられよるもんはぜんぶ偽にせ物ものや。我が意志でつかみとったもんだけが間違いのない本物なんや。

　ワシはな。ワレが羨うらやましいわ。何もかも捨ててな。イズルハでは独立するか即そく位いするまで王家の子供は名無しやさかい、名前だけはワシがつけたった。その名前だけ持ってな。

　ワレは今ごろどこにおるんや。くたばってもうたかもしれん。そないに思たことは一度もない。ワレは生きとるやろ。運の強い子おやったさかい。運が強うなかったら、ワレは生き残られへんかった。ワレなら何でもつかみとれるに違いない。ワシはそう思とった。

　ワレはきっと、いろんなもん手に入れとんのやろな。

　それはぜんぶ、ワレのもんやで。本物や。

　ワシはワレが羨ましいわ。

　あないな国で生まれて、捨てたろ思たことは数かぎりない。それやのに結局、捨てられへんかった。もう無理や。ワシは年や。それだけやない。望んでつかみとったもんとちゃうけどな。ワシはやりすぎた。手えかけすぎたわ。中ちゆう途とでは離はなされへん。せめてワシがおらんくなっても立ちゆくようにしたらんと、おちおち死ぬこともできへんがな。

　まあ、これも人生、やな。

　カタリ。

　ワレがどこぞで自由に生きてるやろっちゅうのんが、ワシにとっては唯ゆい一いつの慰なぐさめや。

　手前勝手かもしれへんけどな。ワシはどうしてか信じてんねん。この疑り深いワシがな。なんでか知らへんけど、ワレのことだけは信じとる。

　あかん。ほんまに年やな。

　モーロウは目め頭がしらを揉もんで天地峡谷ウルカネラに視線を転じた。どうやら次代皇こう帝てい陛下がようやく近づきつつあるようだ。

自然と正面の第三皇子に目が向いた。オクタヴィアン・ギュスターヴ・ヴィス・ラフレシア殿でん下かはたしかまだ二十六歳だったか。線が細く、やさしげな面おも立だちをしているので、もっと若く見える。瞳ひとみは琥珀色アンバーだ。銀色に近い金きん髪ぱつはラフレシア帝家の慣習に従って長くのばし、複雑な形に結ゆってある。目を細め、口くち許もとには微び笑しよう。モーロウはオクタヴィアンの腰こしを見た。帯たい剣けんしているが、中身は模造品のはずだ。第三皇子の他ほかでは、第二皇子も同じように模造剣けんを腰に帯びているものの、他には武器のたぐいを所持している者はいない。聞いた話によると、不人は魔ま術じゆつ士しで、皇帝の護衛役でもあるようだ。

じつは、次代皇帝クリストフ・マガレスト・ヴィド・ラフレシアの継けい承しようが決定するまでには、紆う余よ曲きよく折せつがあった。無能で性格に難のある長男坊ぼうを跡あと継つぎにしていいものかどうか、先代皇帝は死の直前まで迷っていたという。臣下の中にも第二皇子を推す者がいて、第三皇子を支持する者もいた。帝国は割れかけていた。最終的に先帝は第一皇子を後こう継けい者しやに指名してから息をひきとったとされているのだが、このあたりにもきなくさい噂うわさがある。第二皇子が第一皇子に詰つめより、先帝の遺言に関して疑義をただしたという話も、一部ではまことしやかに囁さされているくらいだ。しかし、能力や人望の面でもっとも次代皇帝にふさわしいのではないかと見られていた第三皇子は、先帝の遺言に従って第一皇子の継承を望み、これに忠誠を誓ちかう旨むねの声明をいち早く出した。第一皇子と第三皇子の勢力が合わされば、第二皇子に勝ち目はない。三つどもえの展開を期待していたのだろう第二皇子も、引き下がるしかなかった。一時は不ふ可か避ひとも思われていた跡あと目め争あらそいが、第三皇子のおかげで未然に防がれたのだ。

オクタヴィアンもラフレシアの一部ということなのか。

モーロウは彼かの皇子と面識がある。十代の終わりから二十代前半にかけて、オクタヴィアンは父帝の名代として積極的に外遊していた。その折にキングダム・イズルハを訪おとずれたのだ。頭のいい朗ほがらかな若者だった。それでいて、何か引っかかるものを感じて、曲くせ者ものか、あるいは長じれば曲者になるのではないかという印象を受けた。その引っかかりが何なのか、いまだによくわからない。

強しいていえば、あの笑え顔がおだろうか。

　オクタヴィアンは首だけ振ふり返らせて、片眼鏡モノクルをかけている黒くろ髪かみの男に何か囁いた。

　モーロウは大使ヤナン・タフトの腕うでを肘ひじで小こ突づいた。「あの男は何者や」

「ああ」タフトは鼻を鳴らした。「オクタヴィアン殿下の後見団セコンダンテに所属しておられる──」

「そんなんわかっとるがな。あそこにおるんやからな」

「ラフレシア第三帝国士爵シユヴアリエ、ルイ・アシュモダイ・アデモンディオ殿どのですよ」

「アデモンディオ。あの男が」

　名前は聞いたことがある。好きになれそうにない男だ。何かこう、他人を小こ馬ば鹿かにしているような顔つきをしている。あれは詐さ欺ぎ師しの面相だ。そうか。わかった。

　オクタヴィアンもどこか似ている。あれは自分以外の何もかもを見下していて、それを隠かくそうとしている者が、表面を繕つくろおうとして浮うかべている笑みだ。

　アデモンディオがこちらを見た。目があった。

　唇くちびるの両りよう端はしがつりあがった。

「……あかん」

　モーロウはタフトの袖そでを引いてしゃがませながら、振り返って使節団の他の者たちにも身み振ぶりで体勢を低くしろと命じた。彼らはモーロウの独裁に慣れているので、一も二もなく従った。周りがざわついたが、モーロウが腰を低くして天地峡谷ウルカネラのほうへ向きなおったころにはもう、誰だれもこちらには注目していなかった。

　第三皇子の後見団セコンダンテの列から一人の男が進みでてきた。

　顔の上半分を覆おおうゴーグルをかけているが、老人のようだ。頭頂部に一ひと房ふさ、それから耳から耳を繋つなぐように残って

いる頭とう髪はつは、すべて白い。白と黒の小こ袖そでを着流し、はだけた襟えりに右みぎ腕うでを突つっこんでいる。左手は袂たもとの中だ。

　第三皇子を二回り大きくして脂あぶらぎらせたような見た目の次代皇帝が、顔を引きつらせて足を止めた。

　老人と次代皇帝との距きよ離りは十メーテルほどだ。

　なぜ不人たちは動かない。

　違ちがう。そうではない。

　動けないのだ。

　棺ひつぎが安置されている壇だんの上に──空中に、女が浮いている。いつの間に。

　七人の不人たちは、その女を見上げていた。

　女は紫むらさき色いろのドレスを着ている。着てはいるものの、なんと破は廉れん恥ちな装しよう束ぞくだ。とてつもなく豊満な肉体だが、引きしまってもいる。身体からだつきだけではない。顔だちも鮮せん烈れつだ。妖よう艶えんなだけではない。激しさを感じさせる。じゃじゃ馬どころの騒さわぎではない。あれは手に負えない。

　そうか。モーロウはもちろん魔術士ではないが、魔術を知らないわけではない。知識だけはそれなりにある。

　不人たちはたぶん、無意識層共有領域を通じて攻性スパク意識体チユラを繰くりだし、あの女を精神攻撃マインドハツクしているのだ。七人がかりで、だが、一人を制圧できずにいる。女は凄せい艶えんな笑みを浮かべた。

「蛮翅狂Ｉｇｎｅｉｍ虞隷Ｎａｙｄｏ」

　女の頭上に青紫色の炎ほのおが現れて渦うず巻まいた。女はその炎をちぎって投げつけた。魔術士が魔術を使う際は忘ぼう我が状態に近いはずだ。あの女は違うらしい。完かん璧ぺきに魔術を制せい御ぎよしている。まるで魔術を別の力で操あやつっているかのようだ。超越者オーバリストという言葉がモーロウの脳のう裏りをかす

めた。不人たちは炎を食くらってその身を焼かれ、ゆるやかに壇上に舞まい降おりた女は絹のごとき艶つややかな髪かみの毛をかきあげた。

　楽隊が演奏をやめた。

　次代皇こう帝ていの近ガ衛ル団デが動きはじめた。怒ど号ごうを、雄お叫たけびをあげながら、二十人ばかりが壇上の女のほうへと向かい、残りは次代皇帝の前に立ちはだかっている老人に殺さつ到とうしようとしたが、果たせなかった。

　老人は振り向いて、右腕を抜き放った。

　紛まぎれもなく、それは腕でしかなかった。

　にもかかわらず、鎧よろいを身にまとった近ガ衛ル団デの騎き士したちが、いっぺんに十人ばかりも、しかも腕がふれたわけでもないのに、斬きり伏ふせられた。

　次代皇帝が短い悲鳴をあげて踵きびすを返した。遅おそかった。いつ飛びだしたのか。

　第三皇子だ。オクタヴィアンが天地峡谷ウルカネラを駆かけている。帝家の者ならば護身のために武術くらいは修めているだろうが、あの身のこなしは武人の域だ。速い。無む駄だがない。鋭するどい。

「兄上」

　弟に声をかけられて、兄が振り向いた。

　オクタヴィアンは模造剣けんを鞘さやから抜くなり、次代皇帝の首に叩たたきこんだ。

　いや、模造ではなかったのか。真剣だったのだろう。一目で業わざ物ものとわかるモトロール刀だ。

「あなたは皇帝にふさわしくない」

　愚ぐ鈍どんな次代皇帝は皇帝になりそこねた。それどころか、生首に成り果てて深しん紅くの絨じゆう毯たんにどす赤い血を吸わせる羽目になった。

　オクタヴィアンは血刀をかかげて目を細めた。

「このオクタヴィアンこそがラフレシア第三帝国皇帝である」

「━血まみブラツドれ皇帝インペリア騎士団ルナイツ……！」

　緋ひ色いろの甲かつ冑ちゆうを身につけた男が皇帝を僭せん称しようした第三皇子に駆けよって手をあげた。

「我らが皇帝陛下をお守りせよ……！」

　後見団セコンダンテの大移動だ。オクタヴィアンはあっという間に緋色の騎士たちやら文官らしい男たちやら見み目め麗うるわしい女たちやらに囲まれた。その中にはもちろん、あのルイ・アシュモダイ・アデモンディオもいる。皇帝になりそこねた次代皇帝の近ガ衛ル団デは明らかに驚おどろき戸と惑まどっていた。彼らの総数は三百余といったところか。そのうち十人ほどが老人に斬り殺されただけで、第三皇子の後見団セコンダンテはせいぜい百名だ。しかも、帝国の武官は近ガ衛ル団デ以外にもいるし、望ル天バ蓋ナ地ビ宮ア全体には七万八千名もの兵士が配備されている。何を恐おそれることがあろう。この簒さん奪だつ劇はあまりに無む謀ぼうだ。必ず失敗する。果たしてそうか……？

　モーロウは周囲に視線を走らせた。各国の使節団は狼ろう狽ばいしているか、呆ぼう然ぜんとしているか、避ひ難なんしようとしている。帝国の文官武官たちはどうか。当然うろたえている者が多い。そこかしこで悲鳴もあがっている。しかし、それほどでもない。次代皇帝が第三皇子の手で首を刎はねられたのだ。もっとすさまじい大混乱が巻き起こっていてもおかしくない。

　こうなることを予期していた。もしくは、明確に知っていた者が相当数いるということか。第三皇子派が。もともと派は閥ばつの規模は決して小さくなかったらしい。ありうる話だ。だがなぜこのタイミングで行動を起こしたのか。跡あと目め争あらそいを避さけて兄に帝位を譲ゆずっておきながら、ここで、よりにもよって継承大典レサクセシオンで牙きばを剝むいた。わからない。いや、考えようによっては、この式典は絶好の機会なのではないか。

「オクタヴィアン……！　神聖なる継承大典レサクセシオンを血で汚けがすとはけしからぬ！」

　近ガ衛ル団デよりも先に第二皇子エルネストが旗き幟しを鮮せん明めいにして、自身の後見団セコンダンテを押しだした。

「のけい」と老人が一歩前に踏ふみだすと、近ガ衛ル団デの騎士たちが飛びのいて道をあけた。

　第二皇子の後見団セコンダンテが矢や面おもてに立つ恰かつ好こうになった。

　老人が無造作に右腕を振ふりおろしただけで、第二皇子の部下たちは血ち煙けむりをあげてばたばたと倒たおれた。

　間を置かず第三皇子の後見団セコンダンテから一人の女が進みでた。目の周りを赤や黄、青で縁ふちどり、小さな花弁のごとき唇くちびるに紅をさして、黒くろ髪かみを六本の角のような形に結ゆいあげ、東部風の着物を身にまとっている。見た目はまだ若い。少女だ。

「わらわのことは、阿ア麼マ李リ姫ひめと呼ぶがよい」

　少女が両りよう腕うでを持ちあげると、幾いく十もの鈴すずの音が響ひびいた。モーロウは驚かなかった。その名に心当たりがあったからだ。阿麼李。〝巫女神シビリリス〟。高名な魔ま術じゆつ士しだ。

　近ガ衛ル団デと第二皇子の後見団セコンダンテの騎士たちが起きあがった。

　老人に斬られ、一度は倒れ伏した者たちが、血を垂れ流しながらすっくと、あるいは大たい儀ぎそうに、それでも一いつ斉せいに起きあがったのだ。

「……死霊術ネクロマンシーや」

　死人を操あやつるその魔術とも呼びえない魔術は、中部ミツド諸国域ランズと東部の境目にあるマトゥーヤ霊国で生まれたという。阿麼李はそれを完成させた者として、また、最大の使い手として知られている。すでに死亡したともいわれていたが、生きていたのか。名の知れた魔術士だ。意外でも何でもない。高みに達した魔術士は人ならざる者なのだ。

　第二皇子の後見団セコンダンテはこれで完全に腰こしが引けた。

放ほうっておいても第二皇子は降こう伏ふくしたかもしれないが、それではすむまい。案の定だった。あの女だ。

　紫のドレスを着た女魔術士が、ちょうど第二皇子の頭上にいるではないか。

　女が何かを吊つりあげるような仕し種ぐさをすると、肥満気味の第二皇子が浮うきあがった。

　空中を音もなく移動する女にあわせて、第二皇子も滑かつ空くうした。

　第二皇子は醜みにくく喘あえぎながらじたばたしている。とんだ見世物やな。

　女は間もなく第三皇子の後見団セコンダンテ上空で停止して、つかんでいたものを手放す動作をした。

　第二皇子が落下した。その先にはオクタヴィアンがいた。

「あなたも不要だ」

　オクタヴィアンは第二皇子を一刀両断した。

　真っ二つになった兄殿でん下かを見下ろして、オクタヴィアンはやはり微笑ほほえんでいた。

「見事なお手前です、陛下」

　ルイ・アシュモダイ・アデモンディオが手を叩たたいた。

　さっきまで騒そう然ぜんとしていた天ウ地ル境カのナ間ンが不気味なほど静まりかえっている。

　オクタヴィアンは後見団セコンダンテを下がらせ、モーロウら外国使節団に向きなおった。

「お騒さわがせした。しかしご案じめされるな。ラフレシア第三帝国皇帝オクタヴィアンの名において保証しましょう。諸君に危害が及およぶことは万が一にもありません。どうか心平らかに落ちつかれよ」

「そら無理な相談や」

　モーロウは背筋をのばしてそう言い放ってから内心で舌打ちをした。この性しよう分ぶんや。この性分のせいで、毎度毎度余計な気苦労背負いこむことになりよる。くそたわけが。

「ワシらは継承大典レサクセシオンに臨席させてもらうために、わざわざ国くに許もとから出てきて雁がん首くびそろえとんのですわ。いきなり血い見せられて落ちつけ言われても、そうそう落ちつけるもんやない」

「ごもっともです、ジャン・モーロウ殿」

　オクタヴィアンは微み塵じんも表情を変えない。たいした若造だ。まんまとしてやられた。先帝はすでに亡なく、次代皇帝も、第二皇子も物言わぬ骸むくろと化している。弱小国の左大臣風ふ情ぜいとしては、こうなったらもうこの青二才に取り入る以外に方法がないではないか。

「盛大に──」

　モーロウは胸を反らせて思いきり両腕を広げた。

「執とり行ってもらわな困りますわ、陛下。継承大典レサクセシオン。今すぐ、これからでもええ」

　オクタヴィアンは平然とうなずいてみせた。

「そうさせていただきましょう」

『薔薇のマリア　14．さまよい恋こいする欠片かけらの断章』了

　あとがき

　ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関わったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、ありったけの感謝と愛をこめて。

　永遠に夢を見つづけることはできません。

　夢見るような時はいつか必ず果て、現実の中で自分自身の時間が終わる瞬しゅん間かんを待つことになるさだめです。

　しかし夢もまた現実の一部であり、かくも悲しく美しい現実に僕は執しゅう着ちゃくしています。

『薔ば薇らのマリア』は次巻から終章に突とつ入にゅうします。

　できるだけ長い終章になるように全身全ぜん霊れいを捧ささげるつもりです。

　どうか最後までおつきあいください。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

14．さまよい恋こいする欠片かけらの断だん章しよう

十じゆう文もん字じ　青あお



平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　14．さまよい恋する欠片の断章』平成22年8月1日初版発行



BOOK☆WALKER